

fate/alter Seven  
Sight ??the First  
Sight??

どっこちゃん

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

オリジナルの聖杯戦争モノです。

——笹ヶ谷市と呼ばれる山間の奇妙な都市で、魔女になるべく魔術の修行を続けていた少女、小高森くろむはこの地で百数十年以上に渡って行われてきたとされる外法の魔術儀式「聖杯戦争」に身を投じていく。

初めまして。どっこちちゃんと申します。

感想・評価等よろしくお願いいたします。

「alter」／アルターとは、変化させる・作り変える・変質させる。というの意味。本作は fate シリーズの二次創作に当たるのですが、キャラも舞台もすべてオリジナルで、使っているのは「聖杯戦争」というシステムのみです。

サーヴァントもマスターもすべて新規となっております。

いわゆる「僕の考えた聖杯戦争」のようなもので、だいぶ前に、あくまで「習作」として作ったものなのですが、今回改めて感想を聞きたくなり、投稿してみることにしました。

主人公のサーヴァントが「EXTRA」で出てきたキャラとかぶってますが、書いた当時はまさか被ると思いませんでした（汗）。なので関連性は特にはないです。別物と思っただけだと思います。

補足：加えて、この話は、同じキャラクター、設定、サーヴァントを使いながら、それぞれに独立した「ファーストサイト」から「セブンスサイト」までの七本のストーリーを、それぞれ別のキャラクターを主人公として七つの視点(Sight/サイト)でまったく別のストーリーを展開するという試みの、第一弾となります。

つまり、ファーストサイトで主人公のくるむとライダーは、二本目以降ではわき役であつたり敵役であつたり、被害者であつたりするわけです。

魔術師や、基礎的な魔術・神秘という要素、そして世界の成り立ちそのものが、本家

の世界観とは似て非なる、乖離した世界になっています。

その辺は全体部の後半（Fifth Sight（五本目）以降）に書いていくつもりです。

今は三本目（サード・サイト）に取り掛かっているのですが、投稿に慣れていないのでいつになるのかわかりません。できるだけ早くアップしていきたいと思えます。

サーヴァントのステータス、キャラクターの簡単なプロフィール等は、あとがきで少しずつ表示していきます。

# 目次

五章	五章	四章	四章	四章	三章	三章	二章	二章	一章	一章	プロローグ
―2	―1	―3	―2	―1	―2	―1	―2	―1	―2	―1	―
396	370	333	314	261	213	171	138	107	65	28	1

エピソード	五章
―	―3
479	448



## プロローグ

辺りには、厳かな静寂がまどろんでいる。

日はとうに沈み、夜の帳は夕焼けの鮮紅の上に静かにその濃紺の色味を重ねていた。その黒く澄んだ天蓋には輝かしい月が鎮座している。しかし奇怪なことに、如何にしてか、その真相がようとして知れないのである。

月だ。確かにそれは間違いない。

だが、それが如何なる月であるのか、上弦の月か、それとも下弦の月なのか、はたまたこれから肥ゆる月か細る月か、それが東にあるのか西にあるのかすらも、判然としな  
いのだ。

——なぜならば、この時、この夜の景観にあった月は一つではなかったのである。

暗い虚空には、あろうことか三つもの月が垣間見えた。

そのどれもが確かな月の形をしている。三つの月は闇の間に舞い上がり、あたかも旋轉閃いて、魔魅の躍動を繰り返す。

うち一つは確かな雲の向こうにあった。天空に或る月だ。真円に近い形状をし、夜を

淡く照らしてはばかることのない、確かな月であった。

しかし、だというのなら、後の二つはなんだといのだらうか。

残りの二つの月はより地に近かった。それらは夜気の間を跳動していた。それも縦横無尽に、目視さえも許さぬほどの高速で飛び交っていたのだ。

それらは天の月とは違い、共に三日月の形を取っていた。そして、天から刺す月光を弾き煌めくそれらは、単体で飛び交っているのではない。

それらは共に刃を伴っていた。——否、そうではない。それ自体が刃なのだ。

飛び交い、夜気に舞う一つ目の三日月には一本の矛が添えられていた。一文字のシンブルな直刃に平行に添えられる形で、一枚の三日月が閃いている。

対するもう一つの三日月にも一本の槍が伴われていた。しかし先の矛と違うのはその槍の直刃が三日月を、そのまろい背面から、垂直に貫く形で交差していたという事だ。漢字で言うならば、前者の矛は刃で二の字をあらわし、後者の槍は刃で十の字形を模っていたといえる。

刃は幾重にも交差し打ち合わされ、静寂であった筈の空間には夜気を裂くかのような鋭い剣戟の音が、まるで怪鳥の囀りの如く響き渡っている。

そう、今、この空間で行われていたのはそれぞれに槍と矛を用いての、抜き身の刃に



よる決闘であつたのだ。

真月の照らす夜の下、轟然と三日月の如き月牙の刃を添えた矛を振るうのは、雲をつくような巨漢の男であつた。

その巨軀に似合わず、まるで飛燕の如き俊敏さと稲妻のような苛烈さを持つて手にする長物を振るう、凄まじき猛武の担い手であつた。

しかしその巨漢によつて、千の嵐に比してさえなお苛烈に放たれているはずの刃が、——当たらない。

対峙する十字の槍の担い手に、その攻撃がまったく当たらないのである。

その対手が三メートル余りもある十文字の穂先を持つ槍を振るうたびに、打ち放たれる砲撃のごとき巨漢の攻撃が空を切るのである。

「——フンツ！ おのれ、この爺いめが!!」

埒の明かない展開に業を煮やしたのか、巨漢の男が苛立つように憎々しげな気を吐いた。

その岩をも抉り抜きかねない殺意の波動を、まるでそよ風でもうけるかのようにやりわりと受け流したのは、対峙する男と比するまでもなく、殊更に矮躯の老人であつた。

僧衣を纏つた禿頭の老翁は長くふさふさとした眉毛の奥で、しかしその老齡を感じさせぬほどに精気に満ち溢れた瞳を燻らせ、好々爺じみた笑いを漏らす。

「ホッホ。そう急<sup>せ</sup>いでないわ。お若いの。まだまだ始まったばかりじゃろうに」

距離をとって対峙した両者は暫し、朽木の洞の底にでもいるかのようにその存在を暗夜の帳の中に沈めた。

それは高波を引いた海が今正に弾けんとするかのような、空恐ろしげな沈黙の前兆にも似ていた。

畢竟、——次の瞬間には予期されるべき波濤が空間を打った。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

巨漢が吼えた。するとその途端に、その気迫に打たれただけのはずの周囲の木の枝やアスファルトに確かな破壊の痕跡が浮かび上がったではないか。

しかし、巨漢がやったのはまぎれもなく氣勢を吐いたというだけの事でしかない。

「ふ………む………?」

その不可思議な現象に、その矮躯には似合わぬ長大な槍を構えた老僧は怪訝そうな唸りを漏らした。

たとえ彼らが互いに人を超絶した存在であったのだとしても、たかが氣勢が四五間ほど離れた位置にある物体を破壊せしめるというのは、確かに理解に苦しむ事だ。

つまり、順当に考えるならば、今の「気迫」は唯のハツタリや精神威圧の類ではないという事になる。

しかしそれ以上考える暇もなく。今度こそ巨漢が前進してくる。まぎれもなく全力投球と見受けるに難くない、渾身の振り抜きが遥かな頭上から矮躯の老人の脳天へと迫る。

が、当の老人はそれを暖簾でもくぐるかのように上目でちらと眺め、ただ眉を顰めた。それもそのはず。てつきり今度は先の剛爆にも等しい攻撃を上回る一撃が来るかと思えば、先だつての大振りに輪をかけての大雑把な攻撃である。

その豪気、もはや天晴れとは思いつつも、これは些か面白みにかける展開であつた。いくら力自慢とはいえ、斯様に大振りを繰り返すだけの敵には大した面白みも感じない。

こんなものか——と、僧衣の槍使いは嘆息してゆるりと長槍を執り成した。

たつたそれだけの動作で、巨漢の大振りとは比較にならぬほど静かに伸びた十字の穂先が、矛を振りかぶる異国の将兵の腕の間をすりと抜いた。

狙いは喉だ。この巨漢がただの力自慢なら、にべも無くここで終わる。

それほどに文句のつけようの無い正確無比な刺突であつた。

——しかし、喉下を狙つた穂先の末に、老いた槍兵は射抜くような灼熱の眼光を見た。

老僧は咄嗟に退いていた。

それもただ間合いを開けたというのでは無く、もはや互いの長物を持つてしても容易

には触れ合えぬ制空圏の外まで引いていたのだ。

——否、後退を余儀なくされていたというべきか。

大振りの間隙を抜いたと思ひ刺突を放った決殺の刹那、その間の更なる間隙に、何か  
が前触れも無く割り込み、一転、身を翻した老僧の僧衣の裾を切り裂いたのだ。

そこで巨漢は初めて口角を歪め、ニイツと邪悪な笑いを見せた。まるで体軀に似合わ  
ぬ、年端も行かぬ悪童のような笑みだ。

「んん？ どうしたあゝ老体？ ——フフン。そんなところにおいては自慢の槍も届かん  
ぞお、おい？」

静かに黙する矮軀の老人に対して、まるで猫が鼠か何かでもいたぶりまわすように、  
巨漢は楽しくて仕方がないとも言うような口調で揶揄を繰り返す。

対する老兵は取り合わず、静かに先の不可解な「二の撃」の謎に想いを馳せていた。  
その無言を己の優越ととったか、巨漢はいよいよ愉悦極まったと見えて、

「フフンッ。おいおい、急に黙り込まれては、退屈で叶わんなア。先ほどの軽口はどうし  
た？ ああ!!? こんの、……おいぼれがあっ!!!」

そして言いさした瞬間、肩に担いだ戟もそのままに、巨漢の燃え盛るような眼光が閃  
いた。

すると、それまで何も無かつたはずの虚空に真紅の亀裂が奔り、また身を翻した老僧

の体から鮮血が散った。

「……やれやれ、そう言うことか。まさかとは思うたが、本当にこんな芸当をやる輩がいろいろとは思わなんだ……」

明らかに互いの間合いの外、弓でもなければ届かぬこの間合いから、肩口を切り裂かれた老翁は紅い筋の流れる下腕をべろりと一舐めし、ただ、関心でもするかのように漏らした。

「御主、気迫……いや、殺気を飛ばしたな？ いやいや。その程度なら、英霊なんぞと呼ばれる輩なれば、まあ、出来ぬことではあるまい。——が、これはさすがに埒の外じゃろうのう」

「ふん。気付いたか？ ジジイめ」

「まさか、「唯の殺気」が本物の刃と違わぬ切れ味を持つとうとはのう……いやはや……」  
互いの持つ長物の攻撃さえ届かぬこの間合いから、槍兵の身体を切り裂いた不可視の斬刃。

それはこの巨漢が放った殺気、つまりは念意の放射だったのである。

無論、唯人の戦闘においても、それを鮮烈なるイメージとして対峙する敵の脳裏に送り込み、おのれの攻め手を錯覚させるといふ魔術めいた技法は、しかしいくつもの戦術、闘術の奥義として口伝されている。

何より、間近に互いの生と死をかけて展開される前時代的な戦場に置いては決して杞憂な事例ではない。

しかしこの巨漢の爲した仕儀は、かのごとき凡庸な範例とは一線を画すものであった。

よもや、敵の錯覚を誘うだけの思念の技法が実際の攻撃と変わらぬ重さと切れ味をもつてこの現に浮かび上がろうとは！

——さしもの古強者も、これには感嘆の想を隠せなかつた。

「ホッホ。いや、驚いた驚いた。その粗雑な殺気が飛んでくるだけなら、むしろやりやすいというもんじゃがのう。——まさかその総てが必殺の刃と変わらんとはなあ、これは少々骨が折れるわい」

しかしその改めて鷹揚なる老僧の有様に、それまで得意満面といった様子だった巨漢の顔にはやおら蒼褪めた陰りがさした。

どうやら、相手方の余裕めいた態度が気に入らないらしい。

「フンツ！ おいジジイめ、痩せ我慢はやめておけ、年寄りには年寄りらしく、おとなしく観念したらどうなんだ？ ああ？」

「やれやれ……本当に気の急わしい奴じゃわい。ホッホ。せっかく御主の芸に感服して、こちらも一つ、面白いものを見せようというに……」

言うや否や、今度は老僧の手元から妖術めいた光が奔り、互いの間合いの遙か外側から巨漢のいた位置まで伸びた。

すんでのところでそれを躲した巨漢は、獲物に飛び掛る虎そっくりの姿勢と面貌で、凄まじい憎悪の念を放ってきた。その敵つい顎先からは猫の爪ほどの傷が僅かに鮮血を滴らせている。

老齡の槍使いには、それがまるで横薙ぎに叩きつける刃の雨のようだと感じられた。しかし不可視にして必殺のはずの念意の刃は、怨敵の身体を捉える事が無かった。

巨漢の位置から放射状に放たれたはずのそれらはしかし、先程までの、実際に手に取った戟の一撃同様。まるで柳に叩きつけられた大槌の如く空を切ったのである。

今度は老翁の方が不敵な笑みを浮かべる番であった。

間合いの外から矢継ぎ早に飛んでくるのは殺気という名の不可視の刃に相違なく、しかもその総てが必殺の威力を持つのである。

が、たしかにこのように書けば如何にも恐ろしげに聞こえる巨漢の絶技ではあるが、しかしこの「覇氣の刃」とでも言うべき攻法はその実、「殺気」であることには違いないもので、そもそもがありありと色を纏った殺意の念波である。

たとえ視えずとも、この槍兵レベルの術者になら、補足するのは容易なことなのだ。一度わかつてしまえば、これほど予見しやすいものもない。

ただ厄介なのは、その手数過多であろう。これほど怪物的な巨漢の手数が数倍になるといふのはつまり悪夢以外の何ものでもないということの意味する。

今もまた嵐の如く繰り出される可視不可視を問わぬ剛刃の連打が、矮躯の老体を粉碎せんと振るわれる。振るわれ続ける！——振るわれるにも関わらず、しかし、当たらない。

またもや当惑の憂き目に会うのは巨漢の方であつた。

轟然と嵐の如く刃を振るい続けていたはずの男の五体からは、逆に幾筋もの紅い飛沫が弧を描くのである。

「ぬ——う、うッ！」

「ホッ。どうした、お若いの！」

再びの揶揄。苛立ちに蒼褪めていた巨漢の顔が、見る見るうちに憤怒の色に染まつた。

もとよりこの男、敵の特異性や技の摂理を見極めるなどという回りくどい戦術は頭無し。

あるのはただ攻勢、それあるのみ。それこそがこの男のもつ唯一の道義なのであつ



た。

しかし、それが今回ばかりは裏目に出た。

まるで機関砲の如く撃ち放たれる不可視の刃を残らず受け止め、いなし、その断間を、まさしく針の穴を縫う精密さで突き崩してくるその槍の前に、とうとうこの巨漢も観念して後退せずには居られなくなった。

その屈強な鎧姿からは鮮血が滴っていた。

その背後に控える小柄な少女——この巨漢を統べるべき立場にある「主」が治癒の魔術を施行し、傷は塞がったが、戦況はどうにも分が悪いといわざるを得ない。

治療と共に背後からは主である少女の「言うことを聞け」「もう少し頭を使え」というような内容の指示が聞こえているようだったが、この男には指示に耳を傾けるつもりなど毛頭なかった。

いざ戦の場ともなれば、斯様な小娘の諫言など聞く暇などない。

——が、このままでは分が悪いのも確か。別に諫言を聞くわけではないが、ここは一時守勢に回るものもやむをえない、のかもしれない。いや、そんな深刻なことでもないが、このままやってもつまらない。のだから、仕方のないことなのだ。——フン！

そう、ひねり出すように考え、巨漢は気を取り直して今度こそじっくりと敵を観察す

ることにした。

正確には、その手に執る大槍をである。

驚愕の声こそ漏らしはしなかったが、その巨漢の内心の困惑は、己の絶技を見せ付けたはずの老僧のそれを上回っていたことであろう。

敵が持つ三メートルあまりの十字の槍。その穂先が矢庭に揺らいだ。

無論ここに来て我が目を疑う気にもなれなかった。今眼前に揺らぐ槍の穂先はそのとき確かにひびく歪に滅形していたのだ。

その様は融解しているというには相応しくない。より軽やかに流動するそれは、言うなれば流水に溶け出すような光の様相であった。

しかも、それは凄まじい光と熱を放ち、触れるものを焼き尽くす、という類のものではない。例えるならば陽光や輝炎とは無縁の、いわば流麗なる月の光に近いものだった。

そこで始めて、巨漢の脳裏にその揺らぐような滅形の波紋が鮮烈な既視感と共に蘇った。

そう、あれは月だ。それも空に浮かぶ月ではない。天空の月を写した水面。広大な湖の張方面にさめざめと揺らめく月の映し身の様相ではないか！

あれは漣の流動に映る月の影と同じなのだ。

嗚呼、なんということか！ 水面の月を断てぬ以上、あの槍をかわせる道理も、また受けられる道理もありはしないと言っても言うのだろうか。

そして驚愕は揺るがない確信を導いた。あの奇怪な槍があの英霊——サーヴァントの「宝具」であることは間違いない。

宝具とは現世に呼ばれた英霊が持つ彼ら固有の専用武装であり、そしてそれ以上に、その英霊の伝説を象徴するシンボルでもあるのだ。

あの変幻自在なる不可思議な槍の担い手であるこの敵こそ、此度の「儀式」によってこの世に呼ばれたサーヴァントの中でも特に強力とされる「三騎士」の一角「ランサー」のサーヴァントに相違ない。

しかし、同時に己の宝具を敵に特定されてしまえば、それはそのまま己の英霊としての素性に近づく情報を敵に与えてしまう事にもなるのである。

つまりは、あの槍のもつ哲理を何らかの情報に照らし合わせてみれば、おのずとあの老僧の英霊としての正体も知れるかもしれないということである。

とはいえ、今この場でこの巨漢がそれを察する事はなかった。

もとよりそのような頭脳労働を嫌う男である。今彼の頭にあるのは、この怨敵を如何にして撃破し、踏みにじり、粉碎して血の海に沈めるのかということだけであった。

——その巨漢の背後で、今この場においてその一連の闘争を目撃していたただ一人の人物である少女は、ただ驚愕に足を竦ませることしか出来なかつた。

あまりに現実離れたその光景に、すでに異界とでも言うべきものへと変容したその夜気アトモスフィアに晒された彼女の白い肌が、絶え間ない悪寒に震えていた。

これが聖杯戦争。

この地で百年以上にもわたり繰り返されてきた外法の儀式。英霊を現世に受肉させ、使い魔として使役するという、魔道の常識に照らし合わせてさえ規格外の魔道の極限。

だが少女は震える肢体を己の細い腕に抱き、強引に押さえつけて、目の前で行われる気の遠くなるような激突の余波を受け止めた。

身体を後ろに押し戻そうとするかのようなプレッシャーの列波を耐え、必死になつて激闘に行く末を睨みつける。

己がサーヴァントであるはずのあの巨漢の劣勢を知つてもなお、少女にはそれが覆るであろうという確信にも似た予感があつたのだ。

いや、彼女は物事を直感によつて判断するような人間ではない。その確信は確かな推察から論理的に導き出された結論であつた。

そも、現代に蘇つたあの巨漢の素性を鑑みれば、この程度の事でむぎむぎと敗北するような可愛げのある男ではないのだ。

あれは大陸の歴史書においてかの時代最強とまで称され、ただの一度も戦場で敗北しなかつた猛将として歴史に名を刻むほどの男なのだ。最も、——その悪辣にして無知蒙昧な処世においても言及される無頼漢でもあるのだが——。

確かに、あの光の槍を攻略する事は常の達人には不可能な事かも知れない。だがそれも常人同士の凌ぎ合いならばの話である。英霊の闘いとは、万象の道理を覆してなお常道と成すものなのだ。

しかし、趨勢は一向に覆る気配を見せていなかった。たしかに巨漢もそれまでにも増して果敢に攻め立ててはいるが、その劣勢は火を見るよりも明らかであった。

巨漢の攻撃は先と変わらず嵐そのものであったといえるが、しかしあまりにも単調すぎた。

それ故に対するあの槍兵の技巧が冷然と冴えて見えるのだ。それはまさしく壮麗なる魔魅の戯れと映った。

あの矮躯の老人が球でも放るかのようゆるりと腕を執り成すと、やや遅れて手元に揺らめいた光溜まりが、不意にその閃線を見失うほどに細く引き延ばされ、次の瞬間には光の網が現れるのだ。

しかも鯨でも取るつもりなのかというほどの巨大な網だ。それがまるで花火のよう

に屈強な巨漢の身体に浴びせられ、銃弾すら弾き返しかねない剛体を松皮のように斬り裂き、削り取っていく。

「ぬ——う、くッ　うおのれえええ！」

これにはさしもの巨漢も退がるしかなかった。

苦悶の声を漏らして後退しつつも、己が殺気の刃で反撃を試みるが、あの揺らめく光の十字槍は防備においてもほぼ万能と言つていい性能を見せつけた。

あらゆる角度から波頭の如く飛来した不可視の刃を、まるで鉛細工のように歪曲した光の十字槍の閃線が悉く受け止め、いなしてしまふのだ。

ここまで聞こえてきた巨漢の舌打ちに、少女もまた緊張を高める。彼女の胸には懷疑と疑問の念がざわめいていた。

ここまでのこの劣勢の要因を分析するならば、おそらくはランサーと見受けられるあの老僧にとって、一体一で向かい合い、互いに長物を駆使しての技巧の競い合いというこの状況は彼が最も得意とする土俵なのであろう。

対して彼女のサーヴァントであるあの巨漢は、あらゆる戦技において並ぶ者無しと称されていたとはいえ、その本領はあくまでも騎馬を駆つての対集団戦である。

さすがに相手の得意とする土俵では分が悪いと言わざるをえないのだ。

そして——あの戦乱の泰斗がそんな事すら解からない筈はない。ならば、それはつま

り……。

「コオオオオオオオ——。パアツツッ!!」

そのとき、空間そのものをしたたかに打ったかのような裂帛の気迫に、少女の思考は現に引き戻された。

見れば、巨漢の男が気を吐きながら己の中の魔力の密度を高めていくのが解かった。

その余波だけで、少女は思わず膝を折って尻餅をつきそうになった。

彼女たちは現在もパスを通してつながっている。それゆえにサーヴァントが全魔力を総動員するような事態になればマスターである彼女にも当然影響が出るのだ。

事態はすぐに呑み込めた。彼は勝負をつける気であるのだ。少女は一時、何事かを叫ぼうとしたがその言葉を呑みこんだ。

むしろ、悪くない手なのかもしれない。

見たところ、剣戟におけるあのランサーの防備は完璧に近い、どれほどの連打をどれほどの角度から打ち込んで、おそらくはあの槍の防備を突破する事は出来ないだろう。

ならば、防御が出来ないほどの痛烈無比な一撃によって、その防備を貫くしかないのだ。

そのために、彼はいま己のスキルを使用して攻撃力を倍化しようとしている。

サーヴァントが持つスキルにはそのクラスに英霊が据えられたときに付随されるクラススキルと、その英霊自身が生前から持ち合わせる技能によって設定される固有スキルとがある。

あれは巨漢の持つ固有技能である『激昂』のスキルだと察せられた。

発動する事により一時的に精神と身体のリミッターを外し、攻撃力を倍化する。同時に敵の精神にも『重圧』を与える効果もあり、敵に止めを刺す場合に有用なスキルではあるが、——しかしその反面、使用中は極端に理性を欠くこととなり、冷静な判断力を失うという副作用もある。

つまりあの巨漢は、事ここにいたって乾坤一擲の勝負に出るつもりなのだ。

「ホッホ。——喝！」

まるで物理的に打ち付けてくるかのような鬨気の烈波に対して、しかし僧衣の老翁は好々爺じみた笑みを崩すこともなく、槍をゆるりと右脇に抱えたまま左の掌を己が眼前に据え置き、精神統一のような所作を示した。

何らかの対処をとったようだった。おそらくはあの槍兵の持つ対精神干渉系のスキルであろう。槍兵ランサーの持つクラススキルは対魔力だけであつたはずだから、あれもまた英霊の固有スキルに違いない。

どのようなスキルかまでは判じ切れないが、何かしらの精神防御が働いているのだ。



でなければいくらサーヴァントといえども、これほどの魔的精神重圧の中でああも平然と笑っていられる道理がない。

常人ならば、この重圧の余波だけであるいは死に至る者もいるであろう。それほどの圧力なのだ。

その光景は、まるで烈火と止水の対立を見るようであった。

澄んだ空の下、明るい月光の届くその領域が、光景が、両者の対立の境界に捕らえられて、在りえないほどに歪み、変幻していく。

その対立は一気に泡の如く膨らみ、まるで引き絞られた弓弦の如く強張りを増していく。

——弾ける！ 次に訪れるであろう決死の交差の瞬間を、その刹那の夢想到垣間見た少女は身を硬くして襲い来る諸々の衝撃に備えた。

しかして、そのとき。

その空間そのものをあらぬ方位からまったく予期せぬ波動が襲った。

それ自体はさして激しいものではなかったが、その実はより恐ろしく状況が歪められたのだと、少女は己が魔道の摂理を知る存在であるが故に瞠目した。

今この一帯の空間そのものが、何らかの魔術にとらわれたのだということが皮膚感覚でわかったのだ。

何時の間にか彼女たちの周囲は一寸先も見えないほどの濃い濃霧に覆われていた。

咄嗟に従者に指示を出そうとしたが後の祭りだった。途端に全身の力が抜け、四肢がなえるような喪失感が彼女の五体を襲った。

恐ろしいほどの脱力感だった。不意に剥き出しの膝をアスファルトに突こうとして踏みとどまった、しかしそれが現界だった。

そこから先は微動だにすることができず、もしも倒れこんでいたならもはや立ち上がれなかったに違いない。

見習いとはいえ彼女として由緒正しき魔女の端くれである。魔術戦に備えてそれなりの防備は備えている。

並の魔術が相手なら、多少持ちこたえるぐらいのことは出来る筈なのだ。

しかし、これは反撃どころか抵抗すらまレジストまならない。

これは誰が仕掛けた魔術なのだろうか？ とにかく現代の魔術者ものとは思えないほどの魔力の質と量だ。

こんな攻撃を何の知覚もさせずに行うとは並みの魔術師の手練とはおもわれない。まさか、他のサーヴァント……七つのクラスのうち、最も魔術に長けるというクラス。キヤスターのサーヴァントがこの場に直接介入してきたとでも言うのだろうか？

空間を囲んだの檻の中では思考にさえ鉛のような澱にまみれたような感覚になつてくる。それ以上の思考が働かなくなってきた。身体も思考も重くて仕方がない。

そうしている間に、濃霧で煙る空間になにやら剣で刻み付けたような傷がついてた。

それが拡がり、引き延ばされ、線となつて繋ぎ合わされ、何らかの簡素な図形のようなものを虚空に描き出した。

あれは……なんだつただろうか？ 見覚えがある。

ああ、頭さえはつきりしていれば、すぐに意味がわかるのに……いや、そうではない。意味なんてどうでもいい。あれはあぶない。どうにかしなければいけないのではないのかふせぐのかしかしこうもあしがおもいのでは、もう、どうにも、どうにも……。

限界だった。

動こうとした足は纏れて、少女は倒れこんだ。

ほんの数秒で彼女の抵抗は終わりを告げた。その間に空間そのものに刻まれた文

様が魔術式として完成し、脱力の檻と化していた空間がおぞましい気配を伴い凝結を始めた。

もはやこれまでか、とまで思いかけたそのとき、これもまた先触れもなく吹き荒れた真紅の閃光が、凝結し始めた空間を一閃し、粉碎し、攪拌して裏返した。

——気がつけば、彼女は従者たる巨漢の腕の中で、今にも潰えそうな己の息を聞いていた。

不可解な霧の結界は跡形も無く消失し、体の自由も戻っていた。

「……なにが、あつたの」

「何だ、見てもいられんほど余裕がなかったのか。」

フンッ、誰かは知らんが、何処からか他人ひとの喧嘩ひとに無粋な事をしてくれた輩がいたようだな。

我らをまとめて始末しようとしたようだったが。まあ、そんなものがこのオレ様に通ずるはずも無く……」

そこまでは何とか把握していた。

問題はその後だ。少女は己の胴体よりも明らかに太い巨漢の腕の中、己の自画自賛をしゃべり続けている従者に、丸まった猫のような姿勢にもかかわらず努めて冷静な声で

先を促した。

「だいたいがな、オレ様かかれば——む？」

フン。そうだな。まずあの爺のクラスはランサーで決まりだろう。さすがはセイバーに次ぐ対魔力を持つとの振れこみは伊達ではないらしい。ただ突っ立てるだけでも、奴と我らとではまるで術の効果が違うようだったぞ。

まあ、だからといってこのオレ様がやられると思つたなら大間違いだがな」  
そう言つて巨漢はまた豪快な笑いを漏らした。

「……それで、あなたは宝具を使った。あの霧の魔術を蹴散らして、その敵はランサーともども姿を消した。と？」

「うむ。そういうことだな。反撃に出てやろうともおもつたが、既に逃げたあとであつたわ。

——まあ、ともかくだ。どうだ？ 主よ。オレ様がいてよかつたであろう？ そうでなければおぬしはやられておつただろうな。うむ。これでわかつたであろう。総てのことはオレ様に任せておけばよいのだ。だいたいな……」

「……というか、最初からそうしてたら良かったんじゃないの？」

「ぬ？」

その愛らしい外見からは予期せぬほどに抑揚の無い、冷淡な声で、少女が言った。

「……つまり、どうして最初から騎兵として戦わなかったのかってことよ。ライダー」

「な、何をいっとる……フン！」

すると巨漢、もといライダーと呼ばれたサーヴァントはぼつが悪くなったのか、小脇に抱えていた少女を地面に降ろして威勢良く並べていた口上を引っ込めた。

まさしく猫のようなしなやかさで地に舞い降りた少女はそっぽを向いてどっかりと胡坐をかいたライダーの背中を見下ろして細い腕を組み、抑揚の無い声で詰問した。

「……どうなの、ライダー？」

「ど、どうもこうもあるか。フン。あの程度の老いぼれ相手にこのオレ様が相棒の手を借りろとでもいうのか?! それではまるでこのオレ様が最初から全力だったようではないか！」

手っていうか、その場合、どちらかという借りるのは蹄ひづめだけだね。——などと、少女もたわいの無いことを考えた。無論声には出さないが。

「……けど、それで負けたら元も子もないじゃない。大体最後には使ってたんだし、それなら最初から……」

背中を向けたまま、見なくてもわかるようなこの上ない仏頂面で沈黙した巨漢の広す

ぎる背中に、少女はその後も二三、四、五六ほど言葉をかけたが詰問の効果が無いと見るや、今度はただ無言でその背中を見下ろしていた。

ライダーと呼ばれた異国の巨雄はしばらくの間そうして無表情に見下ろし続ける視線に耐えていたが、ついに観念したのか、

「フン。——続けていれば、勝っていた」

そう、ぼそりと呟いた。

何時もの五月蠅いくらいの音量とは打って変わって蚊のなくような声音だ。

この状態では何を言っても負け惜しみになるということくらいは、本人のうすうす気がついているのだろう。

「……根拠は?」

「いいかッ!」

本来ならこの上鞭打つのは憚られようというものだが、今後斯様に阿呆な真似を繰り返さないためにも念を押そうと、この見るからに可憐な少女はその外観からは予想も出来ぬほどの厳格さを纏って見下ろす己がサーヴァントに更なる追及をかけようとした、の、だが、

——しかし、ライダーはいきなり立ち上がると、ほぼ真上からのしかかるように、己よりも遙かに矮躯である主を睨み返し、

「フン。いいかこのオレ様なは、生まれてこのかた一騎打ちに遅れをとった事など一度としてないのだ！」

それが絶対の蹲踞せんきよだ！ わかったか!!」

と、言い放ち、そしてまたそっぽを向いてしまった。

「……根拠ね。こんきよ」

聞いてはいないと思うが一応訂正する。

否応なしに溜息が出た。珍しく意気消沈したかとおもえば何分も立たない内にこれである。

結局は意味の無い小意地を張っていたということだ。

まったく開いた口が塞がらない。

さて困った、とばかりに頭を掻いた少女——こと、この街に根を降ろす魔術師の一人である魔女見習い、小高森こだかもりくむ涅はこの先の闘争に想いを馳せ、黒い天蓋の広がり始めた空を仰いだ。

闘いは始まったばかりだというのに、こんな調子ではあつという間に脱落するのがオチである。今回は鼻目に見ても運が良かった。

さて、どうやってこの強大かつ扱いにくい事のこの上ない最大戦力をうまく活用したものだろうか……。



とにかく、今後は無為な意地など張つて出し惜しみなどさせないようにしなければならぬ。

意地を張る事と秘密保持とは意味が違うのだ。手の内を温存しようとするあまり敵に好機を与えてしまうなど論外だ。

切れるカードは切れるときに切らなければ意味がない。

何時の間にか夜の頂上を通り過ぎた月は、すでにぼやけ始めた空の境界に向けて束の間の寝屋への帰途に着き始めていた。

——始めて聞き及んだ時には絵空事としか受け入れられなかった魔術師たちによる魔幻の饗宴が、今現実の気配を伴つて彼女の世界を包み始めたのだ。

そうだ。闘争はここに開幕する。魔道の摂理に従う狂演者達がこの街のしじまにて舞い踊る、命がけの生存競争。

彼女——否、彼女たち魔道を担う者達にとつての魔魅の饗宴が、今宵、遂に開始されたのである。

## 一章—1

——まず、思ったのだ。

それが、自分にとっての正しい道なのだ。どうしてそう思ったのかは解らずとも、そのときの私には確信できたのだ。

『そうすることが、どうして正しいのかを説明することは出来ない。しかしそれが正しいのだということは解るのです』——かつて世界で最も高名な科学者の一人が言った、しかし科学者らしからぬ言葉だ。

人は時としてあらゆる理論と過程とを飛び越えて、事の是非を識ることがあるのだ。たとえ何処に向かうのかが解らなくても、その道が正しい事を知っていれば、それを信じて歩いていける。

そうして決定された己の未来には間違いというものがない。少なくとも私はそう思うし、信じている。なぜ思うのかは説明できない。

する必要もないと、——私は思うのだ。

師は念を押しして訊いて来たが、私は自分の意志を通した。

私はこれまで十年ほどの間、公私ともに世話になってきた恩師に、はれて敵対する意を表明したのである。

最もそれは私達の間柄を客観的に照らし合わせるなら、何も不可思議な事ではないのだ。

利害関係の不一致によりそれまで師と弟子であつたはずの者達が当然のように命を賭した争いを始めるということが、私達の通念においては当然のようにまかり通る。

それでも、師は最後まで得心が行かないように首を傾げていた。確かに私が師に立て付いた所で利得などなにもない。

此度の争いの原因となる「万能の願望機」なる宝具も正直なところ、私には無用のものだ。

私にはこれといって急を要する大望などなにもないのだから、それも当然である。故に師は私の行動を訝っていたのであろう。

正面きつて喧嘩を売る以上、師も手加減はすまい。互いに命を掛けた闘争なのだ。謝れば許してもらえないということもありえない。負ければ当然のように死が待っている。

第一、未だ見習いの域を出ていない私がもしも師と戦うような事になったら、万が一

にも私に勝ち目はないだろう。

文字通りそれは像と蟻との一対一の喧嘩に等しい。

——と、以上の理由から推し量るなら、確かに私がこの儀式の正式な参加者として参戦する意味はないように思える。

それでも、私はそれが自分にとって正しい道なのだと感じたのだ。それ以外に——理由はない。

与えられた機会を無駄にしたくなかったのかもしれない。

それは、一人前の魔女の証のようにも思えたのだ。あの日、私の左手の甲に確かに刻まれていた三画の聖痕を目にしたとき、そうする事が正しいのだと、考えるより先に感じたのだ。

だから、そう決めた時、もう迷いはなかった。

(日曜日・深夜)

——夜景が見える。

私達が住むこの〇〇県笹ヶ谷市は、市の東側から南北にかけて囲い込むような形で連峰に囲まれており、逆に西側には広くなだらかな平地が広がる地形になっている。

東西を真つ直ぐに貫く一本の広い国道と、南北にゆるくS字を描く太い線路とで、この都市は大体四つの区域にに分断されている。

もつとも、それは明確な区分というわけでもなく、言うほど隔てられているというこどもでもないのだが、それでもなぜか住民たちはそれとなくその区分を意識せざるを得ないのだ。

まるでそう意識するように意図的につくりこまれていようような感覚さえ、この街は蜂起させる。そんな、何処にでもありそうで、しかしどこかが特異な印象を拭えない。それがこの街だ。

ここはその二つのラインの交差点だった。

だからというわけでもないのだろうが、ここは住民たちにも街の中心部として認識されており、自然と駅や大型のショッピングモールなどが入っている高層ビルが巨城もかくやと軒を連ねている。

まるでここが街の中心なのだ、無言のうちに主張しているかのようだ。

今、私はその中でも一際高い、まるで異国の塔のようにさえ見えるビルの屋上の縁に立って街の灯りを見下ろしていた。

ここからなら、この街の全景を見渡す事も出来るだろう。まさかこの星々の煌めきのような人々の営みの灯の裏で、悪辣なる外法の徒が縦横闊歩していようとはとても思わ

れない。

だが、いる。確かに、いるのだ。

私は昨夜、身をもってその怪異を確認する事となったのだから……。

「ううむ……」

しかし、それについては反省を要することが多すぎる。

あれは二重の意味で運が良かっただけだ。何の労もなく敵に行き着いた幸運と、何の準備もできていなかったにもかかわらず、生き延びられた幸運。

今後はもつと慎重に行動しなければならぬ。あんな行き当たりばつたりを続けていたら、それこそいくら命があつても足りないというものだ。

「うううむ……」

やはりもつと諜報に力を入れるべきだったのだ。

先だつてのように、適当に行き当たった敵と適当に戦闘を繰り返していたのでは、どんな強者でも最後には消耗してしまう。

これはトーナメントではなくサバイバルなのだ。そんなことを繰り返していたら、早々に漁夫の利を拾われて敗北してしまう。

そして、その敗北は高い確率で死を伴うことになるだろう。これは決して遊びでも余興でも、ましてやスポーツでもないのだ。

「ううううむ……」

そこで今宵、私達は街に何らかの魔術や敵サーヴァントの残した痕跡がないのかを探すために夜の街を散策していたのである。

しかし、やはり昨日の事はただ幸運だったということらしい。あてどなく散策しただけでは何の成果も上がらない。

目下、私は我ながら細すぎて頼りないと思える腕を抱えて延々と考えをめぐらせていた。

ここは一つ、長年にわたって労を費やしていた用意していた諜報用の秘策に訴えてみるべきだろうか……。

「ううううむー！」

……とはいえ、何の手がかりもないのではそれも空振りに終わってしまうかもしれない。

皆に何を探すのかを明確に伝えなければ探索の範囲が広すぎるだろうし、……何より街の全域に配置した使い魔たちと感覚を繋ぐのは、私程度の術者にとってはかなりの重労働なのだ。

さて、此処に至って己の優柔不断が怨めしい。だがやはり、まずは今夜の散策で何らかの手掛かりを——って、

「……………ちよつと、」

私は、さつきから人の背後で唸り声ばかり上げている「役立たず」に声をかけた。きりがないので先ほどから無視してはいたのだが、さすがに我慢の現界だ。

いい加減にして欲しい。こんな恰好をしておいてなんだが、私にも羞恥心というものはあるのだ。

「……………おい」

「むううう、」

「……………ら」

「ううううむッ！」

そうだ、何よりも反省すべきはまずこいつを引き当ててしまった己の悪運についてであらう。いや、呪うべきは、であらうか。

こいつが強いのはわかった。たしかに強力ではある。しかし、その反面あまりにも手に余るサーヴァントを選んできました。

この件に関していえば、めったに感じる事の無い後悔というものが売り飛ばすほどに後から後から喉の奥からせりあがってくる。

「……………聞けつてばー！」

「うむ、聞いとるぞで」



ようやく生返事はしたものの、依然としてこちらの顔すらみようとしない、さつきからその視線は一箇所に固定されたままだ。一向に目を逸らそうともしない。

諜報の一環として不審なものがないか街を巡って探せと言っていたのに、まったくいうことを聞かぬらしい。

……さりとて、当然だがこんな事で三度しか使えない強制命令権を使うわけにも行かない。

「……はあ、……」

私は鉄の輪で締め付けられたかのように痛む眉間を抑えながら大きく溜息をついた。我が事ながらこれはたいそう珍しいことだ。

ああ、やはりこれは日頃から神を冒瀆する事に努めてきた罰なのだろうか？

しかしそれも魔女の嗜みとしての必要に駆られての事である。悔い改めるわけにも行かず、こうなってしまった以上、この境遇に甘んじる他ないのだろうか、しかしいくらなんでもこんなものを押し付ける事はないのではないだろうか？ これではあんまりである。

溜息の一つも出ようというものだ。

——この「聖杯戦争」という外法の儀式の肝は、本来ならば最高クラスの魔術師にも

御する事のかなわない「英霊」と呼ばれる存在をこの現世に呼び出し、七つのクラスそれぞれの特性を持つ、固定された『形』——に物質化させ、儀式に参加する七人の魔術師達へ与えるという点にあるのだという。

当然、どのクラスのどのようなサーヴァントを召喚するかは基本的に召喚してみるまでわからない。

あらかじめ選べるクラスがあつたり、その英霊ゆかりの依代、聖遺物のようなものを召喚の儀式に組み込む事が出来れば、目当ての英霊を呼び出すことも出来るのだという。

そうしなかつた場合は召喚者である私達マスターに近い属性を持った英霊が呼ばれる可能性が高い、とのことだ。

それが師から簡潔に教えられたサモン・サーヴァント、英霊召喚についての概要である。

できる事なら、私とて真つ当な聖異物を用意して目当ての強力で誠実、あるいは儀厚い英霊を呼び出したいところであつたが、そんな英霊ゆかりの聖遺物など、私のような見習いの魔女に用意できるはずもない。

かといって最初からクラスを選択できるサーヴァントはいわば大穴のようなクラスであり、できれば回避したいところであつた。

師のように魔術師としての名声と実力、そして権力と影響力を兼ね備える実力者ならば、目当ての聖遺物を取り寄せる事もできるのだろうが、さすがに正面切つて敵に回した筈の師に泣きつくわけにも行かない。

第一、それではこちらのサーヴァントの真名は師に筒抜けとなる。

これは致命的だ。サーヴァントはその真名を嚴重に包み隠さなければならぬのである。

なぜなら、その真名が敵方に知られれば、その英霊にどのような弱点があるのかということや、どのような場面でもなら活躍でき、逆にどのような局面では役に立たないのか、というこまで詳しく知られてしまうのだ。

ちなみに、私は昨夜戦った十文字型の槍を持った老僧——ランサーと思しき槍兵の真名にも大方のあたりをつけている。

あの怪奇にして壮麗なる槍の摂理を伝承に垂らし合わせれば、あのランサーの真名もおのずと見えてくるのだ。

もつとも、——だからといって簡単に攻略できる手合いかといえどもないのだが。

それでも、その伝承から特性なり何なりを推察することは可能なのだ。これは今後の展開によつては大きなアドバンテージになりうる。

そして——私のサーヴァントで言えば、事態はより深刻となる。

もしもコイツの真名を敵に知られたなら、喧嘩は馬鹿みたいに強いが、その反面考えなしの大ばか者で、忠誠心に欠け、いつ主を裏切るかわからず、簡単な策略にもすぐにはまってしまい、最後には自慢の腕力もむなしく味方に裏切られて命を落とした。

というところまで知られてしまう。

——本当である。歴史書にも絵巻にも散々この手の事が記してあるのだ。

曰く、武将としては最強だったが、それに見合うだけの中身がなかった、との事である。

もしかしたら、こいつは全英霊の中でも指折りの豪傑であり、また指折りの馬鹿なのかもしれない。

そんな事が敵に知られたら、大問題だ。

……そして、なぜ私がそんな英霊を引き当てる事になったのかといえば、事の次第はこうである。

結局、確実性のある聖遺物を何一つ手に入れられなかった私は、触媒になりそうな、いわゆる呪物（マジック・オブジェクト）、といっても大半がオカルト関連のガラクタであるが、それらを集められる限り集め、後は天に運を任せるつもりで召喚に臨んだのだ。

できる限りのことはしたのだが、なにが出るのかわからないという大博打には変わりがなかった。

そしてその賭けに負けたのかどうかは、……今のところ、まだ定かではない。と、思いたい。

それでも召喚当初こそはまだ無邪気に自分の引いたカードの強力さに胸躍らせる余裕もあつたのだ。そのときには自分の選択は間違っていないなかつたのだと、確信的にさえ思つたものだ。

サーヴァントの召喚に成功した術者はマスターと呼ばれ、総てのマスターには目視したサーヴァントの基礎能力を凡その形で数値化する能力が与えられる。

初めて目にした私のサーヴァントの能力はまさしく破格だった。真名を聞いてそれは確固とした勝利への予感へと変わった。

なぜなら、そいつは違いなく「最強」の代名詞として語られる豪勇だったからだ。そう。そう考えていた時期も確かにあつたのだ。

むしろそれがピークだったといつていい。昨夜の暴走までの経緯で、私のこいつに対しての評価はまったく正反対のものへと転化したのである。

思えば、最初から何かがおかしいと感じるべきだったのだ。

最初の対面でのそりと召喚陣から出てきたそいつは、ただ無言で私を見下ろしていた。

神々しい畏怖さえ覚えながら、私は己の名と召喚の経緯について丁寧に述べ、そしてそれぞれのサーヴァントが持つという望みを問うた。

これがサーヴァント召喚時においての最も留意すべき点である。

本来、人に御せるはずもない英霊を召喚できるのは聖杯がその殆どを行うからなのだ、英霊がおとなしくそれに応ずるのは、英霊それ自体にも「万能の願望機」に託す望みがあるからなのだという。

英霊もまた何らかの望みを持っているからそこ、このような分不相応な儀式への協力を承諾しているのだという。

——この点については、私には当初から多少の考えがあった。

なにも難しいことではない。私自身には切実に聖杯を欲する理由はなにもないのだから、英霊のほうは何を欲しがったとしても、それが世界を滅ぼすようなものでない限り、正直に渡してしまえばいいのだ。

本来の聖杯を欲して儀式に参加した魔術師たちにとって、ここは最初の難関となるのであろうが、私にとってはそれほど痛痒でもないのだと、……そのときまでは……考えていたのだ。

だからこそ、私は僅かながらの余裕すら持つて己が召喚したサーヴァントに問うた。しかし、その見上げるような巨漢の男は私を見下ろすだけで、ただ無言であつた。思えばこの辺りから雲行きが怪しくなり始めたのだ。

「フン。そうさな、オレ様の願いか」

第一声がそれであつた。言つてすぐにどつかりと床に胡坐をかけた巨漢は暫し考え、こういつた。

「まずは酒だな。何でもいい、あるだけでもつてこい」

慮外の応答に、私は暫し唾然としてしまった。

そう言われても、私は未成年だし、ここは師とは別離したために最近越してきたばかりの仮住まいなのだ。

いきなり酒などといわれても……なんて事はなく、しつかりと用意はしてあつた。

この手の英雄、豪勇には酒類というのは付き物なのだということは最初から予見して然るべきところあつたし、そうでなくとも（おそらく、大概の場合）気難しい（で、あろうと思われる）英霊の機嫌をとるにもこの手のもてなしの用意は必需であろう。

交渉とは、その席についた瞬間から始まっているものなのである。

大体からして、またしても魔女の嗜みとでもいおうか、そもそも私の専門とする魔術が香油や軟膏などの魔術薬の調合なので、アルコールの類は常備しておかなければならない。

人を惑わす酒類の精製は私が日常的に行ってきた修練でもあったし、師の屋敷には酒造蔵（無論、市政には無許可）もワインセラーも完備されていた。

そして何を隠そう、ここ五年ほどの間、この手の事にひどく手際の悪い師に代わり、屋敷の備品を管理をしてきたのは私である。

……おそらく、師は今ごろ、どの銘柄のワインやシャンパンが何処にあるのかも分らず四苦八苦しているに違いない。

師が、弟子である私がこの儀式に参加する事を好まなかったのは、おそらく私がいないと屋敷の中がめちゃくちゃになるからだという理由のほうが大きかったのではないだろうか、と半ば本気で私は考えている。

私は弟子であると同時に、師の屋敷に住み込みで働く使用人でもあるのだ。

もう家事をはじめて十年近くになるので、それらの雑務については結構な腕前だと我ながら思うほどである。

と、いうこともあって、私がこの新居に運び込んだ酒類の数は自作の大樽一個（違法）と蒸留酒やワイン、シャンパン、ビールなども含めて三十本近くになる。



まあ、大ダルのほうは料理酒のようなもので質こそ悪くない出来だが、本来飲むための物ではない。

しかし、なんでもいいというのなら、これでもいいだろう。

開口一番というのは予想外だったが、どんな無理難題が飛び出すのかと内心戦々恐々としていたのだから、これくらいなら想定範囲内だといえる。

と、——このときはまだ、楽観してもいられた。……の、だが、

小一時間ほど後、私は自分の考えが根本的に甘かった事を思い知る事になる。

前途のとおり、用意してあった酒類の容器は、そのころには殆ど空になっていたのだ。

それまで一心不乱に自前の雅な杯で酒を煽っていた巨漢はそこでようやく一息ついたのか、ほろ酔い気分といった風でこんな事を言い始めた。

「まあ、こんなところだな。フン。後は、そうだな、まずは食い物だ。うまい飯が食いたい。」

それと、「女」だ。……………ふむ」

そう言つて、己の耳の調子を疑いなら呆然としていた私に、やおら据わった眼光を向けてきたのである。

何事かと思うより先に、冷たい悪寒が体幹を走った。

「ふむ。娘、いや、もとい我が主よ。よう見れば、その方もなかなかのものではないか。フフン。まだ若い、なんとも見目麗しい。どうれ、もうちよいと近こうに……」

「……ちよ、……」

なんて事を言い出すんだろかこいつは！　そもそも、仮にもマスターに向かつてその方はないだろう。

などと言う暇もあらず、咄嗟に退がろうとしたのだが、ここは人目につかないよう隠匿された地下室だった。

私は退路を失って行き詰ってしまった。ま、まさか私はこのまま自分が召喚したサーヴァントに……!?

「あー、いやいや。よく見てみればおぬしはまだちと青いな。まだまだ体の厚みというもの足りん。フフン。実に惜しいがもう少し、後二、三年は待たねばならんなあ。——うむ、実に惜しい。まだまだ精進がたらんなあ。主よ」

そこでまた酒杯をあおり、ガハハと大笑して見せた。

……もしかしなくても私はおちよくられているのだろうか？　そのころには段々この馬鹿の馬鹿たる由縁がはつきりしてきた。

「まあ、女のほうは急がんでもいいぞ。この時代、女はいくらでもいるようだからなあ。

うむ、楽しみだ。ぜひとも絶世の美女というやつを拝ませてくれ。取り急ぎ、まずは飯だな。用意がないのならどこかうまいものが食べるところに連れて行け」

「……、……」

とりあえず、私は絶句するしかなかった。とだけ言っておこう。

——私が召喚を行ったのは、当然の如く夜も深まり始めた頃だった。

しかし時間が時間だからといって、ファミレスになんて連れて行かなくて良かった。目の前の惨状を見ながら、私は冷や汗を拭っていた。

私が選んだのは市の中心地にもほど近い、繁華街にある食べ放題の焼肉店だった。この辺りには深夜までやっているこの手の店も少なくななのだ。

そしてこれは惨状、と読んで差し支えない状態であろう。

本来穏便に、専心して人目を避けるのが魔術師、ひいてはサーヴァントの習いである。う事は想像に難くない。

当然だ。元来超常存在である筈のこいつ等が人目につくような行動をとったなら、――

当然、こうなる。

……席の周りには、遠巻きにはあるがまばらな人だかりが出来、ものめずらしそうに写真を撮るものまでいる始末だ。

正直、私は席についている事さえ億劫だった。できる事ならその場から逃げ出したかった。

にもかかわらず、この巨漢の食欲はとどまる事を知らなかった。

本来、その存在の根幹を霊体を持っているサーヴァントは常人のような物理的、肉体的な制約から解き放たれている。

主からの魔力の供給さえ滞らなければ、食べることも、寝ることも必要も無いのだ。

よって、これは私の供給する魔力では足りないからなのかとも考えたが、どうやらそれを考慮して自主的に魔力の供給を凶っている、という殊勝なものでもないらしい。

第一、実体の肉体を維持しているだけでも、私の供給する僅かの魔力は浪費されていくのだ。その意味ではこの暴食には大した意味もない。

にもかかわらず、この巨漢は次から次へと運ばれてくる大盛りの肉を軽く炙っては飲み込むようにして胃に流し込んでいく。

結局、閉店までペースを落とすことなく食べ続けた。その実、子牛一頭分くらいは平らげたのではないだろうか？

とても元人間とは思えなかった。たとえ英霊だからといっても、これはあまりに異常だと思えた。

私も別に食の細かい方ではないが、これはさすがに正視に耐えなかったほどだ。

その後で私は、兎角、何とかして、気を取り直し戦略についての話をしようとしたのだが、するとこいつはさらりとこんな事を言ったのである。

「まだ、足りんな。おい、次の店は何処だ。フン。今度はもうちよつといい肉が食えるところにしるよ」

「……………、……………」

結局、その日はそれ以上交渉を続ける事もままならず、数年間にわたり大事に貯蓄してきた一人立ちのための軍資金の何割かをただサーヴァントの食事に費やすという冗談のような成果が上がったのだった。

そして翌日まで、とらなくてもいいはずの睡眠をたっぷりととり、夜中に起き出してはまた酒盛りをしようとするこいつを連れだして巡回に出たのが、昨夜のことである。

そこでランサーと思しき相手に行き当たった。というのが、正直泣きたくなくなる様なこれまでの経過であった。

そして今夜。ぐちぐちと文句をたれながらついてきた巨漢——ライダーのサーヴァ

ントは、探索に協力しろという指示を完全に無視し、目下、私の体の一部を凝視し続けているのであった。

「……いい加減にしてッ」

私は吐き捨てるように言った。

先ほどからこの男がしげしげと眺めている箇所、それは私の臀部であった。いわゆるお尻のことである。

ビルの屋上から夜景を見下ろす私の真後ろに陣取って胡坐をかき、今まで飽きもせず、酒杯片手に見つめ続けていたのだ。

「むむ、どうした？ 隠すでない。フフン。見せるためにそうしているのだと己で言っただけではないか」

だから見ているのだ、と言わんばかりの態度だ。

「……たとえそうでも、別に見せたいわけじゃないの。魔女の嗜みだからって説明したでしょ。……これは仕様なんだってば」

そもそも、私は好きこのんでこんな格好をしているわけではないだ。

今の私は、己の魔女としての礼装を纏っている状態である。イメージとしては黒い三角帽を被り、黒猫を連れて箒を持っているという風で構わない。

ただし、私が身につけているのはこれとは少々異なる。

まず、猫の使い魔はいるが箒は無しである。

そして黒くふさふさとした鍔広の帽子と膝までの黒いレース地のブーツに、肘までの薄手のグローブ、後は首から胸元にかけての、煌めく夜のような黒いウセフ（エジプト由来の連環帯の首飾り）と、腰には黒皮のベルト、——以上である。

自分で言うのもなんなのだが、他には何も身につけていないのであった。

端的にいうと、凡そ隠すべき部分が丸出しになつてゐる状態である。

ただ、大きな三角帽が創る影と、首から肩までを覆うウセフの裾からクラゲの足のように無数に伸びている黒のリボンだけが辛うじて私の身体を覆い隠している程度だ。

当然の事ながら、至近距離から見つめられたら何もかも丸見えになつてしまう。

しかし、これは私的な生理的趣向から斯様な装束を選んでゐるわけでは、断じてない。

そも、魔女とはその属性の一つとして「姦淫」を司るものなのである。そして魔女や魔術師という人種は常人とは一線を画す秘跡を求め、いわば魔の探求者である。

故に人から乖離した存在となるために、日夜修練を積むわけなのだが、その道程というのはよほどの天才でもない限り人間一代の時間では足りないのだ。

故に魔術師という人種は己の生涯の魔術の成果を後継者に託す事で、悠久の時を神秘への探求に当てるのである。

そのため、後継者となるべくして生まれてくる子息は当然の事ながらより魔術師とし

て高い適正を持つように最初から仕組まれている。

生まれる前から魔術的な施術を施したり、より濃い血を持つものを配偶者として選んだりという事を何世代にもわたって繰り返すのだ。

故に、よほどの例外でもない限り魔術師としての能力は先天的な資質に左右されざるをえないのである。

そのような経緯もあつて通常、魔術の世界では代を重ねていたほうが優秀なのだ。

そこで私の話になるが、私の場合は少し難しい。

とりあえず、私の魔女としての血統は二代目にあたる。

つまり、事の始まりはただの一般人でしかなかった母が魔道の世界に足を踏み入れた事から始まるのである。

言葉どおりに受け取ってしまうと私は一般人に毛の生えた程度の魔女もどきという事になる。だが、厳密にいえば……それも少し、違うのだ。

私達の先祖には確かに魔女がいたらしいのである。

らしい、というのは確たる証拠がないからだ。そのために母は生涯をかけて己のルーツを探っていたのである。

自分の先祖には人ならざる魔道の業を持つものがおり、自分はその血を引いているの



ではないか、という疑いと期待を抱いた母は、ありつたけの財産と時間をつぎ込み、独自に魔術師の事を調べ上げ、そして遂に、当初お家の事情で日本に來日したばかりだった師を見つけ出して協力を取り付け、生涯を魔女の研究に打ち込んだのだ。

その成果として生まれたのが私、というわけである。

そういうことなので、師に言わせると私の魔術師としての位は（鼻眞目に言つて）下の中か上といったところなのだそう。

故に、私はこうして後付の装置によつて己の魔女としての純度を高めなければならぬのである。

内側が魔女になりきれていないために、強く外側を固めなければならぬのだ。

実際、力の無い魔術師ほど外装を不自然につくろうために異様な外形を模すもの、とも師はいつていた。

純度の高い、生まれながらの魔術師ほど、無理の無い自然な姿で生きており、それだけで十分に魔なる存在なのだ、と教えられたのだ。

……まあ、その点について嘆くつもりはない。すでに変えようの無い事ならば、後は運用の仕方で何とか誤魔化していくしかないのだ。

ちなみに私の師は九代目という大層な名門の出だという。

そしてその師の後継者として育てられていた師の長子は私と同一年の少女で、時を同

じくして魔道を学んだ仲になるのだが、何せ向こうは由緒正しき魔道の大家の十代目となる計算だったわけで、素養の上ではもはや勝負にならないという事を私は長年にわたって思い知らされてきたものである。

——とまあ、長くなつたが、そういう次第で私は別に裸で出歩く事に興奮するわけでもないし、人に見せて喜ぶわけでもない。それほど自信過剰なわけでも勿論ないのだ。これは魔女としての礼装であり、至らぬ己の実力を補うためのものでもある。

それに、これは私の魔術を使用する上でも必要な処置でもあるのだ。故に裸体を見られたくらいで一々おたつてはいられない。

——はずなのだが、さすがにこう至近距離から、しかも使い魔とはいえ間違ふ事なき異性に凝視されては敵わない。

じつと見られていると思うとさすがに耐え難い羞恥がこみ上げてくる。私としても魔女だてらに人の子なのだ。

しかしいくらそう告げてもこの巨馬鹿ときたら……

「はて、そうだったか？」

この調子である。どうやらこの男の耳は己の都合のいい情報しか聞き取らないようにできているらしい。

「フン。いやいや、恥ずかしがる必要はないぞ、我が主よ。なかなか立派な尻だ。これにはさしものオレ様も前言を撤回すべきだったと思ひ直しとつたところなのだぞ。いや、先日は無礼を申しした。」

斯様に結構なものを見せ付けられてはまだまだ青いのだ、厚みが足らんだなどは、もはや言えぬわなあ、ううむ。——フフン。それにしてもいい尻だ。いや、見事、見事！」

一時は本当に神妙そうな顔で慇懃に頭を下げたこの巨漢の男は、そこでまた痛快そうな高笑いをして見せた。

言うまでもないが、私は言葉もない。

「……ちゃんと周囲に気を配っていったでしょ」

お尻を見られたくないからといって、しかしまさか正面を向けて立つわけにも行かない。

何度言っても凝視というセクハラをやめないのだから私は後ろ手に要所を隠しながら、指示した筈の内容を反復する。私は周囲を見張れ、と言ったのだ。

するとライダーは、うって変わって悄然と肩を落とした。

「仕方あるまい。いくら目を凝らしてもこれでは……」

「……ッ」

馬鹿のくせに痛いところをついてくる。

確かにこう成果が出ないのでは、ただ見張るというのも辛いものがある。

やはり何か策を講ずる必要があるか……というか、最初から見てもいけないのかと思っ  
ていたが、飽きっぽいのはともかくちやんと言う事を聞いていたとは以外だ。

「フン。いくら目を皿のようにして往来を眺めてみても。ほれ、見てのとおりだ。ろくな女がおらんではないか！ まったく嘆かわしい。どいつもこいつも見るに耐えぬ醜女しごめばかりだ。

こうなれば間近にある白い丸尻に目が行くのも、フフン。男ならば当然という言うものだ。

主よ。姦淫だ、魔女だのと大層な事を言いながら、まあだまだ男のなんたるかがわかっておらんようだなあ、男を知らんのが丸わかりではないか。又ウハハハッ それ、隠すでない」

「……………ッ」

前言撤回である。いい得ているだけに余計に腹立たしい。

確かに姦淫を司る魔女だなどと言ってはみたものの、私はその辺りの経験にとんと乏しい……………否！ そうではない！

やっぱりこいつは人の話なんざ聞いちゃいなかったのだ！ しかもあいかわらず何

処から物を言っているのかというほど傲慢な物言いではないか！

「……じゃなくて、探れって言ったのは敵の魔術師の痕跡とかサーヴァントの気配だってばー！」

「何だ、俺の要求した極上の女というのを探していたのではないのか」

「……違う。そんな事、最初から、ひとつことも言つてない。……見るなつてばっ」

「ほれほれ、隠すなどというに。……フン。だいたい、無茶を言うな。俺には魔術だのなんだの気配を探るなんて面妖な真似は出来んぞ。近くで殺気だっている奴が要れば、話は別だがな」

なるほど、これがこいつの特性ということらしい。つまり戦闘では馬鹿強いが、それ以外には完全、全く、本気で役に立たない。ということか。

——うん、少し落ち着こう。いい加減にしないと早々にこっちの心が碎ける。

大した進展があつたわけでもないのに、この数日で私はひどく疲弊していた。

こいつと付き合っていくだけでも凄まじく磨耗していく気分だ。それともサーヴァントというものは多かれ少なかれ皆こんなものなのだろうか？

だとしたら、この聖杯戦争という儀式はろくでもないものなのではあるまいか。英霊を御すというだけでもその労力は計り知れない物がある。

「むう!? ——で、では、我が主よー！」

「……………なに?」

何かに思い至ったかのように、巨漢は真面目な顔で声を上げた。

「それでは、俺の所望した女のほうの用意は何もできていないとでもいうのではないだろうか!」

「……………自分が何をしに出てきたかわかつてる?」

「何だ、何も言わずとも敵が出て来たなら戦つてやる。

だが、それには必要なものがあるだろう。フフン。褒美だ。何の対価もなしに見ず知らずの英霊なんぞと喧嘩などしておれんのでな」

「……………そういえば聞きそびれてた。結局、あなたの願いつてなんなの」

私は保留されてそのままになってしまいそうだった問いを再度尋ねた。

こういうときでもないかと生返事かしないヤツなのだ。するとライダーは素っ気無く言った。

「フン。なにをいまさら。先ほどから言っているではなないか、己が望むのは褒美だ。美酒、美食に美女だ。それさえよこせば、とりあえずは戦つてやる」

そして口角を弓なりに歪めた。

不意にその巖のようだった座り姿が、一枚の巨大な刃のように変質したようだった。まるでビルを跨ぐような巨人の持つ大斧を想わせる偉容だ。

「……それが聖杯に望む事？ あなた本当に英霊なの？」

その濡れ光る分厚い刃のような威容にこそ息を呑んだが、しかし私は同時に鼻白む思いだった。

そんな即物的な物欲が、英霊とまで呼ばれる存在が二度目の生に託す願望なのだろうか？

「フン。オレ様に言わせれば一度死して英霊になってまでごちゃごちゃと屁理屈を捏ね回しとる連中のほうがおかしいのだ」

さすがに唾然とするしかなかった。

それほど幻想を持っていたつもりもないが、さすがに英霊というものはもつと高潔なものだろうと、私も心のどこかで思っていたのだ。

現物がこうも俗物的だとさすがに幻滅してしまう。しかし、この状況でそれを嘆いてばかりいても始まらない。

「……とにかく、褒美があればいう事を聞くって事？」

私は気を取り直してそう言った。

「ほう？ そうだその通りだ。フフン。なんだ意外と話がわかるではないか、主よ」

「……じゃあ、今日中になにか成果を挙げたら、私が知る限り一番の美人と引き合わせて

あげる」

今更何を言ったところで聖杯戦争は始まっているのだし、このサーヴァントを取り替えることもできない。多分、聖杯にクーリング・オフの機能はないだろう。

ならば後は出来る限りの最善を尽くすのみである。それに今の言動からわかったのは悪いことばかりでもない。

俗物的であるということは、逆に言えば扱いやすいということでもある。向こうに合わせてやれば自分から喜び勇んで動いてくれるという展開も有るかも知れない。

「なぬ?」

聞いたとたん。案の定ライダーは前のめりになって食いついてきた。なんともわかりやすい奴だ。

「フン。——美女といったな、どの程度だ? 歳は? 背格好はどうだ?」

「……ただし、条件は守ってもらう。……いい?」

私はびしやりと言った。向こうが話に乗ってきたのだ。ここで一気にこちらの用意したテーブルについてもらおう。ようやく、交渉の始まりだ。

「うむ、心に留めよう。して、その条件とは如何に」

巨漢は今度こそ居住まいまで直して真摯な顔を向けてきた。ちよつと感動ものである。どうして最初からこうできないのだろうかコイツは。



「……私は会わせるだけ、魔術で操ったり、もちろん腕力で言うことを聞かせるのももつての外……守れる？」

それをきいて、巨漢のサーヴァントは一瞬太い眉を上げて考え込むように首を捻つた。

「うむ、自分で口説き落とさねばならぬということか……。フン。いや、嫌いではない。嫌いではないぞ。うむ、心躍るではないか」

と思うと、一気に顔に喜色を浮かべてぶつぶつと言っていたのだが、しかし不意にそれを一転させ、私に懐疑的な目を向けてきた。

「フン。しいかし、な。……それはよほどの、その、なんだ。……美女でないとなあ。見目麗しく、内実の伴った、まさしく天女のような。そういう女でなければなく」

そう言つて今度は首を捻つたまま此方にちらちらと視線を向けてくる。

期待と懐疑が複雑に入り混じつたような、非常に気持ちの悪い顔でこつちを見てくる。

私はこんなのに友人を引き合わせようとしている事にひどく重苦しい罪悪感を抱いた。

しかし背に腹は代えられない。獲物は餌に食いついたのだ。ここは一気に行くしかない。

「……身長は私より二十センチくらい……まあ二回りくらい高い」

「ふむ……」

チラ見していた視線が私に固定された。与えられる情報を目の前の私を基準にして想い描いているらしい。

「……あんたのいう身体の厚みもばっちり」

「ほう……」

眼を見開いて、顔を真っ直ぐにこちらに向けてきた。

「……顔のほうは、街ですれ違えばほぼ間違いない男は振り向く」

「なんと……」

今度は顔だけではなく、胡坐をかいた体までもがこちらに向けてられた

「……去年私の、……学舎で一番の美女を選ぶ大会をやった時はぶっちぎりで一番になった」

「フン？　ちなみに、おぬしは何番だった」

「…………わ、私？　……は七番、だけど。……でもこれは別に自分で出たと言って言ったわけじゃ」

「なんと！」

盛大に前のめりになって訊いてきたそのままの格好で、今度はまるで石になったかの

ように動かなくなつた。

暫しの時がそのまま流れた。

巨馬鹿の動きが静止して久しい。何を考へてるのかは想像に難くない。そして想像したくない。

「フ、フンッ。いやいや、しかしな。いくら美女だといつても、中身のほうがついてこないのではなあ」

不意に動きを再開した石像は、今度は正面を向いていた身体を再度捻り上げてそんなことを言い出した。

めんどくさいなコイツ、と私は思いながら、ふとなぜこいつはこんなにも上から物をいえるのだろうか？ と疑問を再三抱いていた。英霊つてみんなそうなのだろうか？

「……性格はいいと思うけど。おとなしいし、あんまり怒つたりもしないし、あと成績もぶつちぎりで一番だし」

「なに？ 美女な上に博学の才女、そして機知にも富むというのか。そして物腰柔らかいということだな。そうだなあ。フフン。——フンフン。いかに見目麗しくとも、やらと姦しい女はいただけんからなあ……うううむ。す、すばらしい！」

そこまでは言っていないのだが、どうやらこいつは得た情報を都合のいいように変換し始めているらしい。頭の中には理想の女性像が出来上がっていることだろう。

まあ、それについての訂正はしなかった。

実際、私の友人は決してその言に劣らない女神のような人物だったからだ。——だからこそこんな奴の目にかけるのは憚れるのだが……。

するとこの馬鹿は事のほか勢いよく立ち上がった。おかげで足場になっていたビルが微震に見舞われたように揺さぶられた。

私は肝を冷やした。この街の中心街は深夜まで人の気配が絶えない場所だ。下手すると周囲の人間たちに気付かれてしまう。

「ならば話は決まった！ フン。さあ、行こうぞ我が主よ。俺についてくればその辺の英霊などは紙も同然よ！ 大船に乗った気でおい！」

「……………」

私はあまり人に対してネガティブな事は言わないのだが、こいつに対しては心の底からうざったいと思う。こんな事は初めてかもしれない。

「……で、具体的にはどうするつもりなの？」

「フン。いやいやその前に確認だ主よ。今宵成果を挙げればといったな。その成果とは如何ばかりなものか」

「……………いかばかりって……………」

なるほど、これは考え物だ。すぐにこいつを普通の人間だと偽って友人に引き合わせ

てばつかりと袖にされたら、こいつはまたヤル気を失うだろう。

こういう場合、吹っ掛けて見るのもいいのかもしれない。経過はどうあれ、こいつは今嬉々として交渉の席にいるのだ。何とかうまくことを運ばないといけない。

考え込みながら横目で見ると、今度はライダーが私にとぼけたような声をかけてきた。

「フン。あー、主よ。焦る事はないが、急いだほうがいいかもしれないぞ」

「……なにそれ、どういう意味？ ……まあいいや。すぐに会いたいなら今日中にサーヴァントを一騎打ちとること」

「ほう」

法外な要求だったかもしれないが、ライダーは動じる様子もなく眉を上げた。

ここで気を抜いてはいけない。コイツは馬鹿だが、並の馬鹿なら英霊としてここに立つてはいないはずだ。私は自分で交渉を主導するように、更に先を進めた。

「……とりあえず、今日でなくともサーヴァントを倒したところであわせてあげる。そうでなくても今日中に何かの痕跡を見つけられたら、相手の実物を見せてあげる。会うのはだめ、見るだけね」

「フン！ いいだろう」

「……あれ？」

もつと渋るかと思つて気を張つていたのだが。あつさり承諾がかえつてきた。まずはサーヴァントを一人討ち取れとは、さすがに渋るかと思つた条件だったのだが、これは予想外だった。

何か変だと思つた矢先に、ライダーは間を置かずに釘を刺すように念を押してきた。

「フン。では、今宵敵を見つければ、その者の姿を見せる。討ち倒したなら引き合わせるということで、よいな？」

「……いや、別に敵を見つけないでも、痕跡を見つければ……」

「よいな！」

「……い、いや、……うん」

気圧されて生返事をする、そこでライダーはしてやったりといわんばかりのムカつく顔で、ある方向を指差した。

「では——フン。これでまず一目見るのは確定だな」

指されたのは私の背後の闇だった。

## 一章―2

(日曜日・深夜)

指されたのは私の背後の闇だった。

ビル屋上の馬鹿でかい看板の陰の辺りだ。いつから居たのだろうか、そこに、まるで幽鬼のように痩せ細った男がひとり、――居た。

ビクリ、と己の肩が跳ねるのがわかった。何時からいたのかわからなかった。私も気を抜いていたつもりはないのだが。

「フン。どうだ？ 下手に策など弄さんでも、こういうのは待つておれば向こうから来るといったであろうが」

脇で揚々と勝ち誇るライダーに私は応えなかった。

不覚にも声がでなかったのだ。ただ、その闇の中から抜け出してきた男の異様さから目が離せなかった。

なぜなら、その存在が明らかに異質だったからだ。

先日対峙した、まるで研ぎ澄まされた流水の刃のようだったランサーや、粗暴な烈火の如きライダーでさえ、まだ神々しいまでの存在を感じさせる精気というものが確かに

あったのだ。

なのに、あれはそういうものとはまるで違うモノのように見える。その居住まいとやせこけた総身が、まるで伽藍洞のしやれこうべを思わせた。

「フン。さてそれでは、まだ見ぬ麗しの君に相まみえるよう、更なる手柄を立てねばな  
！」

「…………え、ちよつと」

呼び止めようとしたが、ライダーはまた無視して歩き出そうとするので、私は咄嗟に袖の辺りをつかんで止めた。

ダンプカー以上の馬力を感じたが、何とか止まってくれた。先の件で多少は私の話も聞く気になったらしい。

「フン。なんだ、こうなった以上、やる事は一つだろうが。…………ツは!? まさか先の話がホラだなどとは言うまいな！」

「…………いや、ちがうけど…………何の情報もないのに」

「敵を前にしてなにを言い出すかとおもえば…………フン。まあ、いいだろう、調べたいならさっさとやれ」

呆れたように言うライダーの言もこの場合わからなくはないのだが、それでも出来る限りのことはやってから戦闘に臨むべきである。



先にも述べたが、三画の令呪を宿し英霊をサーヴァントとして召喚したマスターにはサーヴァントの能力を透視する能力が備わるのだ。

私はライダーを始めてみたとき、この眼力でその破格の能力を看破し……糠喜びしたのだった。

……いや、そんなことを思い出して意気消沈している暇ではない。

私は意識を切り替えるのをイメージして一種のフィルターを視界にかけ、いまだにこちらを見たまま薄笑いを浮かべ続ける男を凝視した。

するとあの敵が間違いなくサーヴァントであることと、その異様な能力値が把握できた。

「……なに、これ……どうして」

「なんだ、あのひよろいのは見た目より強いのか？ フン。とてもそうは見えんがなあ」

ライダーは男から視線を外さぬまま、なんだか面白そうに聞いていききた。どうやら、戦い自体は面倒だが、いざ戦うならば敵が強いほうがうれしいらしい。

しかし現実にはライダーの思惑のとおりには行かないようだった。

「……そうじゃなくて、逆。……殆どの数値が最低ランクに見える。……あんなに弱いサーヴァントにいるわけ……」

「フンッ。なんだつまらん」

ライダーは心底落胆したような声でそう言つて、今度こそ制止も聞かず、ずかずかと幽鬼の如き男に向かつて行つた。

私は何も言えなかつたが、不安は逆に強まっていた。

この数値が本当なら、何かしら別の要素があるのではないか。事実そういうサーヴァントがいるらしいということは聞いている。

英霊同士の闘争とは単純に強いか弱いかでだけで測れるものではないのだ。

あらためてサーヴァントと思われる男を見る。今度は内的な数値ではなく、外面的な面に目を向けたのだ。

しかし、やはりこれといつて印象の無い男だった。

長身でも短軀でもない、細く骨ばった体。

身につけているものといえば、これまた特徴の無い、古風な薄汚れたシャツとズボン。履き潰したかのようなブーツを履き、腰に巻いた毛皮のベルトには鉞のような大き目のナイフを挿している。

それだけだ。とても英霊の装備とは思えない。だが、それがかえつて私を不安にさせた。

力で来る相手ならいい。技巧や速度に信を置く手合いでも不安は無い。しかし、もしもアレが、それ以外の手段を用いる相手だとしたら……。

しかしそんな私の懸念をその辺の小石程度にも慮ることなく、ライダーは無手のまま幽鬼のような男の前に仁王立ちした。

男はまだへらへらと笑いをうかべているだけだ。

何をする気なのかと私が訝った、次の瞬間。不意に右手をたかだかと掲げ上げたライダーは、ただ力任せにそれを打ち下ろした。

十トントラックをフルスイングして高層ビルに叩きつけたような衝撃が辺りを襲い、私はいきなり虚空に拡散し、ばら撒かれた衝撃に尻餅をつきそうになった。

驚愕に眼をしばたたかせて見れば、もうもうと砂煙の立ち昇る場所に立つのはライダーだけで、その前にはあの瘦身の男の姿がない。

はっとして、私は周囲を探った。

やはり敵もサーヴァント。今の一瞬でどこかに移動したのかと思ったのだ。しかし男の姿は何処にも見つからない。

私は周囲を気にしながらライダーに呼びかけようとしたが、とうのライダーはゆつくりとした所作で足許にあつた何かをつかんだ。

今破碎された瓦礫だろうか？ いや、そうではなかった。

私はようやく予想もしなかった事の顛末に気付いたのだ。

あの男はライダーの拳を避けたわけではなく、ただその場で棒立ちのままコンクリー

トの床面に打ち込まれていたので。

ライダーがそれを引き上げると、今度はまるで引き抜かれた大根のようにその男が姿を現した。

頭を鷲掴みされ、ぶらりと宙吊りになるその姿はどう見ても瀕死のそれにしか見えなかった。

ライダーはそんな事を気に留めた様子もなく、今度はそのぼろ雑巾のようになった敵を豪快に振りかぶり、屋上の床に投げつけた。

また先ほどと同じような衝撃が奔り、鉄骨などで頑強に補強されている筈のコンクリートにはクレーターのような大穴が穿たれた。

強かにバウンドした男は、その辺にゴミ屑のように転がった。

私はそろそろ不憫になってきてしまった。ライダーのやっている事は弱いものいじめでしかないように見えたのだ。

それに、これ以上ライダーが暴れるとこの真新しい高層ビルが早くも崩落の危機さえ迎えそうな勢いだ。

「……ライダー、もういいから……」

「なにを言つとる。フン。下がっている」

まだヤル気なのかと、さすがに抗議しようとした私の前で、——幽鬼のようなその男

は、何事もないかのように立ち上がったのだ。

先ほどの違和感がまた頭をもたげ始めた。

「フフン。まあ、英霊の端くれならこのくらいのことにはなあ……」

だがライダーは心底嬉しそうにまた無手のままで歩み寄っていく。

そこで、——私は違和感の延長たる異変に気がついた。

向かってくるライダーに対し今度は男も前進して来た。そしてがっぷりと組み合つた。

所謂手四つという状態だ。互いに向かい合い、両の掌を合わせて腕力を競い合う形。

——それがすでに怪異だったのだ。

さつきまで、巨漢のライダーを遥かに見上げていた筈のあの男の背丈が今では対面するライダーと変わらないのだ。

体が巨大化しているというのだろうか？

訳のわからなくなった私はもう一度マスターとしての透視力で男を見た。案の定、奴のステータスは今や先ほどとは全くの別モノになっていたのだ。

「フフンッ！　そうこなくてはなあ！　手柄の立て甲斐がないというものだ!!」

ライダーは今度こそ全力といった様相で敵の男に覆いかぶさった。巨漢のライダーに覆い被されて、肥大化したはずの男の五体が軋みを上げる。

ライダーの腕力の凄まじさがここからでもわかった。やはりアイツはとんでもないバケモノだ。戦闘の時だけは、心底心強い。

「フンッ。そうら、そらそらあ！ どうしたどうしたどう……？」

しかし、男はそれでも潰されることはなかった。

そのころには、もうライダーに押し負けることもなかった。組み合う間も男の体は巨大化を続けていたのだ。

それどころかその肉体には別の変化さえ起っていた。

体表は黒くごわごわとした毛皮で覆われはじめ、筋肉の起りはすでに人間のそれとは一線を画していた。

ヤツはもう人の形をしていなかった。

その身体には所謂、ソアントロビー獣人化現象が現れていたのだ！

今や、その体軀は先ほど見上げていた筈のライダーが子供に見えるほどにまで膨れ上がっていた。

異形の巨体は人のものとも思えぬ長い体毛に覆われ、野太い指の先には一本一本が鋭利に濡れ光る鉤爪のような鉤爪が伸びている。

耳まで避けた口腔には案の定、直視を躊躇させるほどの禍々しい牙が列を成している。

もはや二本足で立っていることが不思議なほどに変容したその姿は、しかし僅かに残っている人間らしさのせいでひどく奇怪でおぞましいものに見えた。

それが人の身体を獣の爪や牙で歪めたものだからなのか、勇壮な獣の形態を無様な人間の残滓で穢したからなのかは、わからなかった。

「ぬうううううッ!?!」

ライダーの腕力はサーヴァントの間でも抜きん出たものなのだということは想像に難くない。

だが、それでもライダーがそいつに押し勝つ姿は、このときばかりは想像できなかった。

さっきのお返しとばかりに、今度は獣人の男がライダーの身体を軽々と持ち上げた。

「くっ、このー!」

ライダーも足掻いてはいたが、無駄だった。

そしてまたお返しだったのだらうか、先ほど己がやられたのと同じようにライダーを凄まじい勢いで足許にたたきつけた。

さすがに三度目だ。先ほどの私のいやな予感が当たってしまった。屋上は完全に崩れ、ビル全体に巨大な亀裂が入ってしまったのだ。

もはや驚愕を通り越して唾然とするほかない。

これがサーヴァント同士の戦いだというのだろうか？　ただ素手で格闘するだけで足場とした頑強なビルが崩れ落ちるとは。

私は瓦解しかけている屋上の端で何とかもちこたえていた。

もう少しこいつらが暴れたら、今度こそこの高層ビルそのものが崩落してしまう。その上、さっきからの衝撃と爆音を聞きつけて、ビルの周りには人が集まってきている。ここにこれ以上長くとどまることも出来ない。

にもかかわらず、ライダーは叩きつけられた衝撃で下の階層まで落ちてしまったらしい。

拙いことになった。今の私は無防備な状態だ。今アイツに狙われたら……。

だが見ればあの獣人の姿がない。しばらく視界を巡らせて、やっと隣の、やや低い位置にある北側のビルの上にそれを見つけた。

今や人獣混在といった醜さはなくなり、美しく月光を弾く銀の毛並みとその存在の崇高さを物語っていた。

そこにいたのは完全に理性を失った存在。つまり完全な獣と化した伝説の具現だった。

私は、やっとあれがサーヴァントなのだとなんて納得できたのだ。

——バーサーカー。人から理性を切り離すことで完成する狂気のサーヴァント。そ



の意味で、あれは最も純真な狂戦士なのだ。

人狼とも呼ばれるその存在は、人類史のあらゆるところにその類似の伝説を見ることが出来る。

確かにそのような——獣人化現象——を経験したという英霊もいるはずだが、しかしあれはどこかそういう英霊とは違うもののように見受けられた。

だが、それ以上考えている暇はなかった。

獣はただ純真な飢えを満たすためだけに、その銀色の牙を剥き上げた。ライダーの居ない今、私には自衛がかなわない。

銀狼は一気に跳躍してきた。

見れば見るほどに心を奪われるほど美しい獣だった。

手向かうものにもない。私に出来ることは奈落のような虚空へ身を投げ出すか、おとなしく巨獣の牙にかかるかの二択であった。

咄嗟の判断で虚空に身を晒そうとした瞬間、飛び上がった銀狼と私の間に灼熱の靄のようなものが現れ、銀に光る刃をふるってそれを叩き落した。

「うおのれえええええ、やってくれたなっ！ このケダモノめえ！」

虚空へ身を投げ出した私をまたも手荷物のように抱えたライダーは怒気を撒き散らすように吼えた。

銀色の獣は僅かに鮮血の筋を虚空に残し、また北側のビルの上に着地した。

「……というか、最初から素手じゃなくてそうしてれば良かったんじゃない？」

いや、言うまい。

今回は私も気を抜きすぎた。あの人狼の能力はあまりに突飛で予想外に過ぎた。

崩れかかったビルの屋上にいる私達と、ライダーに跳ね飛ばされてまた北側のビルにまでもどった巨獣。

当然の事ながらその間には下の道路まで何も無い渓谷のような間が広がっている。

無論サーヴァントなら一息で飛び越えることも可能だろうが、この場合先手を打って空中で無防備を晒すよりも、後手に構えて待ちに徹するほうが有利になる。

位置関係としては私達のいるビルのほうが幾分高いのだが、屋上付近は今しがた生じた亀裂のせいでひどく不安定であった。

状況としては五分と云ったところだろう。ここは慎重に機を計らなくてはならない。

とはいえ、この場で戦闘に臨もうとしているのは完全な獣に変じたバーサーカーと基本的に物を熟慮しないライダーだ。

どう鼻目に見ても、両者ともに理性的な判断が期待できるとは思えない。

理詰め of 駆け引きなど論外だろう。

なんにしろう、とりあえずはまず私を安全なところへ降ろして欲しいところだったが、

対峙する両サーヴァントの間にはそんなことを言い挿む余地はなさそうであった。

先日に見たランサーとの対峙の時とは決定的に違っていた。あの時の空気に私は烈火と止水の対立を夢想したが、これは今まさに爆ぜようとするダイナマイト同士の我慢比べであった。

どちらが爆発を堪えられるかを競う馬鹿げたチキンレース。

——きつと、睨み合いは長くは続かない。どちらかが待ちきれなくなり、弾けるはずだ。どっちだ？ いったいどっちが……。

その間、私は息をするのを忘れていた。

——先に動いたのはバーサーカーのほうだった。

しかし私の危惧と心労を余所に、銀の巨獣は一跳びで私達の遙か頭上を飛び越え、私達の立ち位置を挟んで反対側の、それも六車線もの幅広の往來を挟んだ先の南側のビルの上に充分な余裕をもって降り立った。

凄まじい跳躍力だった。啞然とする私達を尻目に、銀獣はそのままふさふさとした尻尾を振って振り返りもせず、そのまま走り去ってしまった。

「……………」

逃げられた？ ……ということなのだろうか？

確かにこれ以上の戦闘を続ければどちらかが消滅していたことは確かだが、なぜか、

妙に辻褄が合わない気がした。

ライダーに抱えられたまま、私は考えた。

そも、逃げるくらいならどうしていきなり私達の前に姿を現したのだ？ なぜ勝てる

確証もないのに敵に攻撃を仕掛けた？

つまり今のは、私達の戦力を測るのが目的であったとすればどうだろう？ もしもそ

うなら事態は重大だ。あの敵を逃してはならない。

「……ライダー、今すぐっ」

——いや、待て。そうじゃない、違うッ！

ある種の懸念が稲妻の如く私の脳裏を奔った。

なぜあのバーサーカーは実体化したまま逃げているのだ？

サーヴァントはいつでも霊体化して姿を消せるのだ、なぜそうしない？ それは——

私達に追われるのが目的だからではないのか？

そうだ、あれは私達に自分を追わせるのが目的なのだ！ あれは、私達を誘っている。

私達を引き付けるのが目的なのだ！

「わかつとるわ！ フフン。ここで逃がしてなろうものか！」

すでにバーサーカーを追って動き出していたライダーへ、私は叫ぶように制止の言葉をかけた。

「……違うつ、逆！ ライダー、逆に行つて。北へ。……あの狼は追わなくていい。あれはわざわざ私達をあの方角へひきつけようとしているの。」

……わざわざ私達を飛び越えて。ただ逃げるつもりなら、あのまま反対に逃げればいい。つまりバーサーカーのマスターは自分のサーヴァントとは別の方角に逃げたということ！」

私はまくし立てた。つまり——そう、忍術に例えるならば、所謂獣遁の術というやつだ。

まずは己を発見しそうになつた敵に此方から犬などの獣をけしかけ、あらぬ方向に逃げた獣に敵の注意を引き付けると同時に自分は犬の走る方向とは逆の方面に身を隠すのである。

つまり、あの人狼は今何かしらの事を起こそうとしているバーサーカーのマスターが近くにいた邪魔者、つまりは私達を遠ざけるために仕掛けた目晦ましなのだ。

故に今すぐに北側の繁華街に探索を始めれば、何らかの魔術を使用している最中の、それも無防備な状態の敵マスターを見つけられるかもしれないということだ。

これは、千載一遇のチャンスだといえる！

しかし、ライダーは方向転換をすることなく、南に向かつたまま私を抱えてビルから飛び降りた。

「…………ちよつ…………ラ、ライ」

サーヴァントといえども飛行する能力は常備されていない。私達は重力に引かれるままに落下するしかない。

そこでライダーは持っていた戟を虚空に突き出した。しかし手掛かりになるような物は何処にもないのだ。

まさか——。私の背筋が最悪の予感を導き出した。

きつと、今朝最凶と出た私の運勢が最悪のピークに達したのはきつとこのときだったのではないかと思う。

「フン。——来たれ、我あが愛馬ああああ——ツ!!」

掲げ上げた矛の先に添えられた月牙が流麗なる天月の光を反射したように煌めいた。

その三日月形の光が時空を超えた的印となり、今ここに時空の果てから、この英霊の相棒たる伝説の名馬を呼び出すのだ。

私達の着地点にあった駐車場。そこに停めてあった煌びやかなボックス型の改造車両が、そのとき内側からめくれ上がるように粉碎された。

そしてその中から、真紅の巨大な騎影が砲弾の如く撃ち放たれ、落下してきた私達を受け止めて、そのまま尋常ならざる速度で疾走を始めた。

「なーにを言うとするんだ、主よ。フン。逃げ去ろうとする敵の背を前にして、それを追わ

ずにいるかもわからぬ背後の伏兵を探すだど？ なにをまどろっこしい。だいたいあれを追わなくては手柄の立てようがないではないか。

——フン。いいか、あの犬を討ち取ったあかつきには褒美を忘れるでないぞ」

「……だか、ら、……そう、じゃ、なくてッ……」

それ以前の前提の話なのだ。そもそも、この聖杯戦争はサーヴァントではなく互いのマスターを狙うのが常道なのだ。

それができないから、サーヴァント同士の戦闘になるだけのこと。マスターを前にしてサーヴァントを追っても仕方がないのだ。

大体、追いかけてもすぐに霊体化して逃げてしまう。そうなるといくら追っても捕まえることはむずかしい。

しかし、疾走する騎馬のあまりの豪速に私の声は掻き消されてしまった。息も出来ずに自分が乗っている馬体の発するあまりの熱量におののくばかりであった。

まるで赤熱する蒸気機関のスタンピードであった。街行く人々には、その姿は人影でも騎影でもなく、ただ一陣の閃紅と映ったであろう。

これこそがこの男の騎兵たる由縁であった。

先夜、あのランサーとの立会いの折、介入をはたしてきた闖入者の魔術を一瞬で蹴散らしたのはこの猛馬の助太刀によるものだったのだ。

「ほーれ、いたぞ。あの犬ところめが！ フフン。行くぞ相棒。戦場（いくさば）においての最速が誰なのか、はつきりと教えてやろうではないか！」

私の目には捉えられなかったが、ライダーには先を行くあの銀狼の後姿が見えていらしい。

そこで喜々とした怒号に応えるように嘶きを轟かせた真紅の馬体が、さらに加速したせいで私の抗議の声はそれつきり喉から出て行かなくなってしまった。

私に出来たのは、ただ必死になつてポイラーのような馬の背にしがみついていることだけだった。

銀の尾を引く獣影はこちらを確認するように振り返り、そのまま近くのフェンスを飛び越えて線路に侵入した。

目算で軽く一トンはありそうな巨体が、まるで重さを感じさせることなく疾走して行く。

「ほう。——フフン。お誂え向きだな。ヤツめ、誘っておるわ」

線路のフェンスの前に一度停止してライダーはそう言った。

「……だから、最初からそういつて……」

私はようやく息をついて声を出したのだが、

「違うわタワケ。囿だなどという意味ではない。



フン。ヤツは遊びたがっているようだな。さつきからわざと追いつかせるように、速度を緩めていちいちこちらを確認していよる」

「……ならわかるでしょ。アレは……」

「フン。まあ、乗ってやるのが筋だろうなあ」

ライダーは実にうれしそうにそんなことを言った。

……いや、そうじゃなくて……。と、その言葉は声にならなかった。

一時停止したかと思われた馬体が、なんの予備動作もなく一気にトップスピードまで加速して線路に突入したからだ。

無論、フェンスは飛び越えるのではなく、まるで蜘蛛の巣ほどの障害でもないかのよう  
に破られた。

「……と、とにかく、そのレールだけは壊さないようにして」

私に辛うじて言えたのはそれだけであった。

これには自分自身でも何を言っているのかと思った。

この状況に私自身もかなり動揺している。……まあ、一応大事なことだ。線路のレール  
というのはいのほかデリケートなものらしいし、そうでなくともこの英馬の燃え滾  
る破砕槌のような蹄に踏み荒らされたら、それこそ角砂糖のように粉碎されてしまうの  
は眼に見えている。

フエンス程度ならいざ知らず、レールを破壊してしまつては路線のダイヤグラムに多大な支障をきたしてしまうことだろう。

カラスが置石をした程度でも話題になるのだ。そこに巨大な蹄の跡がのこつていたら、またそれこそんでもない都市伝説やワイドショーにネタを提供することになってしまう。

無論、儀式の管理者達によって擬装の策は施されるとは思うが、それでもそんな痕跡を無闇に残してしまうのは魔術師としては論外の仕儀だ。

なんとしても回避せねばならない。

「なんだなんだ。細かいことを言いおつて。走りたいように走らせてやればいいではないか。フン。いいから黙つておれ、舌を噛むぞ」

「……………ッー」

それ以上は本当に声もでなかった。

限界だと思つていた騎馬の加速が、一段ギアを上げたのだ。

もう内心で己の奉ずる神に願うしかなかった。私の説得がほんの少しでも通じていますようにと…………。

そしてほどなくして、ようやく私も路線の上を軽やかに駆けて行く銀色の巨獣の影を

捉えるに至った。

私の祈りが通じていたのか、主人の方はろくに言うこともきかない駄馬なのだが、その愛騎たるこの巨馬のほうは主人よりも話のわかる手合いのようで、私の言葉どおりレールを避けて走ってくれた。

後ろの巨馬鹿に比べればだいぶお利口さんのようだ。

強烈な揺れに四苦八苦しながらそう言つてやるとライダーは、

「フン？　確かに、妙に素直だな。おぬし、獣やらに好かれやすい性質なのか？　こいつは気に入らない人間がいれば伏虎の如く噛み殺し、邪魔な人間がいれば虫けらよろしく蹴散らして道を闊歩するという稀代の猛馬なのだがなあ」

……何気に怖いことを言ってくれる。文献にもそこまでは書いてなかったはずだ。

あまり気を許しすぎないほうがいいのだろうか？　と考えていると、今度は馬のほうでそれに抗議するように嘶いた。

「わかった、わかった。余計なことと言わん、好きなように奔れ。……フン。主よ、おぬしはだいたい好かれたようだな」

……そうなのだろうか？　私も動物はまんべんなく好きな性質なのだが……。首を撫でてやると疾走しながら力強い嘶きがかえってきた。

初めて乗ったが、馬というのは結構表情豊かな動物のようだ。主人と同じで暴れん坊

のようだが、少なくとも私には協力的なのが気に入った。

「……うん、いい仔だね」

お前と違ってな、とはあえて口にはださなかった。

「又ハハハッ！ 挨拶は済んだな。フフン。では、これより本腰を入れて行くこととしようか！」

障害物のない線路上で真紅と灰銀の騎影はどんどん加速し、すでに外界からは二筋の未確認飛行物体としか見受けられなかったに違いない。

その英霊たちの顕現たる豪速のなんと凄まじさだろうか、あまりに速すぎて私の体感ではどの程度の速度が出ているのかがはつきりしない。

私達の行く少し先の空間には、空気と紅い蒸気のようなものの境にうつすら膜のようなものが見えていた。

まるで炎に煽られる陽炎の薄膜のようであった。

おそらくあれが力場となつて、凄まじい速度で移動するこの埒外の英馬の上にいる私達を大気の摩擦や外界の障害物から護っているのだろう。

これがなければ私は巻き上げられたちよつとした砂やそこら中に存在している大気の抵抗によつてこの身を引き裂かれていくことであろう。

もつとも、ライダーだけなら身一つで耐えられるのかもしれない。だとしたら、やは

り私に気を使つてくれてるらしい。

おかげで私もこの場所では暴風に煽られる程度の痛痒しか感じる事がなかった。この場合、これは僥倖だというべきことなのだろう。よく気がきく馬である。

その頃には、私もそう思える程度にはこの超加速の領域に慣れてきて、口を聞くことも出来るようになっていた。

というか頑張つて慣れないとそれだけで危険なのは依然として変わりがない。

吹き付ける風の中でようやく息を吸つて、私は背後に聳え立つライダーに半ば叫ぶようにして言った。

「……ライダー。バーサーカーは、ここで討つて！ 取り逃がしては、ダメ！」

こんなところまで来てしまつては、もはや街の北側に逃げたと思われる敵マスターの搜索は不可能だろう。

ならばせめてここで確実にバーサーカーを討っておきたいところだ。

これまでの攻防で、どれほどの情報を敵に与えてしまったかわからない。にもかかわらず、こちらはバーサーカーのマスターの顔すら確認してないのだ。

せめてバーサーカーを討っておかなければ、こちらが一方的にアドバンテージを失うことになってしまう。

「フンッ！ 言われるまでもない。もとよりその気だといつとろうが。大船に乗った気

「でおい！」

ところがライダーはこの状況を本気で面白がっているらしく、高笑いしながら快哉を叫んでいるのだ。

と、そのとき一瞬、周囲の明度が落ちた。

そしてふいに前にいたはずのバーサーカーがいきなり私たちの眼前に姿を現した。私は驚愕するのに精一杯で反応すら出来なかったが、ライダーは当然のようにそれを戦で打ち落としていた。

いつの間にか私達は隣県との県境にある連峰を貫く形で通っている長いトンネルに入っていたのだ。

なんとという速度だろうか。ここに来るまで物の数分だ。新幹線に乗ったときよりも明らかに速い。

それにしても、これまで逃げの一边倒だったバーサーカーがなぜ今になっていきなり攻勢に切り替えたのだろうか？

勘ぐる内にも、暗いトンネル内に列を成して点在するオレンジ色のライト光にその灰色の体毛を染めながら、急旋回したバーサーカーはやおら音速のソニックブームを撒いて襲い掛かってくる。

まるで平面上で行われているドックファイトだった。その迫力はおそらく本物の戦

闘機同士の鬩ぎあいにも匹敵するだろう。

すると、今度は壁面や天井を縦横無尽に駆け巡って多角的に巨大な爪や牙を見舞おうとしてくる。

その度にライダーは戟を振り乱してそれを弾き返すが、しかしその豪速の中で精緻なヒット&アウェイを繰り返すバーサーカーには反撃が届かない。

その激突毎に仄明るい剣戟の光がパツと咲き乱れ、私の目はその度に感光したファイルムのように閉ざされてしまう。

……前言撤回だ。この追走劇、もはや平面の攻防だけではすまないらしい。これは本物のドックファイトに等しかった。

ミサイルを積んでいないのがせめてもの気休めだ。

「フン。この場所ではちと分が悪いな。どうやら地の利は向こうにあるようだ。こちらはどうにも小回りがきかん。」

……フン。せめて弓でもあれば話も違ってくるのだが」

「……物騒なことわかないで」

ライダーは不満そうにぼそり、とそんなとんでもないことを漏らした。

こいつが曰くところの「弓」がミサイル以下である保証は何処にもないのだ。下手にそんなものをぶっ放せば、このトンネルまでもがあの高層ビルのように崩落の危機を迎

えるかもしれない。

守勢に立たされてよろめいたこちらを嘲笑うかのように、銀の閃光を播いた獣は加速した。

「チツ！ それにしても犬頃のくせに生意気な！」

「……追いつけるよね？」

私は安つぽく愚痴を漏らすライダーではなく、私達を乗せて疾走する猛馬へ語りかけた。

すると、それに應えるかのような嘶きが轟き、馬体が限界の限界と思われたところから。また更に加速して行くのだ。もはや私にはこの英馬の力量は測りきれない。

ここで、これまでの攻防で私にも双方の戦力差、というよりも疾走における質の違いというものが、大まかにだが飲み込めてきた。

直線での移動速度はさすがにライダーに分がある。

故に一見前に行くバーサーカーを捉えることも容易であるかのように思えるのだが、しかしいざという時に攻撃が届かない。

というよりも翻弄されてしまうのだ。

簡単に言うなら旋回性能においてバーサーカーはこちらを上回っているということ



になる。

つまり急な方向転換や、速度を落とさぬままに前後左右への切り返しに大きな差がでてしまうということだ。

犬や猫といった肉食獣は膝を起点にして動く人間とは違い背骨と腰、つまりは全身のバネで方向転換をする。

その速度と能率は生半可な機動装置や人間の技巧では到底追いつかないものだ。

対して騎馬の旋回性能も無論のこと人間とは比べ物になるまいが、こちらはあくまでもその走行力の加速性能と持続性を人為的に追及し続けてきた結果であり、その点についてはあらゆる獣を凌駕することは明白だが、しかしこのように多角的な空間においての小回りについては、あのバーサーカーに一步譲らざるを得ないようであった。

それに、私がレールを傷つけるな、といったことも影響が出ていないとはいいがたい。こちらの搭騎が全力で走ることができなくなっているのだ。

邪魔なものを総て粉碎しながら進むのが、本来のこの鋼の巨体の使い方なのだ。

せめてここが線路やトンネルではなく、広い平原だったなら追い詰めるのは簡単だったのかもしれない。……いや、この現代日本の起伏の多い地形ではそんなシチュエーションは望むべくもない。

無い物ねだりは無為の極みだ。この時、この場で、この状況で何とかするしかないの

だ。

しかし相手はバーサーカーのはず、それがまさかそのように考慮したうえでこの経路を選んだとは思われない。

かといって、逃げの算段をつけていたバーサーカーのマスターがそこまで支持したとも考えにくい。

おそらくは獣特有の戦闘感覚のようなものが働いたのだろう。

そも、狼のような自然界のプレデターたちには、考えずとも戦闘において正解を引き寄せる直感のようなものが備わっているのだという。

どちらにしろ、私達は身動きの取れない枷をはめられた状態に陥っている。

「フン。コイツはちと、——面白くなってきたかもな?」

にもかかわらず、ライダーは余裕の表情を崩してはいない。

「……………どうするつもり?」

何か策でもあるのかと私は訊いてみたが、

「そんなものはない。が、フン。なくとも何とかかなりそうではないか? 所詮敵は獣

よ」

「……………」

などと無駄な問答に時間を費やしているあいだに、進行方向の先に小さな光が見えて

きた。

このトンネルの終わりが近づいているのだ。開けた場所に出ればこちらの不利がある程度は解消される。

——それはつまり、バーサーカーの優位が消えるということだ。

ならば、その瞬間をあの手が逃すはずがない。このトンネルが途切れる瞬間こそが勝負のときだ。

「……ライダー、具体案がないなら、私の指示を聞いて」

「フン？ そちらには何か策があるというのか？」

ライダーはまた半信半疑といった眼を向けてきた。

「……あいつは多分、このトンネルの出口で仕掛けてくる」

「だろうな」

この点にはライダーも同意した。

もつともこいつの場合、論理的な思考からではなく、直感的な感覚でそうだと感じていたのだろう。

この男は生前もそうやって生きてきたのだろう。策を弄するのではなく、行き当たりばつたりの運任せ、己の勘任せの行動で、にもかかわらず神がかり的に事象の正解を引き当ててしまうのだ。

つまりあのバーサーカーが持つような、獣特有の直感、超感覚を、ライダーもまた備え持っているということである。

ライダーにとっては獣の行動はむしろ読みやすいに違いない。——つまるところ、同類なのだ。

行動様式が獣と一緒にするのは人としていただけだが、結果が伴う以上安易に馬鹿にも出来ない。

そう考えると、なるほど昔の隣人たちもこの男扱いにはさぞかし頭を悩ませたことであらう。

余計なお世話かもしれないが、私にもその苦勞が揚々と察せられた。

しかし言い換えれば、それはそこまでの能力なのだ。ライダーが単騎ならその野生の勘で何とかなるかも知れない。敵が十人や百人ならその勝負勘を利用して相手を打ち崩せるかもしれない。しかしそこまでなのだ。

それ以上の規模の戦闘において必要なのはことの趨勢を見通す眼力や、知略、そして人々を導き、あるいは説き伏せ、あるいは魅了してしまう能力なのだ。

この男に欠けているのはそういう部分なのではないかと、不意に、そう思えた。

私は、改めてこの男の伝承に思いを馳せていた。

それは時間にすれば秒に満たない時間であっただろう。想いというよりもフラッシュバックのようなイメージ、一枚の絵か写真用なものだ。

この男は徹頭徹尾、ひとりだった。

その能力も、思想も、願望でさえ、他者と交わることがない。孤高なのだ。何処までも虎のように己の身一つで生きぬくこの男が数に頼みをおくあの時代の中原を制することができなかつたのはある意味で順当な結果なのかもしれない。

おそらくあの歴史の if をどれだけ繰り返しても、この男が頂点に立つことはないのかもしれない。

それでも、その事実がこの男の在り方に何の感傷も伴わないことが、なぜか実にこの男らしいと、私は感じたのだ。

ぼんやりと、唐突に湧き起こった刹那のイメージに私はそんなことを想っていた。

「……出口で普通に遣り合っても多分、上手くはいかない」  
「フン。わからんだろうが」

事実そうする気だったらしい。本当に考えなしの男だ。

実際に上手く行く可能性もなくはなさそうだが、しかしそのやり方には確実性がともなわない。

「フン。言っておくがな、このオレ様に妙な小細工をしろなどというなよ。そんな暇はないぞ」

小さかった出口の光は先ほどよりも口径を増していた。出口が近いのだ。

「……それでいい、小細工をするのは私。ただ、あんたは私が何をしてくれるのかを知っていればいい」

「フン?」

私は策の詳細をライダーに伝えた。

それほど難しい策ではない。口頭での説語の内にそのための準備もできた。

首の首飾<sup>ウッセッ</sup>りの裾に付いていた黒のリボンを幾つか外し、端を束ねて結び、ケンダマの玉のような状態にする。

触媒となる軟膏を玉の部分に塗りこみ、簡易的な魔術を施す。何秒も掛からない作業だ。

しかし上手くいけばあの獣の裏をかける。

「——なるほどな。フン。いいだろう、やってみろ。良し、オレ様の合図を待て!」

ライダーも興が乗ったようで喜々として賛同した。

おそらく、こういうシンプルなやり方は嫌いではないのだろう。

この男は流儀がどうこうではなく、物事を簡潔なのか複雑なのかで判断しているから

いがある、と私は見ている。

それにしても、仮にもマスターに向かってその言い草はないのではないだろうか？

とはいえ、それを矯正することの労を想うととても取り組む気にはなれない。おそらく原子力潜水艦の馬力がひつようになるだろう。

私には荷が重そうだ。

危機的状况に瀕して感覚が凄まじく凝縮されているからなのか、それとも逆にあまりにも頑強なライダーの懐で危機感が弛緩しているからなのかはわからなかったが、そんなことを考えている間に、トンネルの出口はすぐそこまで迫ってきていた。

それまで、闇に溶け込むように息を嚙めて並走していたバーサーカーがほぼ九十度近い角度で反転し、私達を、いや、明確に言うなら、もつとも脆弱な弱点である私自身を狙って仕掛けて来た。

「今だー！」

ライダーの耳を聳するような合図と共に、私は球状に丸めたりボンの鞠を迫り来る巨大な顎に向けて放った。

私の指から離れた刹那、それは鮮烈な火花を散らして煌々と燃え盛った。

それは相手を燃やし尽くすための火ではなく、周囲を照らすための光だった。要するに強い光を発するように設定した簡易式の焼夷照明弾なのである。

つまりは単なる眼くらましなわけだが、しかし安易に侮ることなかれ。

どんな超常存在であつても、暗闇の中でいきなり眼前に強烈な光が現れたなら、程度の違いこそあれ、僅かの時間、確実に視力に支障をきたす。

それはたとえ伝説の具現たるサーヴァントでも変わらぬことだ。むしろ暗視スコップ並みに夜目が利くとなれば、より有効な策といえるかもしれない。

何より、このタイミングでほんの僅か、瞬きほどの間であつても視力を失うというのは致命的であろう。

実際にバーサーカーがうろたえたか私にはさだかではなかったが、ライダーのなつた戟の一撃はあらゆる懸念を丸ごと吹き飛ばし、その銀色の巨体をトンネルの外へ向けて数十メートルもの彼方へ血煙と共に誘った。

安易な策ではあつたが、上手くはまってくれた。

私は先ほど、相手のマスターがバーサーカーを囿に使うて遁走の手段としたことを「獣遁」の忍術に例えたが、そこで忍術には忍術ということでの策がひらめいたのだ。た。

小学校時代からの悪友に、この手の雑学に堪能な馬鹿がいて、ききたくもない話を



長々とされた時のことを思い出したのだ。

私が使ったのは所謂「火遁」というやつである。

字の如く読めば火を使って逃げるための術であるが、今回は逃げるためではなく敵の虚を突くための手段として使用した。

遁とは逃げることの意であり、敵を倒す術ではない。

娯楽小説や少年漫画の類では火遁といいながら火炎で相手を焼き殺すような術として紹介されることも多いのだが、実際にはそんな術はあまり使われなかつたらしい。

相手に火をつけるよりは、そこいらにある石なり何なりを投擲したほうが敵を倒すにはよほど効率的なのだ。

忍者とは無駄を廃し、事の能率化を優先する集団だったという。

この辺りの考え方は西洋における魔女術にも通用する概念であり、発生した文化や、またはその目的においても大きく隔てられている両者であるが、その手段や過程の部分において、どこか通ずるものがあるのでないかと私は考えている。

では、実際の火遁というやつはどのようなものであろうか。

私が説明を受けたのは二種類である。一つは街中や民家、集落の集まった場所で使用するものである。

近くに敵は潜伏している場合や、執拗な追跡にあっている場合、周囲の家屋などに派

手に火の手をあげ、それに敵や追跡者の注意を引き付けてそのまま逃げ延びるか、もしくはその火事につられて集まってきた野次馬や人だかりを利用して身を隠す、というものである。

この例は追跡されながらも余裕のある場合の火遁であり、私が使ったのはもう一方のほうである。

これは周囲に人の気配がない場合、そして空にも月の見えない暗い夜を想定した場合である。

現代では新月の夜とはいえ全くの無明の世界というのは想像しにくいかもしれないが、近代に入るまで「夜」とはまさしくそういう世界だったのだ。

人類がガス灯や電灯でむやみやたらと夜を照らし始める以前、夜とは一条の月の光に継らねば成らぬほどに闇に閉ざされた世界だったのだ。

古代において、どうして月が大地に恵みを育む太陽と並び賞されるほどに重宝されてきたのかがわかるだろう。

そんな真に暗い世界ですぐ後ろに追手を背負っている場合に、この遁走術は使用される。

月の無い夜を疾走する場合には敵もよほど夜目がきいていることであろう。その場合、咄嗟に追手の眼前に躍り出て予備動作もなく煌々とした炎を灯すのだ。

いきなり強い炎の光に眼を潰された敵は、それ以上の追跡が困難になるというわけである。

要するに眼くらしもしも使い方次第というわけだ。

とりわけ、今の策においてはそれが理想的な形で働いたといえる。

敵の意表を突くことのメリットは、少なからず驚愕と混乱を伴うということだ。バーサーカーはまだ余力があるかも知れないが、今は攻撃を受けたショックで判断の機を失っているだろう。

獣であるならなおさらだ。

今なら、この隙を逃さねば、確実に止めを刺すことができる！

「……ライダー、ぐずぐずしないで——」

しかし、ライダーは長柄の戟を大きく執り成して肩に担ぎ、高所から悠然と今しがた叩き伏せた怨敵を見下ろしている。

「……何してるの!?! 早く止めを——」

私は気を急いでそういつたが、ライダーは再び人獣混在といった形態となったバーサーカーを見据えている。

「フン。焦るな、ヤツは未だ力を残している。……これからだ」

「……ッ!?!? だから、そうじゃないってッ」

そこでバーサーカーは徐々に人の姿に戻り、そのまま霊体化して夜気の中へ消え失せてしまった。

「……ああ、」

なんということだ、こうなるから急いで止めを刺せといていたというのに！

「なんだ？ ……逃げたのか？」

「……そりゃあ、逃げるでしょ。何で止めを刺さないのツ？」

「馬鹿を言うな、ヤツにはまだ余力が残っていたはずだ。なぜこんなところで逃げ出すのだ？」

——それを聞いて私は絶句した。

「……私達は何をしてたんだっけ？」

「なんだ、今更とぼけるつもりではあるまいな。フン。我が望みをかなえるために敵の首級を挙げようとしていたのだろうが」

「……じゃあ、あのバーサーカーはなにをしようとしてたんだとおもう？」

「我らを誘い出し己の有利な状況に追い込んで仕留めるつもりだったのだろうな、まあ、あれだけ誘いをかけられたなら、フン。乗ってやるのが筋というものだろう。」

だから余計に不可解なのだ。なぜこんなところで逃げる？」

すげえ。……こいつ、本気で私の話を無視していたんだ。というかもう全部忘れ

ているのか？

「……私が何を言ったか覚えてる？」

「そうだな、約束は約束か。その美女に直面するのはまた今度の機会にしよう。フフン。敵を見つけた場合は、その者の姿だけを見せてくれるのだったな。いやあ、それでもいいな。それを心待ちにする間というのがまた心躍るといいうか……」

「……そうじゃなくて、あいつは自分のマスターを逃がすために私達を誘き出したんだって言ったの！」

「おう。はて？ そういえばそんなことを」

さすがの私も本気で頭に血が上った。

「……だから、マスターを追えつていったでしょ？ でも言うことをきかないでバーサーカーを追った。だから私は気を取り直してバーサーカーを倒してって言った！ それはこうなることが眼に見えてたからでしょ?!

……サーヴァントが単体なら、いつでも霊体化して逃げられるんだから、だから霊体化して逃げる前に、混乱しているうちに止めを刺せつていったのに……」

我ながら、おそらく誰かと面と向かってここまで怒鳴り散らしたのはこれが初めての経験である。

しかし、当のライダーは何処吹く風といった様子で、あいかわらずニヤニヤしている。

どうやらその頭の中には褒美のことしかないらしい。

「フン。なんだなんだ、やるからには絶対勝て、という意味ではなかったのか」

……………つまり、こういうことらしい。

結論として、ライダーは私の話を聞いてはおらず、聞く気もなく、これからも聞こうというつもりもない、ということだ。

もう呆れ返るばかりで、私の怒気はどこかに消えていつてしまった。もとより怒って怒鳴り散らすのは苦手だ。

ずっと怒っているのは疲れるし、怒ったほうが損をするような気がする。ずっと怒りを維持するなんて私には向いていないし、似合わない。

「フン。それにしてもつまらん相手だったな。…………ふむ?! これがほんとの「尻尾を巻いて」逃げおった、というやつか?」

「……………いや、別に上手くもないから」

私を心をもめるまで声を張り上げたというのに、どうやらこの巨馬鹿は大した痛痒も感じていないらしく、つまらないことを言っただけで懐にいる私にどや顔を見せてくる始末である。

私は深く嘆息した。それしかなかった。今の私にできることはそれだけだった。

「又ハハハ、まあ、落ち込んでも始まるまい。次に期待しようではないか、なあ?」

そして、そう言つてまた豪快に笑うライダーをぼんやり見上げて、私は思った。

きつと、私如きが怒鳴ろうが何をわめこうが同じことなのだ。おそらく、この男は生前、こういう経験をつみまくっているのだということが察せられた。

一体、これまでに何人の、何十何百の人間がこの男を叱ろうとし、正そうとし、或いは諭そうとし、また導こうと声を嗶らして叫んできたのだろうか。

そしておそらく、——それらは全部無駄に終わったのだ。なぜか、そのイメージがありありと脳裏に焼きついたような気がした。

どうしようもないということが無理やり悟らされたような気分だ。

「フン。なんだ、急に悄然としおつて。おぬしはアレだ、せつかく愛らしい顔をしとるのだからもつと笑えといっただろうが。なあ、お前もそう思うだろう?」

陽気な巨馬鹿の言に巨馬が軽快な鳴き声で応えた。私はその豪笑と嘶きの間で小さな肩を落とすことしかできなかった。

結局、この日はそのままの帰宅を余儀なくされてしまった。

近隣住民には深夜の線路を縦横無尽に滑走した銀と真紅の閃光を随所で目撃されたことだろうが、私にはその隠蔽に努める余力は残っていないかった。

目撃者が謎の発光現象として理解してくれることを祈るしかない。

バーサーカーに対してはしてやったという気もしなくはないのだが、何故かライダー

の馬鹿さ加減に打ちのめされて、打倒されたのは私であるような気がしてならない。

そして今更ながらに確信していた。

私の聖杯戦争においてもっとも強大な難関とは、この馬鹿を御することなのではないのかと。



## 二章——1

(月曜日・朝)

空は生憎の曇り空だった。

予報では明日にも雨が降り始めるといふ。念のために鞆に折り畳みの傘を忍ばせておく。

いつもとは勝手が違うので少々手間取ってしまった。

家を出発したのはいつもよりも一時間は遅い時間帯だった。

しかし、これでいいのだ。いつもは山一つ向こうからバスに乗ってこなければならないのでそういう時間になるのだが、今日は歩いて登校できる。

本来ならこの時間差をうまく使っているところと些事を片付けられそうなものなのだが、今日ばかりはそうもいかなかった。

朝から体が重い。完全に疲弊しきっているのだ。これでも体調管理には気を使っているほうなので、こんなコンディションで登校するのは初めてのこともかもしれない。

やはり無理をせずに適当な理由をでっち上げて休みを取るべきだったのだろうか？

足を引きずりながらそう考えたが、私はすぐにその考えを打ち消した。ここで無闇に休みを取るのはいらない手とは思えない。

そういう些細な行動が誰かの違和感となりそれが不信感となって、余計な詮索を招いてしまうことも考えられるからだ。ここは無理をしてでも平時と変わらぬ行いを心がけるべきだ。

「……平時と変わらぬ、か……」

我知らず漏らした独り言と溜息は自己憐憫にも等しい響きがあった。

昨夜、この世のものとも思えぬ奇怪なカーチェイス、もしくはデッドヒート、あるいは常識の埒外で行われたチキンレースとでも呼ぶべき地獄から、命からがら生還した私こと小高森渥は一夜明けてもなお気が滅入るような曇天の空のもと、それでも懸命に重い脚を引きずって平時通っている公立高校へ向かっているのだった。

ちなみにライダーは拠点となる新住居に置いてきた。

本来なら聖杯戦争の間はサーヴァントを霊体化させたまま随所に同伴させるのがセオリーなのだが、あのバカヤロウがこんなところだなにをしでかすかという心労を溜め込むくらいなら多少の危険を甘んじて受ける所存である。

それに、この学校には私以外の魔女や魔術師がないことはとうの昔に確認してあるので、校の敷地内にさえいればそれはそれで安全な場所だともいえるのだ。

教室内はいつものとおりにぎわめき立っている。私は安息の息を漏らしながらその光景を眺めた。

先日までは何ら思うところの無かった、何の変哲もない日常的一幕が、今となってみればこうもすがすがしく清涼なものに感じられるとは思っても見なかった。

実際にやる気は毛頭ないが、今回ばかりはこの光景に向かつて「ありがとう」と声を上げられなくもない。それくらいに、癒されている自分がいるのである。

ありがたい、今はこうして日常の中に身を浸して静かに身体を休めることができるだろう。そう思いながら、私は自分の席に着くなり突っ伏した。もはや身体を支えることさえ重労働に思っていたのだ。

私達の通う学び舎は公立ではあるが、私服での登下校も許可されている自由な校風を主張しているのが特色で、それ目当てでこの学校を選ぶ者も多いらしい。

きつと、この少子化のご時世に生徒を確保するのに必死なのだろう。

最近の高校や大学の求人策には形振り構わぬものも多いようである。それで本分が疎かになっては本末転倒だろうなどと、傍から見ているだけの私は無責任にも思ったりもするのだが。

とはいえあまり悲観したものででもない。そのような状況にもかかわらず、我高の風紀はそれほどに乱れきっているというわけではないのだ。

むしろ、そんな「自主・自由」とやらをウリにしている割に、ここの学生は驚くほど「普通」の規格からはみ出ていない。要するに、普通の人間が集まる普通の学校というやつなのだ。

ちなみに私がこの学校を選んだのはまさしく「普通」の学校だからである。私のようなマイノリティーの人間が身を隠すにはこういう場所の方が都合がいい。

あまり個人に焦点を当てようなどというお節介を焼いてくるような学校は魔女たる私にとって芳しくないのだ。

もつとも、私個人としては別に高校に通わずとも魔女としてはやっていけると、当初は考えていたのだが、そのことを師に伝えると今時高校にいつていない人間のほうが希有なのだから、目立ちたくないのなら、それなりの学校に行けばいいと言われたのだ。

難色を示した私に、しかし師は最後まで譲らなかった。

そのとき恩着せがましいことは何も言わなかったが、きつと師は私が最終的に魔女であることをやめたいと言いつ出した場合のことを考えていたのではないかと私は思っている。

基本的に私が率先して魔術を続けることを快く思っていない節があるのだ。自身は先代たちの長い探求の末に結実した魔道の血筋の集大成だというのに、師はどこか魔道そのものを忌避しているかのように、私は感じることもある。

数年前、師の晩酌の世話をしていたときのことだ。

私が魔女としての才能を持つていないことを師はうらやましいと言った。「才が無  
い」と言うならいつものことなのだが、「うらやましい」とは耳慣れない師の台詞である。  
私は相打ちを打つようになぜかと問うた。

師は呟くように、「そうすれば自分も魔道以外の生き方を夢見ることくらいはできた  
かもしれない」と言った。

続けて、どの方面についても何の才覚も持ち合わせていないということは、言い換え  
れば定められた道がないということであり、自分で行きたい道を作っていけるとい  
うことだとも。

それは最初から安楽な道を用意してあることよりも苦痛を伴うことかも知れないけ  
れど、それでもずっと幸福なことなのだと、叨々と語った。

後で、酔った勢いに任せたことだから忘れなさいといつてたが、私にはひどく印象的  
なことだった。

私には想像するしかないことなのだが、あまりにも突出しすぎた才能というのは、当  
人が望む、望まずに関わらず、その道を決定付けてしまうことがあるのかもしれない。

師は私の進む先を強制したくないと考えているのだ。

生前、私の母が私を魔女にすることを強く望んでいた事を師も充分承知している筈で

ある。けれど、それでも私が今からでもただの人間として生きたいといったなら、きっと、師は皮肉をいいながら十全の配慮をしてくれるに違いない。そういう人なのだ。

普段は倣岸不遜で文句なしの人でなしを装っているくせに、変なところで気を廻してしまう人だ。

魔術師としては文句のつけようも無く完璧ではあるが、人としても人の親としても何処か不器用で欠点だらけな人なのだと思う。

反故にしてしまえばいい口約束のために、私のような不詳の弟子にまで親代わりとしての責務を感じているのだから。

本当に難儀な人だな、とは思いつつ、そんな人に立場上とはいえ、歯向かうような真似をしたのは、やはり、些か心苦しくもある。

私は突つ伏していた顔を上げた。

止めておこう。そんなことを考えていても気が滅入るばかりだ。何かをやった後でそれを悔いても始まらない。今は真つ直ぐに前を見据えなければならぬ。

とはいえ、今必要なのは休息であつた。私は机の上に伏せたまま、改めて頭を回して教室内に視線を巡らせた。

制服と私服の割合はせいぜいが半々といったところだつた。

制服そのものは全員に行き渡っているはずなので、あえて私服を着ているのは件の餌

にまんまと食いついてしまった、そのためにわざわざこの普通な学校を選んだという半ば自意識過剰な、柔らかく言えば思春期特有の自己顕示欲の豊富な人々ということになる。

そういう、毎日学校に来ていく服を選ぶ努力を惜しまない、ある意味で気合の入った人種か、あるいは私のように、もったりとした型どおりの制服では動きにくいからというだけの理由でつとめて簡素な服飾をローテーションしている人間ということになる。

では斯様な校風の学び舎においてわざわざ制服と着用しているのはどのような生徒なのか。

ここで、自刃して果てた侍よろしく死んだように机上に伏せている私に声をかけてきたヤツの姿があった。

「んー？　ねえ、どしたのクロ？　元気ないわねえ。ねえ？　あんたどしたのよ？」

ねえ？　あんたらしくもない。——つつても、あんたいつも元気いっばいってキャラでもないけどねえ♪」

「……………」

私は殊更にうんざりとした顔をそいつに向けてやった。できれば構わないで欲しいというメッセージが張り付いていた筈のだが、そいつにはまったく通じなかったように、

「ねえ、なんかあったのー？　ねえねえ、いつもはもつとしゃんとしてんのにねえ。あ、まさか——いや、でも、ねえ？　……あんた、今日のはあの日じゃないわよねえ？」  
などとたわけたことを執拗にのたまってくる始末だ。

「……何で、人のを正確に把握してるの」

私はそれだけ言つて再び突つ伏した。

朝の第一声から身も蓋もない下品なことをのたまっているこのバカは不本意ながらも友人として紹介しなければならぬ人物である。

名前は那須秋乃（なすあきの）。ふざけた名前だが本名だそうだ。

制服組の大半はこういう手合いである。入学当初こそ明文化された自由の象徴である私服生活を楽しんではいたが、そのうちに服を選ぶのが億劫になり、次第に制服を愛用するようになってしまった。いわばずぼらな奴等である。

そしてこいつはその代表格のようなやつだ。

ちなみにクロ口とは私のことだ。涅（くろむ）だからクロ口。

どうも彼女（コイツ）は友人の名を二文字にまとめなくては気がすまない性質らしく、近しい友人を皆そのような愛称で呼ぶ。ちゃんと相手の了承を取っているのかは定かではない。ちなみに私は断りを入れられた覚えは無い。

「そおんなに恥ずかしがなくなつたつていいじゃないの。ねえ？　あんた毎月正確だから



わかりやすいんだってえ。それに、ねえ？ あたしとあんたの仲じやないの。ねえ？

……もうお互いに見せ合っていない場所なんてないじゃない……ねえ？」

「……誤解されるからやめて、ホントに」

息を荒げ、不遜な笑みを湛えつつ淫らにしなを作って迫り来るバカヤロウの粘っこいスキンシップの魔の手（なんかベタベタする）から逃れようと、私はバカの顔を引き離そうとしながら言った。

べつに私も過剰に人目を気にするほど自意識過剰ではないが、さすがに限度と言うものがある。それに時勢が時勢だ。そんな誤解を伴った好奇の目で注目されるのは正直言つて願ひ下げだ。

しかしいつもならもつと毅然と突き放すのだが、今日ばかりは身体に力が入らなくて体力満天なバカの不埒な介入を赦してしまう。

実際、これも何時もなら軽く受け流せる程度のバカヤロウのジャブなのだが、しかし特大のバカの後だとこの程度のバカでも辛いものがあるのだ。

「てか、あんたマジで辛そうじゃね？ ねえ、なにやったのよほんとに。ねえ？」

人の身体に抱きつきつつ、脱がしつつ、好きに弄る手は止めず、バカは矢庭にバカらしくない深刻そうな声を上げた。

ある意味面倒見がいいというのか、こういうことに敏感なので余計にタチが悪いの

だ。昔から自主的に集団から孤立しようとする私を、あくまで善意から邪魔してくれる腐れ縁の旧友というわけなのである。

ちなみに、私に忍者云々に関して要らぬ雑学を吹き込んだのもこのバカである。

まさかその雑学が役に立つ日が来ようとは夢にも思わなかったが、考えてみもみれば役にたったのではなく、役に立ちそうになっただけである。

このバカのもたらしかけたメリットは昨夜もう一人のバカヤロウによつてシャットアウトされていたのであつた。

なぜだろう？ バカのもたらす好機は別のバカによつて摘み取られるという法則でもあるのだろうか？

「……別に、ちよつと引越しのせいで寝る暇がなかっただけ」

私はあわや因果律の謎にまでその思考を飛躍させるところだったが、何とか意識を留め、努めて冷静を保つて応えた。

疲労している本当のわけを言うことは出来ない。私は用意していた遁辞を述べたのだ。

遁辞と書くとこれもまたなにやら怪しげに聞こえるが、ようするに怪しまれた時のための逃げ口上のようなものである。別に特異な術ではないが、現代社会では下手な忍術よりもよほど役に立つと考えていい。

私は本来ここ笹ヶ谷市から山をひとつ隔てた場所にある通称「晦（つごもり）の里」からバスでここまで登校していたのだが、今後ひとり立ちをすることを踏まえてこちらの笹ヶ谷市で独り暮らしをしてみることにした。

ということのような内容の文句を、この那須秋乃はじめ親しくしてくる人間にそれとなく仄めかしておいたのだ。

彼女らは私が天涯孤独の身で知り合いの屋敷に住み込んでいるのだということも知っている。故にそれで皆納得した。不審に思う者はいなかったはずである。私が師と対立してもこれで堂々と己の陣地を確保できるというわけだ。

とはいえ、本当に優秀な魔女ならこんな遁辞を用意するまでもなく、そもそも親しくして来るような、プライベートまで踏み込んでくるような友人などつくってはならないはずなのだ。

もちろん私も平素の学校に通うにあたりそのつもりでいた。自分から友人を作るような真似をした憶えはない。

常に誰とも接点を持たず、目立つこともない、教室の隅にいつの間にかいるような存在となるよう努めてきた。——筈なのだが、この馬鹿を筆頭になぜか私にちよつかいというか、ある種の好意をもって絡んでくる人間というのは少なくないのだ。

迷惑この上ないのだが、この秋乃はじめクラスの内外に関わらず私はなぜか半ば人気

者のような扱いまで受けているのだった。

まったくもって不本意である。なぜなのかは全くわからないのだが、どうやら私は動物からも（動物的な）人間からもちよっかいをかけられやすい性質を持っているらしい。使い魔の制御が容易だとか、魅了の魔術の成功率が上がったりと、利点もないわけではないのだが、やはり人の注目を引きやすいというのは現代に隠れ潜む魔女としてはおおいなる弊害となってしまう。

このことについて師には、「やはり魔術師としての才がない」と苦笑ついでに溜息を吐かれたことまである。

中世の魔女狩りの例を挙げるまでもなく、社会の影に生きる魔女が他人との接点を持ちすぎるのはよいことであるはずがないのだ。

とにかく、私が何をしても、このように声をかけたり要らぬ心配をしてくれたりする輩が後を立たないのにはいい加減辟易してしまう。

何時もなら仕方がないと思って受け流すことなのだが、今回ばかりはこれが地味につきつい、説明に無理がないように気を使ってしまい無駄に気力や体力を消耗してしまうこととなるのだ。

「なあんだ、日曜だったんだから言ってくれりゃ手伝いに行っただのに。ねえ、にしても、ほんとにあんたらしくじやないの。ねえ、それで体調崩してたんじやだめじやない、

ねえ？」

「……こういう時だつてある。……だから、今日はほつといて」

「そつか、アンタだつて人間だもんねえ。そういう時もあるかあ。わかつた。みんなにはあたしから説明しとく」

しかしそんなおせっかいいも役に立つこともあるようだ。ありがたい。これで皆に一々説明しなくても済むかもしれない。

「……………じゃ、お願い」

と、私が言うが早いか、バカはなぜか威勢良く両手を振り上げ、

「はい、ねえねえちよつとお、みんな注目く〜ッ！」

と大声を上げてクラス中の注目をまるで熊手か何かで掻き集めるように荒め取つた。

……ちよつと待て、なぜそこまで大仰に喧伝する必要が……!?

結局、バカのおかげで私はホームルームの時間までクラスメイトに取り囲まれてしまった。

前言撤回である。バカのやるお節介は得てして害悪しかうまないらしい。きつとそういう風になっているのだ。

にしても、皆心配してくれるのはいいとして、これでは気の休まる暇がない。途中、教室に入ってきた担任の教師（島原耀子二十八歳独身）や廊下に居た別のクラスの間で交えて騒ぎ立てるものだから氣丈に振舞つて皆を安心させなければならなかった。

何で魔女である私がこんなことに苦心しなければならぬのだろうか。

それでも昼休みになるころには、だいぶ持ち直していた。なんでもない平穩な時間が過ぎたことで、私の心身は近日の現実離れた怪奇な体験の連続から一時的に乖離され、それなりに癒しを感じていたのだ。

「いや〜、ごめん、ごめん。みんなにほつといてあげてつて言うつもりだったんだけどさ。ちよつと不幸な行き違いがね。ねえ？」

バカが何か言っているので無視する。

「ねえねえ、ねえつてばあ。なんだよ。無視しなくてもいいじゃんかよ。ねえ？ 私だつて好意でしたことであつてさ、別に悪気があつた訳じゃないのよ？ ねえ、ただちよつと失敗しちやつただけ、てへつ みたいな？」

ねえ？ そんな健気な私に対してそんな鞭打つような仕打ちは人としてどうかと思うのよ？ ねえ、だから許そう？ ね、許そうよ。許してよ。許す人になろう？ 許せる人になろうよ。ねえ、ね、ね？ ね〜〜〜!?!」

「初めての部屋つてなかなか寝付けないもんね。私もそうだったもの」

無視されても喋る。君が気付くまで喋るのをやめない！　とでも言わんばかりに私の脇で喋り続けているバカヤロウに救い舟を出してくれた心優しき声の主は私の反対側の席に陣取っている人物であつた。

すらりとした長身とその豊かな肢体は椅子に腰掛けていても何ら損なわれることは無く、ともすれば大人びすぎていて人を寄せ付けがたいほどの美貌は優しげな眼差しと今時珍しい長い三つ編みのおかげで年相応の幼さを垣間見せている。

彼女の名は百葉文目（ももえだあやめ）。

得てして普通の人間ばかりが集まっているこの学校にあつて、まさしく規格外という文句の相応しい存在。それが彼女である。

所謂完全無欠人間というやつで、他の追隨を赦さぬ、この学校、否この界限切つての才女である。

私があの大バカに紹介するといつて餌にしたのは他ならぬ彼女のことだ。

とりあえず、師やその息女のような魔術関係者を除けば、彼女以上の美女というのはわたしの知り合いには居ない。

「へえ、アヤでもそうなんだねえ。以外だにや。私なんて何処でも寝れるのに」

マシガンマシガンの如くしゃべり続けていた馬鹿は助成を得たとばかりに立ち上がり、椅子ごと移動して私とあやめの間に割り込み、別の角度から私に戯言を向けてくる。

「どうやら既に持参の弁当を平らげたようである。どうやってああもせわしなく喋りながら食べられるのか。」

「あんまり自慢することじゃねえと思うぞ」

「合宿とかでも真つ先に寝るもんね、アキは」

そんなバカの脇から淡々と相槌を打っているのが秋乃と同じ女子バスケット部所属の音芽と鹿取である。

音芽妃菜（おとがひな）。

妙に可愛らしい名前割に、堂々とした体躯を制服というか、ジャージに包んだ長身の女子バスケット部エースである。

本人のために弁明しておくが彼女の場合、私服で登校したいのだがイメージがあつてできないというのが本音らしい。

彼女自身は少女むけの愛らしい服装というのが何よりも好きらしいのだが、しかし自分では着れないので、結局はジャージで登校せざるを得なくなるのだという。

何を隠そう、彼女の身長は180cmを超えており、通称笹ヶ谷のタワー・オブ・バベルとまで呼ばれる絶対的女子バスケット部のエースなのだ。

彼女もまたその恵まれた才ゆえに己の望む道をとぎざされている一人なのかもしれない。



私との身長差はそれこそ三十センチ程になる。

身の丈の足りていない身分としては頭一つ分以上もある彼女の長身はうらやましい限りなのだが、才人には才人の悩みというものがあるようだ。

性格は非常に穏やかで先輩には可愛がられ後輩には慕われるのだが、いかんせんその中性的な外見から異性との接触がまるでないというのが永劫の悩みらしい。

しかし問題なのは、なぜかその鬱憤を晴らすために私に件の愛らしい服を着せようとしてくるということである。

自分では着れないので人に着せたいらしいのだが、そんなことで着せ替え人形にされるのは正直迷惑である。

私以外にも被害者は多数居るらしく、私は彼女と二人きりにはならないよう注意している。普段は本当におとなしくていい人なのだが……。

逆にこの時期になっても、頑なに毎日別の私服で着飾っているのは鹿取千江（かとりちえ）。

少々アウトローな一面をもっており、規格外のあやめを除けば、あまり優等生のいな代わりに飛びぬけて悪い人間もないこの学校にあつて、密かに「裏番」などと称されることもあるほど凄味のある風貌をしている。

バスケット部のマネージャー件主務で、戦略参謀でもあるらしい。監督のいない女子バス

の陰の立役者なのだそうだ。

一部からはヤンキー、もしくは陰の番長などとも呼ばれている。彼女も私と同じように放つて置けば教室の隅でおとなしくしている手合いなのだろうが、例によって例の如く先ほどから忙しく立ったり座ったりを繰り返しているバカヤロウによつていつの間にかこのグループに巻き込まれていたらしい。

そのついで怪我をして以来やめていたバスケット部にマネージャーとして招かれたのだ。そうだ。

一見正反対だがなぜかあやめとだけは馬があうらしく、休日など行動を共にすることも多いのだという。

バスケット部には所属していないあやめがこのグループに居るのは彼女との関係ゆえであるらしい。

実際、彼女は規格外すぎてこのクラスの優等生グループには馴染めないようなのだ。彼女自身もあやめと変わらぬ長身と真逆のベクトルの美貌、そして長い赤毛をなびかせた美人である。

とまあ、そのようなメンバーで寄り集まっていた。だいたい、昼休みはこういう状態になる。

一応言っておくが、私としては、これは不本意なことなのだ。

入学当初は何とか独りになろうと努力して見たのだが、いらぬお節介をする馬鹿のおかげで今では無駄なことだなということ諦めもついている。

きつぱりと断ればいいような気もするのだが、自分の優柔不断さが怨めしい。

優秀な魔術師ならきつとこんなことにはならないのだろう。一般人にお昼に誘われてもおそらくは華麗にスルーしてやり過ぎすのだろう。

出来れば早くそうできるように私もなりたいたいものだが……。

「しっかし、クロは料理上手いよねえ。うちの母ちゃんにも見習って欲しい」

そんな私の苦悩を余所に、馬鹿が私の作った「採れたてアスパラと根菜の揚げ物」をパクつき舌鼓を打っている。

別に私の弁当箱に勝手に手を伸ばしてくるというわけではない。

不本意だが、弁当持参となった入学当初からそのような狼藉が耐えないので、私はこのグループがみんなですまめるような物を、自分の弁当とは別に持ってきているのだ。

バカの蛮行から昼食を護るために仕方なく始めたことなのだが、最近ではこのメニューだけではなく他のクラスメイトや噂を聞きつけた別のクラスの人間まで味見をしに来る始末である。

……本当にどうしてこうなってしまうのか。

「ほんとだね、去年の合宿とかすごい助かったよ。ご飯がおいしい、とみんな気合入るし

ね

「……………」

ヒナも体育会系丸出しの意見と共に、長い腕で箸を伸ばしながら屈託無く笑う。

悪意が無いだけにこうなると私としてもあまり邪険にはできない。困ったものだというか非常に困るのだ。こんな時までこの調子では……。

「確かに、去年はとくに助かった。何せ部員だけじゃ手が廻らなくなかったからな。イヤ、ホント去年は助かった。去年のように今度の合宿もいければと思うんだけどな。去年のように……」

こっちはこっちで千恵がなにやら邪悪な笑みを浮かべて私にメッセージを送ってくる。確かに去年はさる事情から安易に引き受けてしまったのだが、今年はそんな予定は入っていない。

「……今年はちよつといそがしいから」

「え、何？ オレは去年の話をしてただけだぜ？ そうか、今年かく。今年は考えてなかったあ。いや、どうしたもんかな、今年は」

「……………」

どいつもコイツも人の苦悩などお構いなしのようである。

「チエ。あんまり無理強い駄目よ……。それに」

そう言ってあやめが本気で心配そうな視線を向けてきた。大きな瞳だった。控えめでピンと跳ねた形のよい睫毛に彩られて、慮るように私をじつと見つめてくる。

「涅ちゃん、大丈夫だったの？ 具合悪いのにこんな……」

「……自分の弁当のついでだし。仕込みは殆ど昨日のうちにやってあつたから」

私は努めて素つ気無く言つた。かといつて、あまり構われるのも良くないのだった。按配の難しいところだ。

「大丈夫だつてチエ。クロはわかってくれてるよ。ねえ？ 今年も困つてるあたしたちを見捨てたりはしいつて」

「んー、だよな〜。いや、心配はしてなかつただけだな。もー、アレだよなクロは、ツンデレだつて？」

今度はがっちりと肩を組んだ校内屈指のバカと裏番マネージャーが、相談するふりをするながら横目でこちらを窺ってくる。

「……ところで、アヤちゃん。今週末とかつてヒマ？」

「え？」

私は調子に乗つた愚か者どもを無視して、あやめには話しかけた。

「ごめんなさい！ 怒らないでください！ ねえ、無視しないでえ。マジで合宿はお願いしますう！ チエの料理じゃだけじゃ力が入らないよお。モチベーションがあが

ないんだよお！」

「勝手なことというじゃねえよコノヤロウ！ 自慢じゃねえけど、もともとそういうのは苦手なんだよオレは！ なのに一人でこいつらの面倒なんてみてらんねえんだよ。ホントに、マジで助けてくださいお願いしますう！」

二人は私の足に亡者よろしくすがり付いてきた。

結局は泣き付いてくるのである。ここで本気で突き放して恨みを買うのもどうかと思うのだが、このまま流されるのも癪にさわる。

「……考えとくから、離れて」

「嘘だあ！ そう言つて助ける気なんてないんだろ？ ねえ、頼むよ？ 今うんつていつてくれれば楽になれるからあ！ ね、ね、ね〜？」

バカが食い下がる。こんなところで、（そしてこんなことで）体力を消耗するのは、是非とも避けたい。さてどうしたものか……。

「いや、クロ。無理しなくていいからね。ほんとお願いするようなことじゃないんだし」  
ヒナはヒナでこんなことを悪意なく言ってくるのだから始末が悪い。結果的に逃げ場がなくなるじゃないか。

「……仕方ない。……ほら、わかったから離して」

ほんとに仕方がないのでそう言うと、亡者どもは立ち上がり、

「ハッハーツ！ 言質はとったぜ。もう逃げられねえぞ、クロオ！」

「ナイスヒナ！ しっかし結局は泣き落としで落ちるってねえ、クロつてばあいかわらず甘いよねえ、ねえねえねえ〜！」

「まったくだぜ、お御足スツベスベじゃねえか。いい足してんなーオイ。今からでいいからバスケ部は入っちまえよー！」

「ヒーハーツ！ と吠えんばかりに勝ち誇るバカどもを一瞥すると、当日なつてからスツポカしてやろうかという黒い念が湧き起こってくるのを禁じ得ない。

いい歳してなんでそんなに元気なんだお前ら。

はあ、私はため息をついた。

……いつものとおり、騒がしい限りだ。

沸き興るバカどもにべちべちとケリを入れつつ、心底そう思う。まあ、何処だつて学校というのはこういうものなのだろう。

バカどもの饗宴が一段落したところで皆席に戻った。いい加減にしないと昼休みが終わってしまうところだ。

「しかし、とうとうクロもこつちに来たかあ。こりやねえ、あれですよ？ 遊びの予定がぐつとひろがってもんだねえ、ねえ？」

私が用意したタツパーを舐めるような勢いで掻き込んで、秋乃はいけない妄想に浸るかのようにならぬ虚空を見上げ眼を細めた。

「前から引つ越すとは言つてたけど、ほんとにやるなんてね」

ヒナも相槌を打つ。

「……まあ、とりあえず一月だけしか契約してないし、その後はまた戻るかもしれないしね」

「そんなんでいいのかよ？　ひとり暮らしつつたらもつといろいろと遊べんだろ？」

チエがまるで呆れたようにそんなことを言う。

「……遊ぶつて……」

「そりゃ、あれだろ。同性を招いて夜遅くまで騒いだりよお、もしくは異性を招いて夜遅くまで……」

「な、なんてこというの！　そんなのだめよ、チエー！」

優等生らしいあやめの言葉に、知恵は邪悪な苦笑を湛えて肩を竦めるばかりだ。……なんであやめはこんな性質の悪そうなヤツとつるんでいるのだろうか？

そして、今度は脇にいた秋乃が妙な笑みを湛えてその優等生の方へにじり寄った。

「アヤはうぶいなく、そしてお堅いなく。いいじゃん、ねえ。そのくらい。普通だつて」  
「で、でも、そんな」



「ねエ？ それにねえ？ ねえねエアヤは何が嫌なの？ ねエ？ クロに男がいてもそんなに怒ることじゃない？ クロならそんなろくでもないヤツには引つ掛かんないつてえ」

「でも——そういう問題でもなくて、その」

「それとも。ねエ……それってヤキモチイ？」

「!?」

あやめの耳元でぼそぼそといっていたバカの言葉に、あやめは顔を真っ赤にして言葉を失っていた。チエはそんな様はニヤニヤと眺めている。

私はやりとりの意味がよくわからず傍観していた。

「でも、クロってそんな相手いたりするの？」

同じく傍観気味に成り行きを見守っていたヒナが高いところから聞いてきた。座つていてもあまり身長差が変わらないので、私は視線を上げることなく彼女声だけで応えた。

「……いや、ぜんぜん」

率直なところを答えたまでである。

とうるか事実だ。確かに今は馬鹿でかい居候がいるわけだが、あれは男だとか女だとかの前にまず「超兵器」と言う分類があり、しかるべくその後「バカヤロウ」と分類

されるべきなのだ。というか、もはやそうとしかカテゴライズ出来ない自分がある。

真つ赤になつてゐる優等生を解放した、犯罪者一步手前といった格好のバカが、ゆり、とようやく自分の席に納まつてから、なおも勝手なことを言つてくる。

「わかんないよお、わかかんねえよお！ クロつてこう見えて男に人気あるし、人がいいからさあ、下手に部屋の中へ上げたりするとねえ。ねえ？ 無害そうに見えた男が姿を消し、いきなりウルフガイが現れて」

「……何の話？」

いい加減馬鹿の話が長引くのがあれなので、私は呆れぎみに相槌を打つ。

第一、これほどく苦心している、しかも魔女たる私に対して「人がいい」とは何事か。それに、「こう見えて」とはどういう意味なのか。

「え、知らない？ ねえねえ知らない？ ねえ知らないのお？ 不死身の狼男が活躍するさあ、ねエ、ハードボイルド小説」

「イヤ、知つてつけど、何年前の話だよ。それ。オレら生まれてねえじゃん」

下手したら親の代だつてまだかもしんねえ。とチエは続けた。言う割りにコイツも随分詳しいような？

「アキはよく知つてるよねそういうの」

「昭和だしよお。七十年代だよ。何歳なんだよお前」

狼男か、どうでもいいが聞いていると少々怖気の走るのを感じる。

さすがに昨夜実物を見たとは言えない。しかもまだヤツはこの街にいたのである。あれに部屋の中まで攻め入られるというのは、なるほどたまつたものじゃないだろう。「それはそうとして、確かにクロあんまり頼まれたらいやって言わないし、あぶなくない？」 たしかに秋乃と違って人気もあるし」

「そうだな、秋乃と違って人気もあるしな」

「え、何？ ねえ何？ もしかして、ねえ、私にオチをつけろと言いたいの？」

「涅ちゃん、大丈夫？ まだ具合悪い？」

昨夜のことを思い出して私は俯いていたのだろう、すかさず、あやめが本気で心配そうに聞いてくる。

「……大丈夫。それにそこまでお人よしじゃないし」

「でも、その、最近あぶないって言うし……」

あやめは心底心配そうな声を上げる。

「何の……？」

「あ、わかった。あれでしょ、ねえ？ 例の噂！」

ヒナが聞き返すとあらぬほうからバカが声を上げた。眼を離すとすぐ席を移動しているのだ。小学生男子か。

「噂って、人がさらわれるってヤツか？　ばかばかしい。家出する奴くらいどこだっているだろうさ。バカな保護者連中が騒いでるだけだろ？」

「でも、最近本当に物騒だって話もあるし……」

チエは心底馬鹿らしいとばかりに失笑したが、あやめは表情を曇らせた。

改めて正反対の反応だと思う。にもかかわらず、この二人は普通に仲がいいのだ。まるでタイプが違うというのに。

似ているのは、そう飛び抜けた長身と、……バストカップ位だと言うのに……やはりその辺に通じるものがあると違うのだろうか？

まあ、それはさておき、その噂については、私も聞き知ってはいた。しかしそれは唯の噂だと思っていた。何処にでもあるような、古い噂だ。

「じゃあさ、その辺の事の対策会議も含めてさ、ねえ？　今日はみんなでクロの新居にお邪魔してねえ、そんでねえ」

「……悪いけど、いろいろと忙しいから。遊んでる暇ない」

「そ、そんな！　それじゃあ！　ねえ？　私が持て余した暇は、ねえ？　どうしたらいいというの？　ねえ？」

「……あんたの暇なんだから、好きなようにしたらいい」

「アキ、持て余すも何も、今日もすっかり部活だよ」

「サボンなよ」

「おおう……」

女子バスの絶対的エースと元締め件マネージャーが「稀代のムードメイカー」とか呼ばれる幻のベンチ要員（シックスメン）女に睨みをきかせている様はなんとなく癒されるものがある。

何処でも馬鹿の扱いには手の掛かるものなのだろう。私も帰ったらあの巨馬鹿をどうやって誘導していくのか考えなければならぬ、などと考えていると、

「涅ちゃん。なら、私だけでも、今日手伝いに行こうか？ その、ひとり暮らしって慣れるまで大変なものだし」

「そういや、アヤもひとり暮らしだっけねえ。ねえ？」

秋乃がそんなことを言う。そういえばそう聞いていたかもしれない。私も失念していた。案外この優等生のプライベートについては知らないことが多い。いや、知らない方が本来はいいのだが……。

「うん。その、わたしも最初はいろいろと大変だったし……」

たまに、この優等生は物事を深刻に考えすぎるくらいがあるのではないかと思う。果てはただのクラスメイト相手にこんな献身的なことまで言い出す始末である。

「……いや、そこまでしてもわからなくても」

「そ、そうだよね……。ごめんなさい。……ホントに、ごめんなさい、私調子に乗って……」

私がそう言うのと今度はひどく落ち込んでしまった。どうにも私にばかり反応が過剰すぎはしないだろうか？

「……いや、そんな謝んなくても」

「だめだなあ。ねえクロ？ あんたはアヤの気持ちをわかってないよ。わかんない？ ねえ？ どうしてアヤがそんなことを言うのか。他の人には言わないよ？ ね？ つまりアヤはさあ、アンタだからさあ、ねえ？」

「……は？」

「な、なななに言い出すのアキちゃん!? へ、変なこといわないでえええッ！」

「——んねぶツツ?!?!」

制止を振り切り何事かをのたまおうとしたバカの口を、凄まじい勢いで真っ赤になったあやめの手が鷲掴みにして塞いだ。すさまじい反応速度である。

ちなみに彼女は美貌学力だけでなく運動能力のほうでも規格外らしく、彼女が本気で立ち回れば常人ではまず太刀打ちできないのだそうだ。

「……えーと？」

とりあえず、このバカの自業自得は言うまでもないことなのだと察せられたが、やり

とりの意味がよくわからなかったので、私は他の二人に水を向けてみた。

「今のはアキが悪いな」

「うん、今のはアキが悪い」

「……それはなんとなく解るけど……？」

「いや、解ってない」

「解ってないね」

「……？」

言われても私はクビを捻るばかりである。なにやら判然としないこともあるが、とにかくこんな光景も何時ものことだった。

とりあえず、ではあるが私を取り巻く日常はこの街の陰翳に影を落とす禍々しい側面とは乖離したものだと思えた。

この日中の光に照らされた穏やかな日常はというものはあくまでいつもどおりに過ぎていくように見えた。

少なくとも、この時にはまだ、そう思っていたのだ。

## 二章一 2

(月曜日・放課後)

結局のところ、この日の授業は平穩無事に終了しそれぞれに用事のあるクラスメイトたちと別れた私は一人帰途についていた。

独りになり羽を伸ばすように伸びをして、心身がだいぶほぐれているのを確認した。無理を押しして登校したのは間違いではなかったようだった。

結局、私は皆にアパートの住所を教えてしまった。

無論それも優柔不断のなせる業、——というわけでは、さすがにない。

それも総て織り込み済みのことなのだ。引越したといっておきながら新しい住所を隠そうとするのは不自然だし、興味が無い筈の人間にまで余計な違和感を与えることになってしまう。

だから私は先の遁辞の辻褄を合わせるため、実際に魔術戦の拠点として使用するつもりで用意していた場所とは別にカムフラージュ用のアパートメントも用意しておいたのだ。

少々警戒しすぎな気もするが、こういう用意は出来る限りしておいたほうがいい。そ



れにいざという時には実際に予備の拠点として使えないこともない。そう考えればまあ、そういう無駄ともいえない用意だといえるだろう。

実際の拠点は市の北西部郊外の空家だ。放置されて久しい、曰く付きの洋館で、こちらは地下室を中心に私が勝手に要害化して使用しているものだ。

どうせ持ち主が来ることなんて在り得ないし、来てもすぐに使用することはないだろう。最初に中に入った時の荒廃ぶりはひどいものだった。

人目につかないよう、夜な夜な通い詰めて敷地そのものを自分の陣地としたのだ。

少しづつ、しかも師にも気取られないようにやらなければならなかったのだ、実に半年以上もの時間を費やすことになってしまった。

うって変わって、こちらのアパートは南東部、学校よりも中心街に近い位置にある。

この辺りには近隣の大学や専門学校に通う学生や、隣県から市内に出てくる若者のためにアパート等がたくさん用意されており、私一人が入居しても目立つようなことはありえない。

こちらはこちらで、隠れるには悪くない条件が揃っている。

まだ学生の私が一人で入居するとしても、まあ、不自然とはいえない行動な訳だ。

とにかく、日常、接点のある人間に出来るだけ違和感を抱かせないことが重要なのだ。そういう部分から計算は狂っていくものなのだから。

それにここからなら、南西部にある病院もほど近い。

見舞いに行きやすいというのも真つ当な理由だろう。

遁辞の種にするのは些か心苦しいが、そのためにもこの儀式が終わつたら、実際に見舞いに行くべきだろうか。最近では忙しすぎて見舞いに行く暇がなかったから。

「あ、涅姉さん」

考えながら歩くに足を任せていると、突然声をかけられた。

聞き知つた声に危機感こそ抱かなかつたものの、何せ予期せぬことだっただけにさすがに身が強張るのは避けられなかつた。

勢い振り向くと線の細い、華奢な体軀の少年が嬉しそうにこちらを見ていた。

「……アー君？ どうしたの、こんなところで」

声をかけてきたのは黒髪の美しい少年だった。

その姿に、私も不覚ながら一時安堵の念を抱いた。明らかに純正の日本人とは思われない、弟というよりも妹を見ているような気になつてくるような美しい少年だ。

とはいえ、彼は私の実弟というわけではない。

「今から姉さんのお見舞いに行くところなんだ」

「……ああ、そうか」

故にこの「姉さん」とは私のことではなく彼の実姉のことである。

彼の名はアズル・フォン・シユタウフェン。何を隠そう、我が魔道の師であるルベル・フォン・シユタウフェンの実子なのである。

つまりは彼も魔術師の子息ということになるのだが、彼は母親や一緒にの屋敷に住んでいた私が魔道に関わる類の人間であることを露ほども知らない。

本来、魔術師というものは自分の総ての研究成果を次代の人間に託すために優秀な後継者を欲する。そのためその研究の成果が遺産相続のように分割されるような事態を大いに嫌うのだ。

魔術師にとっての家門の発展とは一般人の場合とは違い、一本の道のようなものであり、あまり枝分かれした分家筋の派生を良しとしないものなのだ。

魔術の目的とは一直線に神秘の根源に到達することであり、決して家門の繁栄ではないということであろう。

それゆえに、魔術師が複数の子息をもうけた場合、どちらか一方を後継者として育て、もう一方には生涯魔道の何たるかすら教えないというのが通例なのである。

それに倣い、わが師ルベルも長子である姉を己が後継者として選び、弟である彼にはいたって普通人としての生活を用意していたのである。

しかしその点についても、現在少々問題が発生していた。

私の唯一無二の親友でもあった彼の姉は、現在ある種の靈的奇病を発祥してしまい、

長期の入院を余儀なくされていたのだ。

もう一年になるだろうか、このすぐ近く、北西部にある魔術師の息の掛かった病棟に入つたままだ。

あれほど可憐な彼女があんな高い所に一年も閉じ込められているのは、何にも増して不憫なことだと思つた。

故に、私も折に触れては見舞いに行つていたのだが、最近では儀式の準備に追われて疎かになつていたのでした。

しかし見知つた顔が出てきたにもかかわらず、私は瞠目せざるを得なかつた。

漏らしかけた安堵の息を飲み込んで、今度こそ渾身で身を強張らせた。まるで凄まじい引力に吸着されたかのように、私の視線は釘付けにされていた。

彼にではなく、彼に同伴していた人物に、である。

「……………そちら、は」

「あ、そうか、淫姉さんは初めてだったね。島原夕子さん。クラスメイトなんだ。今日は車で送つてもらつて」

「ッ!? シマバラ——」

「夕子ちゃん。ほら、いつも話してるでしょ? あの淫姉さんだよ」

「……………ッ、……………」

アズルはとても嬉しそうに私のことを紹介してくれているが、私は暫し言葉を忘れていた。

「始めまして」

礼をとる少女はひどく時代錯誤な感慨を纏っていた。

まるで平安時代の貴族か何かを思わせる長い黒髪と白い肌。今は制服姿だが、洋装よりも和装が似合うであろうことは想像に難くない。

精緻に造りこまれすぎた日本人形のようにであった。だが何より私を動揺させたのは彼女の名だ。

島原——それは確かこの土地で聖杯戦争を開催した御三家の一角。千年の古よりこの地に根付く魔道の大家の名ではなかったか。

「……………ええ、よろしく。もしかして耀子先生の妹さん？」

礼を返しながら、私はそれが疑いようなない事実なのだと確信していた。持っていた知識が、今実感と結びついて私にそれをもたらしたのだ。

「はい、耀子は姉の名です。近年会っていませんが、こちら（笹ヶ谷市）で教師をしているとか。生徒の方なのですね」

私はそうだと応えた。

——実のところ、私も島原という名だけでここまでおののいていたわけではないの

だ。

事実、私の担任教師である島原耀子もまたその魔道の大家の出身であることはすでに調べがついている。

しかし、彼女はアズルと同じく魔道については何も知らない一般人として生活しているというのはずで調べがついていることだ。

彼女には魔道の素養が全くといっていいほどないのだ。

では、この夕子と名乗る少女はどうなのだろうか。

——疑うべくもない。彼女の秘める魔術的ポテンシャルは私の数十倍から百倍、それ以上からも知れない。それが一瞬でわかってしまったのだ。所謂格の違いというやつである。

これだけの魔力なら、どれほど強力なサーヴァントであろうとも御するのは造作もないことだろう。

だが、おそらくは彼女も中学に上がったばかりのアズルと変わらぬ歳のはずである。

はたして、島原は彼女を今代のマスターに選んだのだろうか？

「では、姉にはよろしく伝えていただけますでしょうか。夕子は健勝ですと」

小柄な私よりも、幾分低い位置にある白い貌は表情が読めず、その内実は窺い知れない。

マスターだったとしたら体のどこか、大方は左右の腕のどこかに印が現れるはずなのだ、今のところ見当たらない。

もつとも、それなりに気が効いた魔術師ならそれを隠蔽することも決して難しくはないはずだ。現に私も自分の令呪の隠蔽には気を遣っている。今彼女から受ける印象や情報だけでは判断がつかない。

もしも彼女が敵だったというなら、この場で私はどうするべきなのだろうか。

「……………ええ、もちろん」

曖昧に応えたが、よほど顔に出ていたのだろう。アズルのほうが私に心配そうな声をかけてきた。

「淫姉さん、どこか具合が悪いの？ 顔が真っ青だよ」

実際、私は気圧されないように必死だったのだが、そこで一度小さく息を吐いた。アズルの友人だというなら、いきなりこの場で魔術戦ということもないだろう。

彼はとても人見知りする性質なので、自分やその周りの物に害を及ぼそうとする手合いと連れ合うとは思えない。

その生来の感覚はやはり魔術の子息ならではのものです、その辺の危機感知能力は私よりも確実に優れている。

とはいえ、この場でボ口を出すわけにも行かない。ここはやり過ぎすに限る。私は咄

嗟に彼の言葉に乗った。

「……うん、ちよつと具合悪くてね、帰って横になろうかと思つて」

「大丈夫なの？ ど、どうしよう。——そうだ、これから一所に病院に」

「……いいの、すぐ近くだから。休めばよくなると思うし」

「う、うん」

「……気にしなくていいから、アー君はお見舞いについてあげて、私もしばらくいつてないから」

私と大して変わらない、今時の中学生としては小柄な身長しかない少年は無理をするように声の調子を上げた。

「わかつたよ。じゃあ、今度は一所に行こうね」

彼も無理をしているのかもしれない。

長年一緒に育つた実姉があつた塔に囚われ、今度はもう一人の姉同然に育つた私が一時的には言いながら家を離れたのでは、彼も心細いことだろう。

こんな状態でなければ、私のほうで彼をなぐさめてやりたいところなのだが……。

「……そうだね」

そう言つて私は早足で二人から離れた。

心配そうに私を見る少年と、ペこりと頭を下げた少女はそのまま、待たせてあつたや



たらと長くて黒光りする車に乗り込んだ。

最後に、夕子と名乗った少女がちらりと向けてきた眼差しには、研ぎ澄まされた白刃のような怜悯な光があつた。

やはり、……彼女は敵なのだろうか？ 少なくともこれから先彼女のことはこの先常に念頭においておかなければならないだろう。

気がつくと思が切れていた。早足で歩いているつもりだったが、小走りになつていたのでろう。一度、どこかで息を落ち着けなければならなかつた。

そうしなければ、この胸とは真逆に冷え切つた心胆のほうに耐えられないと思えた。ああも唐突でなければまだ対処のしようもあつたのだが、それもままならなかつた。

彼女がもしもマスターで、そして単独で、サーヴァントを連れていたなら、私は今確実に死んでいた。

なんのこともなく過ぎ去つたかに見えた、ありふれた日常の裏にその実、薄氷を踏むかのような危うさが隠されていたことが逆に私の心胆を凍えさせる。

九死に一生を得たかのような感慨を、私の喉の奥に残していた震えが背後から追いかけてくるようであつた。

それがあまりにも胸に痞えるので、私の動悸はしばらく治まることになかつた。

耳鳴りのような鼓動を聞きながら、私は今後のためにも、やはりサーヴァントは常に

身の回りに待機させておかなくてはならないのかもしれない。と、考えを改めざるを得なかった。

私は歩先を曲げて、近くの自動販売機に向かった。

喉が渴いていたわけではないが、少しでも気持ちの矛先をどこか別のところへ向けなければならなかった。対象は何でも良かったのだ。

と、小銭を取り出そうとしたところで視界の隅から自販機の陰へ入り込んだものがあった。何か、小さくて白いものだ。

紙切れか何かかと思つてそれを追つて塀と自販機の陰を覗き込むと、そこには小さな子猫がいた。

真つ直ぐにこつちを見つめてくる。そこで私は視線を合わせないように、何も無かつたかのように身体を戻した。

こういうとき上から真つ直ぐに見つめてはいけない。

素つ気無い風を装い、向こうが興味を示すのを待つのである。

私は当初の予定通り自販機でコーヒーを買うと、自販機の脇に寄りかかりそれをちびちびと飲み始めた。

動作はあくまでゆつくりとである。急に動いて脅かしてはいけない。

白い子猫はこちらの目論見どおり興味深そうに自販機の陰から出てきた。私は視界

の端でそれを確認したが、それでもまったく興味がございませぬ、とばかりに見向きもしなかった。

そのせいか、子猫は無用心に私の匂いを嗅ごうと近づいてきた。

——すでに間合いだった。

そのとき、私の手には常備してあるプラスチック製の猫じやらしが握られていたのだ。

なぜそんなものを持っているのかと思われるかもしれないが、別におかしいことではない。魔女の嗜みである。

あいかかわらず、私の視線は明後日の方を向いている。しかし突き出した猫じやらしには手ごたえがあった。

——掛かった！

後は見ても大丈夫である。夢中になった子猫をあやしなから、今後は手で直にあやし始める、ワシヤワシヤしてやると無我夢中になっている子猫は相手がなんなのかを確認することも無く奮闘を続けている。

こうなればこちらのものである。後はあやしつつ、咄嗟に両手で包み込むように抱き上げた。

「……男の子だね。一人なのかな？ お母さんは？」

興奮しきっていた子猫はそこで我に返ったのか、声を上げて鳴きだした。

するとそれにつられるように道の反対側の細い路地から同じような子猫を引き連れた親猫が現れた。

やせた親猫だった。警戒はしているが一定の距離を保ってこちらを見ている。私に手にしてた子猫をそつと放した。

子猫は母親の元に一目散に駆け寄った。私はといえはその隙を利用して今度は親猫に近づこうとしている。

注意点はさつきと同じである。あまり眼をあわせるようなことはせず、身を低くしてゆっくり近づく。

敵意がないことを示しつつ、私はゆっくりと鞆からある物を取り出した。丸く、金属の質感を備えたそれは翳り始めた日の光に鈍く輝いていた。

前述の猫じやらし同様に私がどこに行くにも常備しているネコ缶であった。

——一応言っておくが、これも別におかしいことではない。繰り返すようだが、魔女の嗜みである。

しかし、なにが悪かったのか、猫たちは踵を反してしまった。私は行き場をなくしたネコ缶の行方を納める術を知らず、それを追わずには居られなかった。

(※注) こういう場合、本来は追いかけてはいけません。猫たちを悪戯に怖がらせるだけ

です)

猫たちを追って狭い道に入り込んで行くと、そこには奥まった空き地、というか乱立する商業ビルの隙間、とでいうような妙なスペースがあった。

猫の親子はそこにいた。というかそれだけではなかった。そこは猫の集会場だったようで、もう四、五匹の猫たちがいた。

「……こんな所に私の知らない集会所が……」

私は興奮気味に呟いた。

いや、恥ずかしい話だが、知らない顔ばかりだったこともあり、確実に興奮していたといわざるを得ない。

「……足りるかな？」

私は手持ちの装備を全解放した。

しかし生憎、ネコ缶は三つしかなかった。

訝る私の足許には目ざとくそれを見止めたやくざな奴らが摺り寄ってきていた。とりあえず、さっきの痩せた母ネコを優先しようと思ったのだが、何処から出てきたのか、気付くといつの間にか十匹以上の猫たちに四方を囲まれていたのである。

これではあの親子にいきわたらない可能性がある。

多少高く付くが、仕方が無かった。

期待に濡れ光る二十以上もの瞳に見つめられ、私は一路、近くのドラックストアまで奔らねばならなかった。

アパートメントへの帰途へ着くとすでに空は赤らんでいた。

秋口の夕暮れはことのほか早い。私は半ば急ぎ足になって仮初の住居へ急いだ。私の手にはビニール袋に入った十数個の空缶と、ぼろぼろになった猫じやらしがあった。

結局、無駄な出費になったことは認めねばなるまい。

その上だいたい時間も食ってしまった。いやいや。しかし、なにも悪いことばかりではないではないか、良い精神のリフレッシュになったのだし、それにあのネコたちとも新たに契約を果たすこともできた。耳寄りな情報も引き出せた。

……とはいえ、やはり冷静になって考えてみると、反省を要することかもしれない。猫の事になると我を忘れるのが私の悪癖である。

こんなことで予定を崩すのは本位ではない。

考えに耽っていると、いつの間にか自分のアパートの前だった。殊更に特徴に欠ける場所にひっそりと立っていた。だからこそあえて選んだのだった。

仮初であるのだから、本来ここに立ち寄る必要はないのだが、用心はしておいて損はない。実際、この部屋はろくに片付いていないのだし。

それに、ここから実際の要害となる南東部郊外の空き家までの経路はここから市の中心街を真つ直ぐに突っ切つて、市そのものを斜めに移動することになる。

私はとりあえずこの間の区域を毎日別の経路で視察しながら巡回し、一度郊外の空き家へ移つてから諸々の作業に取り掛かるように、日々の予定を組んでいた。

それを繰り返すことで、少しでも街の変化を感じられるようにとの考えからだつた。……ライダーはこのほか不満そうだつたが。

無論のこと、こんなことをしては敵に発見される可能性も高くなる。

しかし私のような外様の参加者はそもそも御三家に比べて情報の面で最初から劣勢に立たされているのだ。

少々の危険を冒してでも先手を打つて行動していかなければならない。そのための周到な用意なのだ。

穴熊を決め込むなどというのは、事の動静を静観できるだけの余裕がなければ無理な話なのだ。

物理的、心理的な猶予の乏しい者が耐久戦を挑んでも結果は目に見えている。ゆえに、一抹の猶予も持たぬ私は一抹の油断もなく先手を打つことでしかアドバンテージを獲得することが出来ないのだ。

分の悪い挑戦だということは最初からわかりきっている。この儀式はあらゆる点で

不平等なスタートラインが設定されているのだ。

もつとも、そもそもこの世に平等という観念はないのだ。

誰もがそれぞれに固有の資質を持ち、違う環境で育ち、別個の通念を構築しながら生きてゆくのだ。

フェアなんていう言葉は、体のいい隠れ蓑でしかない。

不平等が当たり前であるということを、正しく受け入れた者だけが、この世界を正しく見つめられる。

この世界をありのままに受け入れ、ベストを尽くすという選択に辿り着く。

平等という言葉に侵され捻じ曲がった人間は不平等であることを糾弾し、何かの理由にする。そして正しき行いに背を向ける。

簡単なことだ。何かを不平等のせいにするればそれでいいのだから。

私は不平等であることに不満は抱かない。そこが私のスタートラインなら、それなりにどうするかを考えるだけだ。

私はベストを尽くす。後のことはあまり考えていない。

完全なる予知能力でもない限り、物事の可否を考える時間は無駄でしかない。

その分を、今なにを行うかという決断に費やすべきなのだ。遠い未来にばかり目を向ける人間はきつとその遠い未来でもまたその未来のことばかり見ているのだろう。――



—今という掛け替えのない時間を蔑ろにして。

私は違う。

私は今という時間にベストを尽くしたい。だから、私は不利を承知でこの儀式に参加したのだ。

考えながら、ひさしがつくる影の中に入って、私は錆びの目立つ階段に足をかけた。私の部屋は二階の一番奥なのだが、そこでふと階段の上に人影を見つけて、私は咄嗟に足を止めた。

私の部屋の前に誰かがいるのだ。

胸元の下辺りまで伸びた長い三つ編みが印象的だった。すぐにその正体がわかり、私は声をかけて階段を昇った。

「……アヤちゃん？」

さすがに予想外だった。そこいたのは先ほど学校で分かれたはずのクラスメイト、百朶文目だったのだ。

彼女は何時ものように、困ったような顔で微笑んだ。

「……でね、先生の話だと、この街の各所に見られる大きな畦みたいな溝、つまり古代に使われていた経路の後じゃないかって言われているんだけど、この街のそれはどう

いう目的で作られていたのかわかっていないらしいの。

先生が言うには、道というよりは何かの絵みたいに見えるって言う人もいるみたいなんだけど。そうナスカの地上絵みたいに。確かにそうも思えるのよね。なにより……

あれこれと話し込んでいる内に外もだいぶ暗くなっていた。とはいっても私はそれとなく相槌を打っているだけであつた。

この時のあやめは平時とはうって変わつて饒舌に、華麗な声の調べをかきたてていた。彼女らしくない強引な来訪に多少訝る気持ちもあつたのだが、その語調はけつして不快なものでもなく、私もいつの間にか聞き入つてしまつていた。

私のことを待つていたらしいあやめに声を掛けると、彼女はいつものように俯きかげんになりながら事の次第を語つた。

なんと、彼女は学校をあとにしたあと、本当に私の手伝いをするためにわざわざアパートを訪れてくれたというのだ。

「……学校で言つてくれれば、こんなに遅くはならなかつたのに。……結構待つたんじゃない？　こんなところで」

「ううん。今日は研究会があつて私も遅かつたし、ちようどいいかなつておもつたの。それになんだか……みんなの前で言うのが、恥ずかしくて……」

いいながら、この学校きつての優等生は照れくさそうにうつむくのだが、私としては彼女がなにを恥ずかしがっているのかもよくわからない。

兎角、あんなところで散々待たせた挙句、そのまま帰ってくれとも言いがたいものがあつたので。私は彼女を部屋に上げたのであつた。

こんな時間ではろくに片付けなどしているヒマはないと思つていたのだが、彼女に手伝つてもらおうと諸所の些事はあつという間に片付いてしまつた。

私も長年家事にいそしんできた自負のようなものがあつたのだが、彼女の手際には舌を巻いてしまつた。万能の才人とはこんなところにも才覚を發揮できるものかと感心したほどだ。

なのでお礼というほどのことはないのだが、こちらも負けじと手料理など振舞つて労をねぎらうことにした。

彼女は手伝いに来ただけなのだからといつて散々遠慮する気配を見せていたが、このまま帰すのはさすがにこちらの気が咎める。

それに、懸念もあつたのだ。

極めておとなしい性質を持つ彼女が、こうも突飛な行動をしたからには何か深刻な相談でも持ちかけられるのではと、私はうつすらと予測していたのだ。

しかし彼女は私の部屋でどうということの無い話を延々としていた。彼女が部活で

研究している古代道についての知識だ。

なんでも、

古代道とは、日本が近代化する以前に各所に敷かれていた道のことを指すのだそう  
だ。話によると、それらは長い間、人々の往来による踏み分によつて自然発生したもの  
だと考えられていたそうなのだが、近年歴史地理学の研究によつてそれらの中には直線  
的計画道路の存在が考察されるようになったのだという。

それらの推定経路の存在が確認されると、この笹ヶ谷市に存在する経路にも注目が集  
まり、大学等から有志を募り十数年前から本格的な調査が始められているのだという。  
とまあ、そのように滔々と、にもかかわらず歌うようにして、あやめは話し続けてい  
たわけである。

ちなみに彼女の言う「先生」とは担任の島原耀子のことである。

彼女はあやめをはじめとした文系の優等生ばかりが集まった研究会の顧問をしてお  
り、自らが所属していた近隣の大学のゼミとも協力して、度々そのような歴史・民俗学  
についてのフィールドワークを行っているのだという。

彼女の話しぶりからすると、なんともどこかで平和な集まりのように思えてくる。

さて、平時なら別に邪険にするほどのこともないのだが、今はさすがに日が悪い。私  
はいい加減彼女を帰らせるべきだと考えていたのだが、どうにも今日の彼女にはつけい

る隙がないのである。

「……それでね、あの街中から山頂の神社のお社まで伸びてる一本の大きな道があるでしょ？ あれも古代道の一種なんですって。」

この笹ヶ谷市って言う街自体、妙に網の目みたい区切られた場所ってあるでしょ」「……そうだね。所々、わかりにくいところがあるなとは思ってたけど……」

「そういう場所は、もともとあつた道や区画がそのまま使用されてるからなんですって。勿論、新しい高速道路とか大きなビルとかがたくさん建ってしまったって、わからなくなってしまうところも多いんだけど、おそらく昔は街全体が均一な企画で区切られてたんじゃなかったって言われているの」

「……京都の町みたいなものかな、なんか呪術的な意味合いでもあつたって事？」  
「先生はそれも有りうるって言ってたわ。そういう話は風地相学のような東洋的なものだけではなく、西洋にもあるの。」

さつきったナスカの地上絵も、あの広大な経路の上を歩むことで何らかの儀式を執り行ったのだという話もあるし、他にも、英国ではコーンウォールの外れにあるミカエルラインやストーン・ヘンジにも関係のあると言われる規格的な経路を総じて「レイ・ライン」と呼ぶそうなの。似たような話は世界中にあるのよ。

でも、やっぱりこの町の古代道は、特に不思議よね。こんな山奥に、少なくとも千年

以上も昔にそんな小京都みたいな街があつたなんて……—」

あまり集中して聞いていたわけではないのだが、それを聞いて私は、なんとなくこの街の成り立ちに魔術師の影を感じた。

しかし今はそれを考慮しているような状態ではなかったので軽く相槌を打って受け流していた。

だいたい、その手のオカルティズムな話は私の専門なのだ。今更解説を受けなくても知っていることばかりだ。もつとも、そんなことを彼女に言うわけにもいかないのだが。

そのうちに、歌うかのごとく滔々と語っていた文目は、ハツとしてそろそろ帰るといった。

「ご、——ごめんなさい。長居しちゃったみたい。ちよつと夢中になっちゃって」

「……別に構わないけど」

「それでね、涅ちゃん……その……」

あやめは最後に何かを言おうとしていたようだった。

私はやはり、何かあるのかと思った。

このまま帰つたのでは、彼女は結局なにをしに来たのかわからない。私が予感したと

おり、何か悩みでもあったのだろうか？

この場合、もつと突っ込んで私のほうから探りを入れなければならなかったのだろうか？ しかしこんな時に人様の悩みを聞くような余裕などないのだが……。

それでもわざわざ私を選んだというならチエたちに言つてはならないことなのかもしれない。女子バスケット部に関連でもあることなのだろうか？

「……何か用があつたんじゃないの？」

意を決して——というほどのこともないが、私は居住まいを直してから訊いてみた。「え——と、その……」

あやめは桃色だった頬を更に淡く染めて、何かを言おうとし、そして言いよどんだ。

「……？」

私が首を傾げると、あやめは真つ赤になつたまましばらく固まっていたが、俯いたまま、意を決したように口を開いた。

「きよ、今日のお昼に、その、涅ちゃん聞いてきたでしょ？ 今週末ヒマかなつて……」

「……………ああ、そっか！」

私は小さく声を上げた。そうであつた。何か忘れているような気が、微妙かにしてはいたのだ。昼間は他の奴らが騒がしかったこともあり、失念していたのだ。

「……………あれね、うん。——いや、でも……？」

しかしそういわれても、素直に納得しづらいものがある。

「……でも、そんなことくらい、別に明日でも良かったんじゃない……」

そう言うのと、あやめは自身のしなやかな長い肢体を圧縮するかのよう縮こませ、「う、うん。確かにそうなんだけど、その、……なんだか、気になっちゃって。……それに、その、みんなの前で聞きなおすのってなんだか……恥ずかしくって……」

蚊の鳴くような声でそう言って、また俯いてしまうのだった。だが、そういわれても私にはなにか恥ずかしいのか皆目検討がつかないのであった。

しかし、なんにしろその程度のことならこちらも気負うようなことではない。

「……大したことじゃない。ペアチケットもらったから今度映画にでも行かないかってききたかっただけ。……秋乃たちは部活みたいだし、私、他に誘うような人いないから」  
勿論、これは事前に自分で用意しておいたものである。

今後この儀式がどのような展開を見せるかはさて置くとして、ライダーにやる気を出してもらうためには、彼女の姿を見せるという約束を守るための具体的用意があるのだと提示するための小道具だったのだ。

しかしそう言うのとあやめは暫し呼吸も忘れて呆然と虚空を眺め、そして爆ぜるかのごとく、そして狼狽したかのように声を上げた。

「い——行くわッ！　じゃ、無くて、その、全然平気！　何にも予定なんてないから！



無い筈だから!! ちゃんと暇にしておくから! 絶対、絶対行ける。絶対行くから――

——お願い! 私に、い、行かせて?」

「……………うん。じゃ、行こう」

気圧されて、そうとしかいえなかった。

すると今の今まで全身を強張らせていたあやめは一変、ニコニコと満足そうにニヤけているのである。

彼女の場合、いくらニヤけようがその美貌は一向に崩れやしないが、しかしどうにも挙動不審である。この優等生はたびたび私の理解を超えたところで何かを一喜一憂している感があるようだ。

もつとも、それを厭う理由はないのだし、むしろこうもこちらの都合に沿って動いてくれるとは好都合だといえた。

——あとは、この「餌」にライダーがどれだけ食いつくかなのだが……。

「……………じゃ、また明日」

「うん。——淫ちゃん……………あのね、私」

「……………なに?」

「私は、その……………ツ。いいえ、なんでもないので。ごめんなさい。またね」

何かを言いかけて止めて微笑み、文目は帰途に付いた。辺りは暗くなっていた。私はそれを見送って一息ついた。

なんだったのだろうかと思いつつ、ひとりで戻ると不意に部屋の中が幾分温度と色彩を欠いたように感じられた。

地味にまとめられた風貌を好む文目だが、それでもやはり常人には及びも付かない華があるのだな、と私は改めて思った。

それにしてもこういう狭い部屋に住むのは初めてだからなのか、ひとりでいる室内がいやに寒々しく感じられた。

しかし、そんなセンチな感慨も不意に実体化した巨大すぎる筋肉の塊の存在感に掻き消されてしまったわけなのだ。

その良し悪しは別として、驚くには値しない。実は一時間以上前からこの気配が部屋の中に侵入していたことを私は知っていたのだ。

たとえ霊体化したままでもマスターは己のサーヴァントの存在を知覚できるのである。

六畳間のど真ん中に胡坐をかいたまま実体化したライダーは、珍しく難しそうな顔をしていた。太い眉根を寄せてなにやら考えるようにじつと押し黙っていた。

何かに腹でも立てているのだろうか？ まあ、あの空き家に置き去りにしたことやそ

の他諸々、なにに腹を立てても別に不思議ではないだろう。

とりわけ、この男は四六時中なにかにつけて理不尽な文句をつけたがっているような男なのだし。

「……何かあつたの？」

さて、なにやら文句のひとつでも飛び出すかとげんなりしながらも、私は声をかけた。しかし反応がない。何時までも待っているのもバカらしいので、私は背後に回つていつものように礼装に着替え始めた。

衣服を残らず脱ぎ去り、代わりに手製の香油を手にとり体の隅々まで丹念に塗り込んでいく。

数種の軟膏を重ねて擦りこむたびに、えも言われぬ芳香が湧き起こる。

別に初めて見せるわけでもないのライダーのことは気にせず作業を続ける。しかし確かに妙といえば妙。変だといえば変であつた。

何時もならないやらしく薄笑いを浮かべてこの作業を魅入っているような下衆な奴なのだ、今日に限つて見向きもしない。

いよいよ不審に思つて再度声をかけようとしたそのとき、唐突なライダーの声があるに先んじた。

「主よ。……オレ様は決めただぞ」

「……なにを？」

唐突で意味の判じがたい言葉だ、しかし驚くには値しない。いつものことだからだ。「なにを、ではない。昨夜の褒美の件だ！」

確かに、ライダーに言うことを聞かせる報償として紹介するといった美女とは文目のことであつた。

しかし、私は今日彼女をライダーに見せるつもりはなかつたのだ。彼女が自主的に私のところに来てしまったのは慮外の事態だつた。

おかげで、急ぎよ用意した週末の映画チケットもこれで無駄に終わってしまったわけである。

結局一緒に行くことになつてしまつたが、本来なら週末までに成果を上げてみせろとライダーを焚きつけるつもりだつたのだ。

だいたい、人の命令を無視しておいて結局のところ敵を逃すにいたつたヤツに褒美なんて出るとでも思つていたのでらうか？

しかし見せてしまったものは仕方がない。先ほどからなにやら思案しているのは彼女のことなのだらうか？

「……約束どおり見せたでしょ。気に入らなかつた？」

「とんツツでもないツツ!!」

巨馬鹿は座つたまま一氣に此方へ向きかえつた。相變わらず馬鹿みたいに声がでかい。

「オレ様は決めたぞ。あの娘だ。いや、あの娘しかおらぬ。あ、あれほどの美女とは思わなんだ。」

——何ツツたる可憐！ 一目見てより、息をするのを忘れておつたわ。こ、こんなことはあの時以来だ。そう、あの……いや言うまい。過去の傷に触れるは野暮であろう。——兎角、あの娘はオレ様のものにするぞ。絶対だ！ もう決めたぞ。我が主よ。一刻も早くあの娘をオレ様にくれい!!」

いや、靈体化していたのだから肉眼で見えたわけでもないだろうし、そもそも息もしてなかつただろう。とは、まあ口にはしなかつた。

とりあえず、私にはこいつがなにを言っているのかがいまいちわからなかつたのだが、とにかく、彼女を気に入つたということでもいいのだろうか。

「……くれもなにも、私にはどうすることも出来ないよ。まさか暗示にでもかけてそのあいだに何かする気？」

「なるほど魔術師なればそういう手も………馬鹿なツ！ そのような狼藉などせぬわ！ フン。そうだな、まずは約束どおりこれからも敵の首級は挙げよう。」

おぬしの指示にも従おうではないか。故に、今度の褒美は是が否にもオレ様とあの娘

とを引き合わせて欲しい……いやいや、それでは足りん、まずはオレ様が受肉せねばならんな。

このような身体では何時までも主の世話にならねばならぬし、あんなこともやそんなことも支障をきたすであらう。それはよろしくない。

……ううむ。そうだな、まずは受肉し、そのあとだ。そのあとで取り計らつてくれれば……うむ。そうだ。そうでなければならぬのだッ！」

「……いや、ちよつと……」

「フン。——聞けい、主よ！ 決めたぞ!!」

「……いや、さつきから聞いてるんだけど」

とにかくすごい声量だ。うるさくてかなわない。

という以上に、近所から苦情が来るのでやめて欲しい。とにかく声を抑えろというように手振りで示したのだが、とても見ちゃいない。

「オレ様の願いだ。我が戦うべき理由よ！ 驚くなかれ、オレ様は先刻あの娘に惚れ申した！」

驚くも何も、この醜態を見れば凡その予想は付いていたが。

「故にオレ様はいま一度の生を獲得し、あの娘と添い遂げることと致した」

「……………」

「いや、言うな。あの娘にはそれだけの価値があるのだ！」

なんにもいってねえ。……私はそれは白々とした視線でこの馬鹿の狂乱を見ていたことであろう。もつともこの馬鹿には何の意味もないようであったが。

「……別にそうしたいなら構わないけど、私にどうして欲しいの？」

「うむ。よく聞けい！ 取り敢えずはこの戦を制して受肉する。それまではいい、至極簡単な話だ。だが問題はその後なのだ。」

オレ様とて己を省みぬわけではない。オレ様のような武芸の腕によつてのみ身を立てる男と斯様なうら若き貴婦人とは、何よりも接点がない。いざ宴席にでも着けば意気投合するは違いないのだが、そこに行くまでが難しい。

傍から見れば勇猛なるオレ様の容貌は、しかし女人の誤解を生みかねんだ。特にこの時代はそうなのであろう？

——そこでおぬしの出番よ。先ほどもなにやら親しげであったではないか。

あの調子で受肉したオレ様とあの麗しの君とを引き合わせて欲しいのだ。そうすればおぬしは目的を果たせてオレ様も想いを遂げられる。どうだ。万事うまくゆくではないかッ！」

「……………まあ、……………それくらいなら、いいけど」

生返事をしながら、私は一体この男の頭の中にはどのような地獄絵図が展開されてい

るのだろうかと考えていた。たぶん想像しないほうが賢明なのだろう。

「うむ！ 決まった。いや、めでたい。めでたいぞ！ フン。そうとなれば、善は急げだッ！」

そう言つてライダーは立ち上がり、自前の装備である画戟を取り出し掲げ上げた。

当然、六畳間の狭いアパートメントの一室である。二メートルをゆうに超える大男が三メートル以上もある長物を振り回せば、当然やわな壁や天井は障子紙のようにぶち抜かれる。

よもや屋根まで抜いてはいないだろうな。と私が思案する間に、直刃に添えられた三日月形の刃が凄まじい光明を伴いはじめた。

「ふおおおおおおおッ！ 来いたれええええ、わあが愛馬ああああ!!」  
「……外でやつて、外で」

意気込みまくつて雄叫びを上げる馬鹿を何とか制止した。

こんなところで宝具を使われたら部屋どころかアパートそのものが半壊する。というか、これだけ騒げば何の被害もなくとも近隣の住民から不審に思われたことは確実にある。穩行のための仮住まいだというのに、これでは意味がない。

やる気になってくれたのはいいが、やはりこいつには当分の間振り回されそうだ。



## 三章―1

(月曜日・夜)

「ええい、何も見つからんではないか！」

そりやそうだ。と、私は足元に群を成している猫を撫でながら思った。

ようやく方針の足並みが揃ったかに見えた私達は、勢い勇んで再びこの夜の街にもどってきた。

わけなのだが——無論のこと、適当に散策したところですぐに敵を見つけられるはずもなく、そのうちに時刻は夜の深奥を過ぎ去り、目下持て余した威勢の発露を見失ったライダーの機嫌は急激に下降しつつあった。

つまるところ、先程からぶつくさとうるさくてしかたがないのだ。

「フン。だあいたい、おぬしは先刻からなあにをしとるのだ！ あちこちで野良猫と戯れてばかりではないか。そんなことでは何も解からんだろうがつ！」

無論、誰もただ適当に歩き回って敵が見つかるとは思っていない。

私は最初からそのための用意をしていたのだ。しかしそれをライダーに説明しても、どの道いらぬことまで根掘り葉掘りと他愛無い詰問攻めにあうだけなので、私は何も言

わずに適当に相槌だけをかえしていたのである。

しかしどの道うるさいことには変わりないらしい。

やる気がないというもの問題だとは思うが、しかしいざやる気が出たら出たでいい加減、面倒くさいヤツだ。

こんなに扱いにくいサーヴァントというのも珍しいのではないだろうか。それとも、サーヴァントというのは皆こんなに扱いにくいのだろうか？

「……これでもいいの。準備はちゃんと進んでる」

「フン？ では、何か策があるのか」

「……でも、一度使うとまた一から準備しなくちゃならなくなるんだけど……」

「かまわん、かまわん。貴重な時間を無碍にすることこそ罪というものだ」

やおら洗面を一転させたライダーは、嬉々として急かしてくる。

どうやら早く戦いたいというよりは、暇な探索が面倒で仕方なかったらしい。本当に諜報には向かないサーヴァントである。

私が立ち上がると、それが合図のように猫たちは闇の中に散っていった。これぢやうど総ての下準備が済んだことになる。

「……貴重な時間、ね」

確かにこのまま無駄に散策していても事態は好転しないということは解かりきって

いる。ならばやはり、ここが使い時か。

私は腰の皮ベルトについている五つのフィルムケース大の容器を開けて、指でそのペースト状の内容物を掬い取った。

「なんだ？ 化粧でも始めるのか」

「……「魔女の軟膏」って知ってる？」

言いながら、五色のうち赤と青のペーストを取って練り合わせ、それをアイシャドウのように目蓋に塗りこんだ。

次いで今度は赤と黒の軟膏を練り合わせた物を唇に塗った。

確かにそれだけを見たなら簡易な化粧とも見えただろう。それを興味深げに見ていたライダーが、先ほどとはうって変わって感嘆の声を上げた。

「ほほう。そうしてみると、フン。なかなかどうして妖艶ではないか。女とは化粧ひとつで化けるものだ……うむ？」

「……………一応、……離れ、といた、ほうが……いい」

軽い陶酔感を感じながら、私は星一つない天を仰ぐ、視界はすでに混濁し始めている。さらに私の手は多めにとった赤と白の混合物を鎖骨から臍の辺りにまでべったりと塗りつけていく。私の礼装が肌を露にしているのはこの魔術様式のためなのだ。

そのころになると、すでに私の意識は全身の感覚から徐々に手を話し始める。もはや

ライダーが何を言っているのかも判らない。

耳だけではない。地についたはずの足裏の感覚すら曖昧だ。

夜気の臭いや湿った空気の味すらも、今の私には無縁のものとなっていく。あらゆる感覚だけが肉体を残して浮遊し、虚空に紛れた私の五感は完全に三次元の頸木から切り離される。

そう、これは人為的に操作された無我の偽装だ。

この軟膏は唯の色付きのペーストの類ではない。これは私自身が魔術的工程を経て調合したものである。

その成分は非常に揮発性が高く、肌の上に塗ると体温によってすぐに気化して私の鼻腔や口腔に注がれ、私の意識を別の次元へと連れ去って行くのだ。

もつとも、卓越した魔術師ならこういう手順は要らないらしい。私のように素養の薄い見習いにはどうしてもこのような煩雑な手間が必要になってくるのだ。

これを触媒として体の諸所に塗ることで、私は魔術発動のスターターとして使用しているというわけだ。

手間に加えて出費も馬鹿にならないものがあるが、しかし効果はある。そして、効果と共に無論のこと危険も伴うものでもある。魔術とは常に己命は秤にかけながら行うべきものなのだ。

「……  
我 汝 我  
Self は 汝  
Ist 汝 我  
See 我 汝  
Tree 樹  
See 樹  
My 我  
Thou 汝  
See 我  
Lumine 光  
It 光  
The 翳  
See 翳  
See 細  
My 樹  
Thou 我  
Self 我  
Ist 汝  
Shou 点  
herd の  
form つ  
on 上  
vie 視  
are 視  
point 点  
the は  
hou 汝  
selt 我  
Ist 汝  
beg 雨  
ain と  
of の  
yhe の  
wink の  
at 断  
stra 片  
nds 間  
of 見  
ning か

スペルを唱えると、私の体内にある霊的サーキットが励起するのが感じられた。  
すぐに漆黒に閉じられていた私の視界には、暗闇の雲が晴れるかのように無数の星を  
内包し始める。

この街中に点在する無数の目が、今私の意識と接続され現時刻の街の様子を映し出し  
ていく。

この街の薄闇に堆積する闇を見通す裏路地の散歩者たちが、くまなくこの夜の内腑の底を暴きだしていく。私の視界はまるで光の如き速度で街の要点を探っていく。

私自身には目しようもないことだが、このときの私はまるで夢遊病患者のように、ふらふらと歩き回っていたことだろう。何かを探すように、あるいは使い魔になりきったつもりで四つん這いになっていたかもしれない。

まるで満天の月の如く街中を俯瞰した私の視界は遂に、ある種の霊体の存在を知覚した。ゆつくりと移動していく強力な、そこいらの亡霊などとは一線を画す強壯な霊格の気配。

だがその気配は英霊と目するにはあまりに粗暴で澀んでいた。

故に判じるのは容易かった。あれは昨夜対峙した敵。バーサーカーに相違ない。私の視界はさらにピントをずらしてその周囲の景色を確認する。見覚えがある、確か郊外の古い住宅街の辺りだ。

今から追えば捉えるまでそう時間は掛からないだろう。

そしてさらにピントを絞り、その粗暴な霊を引き連れるようにして歩く女の姿を捉えた。栗色の髪を無造作に束ねた。精悍な感のある女性だった。

年のころは二十台後半から三十台前後。全身を黒一色でそろえた長身と、凄味のある目つきがこの女性が唯の一般人でないことをと、その尋常でない心境を物語っていた。

これがバーサーカーのマスターか。おそらく、今から何かしらの事を構えるつもりのようにだった。

兎角、それで充分だと判断した私は意識をその場から回収した。収穫はあった。

私はゆっくりと目を開いた。目の前には不本意ながら見知った<sup>いか</sup>厳めしい顔があつて、私は無事に戻ってこられたことを確認した。どうやら地べたに座り込んでライダーに背中を支えられているらしい。

「気が付いたか。フン。一体なにを始めたというのだ」

呆れ顔で言ってくるライダーに私は開口一番告げた。

「……見つけた」

「なに?」

「……冷たっ」

私は下臀部に感じた冷氣から逃れるようにして、ふらつく足で立ち上がった。

こんな格好では冷えるのも当たり前前かとも思ったが、気が付けばパラパラと細かい雨が降り始めていた。指で帽子に合図すると、大きかった鍔がさらに大きく広がり、傘のように雨を遮った。

あまり歓迎したくない雨だ。

穩行の助けにはなるかも知れないが、私の場合格好が格好だ。あらかじめ全身に擦り

込んでいた霊葉や香油のおかげで凍えることはないが、降り注ぐ雨はそれでも気付かぬうちに小柄な私の体から体力を奪ってしまうだろう。

時間をかけ過ぎればよくない事にもなりかねない。

「見つけたとは、敵のことか？ 一体なにをしとつたのだ」

「……街中の猫の視界を一時的に借りたの。一度にそれを統合して街中を見渡せるネットワークを作った。それでたつたいま、霊体化したままで歩いていたサーヴァントを一体発見した」

「猫？ さっきまで遊んどつたのもそうなのか？ はて、しかし使い魔の類とは見えなんだが……」

「……あれは一時的に契約してただけのただの猫。パートタイムみたいなもの。私はこの街中の殆どの猫たちと契約してるの。有事の時だけ力を借りれるようにね」

「それでこの広い市街をくまなく見通したというのか？ 一体全体、何匹の猫を使ったのだ」

私は暫し考え込み、応えた。

「……多分、二百、……三百？ いや、もつとかな？ 四百くらい？ ……正確な数は数えたことないけど」

「それらと一々契約して回つたというのか、一匹ずつ？ それではさすがに割りに合わ



んのではないのか？」

「……別に問題もないけど？ 私は用がなくても知らない猫がいたら会いに行くし

……」

なぜか、このときばかりは奇妙なものを見るような目でライダーが私を見てきた。私がおかしいとでも言いたげだ。

だが何もおかしいことはない。ちよつと猫好きで魔女なら街中の猫と知り合いになっただけでもそれほど不可思議なことではないだろう。

「まあ、その、なんだ。……フン、それでよくサーヴァントが見つかったものだな」

「……問題ない。猫の瞳は、人間のそれよりも霊を見通す能力が高いから」

古来より、猫の目というものは多かれ少なかれ人の視界には映らない霊的存在を捉える力を持っている。

その力は並みの魔術師よりもよっぽど上等で、中世の古より魔女や魔術師がこぞって猫を己の使い魔として徴用してきたことからもちろんそれは明らかであろう。

「フン。——して、見つけたサーヴァントとはどんな奴だ」

「……たぶん、昨日のバーサーカーだと思う。マスターも一緒だった」

それを聞くと、ライダーは飛び上がらんばかりに狂喜の声を張り上げた。

「そいつは重畳！ フン。昨日の今日で取り逃がした怨敵を見つけるとは何たる僥倖

か！」

さっそく捕えて打ち殺そう。などと物騒な物腰で意気込むライダーだったが、しかし私は簡単には賛同し兼ねた。いきなり間近で炸裂した大音量に聾しかけた耳を押さえながら待ったをかけた。

「なんだ。ここまでやって、よもや見送るなどとは言うまいな」

「……そうは言わない。言わないけど、気になることもあるの」

そう、懸念があるのだ。

バーサーカーとそのマスターはどこかへ向かっていたのだろうか。それも総身に鬼気を纏って、である。その行く先に何かがあるのは明確だ。

さて、その渦中に飛び込んでしまっただけのものか。

出来ることなら、もう少し動向を見守りたいところだ。……うまくいけば漁夫の利を拾うこともできるかもしれないのだし。

しかしそうして思案していた私を、ライダーは無言を言わずに摘み上げてしまった。

「……ちよつ、ライ……」

「敵を見つけたならさっさと言えばよからう。後はオレ様に任せておけい。フン。それで万事旨くいくというものだ！」

とは言うもののこいつの場合、また何の根拠も無いに違いない。

「さあ、来たれツ、我が愛馬よ！」

ライダーが再び手にとった画戟を振りかざすと、その月牙の照り返す光が極まり閃いて近くに止めてあつた違法駐車車両が内側からめくり返されるように粉碎された。

しぶき始めた雨を次々と宙空で気化させながら、灼熱の蒸気を紅の天衣の如く身に纏う巨獣が現に躍り出て来る。

「お前もまだまだ血が冷めやらんだらうからなあ！　フン。待つておれ、もうしばしの辛抱だぞお、相棒!!」

がははと大笑するライダーに呼応するように嘶いて、もはや馬というよりは、恐竜か何かなのではないかとさえ思えるほどの巨獣は、巨岩のような馬体を揺らして意気込みを伝えてくる。

ライダーと居並ぶ、身震いするだけでアスファルトを粉碎してしまうその威容はこの上なく頼もしくも見える。

確かに、敵陣を看破しながらあれこれと策を弄して攻め入るのを躊躇している自分が、馬鹿らしくなってくるほどだ。

しかし、それを安易に吉兆とだけ判ずることは私には出来なかつた。そうして居並ぶ無双の威容は見ようによつては鬼に金棒というよりもむしろ狂人に核ミサイルといった諸刃の危うさを孕んでいるのだつた。

それは言い換えれば、これほど強大な両雄を己に御しきることが出来るのか、という私自身の危惧の裏返しであるともいえる。

このサーヴァントの力は強大だ。むしろ強大に過ぎるといえる。その力の矛先は不安定で、いつ私のほうを向いても可笑しくない。

このサーヴァントの手綱をいかに御するか。やはり、それは私がこの聖杯戦争において居並ぶ敵サーヴァントを打破すること以上に専心しなければならぬ難関なのかもしれない。

——、一方、当のライダーはそんな私の危惧も何処吹く風で、まるで自重を感じさせないような足取りで揚々と愛馬の背に跨り、私を自分の腹の前に乗せた。

というよりも置いたというほうがよいだろうか。私は文字通り借りてきた猫のように成すがままにされるしかなかった。

こうなってはもはや私がなにを言っても止まらないだろうということだけは確かなので、私は振り落とされないように身体を丸めているしかなかったのだ。

とはいえ、ただ一言これだけはいっておかなければならないことがあった。いくら違法駐車してあったとはいえ、伝説の英馬の現出に際して無残にも粉碎されてしまった高級外車を鑑み、是非とも聞いておかなばならないことである。

「……………」の仔は何か壊さないと出てこれないの？」

もしもそうなら、今度からはなるべく被害の少ない物を指定してやる必要が出てくるだろう。

ほどなくして、私達は人家も疎らな西南部郊外の平野に虚ろな隻影を捉えた。

ここから西側には起伏の少ない平地が広がっており、広い田園風景が沈殿した夜の淬に包まれている。街の東側を取り囲むような連峰のシルエツトも、ここからでは深夜になつても落ちることの無い街心部の光彩の帳の向こうに霞んで見えるだけだ。

やはり、その影は見初めていたバーサーカーだった。しかし、何故か先ほど一緒に居たはずのマスターの姿はない。

単騎のバーサーカーは実体化しており、その体の各所はすでに歪に振れ始め、背中や肩には長い獣の毛皮が覆い始めている。昨夜と同じように獣人化現象ソヴァントロビーが生じているのだ。

面貌からはすでに人間らしい表情が抜け落ちており、後は事前に下された命令だけをただひたすら繰り返すだけの存在となるのだろう。

それを目にした私の剥き出しの背筋には、言い様のない悪寒が湧き起こった。それが勢いを増し始めた雨のせいばかりだとは到底思えない。

今宵改めて目にするあのバーサーカーの異形は、私の心胆を縮ませるには充分すぎる

ほどに醜悪であった。同時にやはりあのバーサーカーの危険性が、しかと感じられたのだ。

だからこそ今、安易に接触を試みるのは憚られた。

昨夜のことを鑑みる限り、幾らライダーが強かろうともあの獣相手に傷を負わない保障もない。トーナメントならそれでもいいのだろうかこの闘争はバトルロイヤルの形式をとっているのだ。

よしんば速やかにバーサーカーを下したのだとしても、そこをほかのサーヴァントに突かれたのではよくない展開になる。

そして、私達には気付いていないはずのバーサーカーが臨戦態勢でいるというなら、それはおそらくこの先にバーサーカーをわざわざ向かわせる必要のある敵がいるということなのだ。

それは即ち、件の三竦み<sup>くだん</sup>を成立しうる第三のサーヴァントの存在を意味する！

バーサーカーが不意に立ち止まった。と見る間に、二本足の獣は凄まじい跳躍を見せ、その場から一飛びで目の前にあつた高い塀を越えてしまった。私達も急いでその塀を目指した。

「フン。よし、追うぞ」

騎馬を駆つたままそれを飛び越えようとするライダーを、しかし、私はとどめた。

「……待って、このままじゃ目立ちすぎる」

「なあんだ？ まあたコソコソするのか。もういいではないか、ここまできたら素直に正面から」

「……………だめ」

「わかった、わかった。そう睨むな」

ライダーはねめつける私から顔を逸らせて地に降りると、ぼやきながら愛馬を時空の彼方へ送り返した。

張り切って（許可もなく）召喚したのだから渋るのもわからないでもないのだが、そうもいつていられないのだ。

じつさい彼の英馬の守りは、攻めに特化したライダーのそれに見合うかのように凄まじく、幾重にも重ねられた城壁のそれすら凌駕する。

それゆえに頼もしくもあるのだが、いかんせん、ただ移動のためだけに使用するには燃費が悪すぎるのだ。正味な話、その魔力消費の増大は私には荷が勝ちすぎる。用のないときにむやみやたらと呼び出されてはたまらない。

私は透視してこの堀の向こうがなんなのかを調べた。

どうやら、ここは廃工場跡のような場所らしい。かなりの広さがある。

確かに、ここなら人目を気にすることはないだろう。そういう意味では魔術師の要害

としても悪くない。最も、居心地がいいかは別だろうが。

しかしかなり嚴重に封鎖されている。やはり押し破るのは得策ではない。私は腰のベルトに据えつけられていた容器からまた軟膏を手にとった。多めにとった黒の軟膏で扉のすぐ下の地面に魔術陣を描いていく。

普通、ウィッチクラフトでこのような陣を画く場合は、生贄の生き血や男性の精液、もしくは魔具や魔獣を燃やした灰などを使用する。

錬金術師なら水銀を使うこともあるだろうし、それぞれの魔術師特有の物品を使うこともあるだろう。ちなみに私の師はこういふとき自分で精製した「魔塵」なるものを使用する。

そして私の場合は、この魔女の軟膏がそれに当たるわけだ。

手早く魔方阵を描いていく。肌の上に塗っているわけではないのですぐに気化するというわけでもないが、揮発性が高いことには違いない。こういふときは速度が重要だ。

「なにをする気だ？ それで中に入れるのか」

「……まあね。ここから敷地内に向けて五十メートルくらいの高さを作ってその中を進むの。認識を阻害するから簡単な探知くらいならすり抜けられる」

「——まさか、このオレ様に穴掘りをしろなどとは言えない」



「……物理的にじゃなく、空間そのものに隙間を作るような感じでやるの。壁抜けの要領でね」

つまり幽鬼のように実物の壁を透過してすり抜けるという、まあ初等レベルの魔術の応用というわけである。無論痕跡など残す筈もない。

だいたい本当に穴なんて掘り始めたら目立って仕方が無いし、時間もかかりすぎる。……もつとも、この男がその気なれば地下トンネルの五十や五百メートルくらいすぐに掘り返せそうな気もするが。

「フン。なんだ、まどろっこしい。やはり、あのバーサーカーバツコのように飛び越えて行けばいい話ではないのか」

「……中でなにをやってるにしろ、出来ればしばらくは様子を観察したいの。そのためにはこっちの正体を隠蔽しなくちゃならない。私は消えることは出来ないし、あなただつて霊体化しても存在そのものが消えるわけじゃないでしょ。」

この穴の中にいれば、気配を察知されることもないはず」  
再三愚図るライダーに説明しながら、私は黒の図形の上にさらに赤、青、緑の軟膏のラインを書き足し、複雑な図形を形作っていく。

魔術師としての位階が高ければこういう複雑な術式も要らないのだろうが、自力の足らない私はどうしてもこういう作業が煩雑にならざるをえない。

ライダーは辟易したように声を漏らしてそっぽを向いてしまった。わからないでもないが、諜報とは元来そういうものだ。毎回毎回真正面から喧嘩を売っていたのではこちらの身が持たない。

「ちよつとお、だあめよ。あなあたツ」

凶形に最後の白のラインを書き足そうとしたところで、唐突な声に捕まえられて私は全身で飛び上がりそうになった。

フガフガと息の漏れるような口で声をかけてきたのは、犬を連れた老婆だった。

こんな時間に、それもこんな雨の中を出歩いていることにも驚いたが、この距離まで気付かなかつたということにもまた肝を抜かれる思いだった。見るとライダーも呆気にとられたような顔をしている。

「……あ、の……」

本来なら見られた以上すぐに拘束するなり何なりしなければならぬのだが、咄嗟のことすぎて機を逃した。思わず閉口していると、腰の曲がった老婆は続けて、

「だあめよお。落書きしちやあ。最近、この辺りに落書きしてるの、あなたたちなのお？」

「……ち、違います。その、これはそういう落書きとは違って、すぐ消えますから」  
「それにだめよお。女の子がこんな時間まで出歩いてちやあ」

この老婆は目が悪いのかなんなのか、私の格好については何の言及もなかった。

本来なら真つ先に追及されるところなのだろうが、雨とその翳が落とす暗闇のせいでこちらの姿も良く見えないらしい。

正直言つて助かった。相手がこの老婆でなければまず通報されるか妙なちよつかいを出されるに決まつている。

「……すみません。すぐに帰ります。……お婆さんはどうしてここに？」

私は応えてから水を向けた。とにかくあまり騒がれるのは良くない。すると老婆はおつとりとした声で話し始めた。

「それがねえ。この子がねえ、どうしてもお散歩についていうのよお、いつも来てたんだけど、最近腰が痛くてねえ、なかなか来てあげられなかったから、ちよつとだけって思つてでてきたのよお。」

私の家はねえ、すぐ近くのの。でもねえ、いつもお散歩しておもつてたのよお。せつかく静かできれいなところなのに、あちこちの壁に落書きがあつてねえ、ひどいことをする人がいるんだなつておもつてたのよお」

「………わかりました。ちゃんと全部消しておきますから」

「ほんとお？　ありがとうございます。あなた良い子だわあ」

「………ありがとうございます」

「さあさ、ピンクちゃん。そろそろ帰りましょうねえ。足も冷たいものねえ。それじゃあねえ」

そう言うのと、老婆はそろいの雨合羽を身につけた小型犬を連れて、また音も無く去っていった。

「……………」

「……フン」

「…………あとで壁の塗り直しに…………来なきやならないの…………かな…………」

「阿呆。あんな口約束、馬鹿正直に守るつもりか」

「…………やるって言つて、やらなかったら気分が悪いでしょ。…………まあ、手伝えとは言わないけど。…………にしてもライダー、何で人が来たのに気が付かないの」

「フン。俺も少々肝を潰しておるところだわ。殺気がないのは当然としても、あのババアめ、気配すらなかったぞ。死に掛けだからなのかなんなのか…………」

「…………ババアとか言わないの」

ライダーは珍しく深刻そうな顔で考え込んでいるようだったが、何のことはない。こいつは本気で喧嘩以外がからつきしのサーヴァントだということなのだろう。

殺気、敵意、害意の無い相手は察知できないらしい。なんというか、偏っているといふのか、ある意味ではこれも戦闘代行者たるサーヴァントとして正しいといふべきなの

か……。

「それは兎も角として、ほれ、急がんといかなのだろう」

「……やり直したほうがいいかも」

時間が経ちすぎて、せつかく描いた図形がほころび始めていた。慎重さに万全をきたすなら、最初からやりなおすべきだ。

しかし——それも言っていられなかった。私が改めて黒の軟膏を取り出そうとしたとき、中からは痛烈な破砕音が響き渡ってきたのだ。

始まっている！

「暇いとまはない。行くぞー！」

私は反駁しなかった。

こうなつては仕方がない。このまま、いつまでもまごついてはここに来た意味がなくなる。私は半ば強引に敷地内への簡易塹壕をこじ開け、霊体化したライダーと共に中に突入し、先ほど聞こえた音の方位を頼りに一路進んだ。

そして塹壕の突き当りまで進み、罌の類が無いことを確認して外に這い出した。まず目に付いたのは大きな倉庫のような建物だった。嚴重に封鎖されているそれを通りすぎると、その裏には闘技場のような開けた場所があった。

雑多な砂利が敷き詰められていて、おそらくは運送用の大型車両が出入りするための

駐車スペースか何かなのだろう。

私達の近くに、ちょうど身を隠すのに都合のいい大型の廃トラックが放置されていた。その巨体作り出す陰翳にまぎれながら、私達は広間のほぼ中央で向かい合う二つの影に注視できる位置に移動した。

予感的中した。バーサーカーはサーヴァント戦を行うためにこの場を目指していたのだ。

すでに人獣と化し、その醜く捻じ曲がった凶爪を振り乱すバーサーカーに対峙するのは、ひとりの青年だった。

この位置からでも分かるほど壮麗で背の高い、いつそ女のような顔と見える美青年だった。

頭頂から流れ落ちるような長い髪が鳩尾の辺りまで伸びている。その金の髪の端末と、まるで溶け合うかのような白を基調とした装束は雨の帳の向こうでさえ、その明るい光沢とゆったりした柔らかな質感をうかがわせた。

青年は、しかし隠しようもなく老獪な視線を湛えていた。先ほどより勢いを増した暗夜の飛沫雨の向こうに、私は確かに老成した精神の鋭さを見たのだ。

つまりはピンと来た、といえる。

実際そこにいるのは一見年若き青年と見えても、その実はすでに一度人生を極めた老

獯な魂なのだとということが直感的にわかったのだ。

つまり、あれは間違いないくサーヴァントなのだと言うことが、一見しただけで確信できたのだ。

そも、考えてもみればサーヴァントとは並べてそういう存在なのだ。

若々しく、雄々しい全盛期の肉体を持ちながら、しかし老成し、哲学の極地に至った、あるいは完成した精神の輝きを兼ね備えるという、元来は在りうべからざる存在としてこの世に現界して然るべきなのである。

それこそが英霊の物質化という、魔導においてさえも奇跡と称される「聖杯」の御業。その証明なのだ。

私は魔道に携わるものの端くれとして、振るいたくなるような高揚感を感じていた。今自分が目になっているのは現に示された奇蹟の具現なのだ。……しかし、

「——なんだ男か、紛らわしい格好をしおって詰らん。……フン。そうだな、一度英霊の座に至った女というのを見てみたいものだ。なにせ伝説に名を刻むほどの女どもだ。さぞかし見目うるわしかりうなあ。

……おっと、いかんいかん。今からそのような漫ろな気を起こしては、麗しの君に申し訳が立たんな。主よ、今のは内密に頼むぞ」

……ならば私の隣にいるこいつはいったいなんなのだろうか？　もしかして、私はも

のすぐくクジ運が悪いのではないだろうか。

なんだかとても哀しいような気分になってくる。

しかし——状況はそんな感慨にふける暇を与えてはくれなかった。

隣の馬鹿はさて置くとして、私は目の前の闘争に注視した。にらみ合っていた両雄に動きがあつたのだ。

兎角、なんにしてもここは静観するのが正しいだろう。わざわざ戦闘を始めたサーヴァントの間に割り込む意味はない。

あの老婆に呼び止められたのはむしろよかつたのかもしれない。そうでなければ案外、とうか結構な確率でライダーがバーサーカーの背中に襲いかかつていたかもしれないからだ。

それも既に戦闘が始まっているとなれば話は別だ。

いま割り込めばあの両サーヴァントたちは協力してライダーを排除しに来るかもしれない。それを理解しているのかいないのかは定かでもないが、とりあえずはライダーもおとなしくしている。

おかげで、私はじっくりと目の前で行われているサーヴァントたちの激突を観察することが出来た。

やおら突進したバーサーカーが、まるで死神の大鎌のような爪の束を青年に叩きつけ



ようとして振りかぶった。

だがそれが届くより先に、踏み込んだ足許の地表が崩れ、そこから無数に煌めく白銀の刃が飛び出してきた。

すでに人ならざる獣と化していたバーサーカーは全身のバネに力学的にありえない運動を起こし、いままさに踏み込もうとした方位の全く逆へと飛び退り、宙返りを繰り返して元の位置よりもさらに後方へと着地した。

たとえ獣であろうが人であろうが、どの道ありえないほどの奇怪な運動性能といえた。もはや物理を超えているかのように、私の目には映った。

キヤスターの足元の地面から伸びた白刃の群は、そのままずりとその全容を雨夜に晒した。

それらは二本の腕と足と頭部の乗った胴体に備えていた。

磁器の様につるりとした無貌のヒトガタ達が雨露に洗われながら立ち上がった。あれは錬金術師が使う自動人形オートマトンの類だろうか？

一、二、……全部で四体の自動人形たちは雨しづく暗闇の中で、キリキリと関節を鳴らしながら、未だその面貌に人の名残を多く残す獣未満といった風貌の男を取り囲んだ。

相対する敵の、耳まで裂けた口角に異様な、としか言いようの無い笑いが溢れたのを

機ととつたのか、その半獣の敵にも増して奇怪な面相の自動人形たちは、獲物に群がる蟻のようにバーサーカーの上に殺到した。

ギチギチと、肉を削ぐような音が辺りに響いた。

決して鋭利ではない刃を生き物の肌当てこする音だ。人の情緒を介さぬ自動人形たちは、まさに昆虫の行動様式に沿うかのように淡々と獲物の解体にいそしんでいた。相手が唯の人間だったならばとつくに解体され、その内容を整然と仕分けされていたことであろう。しかし依然として勤勉な動きを見せていた人形たちは一向に作業を終えることが出来ない。

——否、その実——それらは諸所の作業を始めることさえできていなかったのだ。

パツと紙ふぶきが踊るような光景が目前に広がった。

それらはまるで木っ端のように飛び散り、舞い上がった。昨夜と同じように四肢を歪に肥大化させた獣はたった一振りで小山のように群がっていた歯車人形たちを薙ぎ払ったのだ。

その豪腕の表層を、まるでワイヤーのようなゴワゴワとした漆黒の獣毛が覆い尽くしていく。

私は目を皿のようにしてその様子を見ていた。どうやらあの獣人化現象の起点となるのはあの男が最初から腰に巻いていた毛皮のベルトらしい。おそらくは狼の皮製の

ベルトなのだろう。

あれがあつた男の宝具なのだ。私はそう結論づけた。

各々の規格が桁違いなのを除けば、宝具もある種の魔術を発動させる為の魔道器であるといえる。

あの宝具の有する魔の機構摂理は、私にとつても理解しやすい部類に入る。なぜなら、その能力は私の得手する魔術ともあい通じる部分があるからだ。

獣に成りきつたり、その動きを模倣したりしてその能力を再現しようとする試みは魔術妖術に限らず、古今東西の舞踏や武術の随所に見受けられる。しかし、あのバーサーカーのそれはさすがに宝具と言うだけあつて並みの魔術には真似の出来ないものものうだった。

全身が強力に賦活され、その外皮は魔術を弾き、傷を塞ぎ、さらには感覚まで獣のそれに順ずるまでに鋭敏化されているようであつた。

あそこまで魔獣そのものに変容できるというのは、さすがは英霊の端くれだといふ言ひようが無い。まさに規格外だ。

自動人形たちをまるでガラス細工のように粉碎した獣はすでに二本足で立つのが億劫なようで、物騒な鉤爪を並べた手を地に付いて異様に膨れ上がった上半身を支えていた。

そのまま、狼というよりはゴリラを思わせる四足歩行でゆっくりと歩を進めていった。

「む、無駄、——ダ。今のオレは不死——身ダ。貴様二——勝ち目ハ、無——イ。」

今や身を護るものとして無い、眼前の巨大にして異形となった人獣と比較したならば、まるで一厘の儂い野菊のような印象さえ与えてくる優美な装いの青年は、しかし強大な凶気の塊となった魔獣に対して、さして臆したる様子も無い。

その右手の白く長い指を、ゆるく結んで細い顎先に添え、なにやら深と考え込む風であつた。

「ふむ、興味深い。その状態でまだ口が聞けるのか……」

感心したようにその滑らかな喉から滑り出る声音には、何ら気負いは感じられない。

あの青年。おそらくはキャスター。私はそう、当りをつけていた。もとよりその装備を見るならばあれが三騎士のクラスではないことは明白だ。

そして今隣在している魔獣がバーサーカーなのだと思えば、残るはクラスはアサシンかキャスター。

事前に聞き知った情報を信じるなら、アサシンのサーヴァントとはほぼ確実に髑髏の面をつけた暗殺者のサーヴァントと呼ばれるのが通例だという。

ならば消去法である青年の正体は魔術師のサーヴァント、キャスターだということに

なる。もつとも、三騎士以外のクラスはその時々によって変化することもありうるということだから、それだけなら別の可能性もありうるといえる。

しかし私には彼の青年が魔術師キャスターであるという確信が私にはあった。彼が見せた魔術師としての特性が、私にその正体を確信させたのだ。

魔術師には、大きく分けて二つの種類がある。

己の心身を魔術行使の機関として成立させ、瞬発的な魔術行使をもつて外界に干渉することを技巧大系の柱とするタイプの魔術師「ソーサラー」。もうひとつは己ではなく己が外界に則すように作り出したものを媒介として魔術を行使するタイプの魔術師「エンチャンター」。

通常、魔術体系の機構が完全にそのどちらかに偏るということは少ない。

事実、私もその両方の魔術を使うが、より高位の魔術師ほどそのどちらかの技術を専門的に磨き上げていくものなのだ。

よつて、あのキャスターのタイプも推察することが出来た。あれは魔具を作り上げるタイプの魔術師、エンチャンターに属するものだ。

かつて師、曰く、戦闘において「己が最強である必要は無く、最強の物を作り出せばいい」という論理にのつとつて魔術を行使するのが、そのタイプの特徴なのだそうだ。

ならばあのキャスターが主に錬金術師に代表されるエンチャンターなのは明白であ

る。今までの攻防においてそのすべてをあの自動人形に任せているのがその証拠だ。

もつとも、あの自動人形がキャスターの持つ魔術の「最強」のカードだったとしたら、もう勝負は付いたようなものだが……。

「ソレ、モ——こ、コまデ、——ダ。モウ、——オレ、ノ理性がモ、タ——ナイ。……持  
タス、理由モ——ナイツ！」

バーサーカーはその場に立つたまま無造作に右腕を振り上げた。

もはや踏み込みすら必要ない。その肥大化しすぎた腕と爪はすでに青年をその必殺の圏内に納めているのだ。

泰然と直立したままそれに対するキャスターの手には、いつの間にかやら、——何か  
在った。

それは丸い、何かガラスのような、球技に使うボール大のものと見えけられた。

バレーボールほど大きくは無く、ソフトボールよりは大きそうだ。

そのせいかガラスといいながらも、なにやら落とせば弾みそうな気配もあるように見える。鞠か？ しかしその透き通るような体表面はほっそりとしたキャスターの長い指の上にあつて余計に繊細な質感をうかがわせる。

その滑らかな皮膚を決して阻害すること無く馴染んで見えるそれは、もしかしたら特大の黒真珠なのかもしれなかった。

キャスターはその球体を両手に持ち、身体の前に掲げた。もとより掌の中に在つてさえ自重を感じさせなかつた球体はそのまま虚空にふわりと浮かび上がり、その表面からは光が刺し始めた。

光は一筋ではなく無数の線であつた。虚空に浮かぶ青暗色の球体から、まるでウニか栗のイガのように細い光が伸び、暗い周囲の空間に点々と光を画き始めたのだ。そして――

「――高次式普遍天移象球儀――」

眩くような、キャスターの滑らかなテノールが雨の帳の向こうから届いた。

同時に奇妙な既視感が私を打つた。あの光をどこかで見たような覚えがある。そのせいだろうか？ いや、それよりも私の感覚に痛烈な針のようなさざめきを残したのはその威厳を含んだ言霊であつた。そうだ、いまキャスターが呟いたその言葉を、私はどこかで聞いた覚えがあるのだ。それは、いつ、どこでだったか――。

ほぼ一瞬の刹那に凝縮された私の感覚は、そこで途切れた。

そうこうしている内に、バーサーカーの爪はすでにキャスターの命を掠め取れる位置まで迫つていたので。

バーサーカーも一時はその光に反応して一応躊躇する気配を見せた。球体の発する光によって形作られた直系二メートル弱といった大きさの球状の幕は、一見キャスター

を外敵から隔絶する防護膜のようにも見受けられたのだ。

しかし、もはや制止もかなわぬほどに勢いづいていたのか、それともはや極め付きに肥大しすぎたその腕が重すぎたのか、バーサーカーは構わずに巨腕を振り下ろした。

すると、夜と雨と空気とを諸共に引き裂いた凶爪はその光膜をあつさり素通りしてしまった。

爪は未だ寂然と構えるキャスターの頭上に迫る。あわや両断。と、いうところで、両者の間に飛沫が舞った。紅い飛沫。鮮血だった。しかもそれは凶爪に晒されていたキャスターの物ではなく、今まさに決殺の爪を見舞おうとしていた獣の豪腕から散華していたのである。

すると、途端にその毛むくじやらの巨体が私の視界から姿を消した。

と見えた瞬間、バーサーカーの巨体はまるで隕石のような衝撃と共に、私達の隠れている車両のほうへ、しかも後ろ向きのまま跳びのいてきたのだ。

私は泡を食って声を漏らしそうになり、両手で口を押さえ込んだ。動くのが億劫そうな歪な巨体にも関わらず、バーサーカーの動きは常人の目には捉えられるものではなかった。

だが、それほどの暴力を思わせる狂獣の後退も、無理からぬことかもしれない。その丸太のような巨腕からは僅かながら雨の雫に混じって確かな紅い筋が滴っていた。



のだ。

しかし私にはなにが起ったのか皆目検討が付かなかった。

ここから目する限り、今キャスターは何かを飛ばしたわけでも、バーサーカーに向けて魔術を使ったわけでもないはずだ。ならやはりあの光の膜が何らかの作用をもたらしたのだろうか？ ならば、やはりあの光の膜、もといその起点となる宝珠がキャスターの宝具なのだろうか？

その己の出した推論に、私は自ら首を捻らざるを得なかった。仮にあれがキャスターの切り札たる最強武装としての「宝具」だとすると、逆にバーサーカーの傷が軽微過ぎることが不可解に思えるのだ。

今のバーサーカーの後退は与えられたダメージよりも、敵に何をされたのか解からぬ疑心暗鬼が故ではないのだろうか？ きっと今の私と同じ、不可解な疑念にその思考を覆い尽くされているのであろう。

——結論から述べるなら、バーサーカーの後退に対する、以上の推測は半分だけ正解だったということになる。

バーサーカーは更にキャスターから後退して私達が隠れている車体に近づいた。

私は一瞬こちらの存在に気がつかれたのかと思つたが、違つた。バーサーカーは私達でなく私達が身を隠しているこのトラックのほうに用があつたらしい。

ひしゃげるような金属の悲鳴が聞こえて、私はすぐに何が起ろうとしているのかを悟った。やおら、動く筈の無い巨大な車体が浮き上がったのだ。呆気に取られた私はもう少しで自分の穩行を忘れるところだった。

バーサーカーは巨大なトラックを掲げ上げていたのだ。そして全身の筋肉を爆破させるように駆動させて、そのトラックをキャスター目掛けて、投げつけた。

——の、だが。

さて、ここでひとつ問題がある。

その後キャスターはそれを難なくかわしてしまっただが、私の主観においてそれをキャスターがどうやったのかをうまく述べ立てることが難しいのだ。

それほどに、その光景は私にとって埒外のものだったのだ。

先ほどキャスター自身を包んでいたいくつもの輝く点光が群を成す球上の光の膜が、今度は落下してくる巨大な影を包み込んだ。そのうちにキャスターはそそくさと迫り来る車体の下から移動してしまっただ。

つまり私の見たものを率直に言及するなら、トラックは暫しの間宇宙でピタリと制止していたということになる。

そしてキャスターの優雅な歩行が滞りなく雨ざらしの砂利を渡り終えるまでの間、トラックはそのまま宇宙にあり続け、その後であっけなく落下した。凄まじい衝撃が、そ

れを放り投げたバーサーカーの怪力とそれを簡単に回避して見せたキャスターの奇怪さを物語っていた。

『おい、こつちだ』

トラックの陰に隠れられなくなった私は霊体のままのライダーに誘導されて、事務所か何かに使われていたらしいプレハブ小屋の上に飛び乗った。雨の勢いをまともに受けるのは癪だが逆にサーヴァントたちの動きはよく見える。

キャスターの奇怪な行動に、それからも暫し躊躇する気配を見せていたバーサーカーはしかし、すぐに考えることを放棄したようだった。いや、そのときすでに考える機能を失っていたというべきだろうか。

今やその体からは人獣としての醜悪さは去り、そこにはあの夜と同じ、鈍い銀色に輝く毛先をたなびかせる美獣がいた。

そうなれば、もう敵の手など斟酌しない。元来の獣が持ちえることの無い、歪んだ殺戮欲求を満たすためだけに後はどう「狩るか」それだけがあの魔獣の求めるところとなるのだ。

狂獣は、今度は爪でなく特大の氷柱つららの連なりのごとき牙でキャスターに襲い掛かった。

対して、とうのキャスターはいえ、その死の先制に目もくれることなく、眼前に

浮かび上がる球体にそつと手を沿え、ゆるゆると回転させていた。

丁寧に磨くかのような手つきで球を回転させると、その度に周囲を覆っていた光の膜が変容した。球につられて回転し、その大きさを換え、膜の形を換え、光量を変えて滅暗を繰り返した。

すると最終的に光の膜はキャスター自身ではなく迫り来るバーサーカーの巨体の前方に出現し、その巨体をすつぽりと包み込んだ。と、見る間に今度は紅い雨が逆しまに舞い上がった。バーサーカーの総身を、先ほどと同じ現象が襲ったのだ。

しかし全身から血を流しながらも、バーサーカーの歩みは止まらなかつた。再び間合いを測るように旋回ながら牙を剥きあげる。その向けられる凶気だけで、あるいは並みのサーヴァントの戦意を折ることも可能なのではないかさえ思える。

すると、一時は巨獣に追いつがるかのように移動していた光の膜は、やおら虚空に静止し、次いで一気に拡張しこの敷地全体を包み込むまでに広がった。

だが、斯様に展開した光膜もやはり敵を押し止めるような効果は無いらしく、今度こそ何物にも邪魔されることのないバーサーカーの牙は、キャスターに届いた。

否、届いたと見えた。――が、しかし牙は衣服の裾を掠り、そのままどんどん遠ざかつていった。

それを目にして、私はバーサーカーが後退したのかと訝ったが、そうではなかつた。

正確には退がったのではなく、その巨体が矢庭に縮んだ縮んだのだ。

「お、お、おとおおお……おとおつおとおお!? ……」

バーサーカーの口からは驚愕らしき呻きが聞こえてきた。——にもかかわらず、私はそのとき、それに注視することが叶わなかった。

私自身、どうしようもないほどの驚愕に直面していたからだ。たつた今まで、この場所には雨しぶく漆黒の夜だったはずだ。

記憶操作でもされているのでない限り、それはたしかなことだ。しかし……ならば今現実に見える光景をどう受け止めればいいのか。だろうか。

今、私の目に映るのは夕焼けだった。鮮やかな赤だ。今、世界は確かに夕刻だった。それだけではない。空は次第に鮮烈な赤から清浄な青へと変容していくではないか。それに従い、バーサーカーの体は縮小し続け、最後には私達が始めて見た時の様に、青白くやせこけた唯の人間に戻ってしまった。

「ひ、ひ、ひイ……」

あまりの混乱からか、もはや狂声を張り上げ、恐怖に狂ったように取り乱す男の醜態はひどく惨めでみすばらしく、先ほどの完成された美を余すことなく秘めていた銀獣の面影は残っていないかった。

「——月の光を浴びながら日常のモラルを反転、逸脱、拡大するといった儀式は世界各地

にその痕跡を見ることが出来る。

とめどなく満ち欠けと繰り返す月は死と再生のシンボルとなるからだ。それは不死を連想させるものとして陰性の魔力の源となるのだ。

古の精霊と共に生き、シャーマンの存在を受け入れてきた文化では魔女や狼男のような存在を、人間の心の奥底にあるもの、陰性、人間に不可欠な半身として受容してきた。そう、月明かりの夜に踊り狂う者たちの饗宴の儀式だ。

つまりは重要なのは月の光なのだ。たとえ雨雲に遮られようとも、いまもこの世界に降り注ぎ続けている月光。

つまりは月面に照り返す太陽の反射光こそが君の力の源。……ということのようだな。ふむ。なるほど、興味深い」

唐突に声が響いた。この状況で雄弁を振るう者はただ一人しかいなかった。

「月の光でなければならぬというの、つまり太陽光からの直接の恩恵を受けられないということだ。

月の光は一度死んだ光だ。だからこそ、そこで光の性質が陰性に变化する。その死光に満ちた世界でなければ君の宝具は使えないというわけだ。

まさに世界に共通する陰性の魔力の象徴のような宝具だ。興味深いよ。

そして君の宝具は強力である反面、その月光の満ち欠け、つまりは月齢に左右されざ

るを得ない。

加えて言うならば、君の正体は元来からの英霊ではなく、獣人伝説に感染した唯の殺人鬼、といったところなのではないかな？ 英霊として呼ばれたのは君自身ではない。

狼ル！ガル男という伝説の存在を呼び出すための触媒として、偶然選ばれた悪霊が君だったというだけのことだ。

故に、人狼としての性質を失った君にはもはやサーヴァント足りうる戦力は残っていない。……どうかね？ バースーカー、私の推論の程は？」

講釈をたれるかのようなキャスターの声は明朗でよく通った。

故にそれは私の耳にもよく届いていた。その解説を聞いて、私はあのバースーカーについての懐疑に大方の合点がいつていた。今日の月齢はたしか十四。なるほど、ならば昨夜から今宵にかけてのバースーカーの不死性や破壊力にも説明がつく。

魔女にとつても、月は重要なファクターだ。また、狼男や魔女だけでなく、この地上にある万象は月の満引に影響を受けるのだという。それは何も魔術的な側面からだけではなく科学的な見地からも言及されて久しい。

それは一般に生体潮流バイオタイド仮説と呼ばれるもので、この地球における地殻や海水、磁場といったものが月の引力の影響を受けているのと同様に、生物の体もまたあの天体の運行

の影響を受けているのだという説だ。

無論、人体もその影響を受けないわけには行かない。そも、今人類の生活を根本から支配している暦とはあの天体の満ち欠けを元にしているのではないか。

同じ周期で繰り返される女の月経と月の満ち欠けも、その名の通り人と月の密接なる関係を表すものだ。そして、そのもつとも特異にして世に知られた現象こそが「ルナテイクス」と呼ばれる、満月の夜に起る殺人事件や精神錯乱の事例である。

人は月に狂うことを運命付けられた生き物なのだ。いや、この星に生の営みを根付かせる総ての有象無象すべからずそのえもいわれぬ狂気の淡い光の誘いから逃れることは出来ない。

その甘美なる狂気こそがああ「狂乱バウの座サイに誘サわれた英霊カイ」の強力さの秘密だったのだ。その甘露なる蜜月の淡光を予期せず奪われることとなったバーサーカーは、巻く尻尾も無くしたまま足を纏マれさせて形振り構カわず逃げ出した。

だがその逃亡先を、——いつの間マに起き上がったのか——先ほど破壊されたはずのオートマタ達マが塞サいでいる。そして、行き先を変えて逃げようとしたバーサーカーの前に、またもや数体のオートマタが姿を現した。さつきバーサーカーに蹴散キらされたのは別のものだ。

剣を持つもの。槍を持つもの。馬のような四足の半身を持つもの、黒いケープを纏マつ



たもの。よく見ればそれぞれが別の意匠を与えられているのがわかる。

「私の自動人形は全部で七体いてね。君が破壊したのはそのうちの四体だけだ。……もつとも、それらも今の間に復活してしまったようだがね」

七体もの無貌の自動人形に囲まれたバーサーカーは、うろたえる様に腰に挿していたナイフを引き抜いた。幾多もの血を吸ったような、青光りのする寒々とした凶器と見えたが、しかしさすがにこの状況では焼け石に水というものだろう。

宝具さえ使えれば物の数でもないのだろうが、今の状態では彼に勝ち目は無いことは明白だった。

「……拙い」

「確かにな。このままでは旨くない……」

いつの間に実体化していたのか、私の呟きにライダーが声を響めて同意した。さすがに馬鹿でもこのくらいのことにはわかるらしい。

このままキャスターがバーサーカーをくだすのは構わない。だが、ここで終わってしまったのではキャスターの能力や真名の正体を暴くことが出来ないのだ。それではせっかくここまで来た意味が無い。

幸いキャスターはバーサーカーに気をとられて私達に気付いていないらしい。出来ることなら、キャスターの正体なり宝具の効果なりを看破できるだけの情報を得てから

退散するのが最良なのだ。しかし、このままではそれも叶いそうにない。

そうするうちにオートマトナの一体が放った矢が、瘦身の男の足を貫いた。呻き声を上げて逃げようとする男に物言わぬ自動人形達が踊りかかった。

——ここまでか。そう判じた私が失意の退散を意識した、正にその時である。

一陣の刃が総ての自動人形に先んじてバーサーカーの身体を両断した。

哀れ、白昼の狼男は悲鳴を上げる間もなく灰燼と化して消滅した。だが、ひとつ幸いであつたことをあげるのなら、今まさに彼に襲いかかろうとしていた憎き七体のオートマトナたちもまた同じように両断の憂き目を見ていたことであろうか。

——それを孤独に散つた狂人の慰めと見るのは、些か感傷的にすぎるだろうか？

そんな馬鹿げた思考に逃げ込まねばならないくらい、私は眼前の光景について向き合うことを拒絶していた。私はさぞかしそれを唾然と見るごときしか出来ていなかっただろう。

「いやあ、あぶなかつたな。フフン。もう少しで手柄を奴に持つていかれるところであつたわ！」

青天に変じた空の下、ゆうゆうと「舞台」に躍り出たライダーは、そう、嬉々として歓声を上げた。

## 三章―2

(月曜日・夜更け)

「いやあ、あぶなかつたな。フフン。もう少して手柄を奴に持つていかれるところであつたわ!」

青天に変じた空の下、ゆうゆうと「舞台」に躍り出たライダーは嬉々として歓声を上げた。

いまだにプレハブ小屋の屋根に身を隠したままの私に向けてである。

どうやら私は勘違いをしていたらしい。ライダーははじめからこれっぽっちも私の危惧に同意などしていなかったのだ。私はまだこのサーヴァントの馬鹿さ加減を侮っていたのだ。

「……、……………」

私はこのまま帰ることが出来ないものだろうかと真剣に考えてみたのだが、どうにもそうは行かないらしい。仕方なく私はライダーの脇に降り立った。

先ほど、一瞬にしてこの廃工場の敷地の総てを包み込むまでに拡大した光の膜が光陵

を窄め、深い青寒色の球の中に潰えると、青天を仰ぐ白昼であった筈の光景は見る間に消え去り、辺りはまた冷たい雨の降りしきる暗夜に戻っていた。

そこで私はようやく、あの光の膜に映し出されていたものを思い出した。

そうだ、あれは幾多の星座ではないか。そう、あの宝球はプラネタリウムの核となる球形または半球形の投影機部、「恒星球」に酷似している。

あの宝具は光によって、キャスターの周囲に立体映像の如き天球図を出現させていたのだ。

「驚きましたね。今宵はそのままお引取り下さるかと思っていましたか……。ふむ、これはこれで興味深い展開だ」

しかも、覗いていたことは最初から知られていたらしい。考えてもみれば当然のことかもしれない。どうにも私の見積もりはいろいろと甘きに失していたようだ。

「馬鹿め。目の前にいる敵を仕留めずに引くことなどあるわけなからうがー」

馬鹿が何か言っている。——そうか。そういえばこいつ、歴史に名を刻むレベルの馬鹿なんだったつけ。

——いや、もはや何も言うまい。それについての思索は切り離すしかない。と、意識を切り替えようと努力していると、不意に視線を感じた。

見れば、半ば諦めの境地に至って俯くしかない私に、対峙するキャスターの明らかに

冷やかな視線が注がれていたのだ。

「それにしても……はしたない格好のお嬢さんだ」

どうやら、見るからに育ちのよきそうなキャスターは私の格好に一言あるらしい。だが、そこで恥じ入る必要などありはしない。これは私の魔女としての矜持でもあるのだ。

今の侮蔑はある意味で褒め言葉として受け取るものであり、憤慨するにはあたらな  
い。

「うむ。まったく持つてケシカランことこの上ないが、なにやら仕様らしいぞ？ フフン。そういう貴様はなんだ？ 坊主か？ 道士か？ それとも西洋では聖職者とかいうアレか？ まあ、なんにしろ、それならさぞかし眼福であろう。ほれ、もつと寄つて見てみるか？」

もつとも、それはコイツが横にいない場合にかぎる。

「下劣な」

そう言つて目を汚らわしいとばかりに伏せたキャスターの意識は間違ふことなく、私とライダーをまとめてひとつのものとしてみなしている。

どうやらキャスターからすると私はこの馬鹿と同じ部類の「下劣」に含まれるらしい。私はこれまでの人生において、味わつたことの無いような羞恥と屈辱感に泣きそうに

なっていた。

悪いのはこの馬鹿である。

こいつが横にいなければ、まだ魔女として毅然と対応も出来ようというものなのだ。

しかし、こいつと一まとめにされるともう、何の言い訳も出来なくなってしまうのではないか。

もういい。私は滲んできた涙を拭って前向きに考えることにした。

確かにこの先キャスターの工房に真正面から踏みこめる機会があるかどうかは疑問だ。

考えようによつては、これは絶好のチャンスだともいえる。準備不足は否めないが、この際力押しでいけるところまで行くしかない。

私は無言のままキャスターを見据え、多めに軟膏を取って練り合わせ、剥き出しになつている腿から胸元、肘先にまで手早くラインを書き込んだ。

最後に、唇に塗つた真紅の軟膏は火照つた体温に煽られてすぐに揮発した。その火のような吸気を肺に留め、私は一気に呪文<sup>スベル</sup>を紡ぎ上げた。

「…… Bastet maubastet.

dancing insubordinante in silent feast.

— I instill energy like moonlight wake.

「……」

躍動せし不従順なる者達の音無しの饗宴にて

— I instill energy like moonlight wake.

— I instill energy like moonlight wake.

B a s t e t <sup>我</sup> m a w <sup>求</sup> b a s t e t <sup>訴</sup> ……<sup>り</sup>

すると首から肩にかけての連環帯の装飾具の端から無数に伸びていた黒のリボンが意志でも持つているかのように生動し始め、私の体に巻きついていく。

次第に溶け合うように交じり合った魔帯の群は、ボディスーツのように私の顔以外の部分を余すことなく覆った。

被っていた帽子からは三角形の大きな耳が突き出し、その鰐は風呂敷のように後方に伸び、私の背中に柔らかな体毛を波立たせた。

四肢の先にはナイフのような爪が伸び、全身の筋肉が賦活化して体中の関節が位置を変えた。

私は——すでに二本の足で立つことをやめていた。

「これはウィツチクラフト。……なるほど、意外と本格的な魔女のようだ。興味深いーが、しかしさすがにあのバーサーカーの後では見劣りしますな。さしずめ、かわいい子猫といったところだ」

余裕の声を上げるキャスターの前で、私は一匹の大きな黒猫に変わっていた。

これが私の攻撃用の魔術だ。猫に擬態して獣の戦闘力を自身に付加すること、それが私の持つ唯一の戦闘術なのだ。

もつとも、確かに先のバーサーカーのように完全に獣に変容出切るわけではなく、戦

力としてもそれこそ子猫と重戦車ぐらいの差はあるだろう。

「それもそうだな。……獣に扮した女体というの、なかなかどうして艶めかしい。フン。わるくはない。わるくはないが、確かにあの犬つころの後では珍しくもなんとも無いのう。主よ、少々芸が足らんぞ」

「……なんで呑気に見物してるの。……さつきとやることをやりなさい」

勝手に独断先行したくせに、今度はのんびりと私の方を眺めている。コイツの考えていることはホントに理解しようがない。

「うむ、それもそう、……なのだが、どうにもなあ。改めて考えてみると、こんな優男相手ではオレ様の本気を出すのも、ちと大人気なからう？」

こいつはさつきバーサーカーがやられたのを見ていないのだろうか？ それともすでにその事実が頭から抜け落ちているのか？

敵の能力がわからない以上、それはどうあっても圧倒的に不利な状況を意味する。そして、キヤスターはおそらく今のわずかの立ち回りからすでにライダーの能力を殆ど看破してしまっているだろう。

この状況はとも余裕を持って余すようなものではない。

「……何言ってるの。……ここで手を抜く必要なんて……」

焦燥を露にする私に対するライダーはなんとも気が抜けているように見えた。――



少なくともこのときまでは。

「フン。全力になる必要もないではないか。まあ、安心しておけ。だれもやらないとは——」

「興味深いですねえ、これはずいぶんと……?!?」

この場にそぐわぬ私達の会話に割って入ろうとしたキャスターは、そこで何かを悟つたように底で言葉を切つて、またあの球を操作し光の膜を形作つた。

悠然と戟を担いだライダーがその実、——すでに攻撃の用意を追えていることによろやく気が付いたのだ。

「——言っておらんわ!」

次の瞬間にはライダーの持つ戟の曲刃がキャスターの細い首に掛けられていた。反射神経を大幅に増強していたおかげで、今度は私も何とかライダーの動きの軌跡を見つけることが出来た。

とんでもない速度だった。やはり、こいつは馬鹿ではあるが戦闘においては常に正解を選択している。

先手を取るなら、敵がやりたいことをやる前に勝負を決するのが鉄則だ。

殺し合いの大半は第一撃<sup>ファースト・コンタクト</sup>で決着が付く。それはその瞬間がもつとも有効にして危険な「機」だからに他ならない。

そのためにライダーはあえて「機」を外して相手の氣勢を削いだのだ。この男、やはり戦闘においては微塵の隙もありはしない。

しかし——先を取ることにはかなわなかった。刃は止まっていたのだ。

訝るべきは、この場合、何にであろうか。ライダーの攻撃が防がれたことだろうか？ 刃に晒されたキャスターが微動だにしなかったことだろうか？ それとも——刃を止めていたのがほかでもない、宙空に制止した雨粒だったからであろうか。

「な——ぬッ？」

さしものライダーも、これにはさすがに瞠目して咄嗟に刃を引いた。

私はその事実にごそ驚かなくてはならなかった。それが本当に小手調べなら迷わず連続攻撃を仕掛けていたことだろう。

思わず引いたということは、つまりいまの一撃が全力だったということに他ならないのだ。

ライダーの全力の一撃といえ、それは迫撃砲にも等しい衝撃の筈だ。それをいとも簡単に弾いて見せたということは、それが尋常な防御とは一線を画すということである。

それほどの怪異。さすがにライダーも退がらないわけにはいかなかったのだろう。

両者の距離が開くと、すぐに雨は制止を止め、万有引力に逆らうことなく地に降り注

いだ。

するとキャスターは足も動かさずにそのまま宙を浮くように後方にさがった。それについては魔術師ならば驚くには値しない芸当だ。やはり問題はいまキャスターが起こした現象の方なのだ。

「……今、何が……」

私はライダーの側に寄って疑問を問うた。私だけではあの道具がなにをしたのか、皆目検討がつかなかった。

「フン、そういうことか」

「……解かるの？ ライダー」

「どうやら、奴の宝具は『雨』を操るもののような。先ほどあの犬の体を抉ったのも、勢いを増した雨礫であつたわ」

ライダーにはそれが目視できたらしい。雨を空間に留めるだけでなく、加速することもできるということか。しかし……

「……夜を一気に昼に変えたのは？」

「それは幻覚かなにかなだろう。そういうのが、ほれ、魔術師の得意なんだろう？」

「……」

なおも余裕で私に振り返って応答するライダーを余所に、私はキャスターの動静から

目が離せなかった。

そんな単純なものではない。今キャスターが行っていたのは、そんなものではないはずなのだ。

私にもまだ判じ切れないが、あのキャスター、というよりはその宝具にはまだただならぬ秘密があるように思えてならない。

キャスターのほうも今のライダーの踏み込みにはさすがに肝を冷やしたと見えて、油断の無い顔でまた空中の球を空転させた。

またもや光の膜が広がり、今度は一気にこの廃工場の敷地そのものを包み込んだ。

今度は雨が止むことは無かった。

「……で、ライダー。その推測が正しいとして、この雨の中でどう攻めるの」

「フン。決まっておろうが、敵が小細工を弄する前に——」

緩急。ライダーの前進の速度は今度こそその軌道すらうかがわせなかった。——が、

「——たたつ斬るのよ!!」

それはもうやったではないか。と、私がそれを言葉にするより先に、憤然とキャスターに迫っていたライダーはやおら急停止し、こちらに振り返った。

それでようやく、私はキャスターの冷然とした目から注がれる視線が、自分を捉えているのだと気が付いた。

「たわけエ！ 後ろだ!!」

そのおかげで、私はライダーの叱咤に先んじて動くことが出来た。

声を聞いてから反応したのではもう遅かっただろう。私は背面から襲ってきた無数の刃から逃れるように跳躍して、間一髪飛び退いた。

見れば、私が立っていた場所には先ほどライダーに両断されたはずの自動人形達が各々の刃を携えて群がっていた。

「どうなつとる。こいつら不死身か？」

いや、それはない。

例えこの自動人形たちに自己修復機能があつたのだとしても、サーヴァントたるライダーの攻撃で破壊されたのなら、それは外部構造の破壊だけでなく、内部の魔的機構術式の壊滅的な破損を意味するはず。

それこそ、この人形達自体が宝具でもない限り不可能な話だ。——ならばやはりあのキヤスターの手中にある宝珠こそが怪しい。

自動人形たちはわらわらと私達を取り囲もうとしてくる。

「……ライダーッ、私の盾に」

「チィッ、——致し方なし!」

一気呵成に波状攻撃を仕掛けてきた七体の自動人形を、ライダーはそれこそ一振り

薙ぎ払う。

しかしその度にオートマタたちはまるで映像を巻き戻すかのように破損箇所を復元して再び攻撃を開始してくるのだ。

同じような攻防を幾度と無く繰り返すうち、ライダーの手を逃れるものが出てきた。

ライダーは一人で千人の敵に対して攻めを打つことのできる男だが、しかしその反面、何かの防衛、つまりは何かを守りながらの闘いにはまるで向かないようであった。

今も一挙一動が強力無比であることは違いないが、どこか攻め手に立っているときのような精彩さが感じられないのだ。

熊の毛皮のような被り物を模した外装の人形が、ライダーの剣域を抜けて私に迫る。

何本もの折れた短剣や欠けた槍の穂先を、箒のように束ねた奇怪な得物を出鱈目に振り回してくる。

私は逃げずに前進した。敵の凶刃を潜り抜けて両手の爪を敵の懐に連続で叩きつけた。

猫を模倣した今の私の反射神経と速度なら、雑作もないことだ。

——が、文字通りまるで歯が立たない。

私の爪はその気になれば人の身体を両断するくらいは出来る代物なのだが、如何せん、爪がいくら鋭くても「重さ」が足りずにこのような機械仕掛けの身体を破壊できない。

いのだ。

こういう金属製——か、あるいは分厚い強化セラミックか何か——の頑丈なカラクリを壊す時は鋭いナイフよりも、ハンマーやツルハシを使うのが正しい。

そのとき私の肩口を一本の矢が掠った。弓を持ったオートマタが粉碎されながらもライダーの脇を抜いたのだ。火のような熱さに身を振った私を奇怪な箒を持った人形が組み伏せた。

私はどうしようもなくなつて身を強張らせたが、次の瞬間、ツルハシどころが、ビルでも貫通できそうな削岩機の如き一撃が私の上にいる人形を薙ぎ払い、粉碎した。

そのままクレーンのような野太い腕が下りてきて、子猫でも持つかのような手つきで私の首根っこを捕まえてひよいとつまみあげた。

「フン。なんだ、格好ばかり変わつても、ものの役にたたんではないか」

「……そうじゃなくて、盾になれてはいたでしょ……」

そうは言つても、内心わかつてはいたのだ。やはりライダーは盾には向かないサーヴァントだ。

後ろに味方がいても、攻撃がきたなら反射的に避けてしまう。なまじ戦闘に頭を使わずとも勝ててしまうものだから、そう不得手が生まれたのだろう。

粉みじんに粉碎されたはずのオートマタたちは、またもや修復を終えて立ち上がつて

くる。

ライダーは私をつまみあげたまま、手にしていた戟を振りかざした。

「フン、いつまでもいい気にさせておくものか！」

先ほど私達が身を隠していたプレハブ小屋が、溶鉱炉に入れられた鉄片のように真っ赤に融解し膨れ上がる。

伝説の英馬の騎影が、みたび三度雨しぶく現世うつよにその姿をあらわした。

その莊嚴たる佇まいは、やはり赤熱する蒸気機関を思わせて憚らない。自我をも持たぬはずの自動人形たちの足を竦ませるほどに、その威容は圧倒的であった。

私を定位置である自分の腹の前に乗せ、ライダーは一気に騎馬を前進させた。

凄まじい加速のGと馬体から発せられるスチームのような熱気を痛いほど感じながらも、私は思った。

そうか、これならばいける、と。なぜなら、たつたそれだけです。敵雑兵の殲滅が完了していたからである。

文字通りの粉砕だった。オートマタたちは案山子のように蹴散らされ、その刃は私達に届きもしないのだ。

やはり、ライダーの言うように最初から力押しでいったほうがよかつたのだろうか。とさえ、思えてしまう。



真紅に燃える馬体は、そのまま単騎となったキャスターに向けて地盤を踏み砕くような荒々しきで駆けていく。

キャスターは逃げるように位置を変えた。光の膜が私達だけを包むように集束し、そしてまた降り注いでいた雨が加速を始めた。

しかし伝説の英馬の馬体を包む灼熱の力場は、弾丸の如き雨粒をあつという間に気化させ、私達騎乗者の身を完全に護りきっている。

そのまま英馬の疾走は、キャスターいる位置まで一気に朱の線を描いた。

苦肉の策なのだろうか、キャスターは先ほどバーサーカーに投擲されてひしゃげていた大型トラックを盾にするようにその後ろに回りこんだ。

それは、文字通り濁流にのまれながら藁しべに縋るかのような拙い抵抗だと、私の目には映った。

当然のように灼熱に燃える巨馬の四肢は、巨大な車体を飴細工のように融解させ、蹴散らしまった。まるで盾どころか衝立にもなっていない。

この猛馬と騎兵を遮ることなど、如何な豪勇にもかなわぬことのように思えた。

このときの私は無駄な抵抗を続ける敵を前に、頭をもたげた勝利への予感を持て余して酔っていたのかもしれない。

それが失態だった。

このときの私は、己を包んでいたあの光球の幕の存在を失念していたのだ。

融解する鉄片を朝露の如く蹴散らし、巨馬は再び怨敵に突撃の狙いを定めて嘶く。

しかしそのとき、私達の頭上に影が現れた。大きな影だ。何事かと思う前に衝撃が私の五感のことごとくを聾した。

「ぬうううッ!?!」

ライダーが戟を振りかぶり、咄嗟にそれを迎撃したが、衝撃は一度では終わらない。

二度、三度、……幾度と無くそれが降り注ぐ。雨ではない。降ってきたのは巨大な質量の鉄塊。

それは今踏み散らしたのと同規模のトラックの群だったのだ。

ライダーが衝撃から抜け出すように位置を変えたおかげで、ようやく息をつぐことが出来た。

しかし私の頭は混乱の極みに見舞われていた。なぜ? どうしてこんな現象が起るというのだろうか?

しかも今見れば、十数度にわたって落下してきた筈の車両の群はそこになく、あるのは融解して焼け爛れ、両断された一台分の車両の残骸だけだった。

やはりこれは幻覚か何かなのだろうか? しかし、それは間違いだ。

私の頬に紅い筋が滴っていたのがその証拠であった。私の遙か頭上で致命的な超重

量の磊落から私を守ったライダーは頭部から血の筋を引くほどの傷を負っているのだ。

「……ライダー、……治療を……」

「構うな。それよりもおとなしくしているろ」

私さえ懐にしなければトラックが降ろうが、鯨が降ろうがジャンボジェットが降ろうが、霊体化できるライダーにはダメージを与えることなどできない。

しかし私の盾になるためには実体化したままそれを遮る必要がでてくる。やはり私がある状況で闘いを仕掛けるべきではなかった。……それもライダーの自業自得ではあるのだが……。

そのとき、私はようやく己の周りに漂っている光の球立体図に気がついたのだ。私は咄嗟に指示を出した。

「……ライダー。この光を抜けて！」

「はいやつ！」

巨大な馬体が嘘のような初動をもって加速した。すると光球は私達を追うようなこととはせず、一旦立ち消えたあとで間髪を置かず主であるキヤスターの周りに出現してゆるゆると拡大と縮小を繰り返しながら停滞していた。

私は雨の向こうで微笑を湛えるキヤスターを凝視していた。あいも変わらず、訳のわからない宝具だが、取りあえずあの光の膜の内側にしか効果は現れないのは確かなよう

だ。

ゆえに光膜の外にあれば何が起ることもない。

「……………この位置で待機。あの光の中に入らないで」

今のうちに事の概要を整理してあの宝具の性質を見極めなければならない。

そも、あのキャスターの真名はなんなのだろうか？

……思い出せ。既に十分なほどにヒントは示されているのだ。

最初にあの宝具を起動する時、キャスターは何かを呟いた筈だ。あれが宝具機動のイグニッションなのだとなれば、あれが宝具の名だということになる。

宝具の大部分はその名を唱えることによって発動するものだと教えられた。ならば、あれがああ宝具の真名に違いない。

私は三次元的な肉体の守りをライダーに任せ、青のペーストを自分の額に塗りつけた。己の意識を内面的な意識下に向けて集中させるように切り替えたのだ。

こうしてあの時に感じた五感の感覚を蘇らせることができる。これも簡易的な自己暗示に近いものであり、れっきとした魔術である。

思い出せ。思い出せ。思い出せ……………私の意識は肉体の生死さえ忘却して記憶の再生に専心していく……………。

キャスターはあの時、たしかに「メタ・ウニウエルサリス」といつていたはずだ。ウ

ニウエルサリス。どこかで聞いたことがある。

意味はたしか「普遍」「万有」。そして「学科の総括」とも聞いたことがある。……そうだ。

確か事実上はその異名をもつて呼ばれた異端極まりない魔術師がいたはず。そう、カトリックの聖人であるとされながら、当時自然科学と未分割であつた魔術に積極的に携わり、そして多大なる学問を収めた、その名も「普遍博士（ドクトル・ウニウエルサリス）」。

その真名は、アルベール。——そう、「偉大なるアルベール」………。

「はあっ！」

突然の衝撃に私の意識は現実引き戻された。

舌を噛みそうになつたが、それはキャスターの攻撃によるものではなかつた。ライダーが、私の指示を無視して一転、キャスターへ進路を向けたのだ。

「……ラ、ライダーッ?!」

「いつまでも睨み合いなどしていられるかッ！」

なるほど、「待て」が苦手なわけだ。ライダーの性急さを計算に入れていなかった。つくづく手間のかかるサーヴァントだ。……などと言っている場合ではない。

「……だめッ、この光は」

「解つとるわ。この光に触れなければよいのだろうか？ ならば、こうするまでだ！」

光の境界面に迫ったライダーはそこで留まり、やおら虚空に戟を振るった。一面の雨が切り裂かれて四散した。

だが戟の白刃は届かない。届くのはこの男の殺意の具現。「覇刃」！

虚空を薙いだ戟の一撃と同じように、雨の一角を切り裂くこの殺意の波道が幾重もの流線形の軌道を雨のキャンバスにありありと描き出した。

それはいわば、超高速のギロチンの刃が水平に降り注いでくるようなものである。雨の描く幾重もの銀線が、その殺戮の軌道を暴きだしていたのだ。

刃がキャスターのゆったりとした衣装の裾を切り裂いた。ヒラヒラと舞うような動きでキャスターはギリギリでそれを躲して行く。

ライダーは騎馬を発進させた。球形を形作る光膜の周りを周回するように回りながら、連続で念意の刃「覇刃」を放っていく。

キャスターはつたない動きで四方から迫り来る覇刃の回避につとめている。

見るからに危うい動きだ。戦闘の心得がないのは一目瞭然。あのキャスターはやはり典型的な魔術師だ。これではいつまでも躲してはいられまい。

「どっつなっとな……ッ」

いらだつような驚愕混じりのその声に、私はハツとして我に帰った。もつと早く訝る

べきだった。

そのキャスターが、幾らサーヴァントだとは言え、ライダーの攻撃を未だかわし続けられているはずが無いではないか！

ライダーは確認でもするかのようには、光膜の真ん中にいるキャスターへ向けて再度覇刃を放つ。今度こそ私にもはつきりとその異常が見て取れた。

その進行具合は、まるでスローモーションだった。雨を裂いて奔る不可視の刃。光の境界面を過ぎててもその雨粒をも切り裂く鋭さは幾分も変わっていない。

そのまま進めば、キャスターの身体を豆腐のように裂いてすりぬけるだろう。ただ、その速度だけが劇的に変化しているのだ。

刃だけではない。落ちてくる雨粒までもがあの光の中に入った途端、まるで蝸牛のように減速してしまうのだ。先ほどよりも明らかに遅い。しかも降り注ぐ雨がその不可視の刃の軌道を鮮明に示してしまう。

あれなら誰でも迫り来る致命の刃を避けることが出来るだろう。あの光の向こうでのみ、明らかに時間の流れが違っている。

——時間？ そう、『時間』だ。何かが、つながったような気がした。そうだ、時間だ。あのキャスターの宝具は——ッ。

光球の周りを周回していたライダーがそのとき、いきなりその光の中に突っ込んだ。

「…………… ライ……………」

「ぬうううううッ！」

不本意ながら、ライダーが何をしようとしているのか、私には咄嗟に理解できずじまつた。

進退窮まったとなれば、最後は自分の「武」に総てをかけて突貫する。この男の常套手段なのだ。勝算云々の計算はまるで頭の中にならないらしい。

光の中に入っても、私達の体感速度が遅くなるということとはなかった。ただ、雨や空気の感触が以前とは違うようだった。

ただの水滴に不可解な重さを感じる。まるで強風の中にいるような空気の抵抗を感じた。

やはり、この光の中では周囲の環境と私達の時間の流れとの間に明らかな齟齬が発生しているようであった。

兎角——この程度の抵抗はライダーの前には何の痛痒にもならない。いきなり方向転換した私達へ、キャスターは呆気にとられたような、そして哀れむような、なんともいえない視線を向けてくる。

どうやら、このライダーの選択はキャスターにとっては想像し得ないほどの「愚策」と映ったらしい。



案の定、それを見たライダーの憤怒は臨界に達していたようだ。別に私の真上にあるライダーの顔をわざわざ見たわけではない。頭上から聞きたくもない歯軋りの地鳴りが聞こえてきただけのことだ。

不意に周囲の空気が軽くなつた。私はすばやく視線を巡らせて私達を包み込んでいく光の膜の様子に注視した。案の定、その光の境界面に映し出されていた点光がゆつくりと位置を変えている。

四季によつて様相を変える、天球図に瞬く星々のように、だ。

間違いない。あれは占星術を応用して操作されているのだ。占星術。自動人形。天候の操作。天文遁甲……。やはりキャスターの真名は偉大なるあの男に違いない。

光は一変、私達の周囲だけを包み込んだ。光はゆらゆらとぼやけて動き、かわすことが出来ない。

だがすでにキャスターは目の前だ。この距離なら届く！しかし、その期待を裏切るように、それまで一心に前だけを見てキャスターに狙いを定めていたライダーが、ここで振り返つて防御の姿勢をとつた。攻撃は、キャスターの迎撃は後ろから来たのだ。私にでも感じられる圧倒的な殺気を纏つた不可視の攻撃が、背後から襲ってくる。

そのときのライダーの思いは、そして驚愕は私と同じだったことだろう。馬鹿な、これではまるで……。

想うまもなく、追撃は四方から襲ってきた。巨馬と巨漢の身体から熱い飛沫が舞い上がる。ライダーは仕方がなく飛んでくる攻撃と同じ攻撃をぶつけて相殺しなければならなかった。

そう、ライダーは己が秘中の秘とする「覇刃」による防衛網によって足止めを喰らっていたのだ。これにはライダーもたまらず、己の憤怒を棚上げして困惑の言葉を吐いた。

「なんだこれは!?! どうなつとる!?!」

「……だから、それを調べてからって思ってたのに……」

私も私で臍を噛まざるを得なかった。予感したとおりの、そして最悪の展開だ。

ライダーがキャスターよりも弱いわけではない。どうしようもなく相性が悪いのだ。ライダーのように真正面からの力押しを得手とするサーヴァントにとって、あのキャスターのような得体の知れない特異な能力の持ち主は鬼門なのだ。如何に強大な攻撃力も当たらないのでは意味がない。

「フン! 過ぎたことをいつまでものたまうな。問題はこれからどうするかだ!」

「……確かにそうなんだけど……」

お前が言うなど、ぜひとも一言いっておきたいところだが、確かに今はそんな暇がない。

何より最大の不利は敵のマスターが姿をあらわしていないということだ。対して、こちらはどうしようもなく敵前に「最大の弱点」を晒してしまっている。やはり、この時点で攻め手に打って出るべきではなかった。

……後悔は意味を成さない。何とかしてキャスター打開の糸口を見つけなければならぬ。真名の当たりはついた。キャスター自身の弱点は見えているのだ。後はどうやってそれを突くか、そして、この宝具をどうやって攻略するか。その策が重要なのだ。少しでいい。考える時間が欲しかった。

「……なら、まずは退いて」

「馬鹿をいうな。それではまるで負け戦ではないか！」

「……本当に負けたいの？」

「クソツ！」

私の言葉に奥歯を軋らせて、ライダーは進路を一転して後退した。そして光球の効果範囲内から抜け出し、廃工場の敷地外に向けて一路、滑走するかのように加速した。

この場合、敗走は何も恥じることはない。こちらの戦力も知られたことだろうが、たいして隠すこともないライダーの戦法は知られても致命の要因にはならない。

内情を知られて困るのは向こうのほうだろう。謎であることがあのキャスターのような手合いの強みの一つなのだ。ここでの仕切り直しはこちらの有利に働く。

しかし、風を置き去りにするかのような紅の騎影の眼前に、光の膜が出現した。しまったと思った瞬間。私達はまるでガラスに閉じ込められたかのようにその場に固定されてしまった。

身動き一つ。目蓋を動かすことさえ出来ない。無論、呼吸もである。

『これはなんだ？ 一体どうなつとる？』

言葉ではなく、パスを通じての念意が私の脳裏に直接届いてくる。どうやらライダーの同じ状況に陥っているようだ。

単に魔力を使った力技で空間を固定しているなら、ライダーは簡単にその拘束を破つてしまおうだろう。

対魔力こそ微弱ではあるが、ライダーの膂力を完全に拘束することは並大抵の魔術では難しい。そのライダーが微動だに出来ないと言うことは、つまり、これは空間に作用する魔術ではないということだ。

呼吸が止まり、思考が滞ってきた。兎角、このままではいくら魔術師とはいえ確実に死ぬ。いまはここから抜け出すことを考えなければ。

『うおのれえええ!!』

念意であることを忘れそうなほどに騒々しいライダーの気合が私の頭の中に轟いた。

おそらく拘束されるのが大嫌いなことは想像に難くないライダーは、それでもなお全

身の強力を持つてこの固定された空間に挑んでいるようであった。

おそらく、押しても開かない扉があった場合、押してだめならもつと押せ。という感じの思考で生きているんだだろうなあ、こいつは。

『……無駄なことはやめてライダー』

私は念話でライダーに呼びかけた。これ程近い距離なら髪などの触媒を使わずともパスを使って即席で会話することくらいは可能だ。

『無駄とはなんだ。このままでは終わりだぞ？ せつかくの二度目の命。こんなことで死ぬのはごめんだ！ ぬううううっ！』

一度死んでるくせに生き汚い奴だ。英霊というのはもつと潔いものなのでは……まあ、この際、その生き汚さも頼もしいと言つていい。

まだまだ気力はなえていないことの証だ。

『……霊体化しなさい。ライダー。それでこの光球を抜けられたら、一気にキャスターを討つて』

『なぬ？ ……ふむ、よし』

見なくともライダーとその騎馬の重厚な気配が消えたのは感じられた。そのまま凄まじい光陵の点となったライダーの動きはまるで見えるように知覚できた。

そのままキャスターのほうへ向けて移動していく。

どうやら、このキャスターの宝具の法則が見えてきたようだ。

ライダーの霊体化から間を置かず、私は解けた空間に解放されていた。

止まっていた吸気が再開され、吐き出そうとした息に詰って、えづき、雨だまりの砂利に伏せてしばらくあえいでいた。

肺や喉が焼けるようだった。僅かな間だと思っていたが、現界以上に呼吸を止められていたらしい。

魔女とはいっても、私の体は常人に毛の生えたようなものなのでこの程度の負荷ですぐにへばってしまう。

魔術の教練のことを思い出す。これもいつものことだった。私はひどい劣等生で、よく師に才が無いと嘆かれたものだった。

それでも、一度も魔術をやめようと思つたことは無いのだ。それは、どうしてなのだろう。どうして私はこんなところにいるのだろうか……。

そのとき、私の腕や足から紅い痛みが迸つた。雨が、また加速していたのだ。しかも先ほどよりも明らかに威力が強い。私の全身を包んでいた黒のリボン、私の魔力によって余れた防護膜であるはずのそれらが唯の雨粒にいとも簡単に貫かれていくのだ。

逃げようが無かった。雨は次から次へと降り注ぐ。それも当然だ。緩急をつけて降ってくる雨などあるはずも無い。全身に打ち付けてくる雨から急所を庇いながら私

は身動きも出来なかった。

動くことも出来ないのだ。しかもあろう事か、今やこの雨の原因であろう光球はこの廃工場の敷地全体を包みこめるほどの範囲を覆っているのだ。逃げ場など絶無だ。

打つ手が無かった。しかし思考だけが不可解な引つ掛かりを覚えていた。何かがおかしかった。そう感じたのだ。そんなことをしたらこの施設そのものがあぶない。私の防護幕をこれほど簡単に貫くのだ。並みの家屋などあつという間に蜂の巣であろう。視線だけを動かして周囲の建物に視線を走らせる。やはり、それらにはこの雨の影響は見られない。

だがそこまでだ。何か、攻略の糸口が見えたような気がしたのだが、これ以上は私の体のほうが耐えられない。雨に身体を削られるなんて、まるで自分が砂の像にでもなったかのようだ。

すると超重量の枷の如き重圧が止んだ。何か雨が遮ったのだ。

無論、それはライダーだった。ライダーはそのまま私を脇に抱えて愛馬を走らせた。しかし何処へいっても雨は打ちつけてくる。逃げようとすればまた空間を固定されるだろう。ライダーは動けても残された私はやられてしまう。堂々巡りだ。

ライダーもそれを承知しているのだろう。イラただしげに声を荒げた。

「くそっ、足手まといな」

「……だから誰のせいだ……」

我ながら今にも息の潰えそうな細い声だった。キャスターの能力がこれほど広範囲に及ぶというのが解かっていたのなら、誰もむぎむぎ出てきたりはしないのだ。だから一度出なおしてライダー単体で向かわせるつもりだったというのに……。

だが今はそんな場合ではなかった。雨は依然として勢いを増している。一刻の猶予も無い。

「……ライダーッ、あの中に……」

私は弾丸のような雨粒に苦心しながらも、敷地内で一番大きな建物を指して指示を出した。

「何を言うかつ！ この雨の中では屋根など物の役に立たんぞ。ええい、もう黙っておれ！」

進退窮まったライダーはそれどころではないといった様子で耳を貸そうともしなかったが、それでも私はライダーの首を捕まえて、とか太い木の幹のような首に掴まって耳元で声を上げた。

「……勝ちたかつたら言うことを聞いて！ ……解かったことがあるの！」

「チツ、……フン。ほかに手もなし」

ぼやきながらも心底手詰まりだったのだろう。それともこの雨のせいで多少は頭が



冷えたのか、あるいはその逆でやけくそだったのかも知れないが、とにかくライダーは私の指示通りに敷地内の一番大きな建物に向けて進路をとった。

真紅の騎影はその身を砲弾と成し、嚴重に封鎖されたシャッターを粉碎して家屋内に飛び込んだ。

しかし、そこで私は予期せぬ奇妙な感覚にとらわれて呆然とした。

そこには廃工場などなかったのだ。そこは確かに封鎖された廃工場だったはずなのだ。それは間違いない。私は一瞬また己が怪異なる現象に見舞われ、どこか別の場所に瞬間移動でもしたのかと訝ることになった。

私達が飛び込んだ建物の内部は外とはまるきり違っていたのだ。その内部が事のほか清潔に保たれていたことはもとより、まさしく工場以外の何物でもないものと見受けられたはずの建物の内装はしかし、とても工場といえるものではなかったのだ。

そこにあつたのは礼拝堂であつた。それも、そこいらの教会にあるような物ではなく、かなりの広さのある荘厳な拵えのものだった。

「なんだあ、こりゃあ?」

さすがにライダーもその異質さには違和感を覚えたようであつた。つまりは納屋の中に宮殿の一室が広がっているようなものだ。その異質さは誰の目にも明らかであつた。

「……もしかしたら、ここはただの廃工場じゃないのかもしれない。知らずに拙いところに入り込んだのかも……」

この廃工場跡と見受けられるこの場所は、その実、秘匿された教会だったのだ。問題なのはなぜこんなところに教会があつたのかということではなく、どうしてそんなものを偽装する必要があつたのかということだ。

それは、——表向きの信者ではなく裏の信者。つまり魔と、教会の敵と戦うための教徒が利用する場所だったことを意味する。つまり、我々魔女や魔術師を狩ることを生業とする狂信者どもの巢なのだ。

ようやく私の中のキャスターへの懷疑が確信へと変化しようとしていた。私の推察が正しければ、あの男は魔術師が呼び出すにはふさわしくない性質の英霊だ。いや、その実、その存在は英霊とは一線を画すものである。

もしかしたら、ヤツは教会が用意したサーヴァントなのではないか？

私の疑念はそこで一気に集束して結実した。それならばあの男がキャスターのクラスとして呼ばれたことにも得心がいく。なぜなら、あの男は生前、聖人であるとされながら同時に魔術師としての伝説をも持ち合わせていた破格の偉人なのだから。

しかし、なればこそ拙いことになったかもしれない。聖堂教会はこの儀式を監督する立場にあるのだ。その教会と敵対してよいものだろうか？

いや、そもそも教会がサーヴァントを呼ぶことがルール違反なのだ。その点に関して責められるいわれはない。……だが相手はそういう理屈の通じる手合いでないこともまた事実……。

「しかし、この中が大丈夫だとどうして解かった？」

いまだに無事な天井を見上げるライダーの訝しげな声が聞こえて、私は我に帰った。

そうだ、今は後のことを考えている場合ではない。ようやくキャスターの宝具の持つ法則が見えてきたのだ。今はそれを攻略するために尽力することこそ至上命題だ。

「……ライダー、この中じゃ騎馬の機動力は殺される。それに、私のほうが二人分の維持に耐えられないかもしれない」

「む？　そうか。よし、よくやってくれた。戻ってくれ」

私ともども馬上から降り立ったライダーは月牙の光で巨馬を包み、その身を時空の彼方へ送り届けた。

実際、手傷よりも疲労のほうがしんどかったのは本当だ。ライダーがああ愛馬を呼ぶと、私が供給する魔力は一時的に倍化してしまうのだ。本来ひとりしか呼べない英霊を二人呼んでいるようなものだからそれも当然だろう。

強力な反面、やはり使いどころが難しい宝具である。……だから許可もなくむやみに使わないで欲しいのだが……。

「……敵は雨を加速して私達を攻撃して来た。でも、ここなら安全。この建物も雨と一緒に加速しているから、屋根が抜けるようなことは無い」

音と気配で建物の外の様子を鑑みながら、私は言った。

「それは、どういう……」

解からないということとを全身で表すように慥然と立つ巨漢を見上げ、私は言った。

「……あの宝具の持つルールがわかってきたってこと」

「ほう？」

「……言うことを聞く気になった？ ライダー」

「言つとる場合か。さっさと教えろ」

ライダーは急かすように言ったが、私はゆっくりとした語調を保った。

「……ライダー。少なくとも私はここで負けるつもりは無いの。そのためには私の指示に従ってもらわなくちゃならない。今も、これからも」

暫し澁面を作っていたライダーは威圧するように無言で私を見下ろしてきたが、私はそれを真つ直ぐに見つめ返していた。

ここで引き下がったら、たとえこのライダー相手ではなくとも、英霊を統べるマスターには値しないだろう。たとえ何をされても、ライダーには私が主であると認めさせなければならぬ。

今夜の苦戦はそもそもそれが原因なのだ。これを改善しない限り、今日を生き延びても、次は無い。だから、私はこの稀代の純粹なる闘争の具現たる巨漢を見据えていた。それは命を掛けるに値することだ。それが英霊を統べるという魔術の理なのだ。

「フン！ ええい、仕方がない！——いいだろう、今日の所は言うことを聞いてやる。さあ、どうすればいいのだ!？」

すると、以外にも簡単に折れたので私は拍子抜けしてしまった。

「……ほんとに聞くの?」

確認してみる。

「くどいぞ。俺とて、ここで負けるつもりなどないのだ!」

「……わかった」

「フンッ! では、どうすればいい?」

「……よく聞いて」

私は敵の能力の解説とこれから取るべき戦術を簡潔に説いた。

指示が終わると、待っていたかのように建物の正面に動きがあった。ライダーが開けた大穴から入ってきたのはまたもや自動人形<sup>オートマタ</sup>だった。しかし、今度は一体だけだ。

どうやら七体分の無事なパーツだけを集めて一体分の身体をでっち上げたらしい。ごちゃごちゃと歪な造詣の手足を使って歩きにくそうにこちらに向かってくる。

「……ライダー、指示通りに」

私はライダーの前に出て、オートマタに向き直った。

「いいだろう、この命あずけよう。——フン、小賢しいだけの娘かとおもったが、なかなか骨があるではないか」

「……余計なことは言わなくていい」

オートマタは据え付けられている座席を蹴散らして前進してくる。キャスターの姿は無い。つまり、今あの光球の宝具は使われていないということだ。

これが、あの宝具の特性の第一だ。あの宝珠は常にマニュアル操作しなければならぬのだという推察は、これで証明された。あの宝具を使用している間、キャスターはそれ以外の行動がほとんど制限されてしまうのだろう。おそらくすさまじく精密な操作を要求される魔導器に違いない。

そして宝具を使用していないというなら、今キャスターは別の作業を行なっているということだ。

どこから来る？ キャスターはからならず自身で詰めを打ちにこの場に現れるはずだ。

その時、オートマタの前進と同時に私達のちようど真上の天井が破砕され、そこから雨と共に後光を纏う天の御使いの如き貴姿が現れた。キャスターは上から来たのだ。

光が溢れ、あの宝具を使用しているのがすぐに分かった。おそらく、屋根の一部の時間を超加速させて脆くしたのだろう。あの宝具は、万象の時間を高次的な視点から操作しているのだ。

要するにタイム・コントローラーのようなものだと言える。いざ対峙してみれば、これほど厄介な代物はないと思いが知らされる。

あの宝具にかかつては、あらゆる凡百な物質も無敵の盾となり、いかに強固な物質も無常の風化を免れない。時間に侵食されない物質は無く。時間の停滞にとらわれた物質はいかなる変化も寄せ付けないからだ。

ライダーは天の御使いの如きその貴影に覇刃を連射した。しかしそれらはキャスターの身体を包む光の膜に阻まれ、空を切った念意の刃だけがむなしくも豪快な破砕音とともに天井を切り裂くばかりだ。

それを微笑と共に見送ったキャスターは計ったように私とライダーの間に舞い降りた。

私達の分断にかかったのだ。

今度は光球が拡大してライダーを絡めとろうとする。さしもの猛将もこれには後退を余儀なくされるが、それでもライダーは無謀とも見て取れる覇刃の連射を繰り返す。

私は私で、一体のオートマタ相手に防戦必死だった。六本の腕にそれぞれ別の武器を

持ったオートマタはそれらを出鱈目に振り回して逃げる私を追いまわす。

キヤスターの戦略はおそらくこうだろう。天井から私達の間に降り立って私達を分断し、自分があの宝具でライダーを押さえ込んでいる間にオートマタがマスターである私を討つ。最も確実な戦法だろう。——そしてそれゆえに読みやすい。

一見、絡め手で闘いを優位に進めているように見えて、キヤスターがライダーを倒すことは難しい。あの宝具は間接的にしか敵に干渉出来ないからだ。

私が推察したあの宝具の特性その二は、あの光膜内の時間操作の効力が、なぜか人間——及びそれに準ずるものだけに及ばないということである。おかげで直接時間を操られて胎児にまで戻されたり、死ぬまで時間を加速されたりはしないが、周囲の時間が加速・停止・逆行する間、自分だけがそこから取り残されることになる。

すると、それらとの齟齬によってダメージを受けてしまうことになるのだ。もちろん、いくら周囲の物質の時間を操っても、霊体化したサーヴァントには意味の無いことである。

つまり、敵の時間に直接作用できないことが強みであり同時に弱みでもあるということになる。無論、キヤスターはこのことを誰よりも熟知しているだろう。狙うとしたら、やはり弱点である脆弱なマスター、つまりは私だろう。ならば——私達はそれを逆を利用してやればいいのか。



私は機を求めて壁や天井を縦横無尽に飛び回った。こういう室内でこそ猫のはしっこさというのは有用なのだ。防御に徹していればこのオートマタの攻撃をかわし続けることはそれほど難しくはない。

だが私はあえて大仰に飛び跳ねて逃げ回った。まるで焦燥と恐怖に駆られているかのように。

場は暫し膠着した。埒が明かないことに憤慨したと見えたライダーは、霊体化して光球の中に侵入した。実はこれも私の指示したことだ。私はオートマタと距離をおきながらそれをつぶさに霊視して観察していた。今の私の視力は二重の意味で猫のそれに順ずるのだ。

案の定、ライダーは光の幕に邪魔されることなく私のほうへ来ようとしたのだが、しかし同時に霊体化したキャスターによってその途上で何かに進行を阻まれ、まるで弾かれるように押し戻されたのだ。

霊体同士で押し合いをした？——否。というよりは、何らかの磁場によって霊体のライダーが一方的に弾かれた、という感じだった。

おそらくはキャスターの持つスキルか何かだろう。もとより予見していたことだが、「霊体に干渉できない宝具」を持つキャスターが、敵の霊体からの干渉、さらには呪いや呪術の類の脅威に対して何の対策も持っていないはずがない。

「聖言か、それとも聖人としての高位からの加護の類であろうか？ とにかくキャスターには霊体のままにもかかわらず、外部からの干渉を阻害する何らかの防護があるのは間違いない。それも霊体化した他のサーヴァントを完全に押し留め、拘束してしまうほどの強力な代物だ。」

ライダーが再び実体化すると、キャスターもまた実体化し、先ほどと同じように対峙した。嘲るような声をキャスターは静かに発した。

「——興味深い状況ですねえ。貴方がこんなところで手詰まりとは。三国最強の雄よ、あなたは確かに最強の武人だ。しかしけして勝利者にはなれない。このような現に出てきてもまた苦い思いをするだけなのではないですか？」

「——フン」

敵の激昂を煽るための計算ずくの揶揄であろう事は想像に難くない。これまでのキャスターの印象からはらしくない挑発だといえた。つまり、彼もまた極限の闘争に追い詰められているのだ。疲弊しているのはこちらだけではない。

ライダーの様な敵には何よりも効果的なのはそれに、しかしライダーは反応しなかった。

珍しく表情を欠いたライダーの対応にキャスターはその意を判じかねたことである。

ライダーの不可解なまでの専心が、キャスターの意識に僅かながらの空白をもたらしたのかもしれない。

そのときであった。

不意に、誰もが予想さえしなかった彼方から、乾いたような一つの銃声が聞こえたのだ。

音は屋外から、しかしそう遠くはない場所から聞こえてきたようだった。これは私にとつても慮外のことだ。当然それに気をとられはしたのだが、それでもキャスターから意識を切らすことは無かった。キャスターは一瞬、動きを止め彼方に視線を泳がせた。

その後姿に、私は最良の「機」を見て取った。

今しかない！

「ライダーッ！」

「……おおおおおおおッ!!」

私の声に寸分の暇さえなく反応して、ライダーは高く跳躍した。そしてキャスターの頭上から広範囲へ向けての覇刃の乱れ打ちを放ったのだ。

キャスターは咄嗟に自分の眼前の空間を固定して覇刃を防いだ。先ほどの一瞬の停滞が、それ以上光膜を広げる暇を奪ったのだ。今、あの宝具の効果はキャスターの周囲の僅かな領域にしか影響しない。

無論、覇刃はキャスターには届かなかつた。——もとより、狙いはキャスター自身ではない。なぜなら、その念意の刃が切り裂いたのは、私の眼前に、そう、キャスターの背後、すぐ近くに誘導され、立ち塞がっていた自動人形だったのだから。

背後を振り仰いだキャスターの双眸が、己の失策を悟ってやにわに歪む。それからは一連の事がまるで時間がコマ送りになつたかのように凝縮されて展開した。

同時であつた。ライダーの着地。キャスターが私の策を見抜いた事。私が破砕されたオートマタを踏み台にしてキャスターへ突進した事。すべてが同時だつた。

挟撃。それが、私がライダーに提示した策だ。

安易な策だが、こういう策は簡潔なほうがやりやすい。それにライダーにあまり難解な指示を出してもそれは無駄に終わってしまうかもしれないし、時間もなかつた。

キャスターの持つ宝具の法則の三つ目。それが光膜による時間操作の範囲指定だ。あれは物を指定して時間を操作してはいるのではなく、自分で指定した範囲、つまりあの光膜の内側の空間しか操作することができないということなのだ。

つまりこうして挟み撃ちを仕掛けられたならば、私とライダーの両方に対処するには、その中間にいる自分ごと範囲指定をしなくてはならない。

しかしキャスターにはそれが出来ない。空間の加速も停止も、その効果範囲に自分を

含んでしまったのでは宝具そのものの操作に支障をきたしてしまうのだ。

そして、私の意は真つ直ぐにキャスターの首へ注がれている。

私は、熱病のような高揚と共に内心でほくそえんでいた。

これが拙いのだろう、キャスター？ これこそがあなたの最大の弱点だ。

体術を全く心得ない魔術師であり、そしてオートマタに戦闘の総てを任せるというエンチャンターとしての魔術師のスタイルが、あなた自身の物理的脅威に対する脆弱さを物語っている。

つまり、この絶対的な宝具の防御を突破したなら、私の魔爪でもあなたを殺傷しうるということだ。

私は加速する。ライダーもまたキャスターへ向けて迫る。もう逃れることは出来ない。さあ、どうする？ キャスター。

しかし、そこでキャスターがとった行動は、私の予想を上回っていた。

キャスターはこの状態で時間を加速するのではなく、停止するのでもなく、――巻き戻したのだ。

光球は最大限元にまで縮小し、キャスター自身の足元だけを包みこんでいた。そこには、先ほど破壊された天井の破片があったのだ。

おそらく最初のライダーの攻撃で天井から落ちてきたものだろう。時間逆行によつ

て上方に昇っていくそれに乗って、キャスターはこの場を離脱しようとしているのだ。その精神力に、私は感服せざるを得ない。

この絶望的状况下を一手で覆ってしまった。敵の策に陥ったことを悟りながら、それでもなお敵の思考を上回る手を弄せる。頭の回転以上に、その胆力こそが特筆すべきものであった。

わずかに遅い。わずかに遠い。キャスターは既に私の手が届かないところにいた。だが、私もまた怯まなかつた。この程度のことと精神的後退をするわけにはいかない。今、重要ななのは、策を破られてしまったことではない。その事実には、精神的に屈してしまわないことなのだ！

この挟撃に二度目はない！　ここが局面なのだ。ここで決めるしか、ない！  
「ライダーッ！」

私は再び叫んでいた。ライダーは宙空を昇っていくキャスターへ向けて再び覇刃を見舞う。

しかしキャスターを載せた光球がそれを見越していたかのように肥大化し、下方からのそれを逆行させてしまった。先程の光景の再現だ。幾度となく証明されている。

ライダーの放つ念意の刃は、それ自体がライダー本人から乖離した物理的破壊現象となつてしまったために、キャスターの宝具『高次式普遍天移象球儀（メタ・ウニエリ

サリス)』の時間操作の影響を受けざるをえないのだ。

キャスターは目を細めた。それが唯の悪あがきであると嘲るかのよう。

だが次の瞬間、その目は驚愕と懐疑に見開かれたことであろう。眼下に見下ろしていたライダーの顔に満ちた、勝利の確信を見たが故に。

そのとき、私はキャスターの上にいた。

この高い礼拝堂の天井すれすれまで、私は飛び上がっていたのだ。

無論、キャスターの観察眼の前では、私の跳躍力ではそんなことが出来ないことはとつくに看破されていたことだろう。

だからこそ、この隙が生まれたのだ。あの一瞬で私が上昇を続けるキャスターの頭上を取ることは理論上不可能だった。

だが、それはあくまで私の「独力」では無理だということに他ならない。ならば、誰かの助けを借りればいいだけのことだ。

驚愕に見開かれた目が背後の私に振り返り、呆けたような視線が私に注がれた。そのときすでに私の魔爪はキャスターの白い首を挟んでいた。

私は、ライダーがキャスターに届かぬことを承知で放った「覇刃」の刃を足場にしてここまで駆け上がったのだ。

血潮を撒き散らして落下するキャスターは、地に着く前に霊体化してその実体をかき

消した。

私も同様に自由を失って落下したが、下にいたライダーが受け止めてくれた。

「——フンツ、無茶をしたものだな」

「……咄嗟に合わせてくれたのは、よかったけど。けど……」

キャスターがああいう逃げ方をするのは、正直予想していなかった。

咄嗟にライダーが私の意を読んでくれなかったら、今頃キャスターを逃していたかもしれない。その点については何の文句も無い。よくやってくれたと喝采を送りたいくらいだ。だが、しかし……

「……もうちよつと加減してくれてもよかったんじゃない？ 骨まではいってないけど、これじゃ攻撃されたのと変わらない……」

私の足からは赤い血が糸を引くほどに滴っていた。

ライダーの覇刃が、私の足を押し上げてくれたおかげで私はキャスターを捉えることが出来たのだが、その足場にした刃の切れ味のせいで私の足は見るも無残に切り裂かれてしまっていたのだ。これでは歩くこともままならない。

「馬鹿を言うな。加減せなんだから、その細足は今頃身体に繋がつとらんぞ」

あれでも加減していたらしい。溜息をついて、降ろしてもらい私は自分の足の止血を始めた。



「……キャスターは」

「霊体化しようだが、首は我らサーヴァントにとつても急所だ。あの様子では幾らも持つまい。フフン。我が方の勝利だ！」

「……………」

勝利、か。なんだか実感が湧かないが、取り敢えずは勝利の凱歌よりは撤収のほうが先決だ。

私は簡易的な足の治療を終えると、ライダーを促して外に出た。見れば雨は止み、東の空はすでに白み始めていた。

残りの家屋を探索すると、黒こげになったひとりの人間の亡骸を見つけた。こいつがキャスターのマスターだろうか？ 幾重にも重ねられた防護結界の中で戦う私たちの動向をうかがっていたらしい。

おそらくは今の勝負を分けた一瞬の転機となつ、たあのとときの銃声によつて殺されたのだろう。

しかし、この死にかたは異様であつた。骨まで完全に焼き尽くされてしまっているのが死因も何も分からない。むしろ、そうするために念入りに焼き尽くしたというほうがふさわしいだろう。

床や周囲のものには焼けた跡がないので、何らかの証拠隠滅のための魔術を使用した

のだと思われる。おそらく霊体や魂までもが滅却されているはずだ。つまりはこの死骸からはどんな魔術を使っても情報も得ることができないということだ。

しかし、誰がこいつを仕留めたのだろうか？　こんな手の込んだことまでして……。

まさしく漁夫の利を拾われた訳だが、途中から介入するものがいれば、私達はともかくキャスターが気づかないはずはないのだ。そのキャスターが己のマスターを殺されるまで気がつかなかったというのは、どうにも不可解な話だ。

いつたい、誰が、どうやって——？

結局予期せぬ激闘から生還した私は、そんなことを思索しながら、上機嫌のライダーに連れられ街の反対側にある隠れ家に帰路を取った。

しかし予期せぬ戦闘だったために疲労も凄まじいものがある。明日……ではなく、今日の学校は休むしか無いかもしれない。揺れる巨馬の背でまどろみながら、私は最後にそんなことを考えていた。

## 四章——1

(水曜日・朝)

薄暗い地下室の一角にある丸扉の輪郭に、淡い金の円環が現れているのを見つけて、私は未だ諸所に気だるさを残す身体を、重く、とろりとした香油で満たされたバスタブから引き上げた。

日の光がここまで差し込んできているのだ。光量からして、とうに夜は明けていたらしい。

丸一日をまどろんで費やした治療魔術は功を奏したようで、各所に出来ていた各々の傷は跡形も無く完治し、深かった足の傷も多少の痛みを残してはいるが、歩けないというほどではない。

このように時間をかけずとも、瞬く間に傷を塞ぐ術というものもないことはないのだが、やはりこうやって時間と手間をかけて治癒したほうが傷口もしっかりと癒着するし、また綺麗に治るのだ。

あれから丸一日、私は郊外の廃墟を無断流用した隠れ家——その地下室を改装して造ったこの簡易工房の一室で、全身を特性のアロマキャンドルの芳香と温む香油に浸し

ながらじつくりと思考を練っていた。

初めて明確な勝利を収めたことで、心理的にも余裕というものができていたのだろう。思考は実にクリアだった。一番の焦点となるのは、やはり現在の趨勢についてである。

一昨夜の戦場でキャスターとバーサーカーが脱落したとするならば、残るサーヴァントは私のライダー、緒戦に対峙したランサー、そしてまだ見ぬセイバー、アーチャー、そしてアサシンである。

一気に二人のサーヴァントを倒すことが出来たのは、思っても見なかった僥倖だといつていい。

しかし、だからといつていつまでも浮かれているわけには行かない。残りの敵が数を減らすことは同時に総てのマスターとサーヴァントが動き出すということを意味する。

今まで穴熊を決め込んでいた連中が野に放たれるのだ。闘いはここから一気に激しさを増していくだろう。

いつまでも呆けている場合ではない。

全身の香油を洗い流した私は、そのまま軽く身体を拭いただけですぐにバスローブを纏った。上方から漏れこんできた陽光には背を向けて一路、更に深い地下へと歩を進めた。

気分が晴れやかなだけに朝日のひとつも浴びたいところだったが、ここは表向きには空き家ということになっている。下手に出入りして人目に付くようなことは厳禁だ。

私は手にした燭台の織り成す影を燦らしながら、地下の深奥の一室に向かった。サモンサーヴァント英霊召喚にも使った一番大きな広間で、基本的な居住に適するように改装を重ねてきた場所だ。

なんとなれば、二ヶ月くらいはここで籠城だつて出来るだけの備えをしてある。苦勞した甲斐もあるというものだ。

思えば、唯の物資貯蔵用の地下室を、半年もかけて拡張し、掘り進めて出来上がった苦心の隠し工房なのだ。

儀式の終了と共に破棄してしまうのは惜しいくらいだ。ゆくゆくは正式に買い取つて地上の建物諸共に自分だけの工房として使用するのも悪くないかも知れない。

しかし、扉を開けると、そんなちよつとした誇らしげな気分を吹き飛ばすような酒の臭いに出迎えられた。

「おお、主よ。なんだなんだ、朝から頬を桃色に染めてとはらしくもないではないか。いやなんとも艶めかしい。ふむ？　そうか風呂上りだったな。なんにしても酒の肴としては上々よ。

どうだ足下（そっか）も湯上りに一杯。さき、こちらへ来やれい、膝の上でもかまわ

んぞ、ほれ」

「……、……」

無論のこと、容疑者は疑うまでもなくひとりだ。そこでは案の定頬に不健康そうな朱を兆した巨漢が酒瓶片手に朝つぱらから……なんと言おうものか「出来上がって」いた。「おいおい、なんとという顔をしとるんだ。足下はあれよな、なかなかどうして愛らしい顔をしとるくせに表情というものが硬い。いかんぞ。それではいかん。

いいか、女というのはな、幼げ残す少女から熟れた婦人に至るまで、時にうつそりと、時に朗らかに、ころころとはにかんで笑顔を転がして見せるのが一番なのだぞ。それこそ華は華として咲き誇るといふものだ。

若いゆえに硬いのは仕方がないことかも知れぬが、女というのは硬くてもよいことなどひとつもないのだからな。うむ、硬くて都合がいいのは男のほうだな？　又ウハハハッ！」

言葉もない。

なんで私は気持ちも新たに再起しようかと決意した朝に、己の従僕であるサーヴァントにセクハラされなくてはならないのだろうか？　というか普通に余計なお世話だ。

私は吐きたくも無い溜息を奮発して、眉間を押さえ込んだ。確かに一昨夜の勝利はこの馬鹿の手柄も考慮しないわけには行かないのだが、しかしこれをこのまま放免しては

飯にもマスターとしての沽券に関わるし、それ以上にいろいろと問題だろう。

このままでは被害が私だけで済むとは思われない。近隣住民に取り返し不着か  
不幸が襲い掛かる前に、私が何とかしなければ……。

「……朝っぱらから何をしてるの、ライダー」

言葉を無くして暫しの後、ようやく絞り出せたのがそんな文句であった。

「フン。何を何も、足下がずっと風呂に浸かっておるので、おれは手持ち無沙汰で仕方がなく、こうして無聊をなぐさめているのではないか。いや、風呂桶の中で死んだのかとおもったぞ」

つまり朝っぱらからではなく、昨日の朝からずっとこうしているらしい。見れば一番広い地下室の一角に小高く積み上げられた酒瓶の量は私が用意していたものを明らかに超える量と見受けられた。

どうやってそれを入手してきたのか訊くことも憚られる。

そしてこの男を従えている以上、この場所での籠城は不可能であったことがここに判明した。食料の備蓄の大半がすでにつきかけていたのである。私一人分の備えとはいえ、二か月分がもって一昼夜の酒のつまみとは……さすがに言葉もない。

「……いや、別にずっと遊んでろとはだれも……」

「何を言う、風呂に入る前にしっかと言ったではないか。フン。勝手にどこぞへ攻め

入るのはやめろ、問題だけは起すな、と繰り返してな」

つまり、「攻めるな」||「何もするな」ということと受け取つたらしい。そして何処からか大量の酒類を強奪するのはこの男にとって「問題」ではないようだ。

この男、本当に喧嘩以外は出来ないし、ヤル気もないらしい。私は朝から頭痛を起しそうだった。

後で何処からこれらの酒を持ってきたのかを聞きださなくてはならない。レッキとした盗難事件になつてしまつているだろうが、仕方が無いので密かに代金だけでも置いてくるしかない。

「……………攻めないにしても、やることぐらいあるでしょう。偵察なり、警護なり、諜報なり…………」

「まどろっこしい。攻め込んだほうが早かろう。フフン。さて、足下の傷も癒えたなら今から参じようか、次の狙いは何処だ？」

「…………行かない。今度こそ行き当たりばつたりは無し。ちゃんと作戦にしたがつて」

胡坐（あぐら）を掻いたまま酒瓶から手を放さぬ目下の巨漢を、私は備わる限りの威をもつて睨みつけた。

そして反駁を予想して身構えた。どうせまたごねはじめるに決まつている。このサーヴァントの相手をする場合、並大抵の氣力では話にならないのだ。言うことを聞か



せるのも一苦勞だ。

「ふうむ……」

「……忘れたとは言わせない。一昨日勝てたのは私のおかげだったってあなたも認めたでしょ。なら、これから先は私の指示、作戦にしたがってもらおうから」

「フン。よかろう」

「……え？」

ライダーが以外にもあつさりとした承したので、私は拍子抜けしてしまった。

「足下の指示に従おうではないか。ほかにはなにかあるか？」

今までは耳だけを私に向けていたのが、今度はいきなり私と面に向かって、

「どうだ？ 何かあるのか」

「……ない、けど」

酔いも全く冷めたかのような慄然とした顔を向けてきたのだ。先ほどから酔いどれていたのは腹ただしくもまだ予想のつくことではあったが、これこそ想定の外である。私は二の句も継げずは是と唱えることしか出来なかつた。

「いよし！——さて、フン。そこで我が栄えあるマスターよ」

ニヤリ、とばかりに極上の笑いを浮かべたその顔は凶兆を含んでいた。私はしまったと感づいた。交渉の席に、不用意に着いたのは私のほうだったのだ。

「足下こそ、忘れてはおらんだろうな」

「……なにを？」

「とぼけるでない。サーヴァントを討ち取った暁には、我が麗しの君に引き合わせるとの盟約だったではないか」

「……あー、」

そういえばそうであった。どうやらライダーは飲んだくれていながらも、そのことを確約させるために虎視眈々と私を待ち構えていたらしい。

その後の動乱に紛れて意に昇らなかつたのだが、初めてバーサーカーと対峙した夜にもコイツはこういう手腕を見せていた。

そういえば、馬鹿の中の馬鹿のクセに、時たまこういう奸智に長けるところを見せるから、昔の人もコイツの扱いに困っていたんだっけ。

それを失念していたのだ。これは私のほうの失策であった。

「……確かにそうだけど。会うのは受肉してからって言ったじゃない」

「いや、そこで考えたのだがな、いきなり会って求愛したのでは、向こうも驚かれることであろう。会うだけなら受肉していなくとも問題あるまい。」

そこでだ、今のうちに幾度か偶然を装って逢瀬を重ねておくのだ。そこではあえてこちらの心を見せずに関心の無い風を装ってな。そのあとで受肉の暁に、いよいよもつて

この心の内を示すのだ。

現世の言い回しで言えば「さぶらいず」というやつだ。いや、いつの世も女心というのはこういうのに弱いからなあ」

「……………ああ、うん、そう。いいんじゃ、ない」

私は夢見るような面持ちで虚空を仰ぐ馬鹿から目を逸らしつつ、そう適当な相槌を打った。他にどう言えばいいのであろうか。私は呆れるのを通り越して憐れにもなってきた。

「フフン。そうだろう、そうだろう！」

ライダーは上機嫌でまた新しい酒瓶を手にとつて、小枝でも折るかのように注ぎ口の部分をペキリ、と折り取つて中身を一息に飲み干した。

ライダーの機嫌は最高潮に差し掛かり、私はそれに反比例して偏頭痛のピークを迎えようとしていた。

「して、日程はどのようになっておる」

「……………向こうの都合もあるから、……………すぐにつて訳には行かないと思うけど」

「ぬううツ！ まだ待てというか。そうは見えぬかも知れぬがな、こちらの気はそう長くはないのだぞ！」

言われなくともそう見える。見えすぎるくらい丸見えだ。

「……まあ、なんていうか、……奥手な娘だから」

そう言うのと、やおら激昂していたはずのライダーは一変して融解するかのようにならずに破顔した。

「ほうッ！　そうか、そうかつ、それでは仕方がないやもしれぬなあ。そうだな、あれほどの美女なれば、そうそう尻の軽いこともあるまいなあ、うむうむ、なるほど……」

グフフツ、と気色の悪い含み笑いを漏らしていた。

「……とにかく誘って見るから、おとなしく待つてて」

「フフン。心得た！　全ツ力で、待とうではないか！」

コイツ、馬鹿なだけじゃなくて気持ちも悪いな。と、私はあらためて心の底から思っていた。

「……それから言っとくけど、まだ勝ちが決まったわけじゃないんだから、あんまり気は抜かないですよ」

「なあに、そこはそれ、大船に乗った気でおればよからう。残りの敵はあの槍使いの爺にどこぞの剣士に弓兵、あとは間者だけというではないか、つまりは何処からくるか解らん間者にだけ注意して置けば、フフン。後は何を恐れることが在ろうか」

「……………それは……………そうかも」

ライダー（馬鹿）にしては最もな意見かもしれない。確かにライダーの戦闘力を加味

するならば、恐ろしいのはキャスターやアサンとといった搦め手を使うタイプの敵ということになる。

実際、あのキャスターとの相性は最悪だった。しかしそれを下した今、残りの敵と正面から相對するならば、おそらくライダーにとつてそれらは物の数ではないだろう。確かに、そう考えるならば前途は揚々と開けているのかもしれない。

「フン。そうと決まれば、祝杯の続きだな」

「……ちよつとは控えておいて、あんたが実体化してるだけでこつちは消耗するんだから」

「うむ、ほどほどに控えよう。吉報を待つぞー」

全力で霊体化して待機するようライダーに言いつけてはみたが、あの調子だと多分素直に霊体化はしなさそうだが、これ以上の問答は体力の無駄な浪費でしかない。

私は手早く登校の用意を済ませ、外につながっている地下道に入った。

表向き空き家になっているこの洋館から出てくるのはよくないので、人気の無い場所に通じている抜け穴を通って出入りするのである。

私は勝利に浮かれるライダーに注意を促したが、しかし遺憾ながら、このとき私も勝利の余韻に酔つて樂觀視しすぎていなかたかといえ、嘘になるかもしれない。

——後で、それをひどく後悔することになるとは、この朝には思いもよらなかつた。

生憎の曇り空の中、未だ微かに刺すような痛みを残す足を引きずるようにして、私は平時通う学舎に向かった。

足をかばってきかせいで時間はかなりギリギリだった。これで加減したというのだから凄まじい切れ味だ。しかしサーヴァントとの戦闘で受けた一番の負傷が味方から受けた傷だというのものなかなか情けない話ではないのだろうか。

丸一日ぶりの教室は特に変わったこともなく、和んだ空気が私の渴いた心を癒してくれる……はずだったのだが、なぜか違和感のようなものがあつた。

教室そのものではない。いつもの弛緩しきつた緩やかで怠慢な空気が、なぜか今日に限って曇天の空の如く澱んでいるように思えた。

今にも凍てつく雨に降られそうな、それを恐れているかのようなピリピリとした感覚も付き纏ってくる。

級友たちの顔に浮かんでいるのは、なにやら得体の知れぬ焦燥や恐怖のようなものではないかと窺えた。

何かあつたのだろうか？

「ク口……」

席について眉を顰めたところで、深刻そうな顔をした馬鹿がよってきた。腐れ縁の旧

友、那須秋乃である。何事かというような顔色が窺えたが、私はあまり真に受け取ることはしなかった。

たまにこういうことをするのであまり真剣に取り合う必要はない。……のだが、このときばかりは何処か違うようにも感じられた。教室の雰囲気と同じように、なにかが違っていた。

「……何かあったの」

「よかった……。昨日連絡つかなかったからさ、あんたにまで何か在ったのかと思って……」

意味がよくわからないが、あんたまで、というからは私以外にも誰か連絡につかなくなつた人間がいるのだろうか。

「……ちよつと、具合がひどくなつて、風邪っぽかつたから……」

「うん、そう思つて昨日アパートまで行つただけだよ。まるで人気がなかつたから、心配してんだ」

「……薬飲んで寝てたから……」

気付かなかつたみたい、とやや苦しい言い訳を述べたが、咄嗟の事だけにあまり追及されると遁辞もうまく回らなくなる。

昨日私はそのアパートにはいなかったのだから、それも当然だ。やはり安易に住所を

教えたのは早計だっただろうか。

しかし私の不審を気にとめることもなく、幸いにも秋乃はそれ以上の言及をしなかった。

「そっか、ならいいんだ。顔見れて安心した」

「……ほかにも誰か？」

「ねえクロ……あのさ、あくまで噂っていうか、確かなことは解んないんだ。それ程のことでもないと思うんだけど、その、さ」

珍しく歯切れの悪い悪友の言葉を待たず、私はぎつと教室内を見回した。そういえば、いつもなら控えめな竹まいの中に余裕と優雅さを含んでいちはやく教室に来ているはずの優等生、百朶文目の姿がない。

この教室の曇ったようなざわめきは、どうやら我がサーヴァント曰くところの麗しの君に関係があるらしい。

「……文（あや）ちゃんも昨日休んだって事？」

彼女とは一昨日私のアパートで別れた限りだ。まさか彼女も昨日休んでいたとは思わなかった。

「……」

秋乃は口を噤んでいた。それ以上なにも言わない。いや言えない（……）のだから



うか。

そこで初めて、いやな予感というものが私にも感ぜられた。

今、この街で行われている外法の儀式、そして、行方知れずになった級友。それがなにを示しているのか、私にも察するのは容易だった。

しかし彼女は聖杯戦争には関係の無い一般人のはずだ。浮世離れた才人なのは確かだが、それがなぜ……それとも儀式とは関係ないのだろうか……。

そのとき、担任の教師である島原耀子が教室に入ってきた。

それを合図に皆己の席に戻った。いつもの光景だが、いつものように雑然としたざわめきは起らない。

ひとつだけポツンと空いたあやめの席が、かえって皆の脳裏の不安を煽る形になったようだ。

何よりも、いつもならば優しい笑みを絶やさない担任の蒼褪めた硬い表情がこれから告げられる凶事を想わせて、室内は通夜のような静寂に包まれた。

私はいつもの担任の顔を思い出して、ライダーの言う、常に微笑を絶やさぬ「よい女」というのはこういう人物のことなのかとぼんやりと考えていた。彼女に紹介するといつてもライダーはヤル気になるだろうか、何せあやめに拒絶されたあとのライダーをどうやって誘導するのは頭の痛くなる死活問題だったからだ。

そういえば、このまえ出合った担任の妹について考えを及ばせていなかった。もしも彼女、島原夕子がサーヴァントを従えるマスターだったとしたなら、少しでも情報は集めておいたほうがいい。何も知らないにしろ、その姉である耀子には接触を図っておいて損はないだろう。

教壇に立つたまま暫し口ごもっている島原女史を見ながら、私は叨々とそんなことを考えていた。

後になって考えてみれば、この時、私は無意識にあやめについて考えるのを拒絶していたのかもしれない。

そこで意を決したように口を開いた島原女史は、昨日から行方不明になっていたという生徒、百朶文目の死を、簡潔に告げた。

一限目の授業はそのまま自習になった。

担任はあまり動揺しないようにとだけ告げて、事故なのかなんなのかの説明もないまま退室した。

おそらく教師たちの間でも動揺が広がっているのだろう。今頃は職員室で会議の真つ最中であろうか。

教室内は静かなものだったが、それでもいつものように雑談する者、おとなしく自習

する者などもいて、平時と同じように時は流れていた。特に泣き崩れるような者はいなかった。

校内きつての才女であつたあやめを奉ずる人間は少なくなかつた筈だが、何よりも噂や担任の声から聞き及んだ僅かの情報だけでは、現実味を感じることが出来ないのだらう。

普段身近に人の死というものを意識していない現代人にとっては、それが普通の感覚なのかもしれない。

伝え聞いた言葉に現実味がないのではない。死から遠ざけられて育つた彼らは死というものに対する感受性が著しく欠損しているのだ。

死という言葉に、その情報にリアリティを感じる事が出来ない。

憐れなものだ。と、私は思った。それほどに彼らは鈍感なのだ。だから訪れて当たり前のものに不意に直面して取り乱したり、呐喊したりと無様を晒す羽目になるのだ。

魔術とは死に接し、死を受け入れるところから始まる陰性の奇跡を統べる術である。故に私は彼らとは違つた。

血は浅くとも私は魔女だ。

こんなことで動揺することはありえない。

級友の死を告げられても、「まあ、そんなところだろう」というのが私の率直な感想

だった。

灯を失った冬の庭のような教室の雰囲気反して、私の思考は冷静だった。

行方不明が昨日から、と言うのは彼女が登校しなかったという事実から導かれた推察だろう。独り暮らしの彼女はたとえその前日に死んでいたとしてもそれに気づく者はいないのだ。

ならば、私のアパートを後にしたときに何かがあったという可能性もあるだろう。むしろ日中よりも夜に何かがあったと考える方が妥当なのではないだろうか。——そう、彼女が私の部屋を訪れた、その帰り道に。

私が意図して呼び寄せたわけでもないのに、負い目など感じはしないが、調べて見る必要はあるかも知れない。

一般人の彼女が儀式に巻き込まれるパターンとはどのようなものがあるのだろうか？

——やはり、サーヴァントの戦闘を目撃してしまい、秘密保持のために、というのがもつとも妥当な線だろうか。

「クロ……」

また秋乃が席を立って寄って来た。気丈な彼女もさすがにショックなのだろうが、それに付き合っつてもに嘆き悲しむ振りをするというのも面倒な話だ。

「……ごめん、今は」

今は話したくない。とでも言っただけでしよげた風を装えば勝手に深読みして納得してくれるだろう。そう考え、私は顔も向けずに言った。

「いいよ。——無理すんな。あんた、こういうとき無理しちゃうからさ……」

すると椅子にかけたままの私の肩に手を置いて、案の定お決まりの文句を吐き始めた。そう言っただけで悦に入りたいのかもしれないが、こちらとしては面倒くさいことこの上ない。

「ねえ、こんな、時まで、普通のふりとかしなくていいから……」

「……………」

正直寒気がする台詞だが、まあ、言わせておけばそのうち満足するのだろう。

取り合わず、自習の用意でもしようとした手を秋乃の手が取った。

「……ちよつと、アキ……」

さすがに文句のひとつも言おうとしたが、そのときやつと気がついたのだ。取られた手が、私の手がどうしようもなく震えている。

瘡にでもかかったかのように、戦慄いて、止まらない。

震えていたのは手だけではなかった。とつくの昔から、私の頬は雨に打たれかのように塗れていた。

秋乃は呆然と動くことも出来ない私の震える手と肩に触れてくれた。私はその暖かい手と自分の身体を抱きとめるようにして、突つ伏すように身体を折り畳んだ。

昔、子供のころ嫌なことがあるといつもそうやって縮こまっていたことを思い出していた。

私はいつもそうやって泣いていたんだっけ。

声押し殺すようにして、私はずっと動くことが出来なかった。一度認識してしまうと、もう、止まらなかった。

彼女の、あやめの死に、一番動揺していたのは私だったのだ。

よく私を氣遣つてくれた級友は死んだのだ。意識したことなどなかったから、気がつかなかつたのだ。

彼女はただの級友などではなく、れつきとした私の友人だったのだ。今の私を構成する一部だった。

欠けてはならないものだったのだ。

そして、あの日私が余計な事をしなければ、彼女が私の家にさえ来なければ、きつと何の罪もない彼女が巻き込まれることは無かった。

確証など無いが、きつと、そうだ。

つられるように、クラスの隅からは咽ぶような声が聞こえてきた。

私は馬鹿だ。

現実感がないから泣けないなんて嘘だ。本当はみんな涙と嗚咽をこらえていたのだ。己の弱さを幼子のように曝け出してしまわないように、歳相応の人間として己を抑えていただけだった。

そして、それさえもできなかつたのが、私だ。

このなかで一番弱かつたのが、私なのだ。

周りの誰よりも誰かの死を恐れているくせに、何が死を諦観した魔女だ。何が陰性の奇跡を担う者だ。

出来損ないの魔女、劣等生の小高森渥はどうしようもなく落ちこぼれだった。

たった一人の友人の死に心乱されて、泣きじやくることしか出来ないお粗末な小娘でしかなかった。

まるで誘われたかのように、曇り模様だった空までもが、とうとう泣きだし始めた。た。

きっと、しばらくの間止む事はないのだろう。

まるで石の涙のように降り続ける、この重苦しい灰色の帳は。

その日は午前中だけで急遽放課の次第となった。

あやめの死についてはそれ以上の理由は語られることが無かったが、誰も過度の説明を求める者は無かった。

それはひとえにとある噂によるところが少なからず含まれているものと思われた。件の噂を信じるもの、荒唐無稽だと信じぬもの。とにかくそれ以上の言及を躊躇わせる何かがその生々しい噂——都市伝説には在った。

それは古くからこの地方に流布していたという特に珍しくも無い都市伝説だ。この地域で数十年に一度、幾人かの子供が浚われ、女性が暴行を受けて殺害されるのだという。

もつとも、類似のような話は数多くあり、昭和初期の東京は下町から、はては大阪まで広い地域にまで流布していたのだという。

つまりは何処にでもありそうなただの噂だということだ。

しかしただひとつ、この地域でのみ趣を異にする事柄が一つあった。なぜかこの山間部一帯でのみ、その噂話がこと現在に至るまで断続的に流布しているのであった。

故に昭和初期に流行したはずのその怪談が、私達の年頃の人間の耳にまで馴染み深く浸透しているのであった。

その噂が潰えることはなぜかないのだ。いつの時勢も忘れ去られたところになると何処からか流れてきて、まことしやかに囁かれるのであった。



故に、いかなる世代であれこの辺りでの噂を知らぬものはいないのだ。曰く、——『怪奇の赤マント』——もしくは『赤い外套の悪魔紳士』と呼ばれる怪談の類であった。はたして、誰もが口にするでもなく、大きな疑念が横たわっていた。過敏すぎる教師陣の対応に、誰もがその由縁を、そしてその噂との関与を想像せざるを得なかった。彼女は、百染文目は本当に事故によつて命を落としたのだろうか、——それとも、何者かに命を奪われたとでもいうのだろうか。

その日の落日の折、夕日のように紅く染まった、洒脱な外套を羽織った男の手によつて——？

何処へ帰るのかも判然とせずに帰途についた私は、廂（ひさし）のついた公園のベンチでぼんやりと、静かに降り注いでいる冷やかな雨粒を数えていた。

誰も寄り道をせずに帰るように、とは厳命されたことであつたが、誰もがこんな折に好きこのんで炉辺の夕暮れを拝もうとは思わないだろう。

噂の真偽はさて置いて、この周囲で死人が出たことは確かである。噂話の怪人である、事故であれ、気の違った殺人鬼であれ、被害者からしてみれば同じことだ。

なにがうろついているのにせよ、おとなしく自宅に逃げ帰るのが一番の対策であるう。

だが私は暫くそうしていた。まだ日が暮れるには早い時間だったが、辺りには何者の

姿も無かった。

私はただ一人雨露の帳に囲まれて塞ぎこんでいた。

今更だが、己の脆さに辟易していたのだ。十余年の魔道の修練は私のような凡俗には何の意味ももたらさなかつたらしい。

死んだ母もこれでは浮かばれまい。

自嘲するように乾いた笑いを漏らして、私はいつまでも腰を上げることが出来ずにいた。どちらの隠れ家に帰るかも解らなかつたし、帰つても素知らぬ顔でライダーに対応できるのかがわからなかつた。

事の次第を話せば、ライダーのモチベーションはまた著しく低下することだろう。あやめの死を告げることはそれ故に憚られるのだったが、しかしその事実を言下に隠匿したまま変わらぬ立ち振る舞いを続けることはひどく億劫だった。

まるで嘔下しきれない毒礫を鳩尾に抱えたまま、享楽の席で快哉を装うようなことだと思えた。

耐えられそうも無いとも思えた。こんな弱音を吐いたのは初めてのこともかもしれない。

このときばかりは己の凡庸さが恨めしかった。才ある魔術師ならこんなことは目蓋を伏せることと同然にやつてのけることであろうに。

考え込むうちに日は沈みかけていた。帰路につかぎるを得なかった。朝には棘が刺さった程度にしか痛まなかつたはずの足の傷が、このときばかりは鉛を捻じ込まれたかのように重く、爛れたように熱かった。

幾ら雨に打たれても、その熱ばかりは、一向に消えてはくれない。

結局、私はそこから近い方のアパートに向かった。当初の予定のとおり、ここから街の反対の隠れ家までの道すがらに異変の調査を行うつもりだった。

毎日同じルートを回ればそれまで気付かなかつた異変を探れる、という心積もり——  
だったのだが、今はやはりとてもではないがそんな気にはなれなかつた。

傷のことを言い訳に、今日はこのまま引き籠ろうかとさえ思っていた。

アパートについて部屋に入ると、物音でそれを察して整列していた使い魔たちと、戦支度を整えた巨漢がちやぶ台でお茶を啜りながら私を出迎えた。シユールな光景だ。

私はまず濡れたまま使い魔たち買い置き物のネコ缶を開けた。いつもならおやつ代わりに何か用意してくるのだが、今日は寄り道する気になれなかつた。

「……………どうせなら、もつとちゃんとしたお茶を用意しておいたほうが良かった？　大陸式の……………ちゃんとしたやつ」

そしてタオルで身体を拭きながらライダーに声を掛けた。ぬれた服もそのまま脱ぐ。

確か生前のライダーが生きた古代中国は後漢の時代、お茶はまだまだ希少な代物であり、庶民の口に入るものではなかったという。限りない贅をもとめるライダーのことだ、そういう要求があるのかとおもったのだが、

「む、構わんでよい。フン。もとより茶の機微などわからんのでな」

そう言つてライダーはうまそうに買い置き煎茶を啜つた。

即物的で物欲に正直なわりに、高級志向というわけではないらしい。物の値段や貴賤には興味がなく、実際に目で見て手にとつた物の機能美にこそ価値を見出すきらいが、この男にはあるようだった。

よく言えば物の外面に囚われぬ慧眼の持ち主だと言えなくもなかったが、裏を返せばそれは他人の指標を信じず、己の五感と直感とを駆使してことに当たるといふことで、へたをすれば人目には一人よがりな偏屈者と映ることもあるだろう。

総ての濡れた衣服を脱ぎ去つた私はすぐにシャワー室のバスタブに満たしてあつた香油に全身を浸した。ひやりとした弾力のある液体の感触が、私の全感覚を塗り替えていく。しかし——、

「して、首尾はどうだった？ 席捲の時期は如何に？ 彼（か）の君は何時なりと仰つたか？」

ちやぶ台のライダーの嬉々とした声が聞こえた。この距離では聞こえぬ振りも無理

だろう。

「……ちよつと、事情が変わった」

「ふむ？」

当てが外れた。いつものように香油や煎薬で己の外表面だけでも魔女としてつくろえば、気持ちの方も切り替わるのかと思つたのだが。

どす黒い鉛のような毒礫は、今だ嚙下することが出来なかつた。

「事情とは何のことだ？ よもや会う前から拒絶されたとも言うのか!? そこを言ってくるめるのが足下の仕業ではないか！ そもそもな、」

「死んだの」

なぜなのだろう。言い訳を考える時間なら幾らでもあつたはずなのに。私は嘘がつけなかつた。

「……あの娘は死んだ。昨日、殺されたって……」

ライダーはしばらく何もいわなかつた。幾何の閑静、そして硬い声が問うた。

「なぜだ。なにゆえ、そのようなことが……」

「……おそらく、巻きこまれたんだと思う。この儀式はこの地の住人の安全を計算に入れていない。……きつと、魔術師（わたし）達の内の誰かが、ただ一方的な理由で、あの娘（こ）を殺したんだ……」

とどめる間もなく、どこか自暴自棄な感覚も手伝って、私は独白するように言った。  
こんな率直な物言いは厳禁だったはずだ。事如何によつてはライダーが爆ぜるやも  
知れない。

そうなればこのアパートごと、下手をすれば私の命もないだろう。だが、どうにも  
持ちが理性を押しつけて言葉をついていた。

止めようがなかった。もしかしたら、私は自分を罰したかったのかもしれない。  
しかし、しばらくたつても、ライダーは物理的にも概念的にも爆発することはなかつ  
た。

バスルームから出て見ると、何時の間にか不動尊の如く仁王立ちしたライダーは四肢  
を有らん限りに踏ん張り、打ち震えるようにして戦慄していた。

その眼光鋭き虎の目のような双眸からは、滂沱の如き涙が溢れかえっていた。  
呆気に取られてその様を見つめる私に、

「誰が——」

とライダーは問いかけた。

「誰だ？ 誰が、どの魔術師がやったというのか!!」

苛烈な問いだった。真つ直ぐな他意の無い問いだった。

「……解らない。巻き込まれたっていうのも推測で……確証は、ない」

「そうか。……無念だ。無念だ……………」

そう呟くように言つて、また雪崩のように座り込んだ巨漢は吐き捨てるように言を重ねた。

そうしてひとしきり嘆いたあとで、顔をあげると、

「して、なればこそこれよりの次第はどうなつておる」

と、色のない声で訊いてきた。私は俯いて応えた。その先については本当に何の考えもなかった。

「…………ごめん、代わりになるような人は、まだちよつと」

「そんなことを聞いてはおらぬわ!!」

まるで本物の矢に射すくめられたような気がした。それは初めてこの男が私に向けた本気の怒りだった。

「なにを言い出すかと思えば、足下らしくもないではないか! なぜ仇を討たぬのだ?

ああも仲むつまじくしておつた輩ともがらであらうに!」

「……………私は、魔女」

言われて、しかし私はライダーを睨み返した。

「…………一々誰かの死におののいてなんていられない。死にとらわれてもいられない。魔女とは万象の陰性を司る者…………だから、……………だから私は、——」

己に言い聞かせるように呟く私の言葉を、打ち切ったのは深い溜息だった。

まるで失望したような目を向けてくるライダーの視線に、私は己の顔に火が入ったような感覚を憶えた。

「フンツ。なんと、まあ……小賢しいことだな、なあ、小娘よ」

「……………うるさいッ」

「そんな建前を振りかざして、己の本心を覆い隠すつもりとはな。フンツ！ もう少しものの道理を弁えた手合いかと思つたが、俺様の見込み違いだったようだな。これを小賢しいといわずになんというのだ」

「……………うるさいッ！ そんなことあんたに言われたくない。あなたみたいな人間が仇討ちだとか、それこそ、らしくないじゃない！」

鼻で笑うライダーに、私は吐き捨てるように言つた。まるで毒を吐いたような気がした。いつもなら誰かに何を言われたって、私はこんな事を言つたりはしない。他人を害しようとする言葉は、結局同じように自分の喉を爛れさせるものだ。

しかし座り込んでさえ殆ど私を変わらぬ高さの目線が、まるで見下すかのように私を見つめた。私の吐いた毒など何処吹く風だ。この男に何を言つても爛れるのは私の喉ばかりだ。

「なにを言う、当然のことだ。己のものにするのだと決めた女を亡き者にされたのだぞ



!? それ即ち、この俺の五体に狼藉を働いたも同じことだ。生かしておけるはずがないではないか！」

「……………私は、違う。彼女にそんなことをする義理もないし、義務もない……………」

己の足元に言葉をこぼす私に、ライダーは一喝した。

「それは立場を盾に取った建前であろう！ 足下の心はなんと云っておるのだ」

私は息を呑んで押し黙った。——心、だなんて、この男から聞こえようとは思えない言葉だったのだ。

「……………」

私は呆気に取られて、むせるようにただ息を吐くしかなかった。その無様な様にライダーは再び溜息を吐いて続けた。

「フンッ。いいか、我がマスターよ。人とはな、決して建前や理屈で動くものではないのだぞ。オレ様が生きた時代にも、本音よりもそんなものを後生大事にする手合いが幅を利かせていたのは確かだ。後世の小生意気な学者どもは、オレ様の生き方を理屈に合わぬとしてケチをつけとるようだが、ひとつ言っておいてやる！」

人は理で動くものではない、情動によつて動くものなのだ！ 情動とは心であり、人の根幹たる欲だ。考える必要はないぞ。感じてみる。今、この時、足下の芯たる己の欲するものはッ、何ぞや!!」

「……………私は、」

まくし立てられて、返す言葉がみつからなかった。それは、冷静に考えれば幾らでも反論の出来そうな拙い論説だったかもしれない。

それでも、今の私には返す言葉がひとつも出てこなかった。魔女としての論理ではなく、私の私としての心は確かに、

——彼女の死を悼みたがっていた。

その理不尽な死を、それを生み出したおぞましき者を、己の手で是正したかった。——否、正さねばならなかった。

「……………私は、……………私だって、このままにはしておきたくなんて、ない。……………けど……………」  
 呟くようなか細い私の声を聞くと、ライダーは貌を一変させてにやりと笑った。いつものいやらしく小憎らしい顔だ。

泣いて、怒って、すぐこれだ。なんとも切り替えが早い。私にはとても真似できそうになかった。

「い良し。そうとなれば、後は簡単ではないか。フフンツ。疾く馳せなければなるまい。まずは怨敵を探し出すところからだッ！」

そして……………何時だって、人の話も聞かずに強引に話を進めてしまうやつなのだ。

「……………変なの、あんたみたいなヤツは殺されたって、泣いたりしないと思ってた」

私は思わず肩の力を抜いていた。いつものことではないか。コイツを相手に熱く  
なつても無駄なのだ。そう思うと自然と身体から余計な力が抜けた気がしたのだ。

「なにを言う、泣きたいと思つたら泣くのが当然ではないか。なぜそれを捻じ曲げようとする？」

「……ほんとだね。何でみんな泣くのを我慢しようとするんだろう」

「泣きたい時に嘆き、喚くが良からう。——フフン。ましてや女子供ならばなおのこと  
だな」

「……うるさい」

目をこする。私は、そんなに泣きたそうな顔をしているのだろうか。勝ち誇つたよう  
に言うライダーに私はうまく反駁出来なかった。

それでも、いざ方針が決まると、それまで冷え切っていた体の芯に火がついたような  
活力が湧き起こってきた。

心と体は未分別なものなのだろう、と今更ながらに思う。心の求めるところを建前で  
押し留めてしまつては身体の方にまで影響が出てくる。

馬鹿の言ではあるが、理がないともいえなかった。

私は魔女である以前に私なのだ。たとえ未熟と誹られようとも、それが今の私の答え  
だった。

空からは、未だ冷ややかな雨が降り続いている。——しかし、それが私の心を凍えさせることは、二度となかった。

(水曜日・夜)

今後の方針としては、まずあやめを殺した相手の特定が最優先だった。もつとも、未だ事故である可能性も無くはないので、私達はまず彼女の死体が発見されたという場所に向かった。

生憎の曇り空だった天候は回復することなく、依然として街は暗鬱な雨の帳に囲まれていた。現場は私達のアパートからも程近いところであった。そこに到着するころには、周囲は夕刻を待たずして無明の暗夜へと変じていた。

やはり、あの日彼女が私のアパートに寄ってくれた帰りに、何かが生じたのだろう。苦い感覚が湧き起こってきた。

やはりあの日私が余計なことを言わなければ、彼女が死ぬことはなかったかも知れないということだ……。

そこは工事現場のような場所だった。いや、発掘跡とでも言うのか、大きな畦のように掘り返された土がブルーシートに覆われて雨に濡れていた。

住宅やアパートの多く密集する地区の境目にできた、洞のような場所だった。

程近い場所には背の高いマンションが群を成すようにそびえており、なるほど、夜ともなればここは絶好の死角となるだろう。発見が遅れたというのもわかるような気がした。

現場の仔細を知って私は心を痛めた。こんな寒々しい場所で、あやめは死んだのかと思うと暗鬱な気持ち湧き起こってきた。

夜半だからなのか、殺人現場にも関わらず人の姿は無かった。この場所そのものはあまり重要視されていないのか、それともおそらくは警察も何の情報もつかめてはいないのかもしれない。

……あるいは、これが儀式に関わる殺人であるがゆえに何らかの情報操作が行われているのかもしれない。

そこでふと、剥き出しになった現場の端に不可思議な溝、というのか、妙な石畳が土中から覗いているのを見つけた。

そうか、このせいで工事を中断して発掘調査が行われていたわけか。

私はあやめが熱心に話していた古代道のことを思い出した。ここがそういう「古代道跡」なわけか。

しかしなぜあやめはこんなところに来たのだろうか？ 幾らこの遺跡に興味があつ

たのだとはいえ、まさかそんな時刻にこれを調べに来たわけではないだろう。

ならば、どういう可能性が考えられる？ 誰かと待ち合わせだろうか？ いや、呼び出されたということか？ もしくは何らかの異変を感じてこの場所に近づいてしまった。

……しかしここは大仰なマンション群の翳になっており、往来からでは容易にはこの場所の様子を窺うこともできない。

そこまで明白な異変とはなんなのか……もしもそれが魔術なら、その名残があってもおかしくはないのだが……。

そう考えた私は地面を見つめたが、この雨ではそういった魔術の名残のようなものも流れてしまっていることだろう。情報が少なかった。これだけでは犯人に辿り着くことは難しい。兎角、足元の泥を採取しておいたが、方ひとつ、何らかの情報が欲しかった。

取り急ぎ、私は軟膏を五体に塗りつけ、四つん這いになって周囲を探った。五感を鋭敏化させて魔術の遺留品や残留物といった痕跡がないかを調べるのだ。魔術の残り香、というやつだ。

すでに警察の手によってこの現場は大分荒らさ<sup>ら</sup>れているかと思うが、それでもやってみ見る価値はあるだろう。

当然だが、彼らは犯人が魔術師であるということを念頭において捜査をしてはいないはずだからだ。

すると惹きつけられるようにして石造りの遺跡の隙間に何かが挟まっているのを見つけた。まるでこの石畳の内側から伸びているように見えた。妙だとは思いつつ、何かと手にとって見ると、ズルリと抜けた。

こんな場所では鑑識も気付かなかったのだろうか。或いは関係の無いゴミとしか見なかったのか……。

しかし、それはたしかに「魔」の香りがした。魔術師の遺留品に違いなかった。私の嗅覚はそれを見つけ出したのだ。

瞬間、火のような何かが私の中を通り抜けていった。やはり、彼女は魔術師の、いや、私達の都合によってこのような目に合わされたのだ！

それは黒く、妙にけばだった布地の切れ端だった。これは……黒ラシャ地であろうか？ 燕尾服（イブニングコート）などに使われる上等の布地だ。現代ではあまり多く使われるものではないのではないのではないだろうか？

どういうことなのだろうか？　これが、一体彼女となんの関係がある？　なぜ彼女はこんな場所にいたのだろうか？

……理由は想像できず、可能性も少ないが、もしも彼女が夜半にここに呼び出された

のだとしたら、それを行うことの出来る人間は誰であろうか。あやめは見ず知らずの誘いに簡単に応じてしまうようなタイプではない。

それができるのは親しい人間だけだろう。そして彼女の交友関係はそれほど広くないはずだ。

たしか、あやめは担任に師事してこの古代路の調査を手伝っていたのだといっていた。私達の担任の教師、島原耀子。何かを知っていると云うのか？

しかしその場合、何かあやめの死についての事情を知っていて、その上で何も語らなかつたというのか？ ありえない話ではない。もしそうだとしてもそれを生徒に伝えることはしないだろう。無駄に怖がらせるだけだ。

彼女にアリバイはあるのだろうか？ ——私の思考は困惑の極みに差し掛かった。しかし可能性はあるとしても、彼女に安易に接触するのは賢明なことではないと思えた。

彼女自身は魔術の素養の無い一般人であることは確かだが、それでもあの（・・・）島原の血筋なのだ。下手に手を出せば何かがあるか分からない。

だがそれもやり方次第だろう。魔術師としてではなく、一生徒として友人の死について尋ねるくらいならなんとでもなるはずだ。何かを知っているのなら顔色の一つくらいは変わるはず。



……しかしそれもあまり唐突にやったのでは具合が良くない。何か口上の種になるものがあればいいのだが……。

『おおい、何時までそうしとる気だ。別にかまわんが、そんな格好で尻が冷えんのか？  
せつかくの尻ではないか。フン、もつと気を使わんといかんぞ、まったく』

たしか、あやめもひとり暮らしだったと聞いている。申し訳ないが部屋を調べさせてもらおう。何か見つかるかも知れない。どうせ警察に荒らされたあとなのだろうし。

『おおい、聞いとるのか?!』

「……移動する。ライダー。あの娘の部屋に行ってみよう」

ライダーはそれを聞いて一瞬怪訝そうな気配を見せたが、すぐに思考を放棄したよう  
で、

『いよし、ならば行くか!』

「……魔力の無駄だからタクシーでね」

そう言って、矢庭に実体化しようとしたライダーを制した。また自分の愛馬を呼び出して私ごと移動するつもりだったのだろうが、そもそも魔術師とは意味の無い浪費や派手さというものを嫌うのなのだ。

唯の移動のたびにいちいち伝説の英馬になんて乗ってられない。

私は不満そうなライダーの気配を受け流し、往來に向けて雨にぬかるむ殺害現場を後

にした。

時刻もまだ深夜というほど深まっていたわけではないので、マンション郡を抜けた先の往来にも車の行き来が少なくなかった。私はほどなくして通りがかつたタクシーを呼び止めた。

礼装のまま乗り込むわけにも行かないので、このときの私は帽子を脱ぎ、黒いファアのついたような黒い上着を羽織っていた。

「へえ。……なんだいお嬢さん、こんなところ？ 彼氏にでも置いてかれたのかい？」  
膝から下は黒いブーツを履いてはいるが、太ももは殆ど丸出しである。さらに人相を変えるのに軽く化生もしていたから、その格好を見て顔に不健康そうな油を浮かべた年の運転手が下世話な声をかけてきた。

私は応えず、簡潔に行き先だけを継げてバックから携帯を取り出した。

「チツ、愛想のねえガキめ……」

ぶつぶつと漏らしながら、車を発進させた運転手はラジオの音量を上げた。私も人のことは言えた性質ではないが、どうやら客商売には向いていない人種のようなのだ。

ちなみに、今私が羽織っている上着やバックは総て使い魔が変容したものである。携帯などの備品も、通常は帽子に変じているこの使い魔達が内包していてくれるものなの

だ。

しばらく携帯電話の番号にかけたのだが、出ない。まだ寝ているような時間ではあるまいし、……私は少し考えてオフィスのほうの電話にコールしてみた。するとすぐに出た。

戦争の真つ只中だというのにあいも変わらず職場で残業しているのだから、わが師の傑物ぶりも相変わらずどころだろうか。

「……先生。私です」

実際のところ、あまり気は進まないのだが、背に腹は変えられない。この際、訊けることは訊いておくべきだろう。

『驚いたわ。本当に電話してくるなんて』

声は軽かった。多少懸念もしていたのだが、向こうではまだ被害らしいものは出ていないようだ。

『けど、まさか降参の申し入れなのかしら？ それとも決闘の事前交渉？ だったらやめてちょうだい。しばらく家にも帰れてないのに、これ以上余計な手間を増やさないで』

「……また会社に泊まりこんでるんですか。アー君は心配してましたよ」

『あら、会ったの』

「……ええ、お見舞いに行くと言っていました」

聞こえてきたのは溜息だ。

『そう……。実を言うとなね。儀式が終わるまでは、私はこつちにいたほうがいいんじゃないかと思ってるのよ。アズルを危険な目にあわせるわけには行かないでしょう？

アズルしかいない本家を襲うメリツトは無いわけだし、もし攻め込んでくる輩がいても、アズルには指一本触れられないよう相応の準備はしてあるわ』

「……私がアー君を人質に取ったらどうするんですか？」

『あなたには無理よ。だって才能無いもの』

「………はつきり言いますね」

改めて再確認させられて自分でも声のトーンが落ち込んだのが分かった。いよいよ私は魔道の才覚がないことが証明されたような気になってくる。

『あら、何かあったの？ こんなことでヘコむなんてあなたらしくないわね』

「……ええ、ちよつと」

『ふふ。気にしなくていいわ。私は優秀な魔術師ひとでなしの才能が無いからこそ、あなたを買ってるのよ』

それはフォローになってるんだろうか？

「………使用人としての才能はあるってことですか？」

『真つ当な人間としての素養があるといつてるのよ。……それで、何の用で電話してきたのか、いい加減教えてちょうだい』

「……ちよつと訊きたいことがあります。今回の事に参加している魔術師についてです。先生には、大方の参加者の詳細は知れてるんですよね」

『勿論よ。貴女を含めて事前にね。……でも、ただ教えてといわれて教えるわけには行かないわよね。貴女は一応の師である私に嘸み付いている最中なわけだし』

「……私が幾ら嘸み付いても、痛くも痒くもないんじゃないですか」

『それでもないわ。意外と困つてるのよ。——貴女がいないから屋敷の中がまるで片付かないし、それにほしいものが何処にあるのかも解らない。大体からして貴女以外の家政婦の料理じゃ、ともてもじゃないけど口にあわないの。どうしてくれるの?!』

どうやら嘸み付くことよりボイコットのほうが堪えるということらしい。予想していたことではあるが……。

「……でも、先生は忙しい時はろくなもの食べないじゃないですか」

『だからこそッ、たまに家に帰ったときくらいは落ち着いて良いものを食べたいのよ。だからさつさと降参して家の中を片付けに来てちょうだい。伸江（のぶえ）一人じゃどうにもならないわッ』

ちなみにこの伸江さんと言うのは私と同じフユタウフェン家専属のメイドであり、同

時に師が経営する会社の社長秘書でもある女性だ。

生まれついて強力な魅了の魔眼を持つ異能者で、男を惑わす生粋の淫魔なのだそうだが、しかし以前にその力を使ってバカをやらかしたらしく、その折に師に命を救われ、それ以来半使い魔状態で使役されてしまっている。

……まあ、一言で言うとかわいそう人である。

「……もしかして、仕事がどうこうじゃなくて、そのせいで家に帰りたくないんですか？」

『……………チツ』

私がズバリ訊くと舌打ちが返ってきた。

嗚呼、我が偉大なる魔道の師、ルベル・フォン・シユタウフェンは魔術師としても一社会人としても間違いない一流であり、非の打ち所の無い傑物であるのは確かなのだが、……しかしその反面、どうしても不得手とする事柄がある。いわゆる家事全般というやつがそれで、その腕前はもはや壊滅的であった。

それで見かねた私が自然と家事に手を出すようになり助手となったのだが、そのせいで師のプライベートでの出不精に拍車を掛けてしまったらしい。私が居ないと三日で私室が大変なことになるのである。

「……………掃除とかどうしてるんですか？」

『仕方がないから通いの人間を増やして何とかしてるんだけど、ダメね。手際が悪くて見るとイライラするわ』

「……あんまり通いの人たちを虐めないでください」

『人聞きが悪いわね。貴女と比べて手際が悪いといっているのよ？　つまりあなたの責任ではなくて？』

……なんでやねん。

「……私は十年も住んでるんですから、比べるのはやめてください。そんなことだから折角来てくれた人たちが萎縮して辞めちゃうんですよ。……それにしても大丈夫なんですか？　この時期に外部の人間を屋敷に入れたりして」

『ええ、問題はないわ。通いの人間の中に魔術師がいないことははっきりしてるから』  
「……」

どうやら師は、相手が魔術師でさえなければ警戒の必要もないと考えているらしい。その辺りの事を軽んじるのは、己への自負によるところからであろうか。私には真似できない。

『だいたい、私の部屋を掃除できるのは貴女だけでしよう？　困ってるのよ。そろそろ何がどうなってるのか私には訳が解らなくなってきました……』

自分の生活している私室に対して、「訳がわからない」とはなかなかいえる台詞ではな

いと思う。

にしても、ここまで豪快に掃除が出来ないと言い切るのも、ある意味さすがだとさえ言えるのではないだろうか。

「……率直に聞きますが、今先生の部屋はどうなってるんですか」

もはや「散らかっている」などという表現では追いつかないのは明白だった。

『ふふつ、それは——見てから確認してもらおうしかないわね。私は解らないわよ。しばらく何も見ないようにしてたから』

ふふつ、じゃねえだろ。とは声には出さなかつたが。どうやら、今や師の私室は想像を絶する散々な有様となつているようだ。

さすがに胸が痛んできた。日々私が愛情を持つて磨き上げてきた高級な家具や調度品が、あろうことかその持ち主によつて蹂躪され尽くしているとは、まったくひどい話である。

なんだか、私も心なしか掃除をしたいような心持ちになつてきたが、しかしこのまま屋敷に向かう訳にも行かない。そうできない理由が、今の私にはあるのだ。

『とにかく、それが解つたのならさつさと戻つてきて私のサポートにつきなさい。そこまでして聖杯が欲しいわけじゃないでしょう』

私は、断固として即答した。



「……いいえ、少し事情が変わりました。それが片付くまで、降りれません」

『——淫、——何が、あつたの』

「……」

『——いいわ。でもただではだめよ、何か渡せるものはあるのかしら』

「……情報が少し」

「聞かせてみて、見合うだけのことには応えてあげる」

私はこれまで体験した敵サーヴァント達の情報について、わかっている限りのことを簡潔に述べた。

——ランサーの宝具。そこから察せられた真名。バーサーカーの消滅。そのマスターの行方が知れないこと。キャスターの最後。そしてそのマスターの奇怪な死に様。そして教会との関連性。

——師が現在までにどれほど戦ってきているのは解らないが、情報はあつて困るものではないだろう。

『驚いたわ。序盤から随分飛ばしてるとるじゃない』

「……私の意志ではないんですが……」

今更だが、私が主導していればこんな苛烈な戦歴はできていなかったことだろう。

『解らなくもないわ。サーヴァントを御するのは並大抵なことじゃないわよね。まった

く、言うことをきかないったら……』

以外だった。魔術師として特級である師ですら辟易するとは、そのサーヴァントはどんなバケモノなのだろうか？

「……先生、それよりも」

『そうね。いいわ、キャスターとバーサーカーの脱落はともかく、未確認とはいえランサーの真名は大きいわね。充分な情報よ。で、何について聞きたいの』

さて、こちらとしても問題の概要を捉え切れていない状況だ。下手に説明してもわかりにくくなるだけなので、私はまず、期待もせず、単刀直入に聞いた。

「……燕尾服を着た、あるいはそれに関係のありそうな魔術師について、心当たりは在りますか？」

『——一人、いるわね』

暫し返答の間が空いたことで、私は師が驚愕しているのだと知った。私の体温は一気に沸騰した。

「……教えてください」

私は待った。息を殺して、その敵の名を。

『あなたも、名前だけは知っているはずよ。その男の名は夜鳴手——錐人』

「……それは、たしか」

『そう、私達シユタウフエン、島原と共にこの儀式を始めた御三家の一角よ。とはいっても、コイツは家門が代々聖杯戦争に参加しているんじゃないやなくて、本人が百年以上にわたる総ての聖杯戦争に参加し続けているのよ。』

今時燕尾服なんて着込んで往来を歩くのは、魔術師の中でもコイツくらいのものよ』

「……ヨナリデ・キリヒト」

私は繰り返すように呟いた。それが、あやめを引き裂いた怨敵の名か！

『ひとつ忠告しておくけど、事を構えるつもりなら相応の覚悟が要るわ。文字通りのバケモノよ。できるなら、やめておくことを進めるわ』

師の声に僅かだが重苦しい響きが宿った。その言葉が脅してない事の証拠だ。

「……ありがとうございます。先生。ご恩は後日お返しにあげます」

『無用だわ。これはフェアな取引よ。——でも、かくまって欲しくなったときは何時でも私のところに来なさい。いいわね』

そう言つて、電話は切れた。

「……ありがとうございます、先生」

「着いたよ。お客さん」

同時に、運転手の作ったような無愛想な声が聞こえてきた。車はいつの間にか停車していた。雨はまだ止んでいなかった。

それなりにしつかりとしたマンションだった。あやめらしい、簡素でいてしかし決してみすばらしくはない清潔感があった。

降りしきる夜雨の中でも、小奇麗な印象を受けた。

だが、住居の佇まいから窺えたのはその程度のことだけだった。私は足早に彼女の住んでいた一室に向かった。

侵入するのはわけもない。魔術で開錠などしなくとも霊体化したライダーが内側から扉を開ければいいのだ。

私は階段を駆け上がった勢いさえ殺さずに室内に滑り込んだ。ライダーも今日ばかりは指示するまでもなく行動した。何時になく殊勝なものだった。

「フン、しかしあれでよかったのか」

「……何が？」

部屋の中も、簡素でいて整頓されており、主の人柄を窺わせるには充分すぎるほどであつたのは見受けられたが、一見して異常が認められるようなものは何もなかった。

室内の探索を私に任せて、窓の外に気を配りながら、ライダーは重ねて問うた。

「敵のことだ。足下の師とやらには名前しか聞いておらなかつたではないか」

「……それでも充分。散々聞いてはいた名前だったから……」

「ふむっ。」

手早く整然と整頓された部屋の中を調べてみたが、結局使えそうなものはレポートの資料だけだった。

まあ、いいだろう。案外容易に敵の目星もついたのだし、後は明日にでも担任教諭の耀子にこのレポートを、あの日あやめが忘れていったとでも言って話を聞きだそう。それで反応を見せないならそれまで、もしも何らかの反応を示したなら、そのときは……。

そのときだった。レポートから程近い所に妙な物を見つけた。妙な形に切り抜かれた厚紙の束だった。それぞれに微妙に形の違う、それも結構な量あるものだった。何らかの工作だろうか？

私はしばらく訝しげにそれを見ていたが、とりあえずそれももって行くことにした。

「……もう行くよ。ライダー」

「暫し待たれい」

訝しげに外を警戒しているライダーの顔には、何時になく険しい相が見て取れる。

「……敵の、……気配とか？」

警戒を強めて問うと、ライダーは静かに答えた。

「それほどはつきりしたものではないな。フン。ただ——この場と言うか、街全体の空気が変わったのだ。街そのものをえらく剣呑な殺気が覆っているような……とにかく

尋常ではないな。気を抜くでないぞ。主よ」

「空気が変わったのは今？　今夜のこと？」

「否、一昨夜くらいから、そうだな、あのキャスター（優男）を討った後、程なくしてからなんとなしには感じ取っていたのだがな、はつきりと確認したのは今しがた、ということだ」

一昨夜……、どういうことなのだろう。あやめが死んだ時刻と一致するということが？　いや、つまりそれは、奴が活動を始めたから、ということなのだろうか？　と、いうかそれよりも。

「……何で今朝のうちにそれを言わないの」

「ほかに優先すべき事柄があつたではないか。それにこの殺気のほうは今憂慮しても仕方の無いことかも知れんぞ。先ほどから外に向けて此方から殺気を放つてみたが、何の反応もない。フン。この辺りには何がいるというわけでもなさそうだ」

こいつにとつての優先事項とはつまり自分のことらしい。それにしても、家捜しもせずにおとなしくしていると思つたら、そんなことをしていたのか。

普通なら気が効くというところなのかも知れないが、コイツがやるとその殺気だけで建物を倒壊させそうで不安になってくる。

「……なら、今日できることはもうない。帰るよ、ライダー」

「やれやれ、なんとも釈然とせんな。フンツ。全身がむずがゆくなってくるわ」

そうは言いながら、この日はライダーもおとなしく指示に従ったので何事も無く帰路につくことができた。

ただ、不安は降り積もる雨のように募っていった。這いずるような戦慄が私達の足許に迫っているかのようだった。

## 四章一2

(木曜日・夕方)

翌日の放課後、私は人氣が少なくなるのを待つて、あらかじめ調べてあつた島原耀子の自宅へと向かった。今回はライダーを連れてである。

考えたのだが、やはり校舎の中ではじつくりと話をしにくいし、人目も多い。

それにあやめのことを話しているのを秋乃達に聞かれては、また余計な心配をかけることになるだろう。それでこのような運びとなつたのだ。

島原の本家はここから山一つを隔てた山裾、周囲をこれまた複数の山に囲まれた山間部の集落地。通称「晦(つごもり)の里」にあるはずなので、無論仮住まいだろうとは思つてはいたのが、——はて？

ここは、なんと言おうものか、——「普通」だつた。  
いたつて普通な民家だつた。

笹ヶ谷市の東側、南北に弧を描くように足を伸ばす深い連峰の裾に、その家はあつた。至つて普通の住宅だつた。それでもかなりの年代ものであり、郊外の町外れだけあつて、それなりに広そうではあつたのだが、耀子のような人間が住むイメージではなかつ



た。

私には島原の事情は知りようもなかったが、高級マンションのひとつやふたつどうとでもできるだけの資金と権力があるのは確かはずなのだ。

はたして、ここは本当に彼女の居城なのだろうか？ 当然、魔術師の工房とも、とても思えない。

呼び鈴を鳴らすと、ひとりの老婦人が対応した。何でも島原女史は、息子夫婦が仕事の関係で隣県に移ってしまい、本宅の敷地を持って余していたこの老夫婦のもとへ、自分から間借を申し込んで下宿しているらしかった。

今時珍しい話だと思えたが、老夫婦はそれをひどく喜んでいるようで、嬉しそうに耀子のことを話していた。

耀子はまだ帰宅していないようであったが、教え子たちからの信頼熱い耀子のもとへ生徒が来るというのはさして珍しくないことらしく、学生証を見せて彼女の教え子だと告げると、私もとくに怪しまれることもなく部屋に通された。

そこは彼女が使っている部屋とふすま一枚を隔てた簡素な部屋で、生徒たちが耀子を待つときはいつもここに通すのだという。

長年の人の生活が幾重にもその家屋の表層を磨いてきたかのようで、初めて入った場所だというのに、そこはひどく人の肌に馴染むような感覚があった。私もずっと洋館に

育ってきた人間だが、こういう昔ながらの日本家屋というのも悪くないものだと思うた。

きっと彼女もこういう雰囲気が入ったのかもしれない。

しかし、さすがに地方旧家の息女が住まうにはなんとも質素なものだった。むしろあやめのマンションのような清楚なイメージのほうがまだそぐうように思える。

彼女はなぜこんな場所を選んだというのだろうか？ ある種の違和感が拭えなかった。それとなく探ってみる必要があるかも知れない。

しばらくすると耀子は帰宅し、驚いた様子で待っていた私を自分の部屋に迎え入れてくれた。

「小高森さんが来るなんてはじめてよね。どうしたの？ 今日はい」

「……ええちよつと。……私も以外でした。耀子先生が住んでるのがこういうところだとは思わなくて」

あえて質問にも答えず、多少慇懃な物言いをしてみた。反応を見るためだ。今のところ、不審な様子は窺えない。

「そうね……みんな多少なりともそう言うんだけど……ずっと思ってたの。こんな所に住んでみたいって」

「……本家のお屋敷とは違うってことですか？」

そう言うのと、少し驚いたように、彼女は少女のように大きめな瞳を揺らした。

「そっか、小高森さんはたしか……」

「……はい。晦の里（山向こう）で育ちましたんで、島原様のことはある程度知っています」

別に彼女も自分の生家がどういふところなのかを喧伝して歩くようなことはしていないのだから、生徒がそこまで知っているとイケースも今まではなかったのかも知れない。

交通の便がよくなって山間の秘湯目当てに集まる観光客は多くなっても、笹ヶ谷の住民はあまり里との接点を持たない。

あそこはもともとある種の異界として認識されており、今でも島原やシユタウフエンの屋敷がある集落地の一角はこちらの街の住人には隔てられた場所なのだろう。

私がそこに住んでいるというと、少なからず何らかのリアクションが有るといふ程度に。

耀子女史もそういう反応にこそなれていたのだろうが、私のようなケースは確かにめずらしいのだろう。こちらで向こうの人間同士が会うというのはなかなかないことだ。

しかし、今しがた垣間見えた動揺がそれについてのものなのかどうかはまだわからない。

「そうね、なら、余計におかしいと思うわよね？ ……なんていったらいいのかわかるのか、私の家は家族同士で顔を合わせることも多くなくて。特に私は家の大事なこともなんかも知らされて無かったり…なんていうか、いつも蚊帳の外っていうのか…とにかく、ずっと一人だったの。」

それで思ったのよ。あの大きなお屋敷にいる限り私はずっと一人なんじゃないかって。…だから、どこかで、一緒に住んでる人の顔が見えるお家に住みたかったの。だから、ここはとていいところだと思えて。本当に…」

独り言のように口走って、耀子は咄嗟に自分の唇に指先を添えた。そこまで言うつもりは無かったのだろう。

おそらくはそこまで話せる相手がいままではいなかったということなのではあるまいか。

島原の事を知らなければ、確かになんのこともわかるまい。

「ごめんなさい。変な愚痴まで聞かせちゃって…」

「…いえ、私こそ変なことを聞いてすみません」

今の彼女にはひどく動揺が見えた。しかしそれは私が懸念していたようなものではなかった。

しばし二人とも押し黙った。その根底にあるのはやはりあやめの死についての動揺

なのではないだろうか？

「……そういえば、一昨日なんですけど、妹さんにあつたんです。学校の帰りに」

私はそんなことをそれとなく言った。私としてもいきなりあやめのことについて聞くのは憚られたのだ。

「妹？ ……夕子に会ったの？」

すると、それまで沈んでいた彼女の顔が、パツと光彩の明度を上げた。

「……はい、私がお世話になっているお屋敷のご子息と同級生だそうで、声を掛けられました」

「ふふ、もしかしてアズル君のこと？」

「……………耀子先生は知ってるんですか？」

これにはこちらのほうが多少驚かされた。彼女はにこやかに微笑んで続けた。

「私も、最近直に会ってはいないんだけど、あの子お付の人とは連絡を取ってるのよ。あの子、アズル君のことばかり気にしているらしいわ」

「……………それは、ちよつと、驚きです」

そういえば、なぜあの二人が連れ立っていたのか、今まで訝りもしなかった。あの少女の圧倒的な存在感に気圧されて考えが及ばなかったのだ。

「どうだった？ あの子は何か言ってた？」

しかし、今はそれを加味している暇はない。私は雑談しに来たわけではないのだ。

「……ただ、『健勝だと伝えてほしい』、とだけですけど」

「あの子らしいわね。折り目正しいって言うのか……私も昔はそうだったんだけど」

耀子は本当に嬉しそうに話していた。家族とは疎遠だとは言いながらも、歳の離れた妹のことは気にかけているらしい。

そして、その妹が規格外の魔術師の卵だとは夢にも思っていないようだった。どうやら、彼女が魔術とは無関係だと言うのは確定のようだ。

「……ごめんさい、私ばかり喋ってしまって……小高森さん、今日は何か聞きたいことがあったんじゃない？」

しばらく言葉が続けてから、耀子はそう訊いて来た。ようやく話を切り出せる程度まで空気が温まったと思うたのだろう。おそらく彼女に悩みを相談しに来る生徒や卒業生も多いのだろう。この手の問答の進め方にはいささか手馴れたような感を見せていた。

手間が省けたというものだ。おかげでこちらもスムーズに用件を切り出せる。

私は鞆をあけて中から文目の部屋からもってきた資料を取り出した。当初の目的であるあやめの事を問う気になったのだ。

「……あの日、妹さんに会った後、私の部屋にあやめさんが来たんです」

私は目を伏せたままそう言ったが、耀子が息を呑む音は聞こえていた。

「……先生には、私が一時的に引越しをしたって言うのは話しましたよね」

「——ええ」

息を詰まらせたように、耀子は言った。

「……その話をしたら、あやめさんは部屋の片付けの手伝いに来てくれたんです。昼間にはいいって言ったんですけど……」

耀子は言葉を無くしているようであった。私としてもかなり緊張せざるを得ない話だった。

虚言も何もないのだ。

私は今、彼女の死の原因の何割かを自分が担っているのだと素直に告白した事になる。私は言葉を続けた。

「……その日、彼女が忘れていったものなんです。こういうことは先生に教えてもらっていたと聞きました。……なのでこれを返そうと思ったんです。……彼女には、もう返せませんから」

すると、突然言葉を無くしていた耀子が身を乗り出してきた。

両肩をつかまれて、私は一瞬反撃を思い至ったが、

『止めろ、馬鹿者。早まるな』

というライダーの念が頭の中に響いて、私は成すがままに身を任せた。つまり、彼女には敵意も害意もないということなのだ。

「小高森さん！」

耀子は強い視線で私の目を真っ直ぐに見つめてきた。

「変に自分を責めては駄目よ。あなたには何の非もないんだから」

言葉には真摯に私を案じる意しか感じられなかった。彼女は本気でそう言っているのだ。

「……私が何をどういう風に思っても、同じことです。罪というほどのことではないのかもしいし、責められることじゃないのかもしれないけど。」

……全部が偶然なのだとしても、私はあの日の偶然の一部なのは間違いないんです。もしも私が……」

「もしも、なんていうのはやめさない。それにあやめさんはあなたのことをそんな風には思わないはずよ……」

そう言つて、耀子は私の手から資料を受け取り、

「あやめさんもね、よくここに来てくれていたの。……この遺跡の研究ね、本当は別の生徒が興味を持って始めたいと言いつ出したことなの。それで、私が顧問になつて郷土研究の同好会として設立したのよ。」



最初、あやめさんには私が声を掛けたの。ただ勉強にも余裕がありそうだったし、何処のクラブにも所属してなかったからという理由でね。最初はちよつとした手伝いをして欲しいとだけ言ったの。

でもそのうち、彼女以外の生徒たちは顔をださなくなってしまうて……でも逆に彼女はこの研究に興味を持つようになったみたいで」

耀子は私の手を取って話を続ける。その手がとても、温かかった。

「そうして、私の所にも良く来てくれるようになって、話すことも多くなったわ。彼女生徒でも教師でもあまり心を開いていなかったから……」

それについては解らなくもない。彼女は私や秋乃達のような近しい人間以外にはあまり心を開かなかつた。

もつとも、彼女の場合、他の人間のほうが彼女に対して尻込みしてしまうのだろう。教師にしても、あまりに完璧な生徒には気後れするものなのかもしれない。

耀子はあらためて私を見つめた。

「それでね、あやめさんが一番話していたのは、あなたのことだったのよ」

「……私、ですか？」

慮外のことだった。いろいろな要素を差し引いても、やはりそれは慮外な言葉だった。

「……それなら、私だけじゃなくて……秋乃とか」

「もちろん、他の人たちのことも話していたわ。けど、一番彼女が気にかけていたのは貴方のことだった。彼女は言っていたわ。あなたに憧れてるって」

「……意味が……解りません」

言葉が出てこなかった。私が彼女より優れているところなんて何一つとしてない、……なかったのだから。

「私も詳しくは聞かなかったわ。でも彼女は貴方の生き方に憧れているといっていたの。あなたは何かがあってもぶれない生き方をしているって」

私は何も言えなくなった。

「多分、何でもできてしまうから、目標つてものが無かったんじゃないかしら……。あやめさんは、何でも簡単に物にできてしまうから、逆に何かに向かって進んでいくことができなかつたのかもしれない。……だから、きつと……」

なんと応えていいのかわからなかった。何かで掠れたような声だけが無様に私の喉から漏れた。

「……そんなのは、嘘です……私は揺れてばかりです。そんなに真つ直ぐじゃない……」  
耀子も涙をこらえるようにして言った。

「本当は……絶対に誰かに言っては駄目だと言われていたんだけど、でも、私はあなたに

それを伝えておくべきだと思ったの。ごめんさいね。……けれど、彼女は、どんなことがあっても貴方を怨んだりはしないわ」

私は何も言わなかった。その話を否定することも肯定することも、どちらも同じくらいに辛いことのように思えた。

無論、それは黙っていても同じことだった。

しばしそう言って押し黙っていた。耀子は「すこし寒くなってきたわね」と言って型の古い灯油ストーブに火を入れた。

そこで私はかばんの中からあの厚紙の束を取り出した。今まで忘れていたのだ。こうなってはもう彼女への疑いはないに等しかったが、それならなおさらこれをもって帰るのも無意味だった。私は彼女にあの厚紙の束を見せた。

「あら、これは……あやめさん。本当に熱心だったのね。自宅だけじゃなくて持ち歩いてもいたなんて」

少しヘマをしたかと思った。資料と違い、あまり持ち歩くようなものではなかったのだろうか？

「……それはなんなんですか？」

「これはね……」

語られた話からすると、この厚紙の束はこの地域一体の立体模型の部品なのだとい

う。

何でも、この山間部事態の正確な模型を作るために一万分の一の縮尺の地図を何百枚も使い、それを等高線をずらしながら厚紙に貼り付けて切り抜き、それを順に重ねていくと、地形の立体図が出来上がるのだそうだ。

断片的な厚紙の束ではわかるものわからなかったのだが、言われて見るとなるほどと思える。しかしこれはまた地道な作業だ。私がそう言うと、耀子はだから皆で手分けをして持ちまわりをしていたのだという。

ただ、あやめは自分に割り振られた部分をすでに終え、遅れている生徒の分を率先して手伝っていたのだという。

何でも、この地域の古代道を調べているうちに、彼女たちは何処か、この辺りの地形そのものがおかしいのではないかということに気付いたのだという。

専門的な話は私には解からなかったが、この辺りの地形そのものが人工の物のように思えるのだという。

しかも更におかしいのはそう考え始めると、いったい、何処までが人工物なのかわからなくなってくるというのだ。もしかしかしたら、この連峰——否、笹ヶ谷の大地そのものが……。

そこまで言って耀子は横道に逸れてごめんなさいと言って、言葉を切った。

しばし沈黙が降りて、彼女がぼそりと言った。

「でも、彼女らしくないわね。あの娘が忘れ物なんて初めて聞いたわ」

また少し動揺した。その一点だけは私の作った虚構だったからだ。しかし応えはつまることなく出た。

「……ちよつと、遅くまで話し込んでしまつて……」

「そう、あやめさん、そんなにはしゃぐほど楽しかったのね……」

「……」

確かにあの日の彼女は楽しそうだった。

忘れ物こそしなかったけれど、本当に彼女が、わたしをそういう風に思つて本心から喜んでくれていたのだとしたら。

そう考えることでやつと心が軽くなった気がした。それらしい情報は得られなかったけれど、ここに来てよかつた。と私は思った。

それからも話は続き、結局私は夕食までご馳走になることになつてしまった。

相談に来た生徒はみんなそうしているとのこと、老夫婦も迷惑そうな顔一つせず対応してくれた。

卒業生にまで人気があるのが分かる気がした。この空気は、なんとも居心地が良いように思える。私にまでそう思えるのだから、よつほどのことだ。

こんな人が、魔術師であるとは思えなかった。むしろ魔道の家門に生を受けた人間がこのように生きていけることが感動的でした。自分でも妙だが、私は彼女を疑ったことを恥じてさえいた。

ちなみに夕食をご馳走になっている最中、霊体化したままのライダーは怨めしげな念を送り続けてきたのだが、この場合は仕方がないだろう。よしんば、最初からこの男を保護者か何かだと偽ってこの席に着かせたのだとしても、こんな大食漢の腹を満たせるような食料はこの家にはないに違いない。

かといってこの漢が殊勝におとなしくしているはずも無く『少しは気を利かせろ』、などと念を送ってくるので、『こちらの台詞だ』と応えてやるとそれ以来何を語りかけても応えなくなった。どうやらまた拗ねてそっぽを向いたらしい。

夕食が終わると、すでに夕日が朱の色を失いかけていた。耀子女史は私を自宅の部屋まで送ると言い出した。

危険かとも考えたのだが、今はライダーも居るのだし、問題はないと判断してその言葉にしたがうことにした。

考えてもみれば、教師としてはこんな状況でまたもや生徒を一人だけで帰らせることは憚られるのだろう。何よりあんな話の後だ、彼女の性格なら、なおさらであろう。私はそのまま耀子の車に乗り込んだ。

結局のところ、調査としてだけみるならここは空振りだった。今後の闘いを優位にするようなものはなにも得られなかった。後は別の線から夜鳴手錐人の情報を探っていないかなければならないだろう。

——それでも、私の気持ちはすつきりしていた。問題は何も解決していないが、耀子と話せたことで気はほぐれたようだった。

『しかし、結局、大した収穫はなかったようだな』

『……焦りは禁物。……それに、悪いことばかりでもなかった』

耀子の運転する車中、私は念話で霊体化したままのライダーと意志の疎通をはかっていた。

『そのようだな。昨夜よりも随分顔色が良い。フフンツ。その恩師に感謝するがいいぞ』

ごもつともだと思えたが、あいかわらずなぜそんなに高いところから物を言えるのか不思議ではあった。大体どうやって私の顔が見えるのかと問うと、『見なくてもわかる、足下は解りにくいようできて、実のところは事の外単純なようだからな。フンツ』などといわれてしまった。

別に否定もしないが、コイツにいわれるとなぜかすぐく腹正しい。

しばらくすると外には煙ったような濃い霧が立ち込めはじめた。

「変ね。随分と冷えこんできたみたい。まだそんな季節じゃないのに」

見れば、フロントガラスまでもが白く曇っていた。見通しが利かないためか車は速度をやや落とした。生徒を乗せている手前、万が一にでも事故があつてはならないと考えたのだろう。

「ごめんなさいね。少し時間がかかるかも」

それから私のほうに向かってそういった。彼女も生来から真面目な性格なのだろう。

「……気にしないでください。急ぐ必要はないので」

『おい、なにやらおかしいぞ』

霊体のままのライダーから発せられる剣呑な波動に私は感応する。

『……分かつてる。ライダー、何かあつたら——』

次の瞬間だった。いきなりの突風が横殴りに叩きつけて車体を緩く揺さぶったかと思つた刹那、窓の外、その光景のすべてが真っ白に埋め尽くされてしまったのだ。

『いかん！ 触れるな！』

いったい何が、と不可解な現象を訝り窓に手を伸ばした私を、それだけでひつ迫の程が分かるライダーの念波が押し留めた。

次いで悲鳴。運転席にいた耀子が悲痛な声を上げたのだ。



見れば、その細い指先から血が滴っている。今しがたの私と同様にフロントガラスに触れたのだろう。それが、よもや人の指から皮膚を剥ぎ取るほどに急激に凍結しているとは。

パニックに陥りそうになっている耀子にかけようとした声は、しかし滞ってしまつた。それまで自走を続けていたのか、或いは慣性によつて移動し続けていただけなのか、とにかく前進し続けていた車体が何かに激突したかのように急停止したのだ。

凡その予想はついた。急激に冷凍された車体が、ついには完全に凍結され、地面に縫い取られたのだろう。

すでに車内も人の限界を超えた超低温の空気が席捲し始めていた。もはや息が出来ない。このままでは肺そのものが凍ってしまう。

『……ライダー早く私達と外に——』

『さて、外の冷気はこことは段違いだ。出れば足下でも即死だ』

急いでライダーに指示を出すか——時すでに遅し。状況はもはや詰めの段階まで差し迫っていたようだ。そして案の定刹那の間すら置かずさまじい圧力が車上に打ち込まれた。

車体が悲鳴を上げる。そろそろ車体を覆いつくそうとしていたはずの水柱群も盛大に砕け、その破片がダイヤモンド・ダストよろしく澄んだ超低温の空気に散華していく。

その煌めきの戸張の向こうに、私は愕然としてある物を見ていた。

碎氷に満たされた空間にまるで切り裂かれたような跡が断続的に現れ、なにかしらの紋を作り出していくのだ。

私には、今度こそそれがなんなのか解かった。そこに刻まれていたのはルーン魔術の刻印であつた。

ライダーがランサーと戦つた夜、横槍を入れてきた魔術師と同じものだとわかつた。

今まさに冗談の如く煎餅の真似事に興じようとしていた車体の中、超圧縮された感覚で、私はそこまで考えた。

だが考えられたのはそこまでだ。それ以上思考に耽溺していたのはでは、このままでは車ごとつぶされて終わりだ。

思考に先んじて、私の手の甲から烈火の様な熱が弾けた。

すでに実体化して止む無しとばかりに私を抱え車外に飛び出そうとしていたライダーの身体に強制的な力が加わり、押し留めた。

不可解な己の五体の挙動にうなりを漏らしながら、ライダーの体は機械的に動き、すでにへしやがて身動きすら困難となつた車内から私と耀子の身体を抱えてその姿を掻き消した。

## 四章―3

(木曜日・夜)

気がついたときには私達は冷えたアスファルトの上に投げ出されていた。令呪によるサーヴァントの強制指令と、空間転位である。

一連の動作ゆえに一つの令呪ですべてを決することが出来たようだ。

しかし拙い事をしたかもしれない。身の安全を確認しつつ、思案する。こんなところで令呪を使ってしまうとは思わなかった。

私一人なら、ライダーに守られながらあの超高压と低音の嵐から逃れることも出来たのかもしれない。

もつとも、その是非を問う暇が無かったというのが本音なのだが。――

「令呪とやらを使ったか。フンツ。良い判断だ。あのまま飛び出しても、無事で澄んだ保証は無いからな」

珍しくこっちの思考を見越したような事をライダーが言う。

……否、そうではない。ライダーをしてそれほどまでに危機的であったと言わしめる

ほど、今の不意打ちは致命的であったということなのか。

ならば令呪一つで身を護れた事をよしとしなくてはならないかもしれない。

私は身震いしていた。それほどの敵が、今までの敵とは比較にならない凶気が、今私達に向けられているのだ！

私は努めて自分を抑え、ライダーと使い魔達には周囲の警戒を指示し、気を失っている耀子の容態を調べた。

手足に多少の凍傷と、首に痣が出来ている。ムチウチくらいにはなっているかもしれないが、いまのところ命に別状はなさそうだ。

私は彼女を安静に路肩に寝かせ、自分の着ていた上着をかけた。だがその口腔から弱々しく漏れる息が白く煙っている。

私の指先も、あまりの低温ゆえに感覚が戻っていない。かなりの距離を空間転位したにも関わらず、あの霧とそれに伴う異常な冷気の余波からは逃れられていないようだった。

車体を瞬時に凍結させてしまうほどの冷気は、その周囲一帯にまで影響を及ぼしているらしかった。

もつと遠くまで跳ぶべきだったと今更ながらに後悔の念が湧き起こるが、今更考えても詮無いことだ。だが、問題なのはこれほどの規模の魔術を、いったい何者が引き起こ

しているのか、ということだ。

キヤスターのサーヴァントはすでに倒した。これが残りのサーヴァントの能力か何かで無いなら、それをやってのけたのはそのマスターだということになる。

もしもその懸念が当たっているというのなら、その魔術師は、一体どれほどのバケモノだというのだろうか。

兎角、このままでは耀子は凍死してしまうだろう。私は服を脱ぎさつて、まず鞄に化けさせていた使い魔をいつもの帽子に変化させた。

それを被ると、帽子の淵からさわさわとした手触りのいいものが降りてきて、グローブやウセフといったいつもの魔術礼装に変化した。同時にそれらからは雅な香りの漂う香油が滲み出して、私の身体を覆い、冷気から遮断した。

「フン？　なんとまあ、用意のいいことだな」

一息間に行われた私の「変身」をしげしげと眺め、感心するような声を上げるライダーに余所見をするなど激を飛ばしつつ、私は作業を続けた。

とはいえ、如何に呑気な声を出していても戦時下で気を抜くような男ではないことはわかつている。

私は自分の礼装の用意が済むと、今度は帽子に手を掛け、大体の当たりをつけて半分  
に裂いた。

半分はそのままサイズダウンした帽子になって私の頭上に留まり、残りの引っぺがした方は変化の魔術が解け、元の姿に戻った。一見すると一抱えもありそうな黒い毛玉なのだが、それを地面に放ると四足でスタリと着地して「ニャー」と鳴いた。

多少オーバーサイズな感はあるが見てのとおりの猫である。ただでさえでかいうえに、長毛種なのも手伝って猫であることを疑われて久しい愛すべき我が家の大食漢である。名前はレオだ。

指示をすると、ただでさえ大きなレオの体は更に、更に大きく引き伸ばされ、一枚の毛布のようになって耀子の身体を丸く包み込んだ。

ちよほど寝袋のような状態だ。これで彼女は凍死しなくて澄むことだろう。

「レオ。耀子先生をお願いね」

そう言うと、巨大になった毛玉の何処から出ているのか解らないが、とにかく「ニャー」という威勢のいい返事が出た。私はすぐさま帽子に手を突っ込んで携帯電話を取り出した。

コールしている間、なぜかライダーはなんともいえないような目で私を見下ろしている。……俺様とて詳

「——ふん。なんというか、足下の扱う妖術というのはかわつとるなあ、……俺様とて詳

しいわけではないが、魔術妖術の類とはもっとおどろおどろしいものではないのかのう」

「……何？ ライダー、ぶつぶつ言っていないでちゃんと見張って、救急車の手配はしたから」

だめもとでやってみたのだが、携帯はしつかり通じた。どうやら、敵は魔術の隠匿にはそれほど気を裂いていないらしい。兎角、これで耀子の安否については目星が立った。

後は私達がこの場を立ち去ればいい。

「ふむ？ そんなものと呼んでもここまで来られるものか？」

「……まずはここから離脱して、ライダー」

「うむ」

言うが早いのか、ライダーの鞍が閃き、気がついたときには私達は疾走する真紅の馬体の上に居た。

「……この結界がなくなれば助けはすぐに来る。今のは確実に私達を狙っていた。なら、まずは私たちから耀子先生を遠ざけるのが重要」

「フン。なるほどな。して、この後の策は如何とする」

私は少し思案してから応えた。

「……とにかくこの結果を何とかしなくちゃならない。……この状況での対策は二つ。ひとつは逃げること」

「ふむ」

このまま騎兵としての脚力に任せて離脱をはかる、私達が結界の外に出ようとすれば、結果ごと私達を追うか、新しく張りなおさなければならぬ。

「……もうひとつはこちらから敵を迎え撃つて速攻で倒すこと」

元凶である敵を討つてしまえば当然結界は消える。それを聞くと、ライダーは即答した。

「当然、後者であろう」

「……私もそう思う」

たとえ逃げてみても、この結界がその径を広げられる可能性もなくはないし、そして私達を素通りして耀子を狙うことも絶対には言い切れない。やはり危険の元は根本から断つてしまうのが一番の策なのだ。

「フン。なんだ、たまには意見が合うではないか。で、どうするのだ？ 敵の位置はわかるのか」

大体からして、コイツが逃げるといふ提案をすんなり受けるとは思えない。

「……ライダー、四方に殺気を放つてどのくらいの範囲を探れる？」



「せいぜい四半里といったところだ。しかしこちらの位置も敵に知れるぞ?」

「……やって。そのほうがあんたもがやりやすいでしょ」

「フフン。——心得た!」

ライダーが嬉々として吼えると同時に、凄まじい波動が解き放たれたのが彼の懐にいた私にも解った。

敵が誰なのか、この時点ではまったくわからなかった。しかし、奇妙な感覚があった。もとめていたものが自分から向かってきてくれたような感覚だ。

不意に紅の騎馬が足を止めた。

「……ライダー」

「うむ、居るな。フフン。特大の殺気の持ち主が応えおったぞ。正面だ」

言われてその方に目を凝らすと、まるで靄のように霞む人影がおぼろげに見えたような気がした。

それが矢庭に輪郭を際立たせ、瞬く間に実体を得て、いつの間にか眼前には目を逸らすことさえかなわなような存在感を放つ一人の益荒男の姿が浮き上がってきた。

この結界の中で悠然と佇んでいる以上、それはこの霧を私達に仕掛けた本人か、またはその従僕でしかありえない。

いかにも無骨な西洋のものと思われるカブトとチェーンメイルを纏った巨漢だった。まず見るものの目を引き付けるのは、鳩尾のあたりまで伸びている立派な髭だろう。むしろひげの中に顔が埋まっているような感さえある。ずんぐりした樽のような恰幅のいい巨体。

身長2メートルをゆうに超えるライダーに比べれば上背こそ僅かに譲るものの、その重厚な装備の上からでも容易に窺える筋肉の隆々たる起こりを見れば、その膂力が決してライダーに引けを取らぬであろうことは想像に難くなかった。

と思う暇こそあらず、まずは巨漢が真っ直ぐにこちらに向かつてきた。その大樽のような巨体からは想像もできぬほどの足捌きであり、スピードだった。

「フーン…面白い！」

言うや否や、ライダーは私を騎馬の上に残し、単身地に降り立って、こちらに向かつてくる髭の男に向き直った。ライダーは真正面から受けてたつつもりなのだ。私もあえてそれを止めようとは思わなかった。

「……ライダー！」

掛けた声に制止の意味ではなく、むしろその行為を容認してのことだった。

「せいぜい安心してそこに居れい！」

樽のような漢は美しい模様の浮かぶ幅広の片手剣を振るって迫る。見たところ、あれ

はヴァイキング・ソードというものだろうか？

「フン。——こおおおおおッ！」

ライダーは大上段に掲げ上げた戟を、まるで大斧のように掲げて眼前の漢にたたきつけた。

髭の男は避けなかった。ただ剣を頭上に掲げ、まるで駒のようにその丸い身体を回転させ、ギロチンの刃よろしく落下してくるその分厚い刃をいなしたのだ。

男の動きはそこで止まらなかった。男の武器はそれなりの長さを持つ片手剣だが、対して男よりさらに上背のあるライダーが手にするのは三メートルほどもあろうかという長大な戟だ。

本来、馬上で使われるものだから当然なのだが、やはり懐に入られるとライダーの方の分が悪い。

当然の選択として、長剣の男は剣の間合い、ショートレンジでの戦闘を挑んだのだ。

「——猪口才な！」

といって、胴を狙ってきた刃をライダーは戟の柄で受けようとしたのだが、セイバーの剣筋がそこで矢庭に変化した。

強靱な手首の反しによる片手剣独特のトリッキーな軌道変化である。

「——フン！」

浅い、感嘆とも取れる呻きを上げて、ライダーはそれを紙一重で躲す。髭の戦士の縦横無尽の斬撃は止まらない。

それが凄まじい速度と重さで、しかも断間なく繰り出されてくる。

その野太い腕に見合いの腕力で、打ちおろされたと見えた剣筋が咄嗟に横薙ぎに変化し、横薙ぎに払われたかと思えば、今度は勢いも殺さぬままに剣先が回転して鋭利な突きを放ってくるのである。

これにはさしものライダーも舌を巻いたと見えて、すぐさま戟の間合いを生かすべく距離をあげようとした。

無論、それを安易に許す相手ではなかったが、ライダーは咄嗟に物理的干渉力を内包した念意である「覇刃」をばら撒いて、強引に間合いをミドルレンジ、長柄の間合いまで押し返した。

反射神経を増強していたおかげで、私にも何とかその闘争の詳細が確認できたのだが、それ以上のこととなるとお手上げであった。

おそらくだが、私にはとても知覚しきれないほどの攻防が繰り広げられていることは想像に難くなかった。

それはつまり、先のランサー以上にライダーが全力を尽くさねばならない敵だということだ。

不可視の刃でありながら、その殺意の念の、あまりの濃度ゆえに英霊と呼ばれるレベルの相手には用意に察知されてしまうのがこの「覇刃」の難点なのだが、しかし何者であれ、一目見れば驚愕の色の端程度はその顔に上らせるはずの絶技であった。

この髭の戦士がそうならなかったのは、やはりこの敵が最初からあのランサーとライダーとの死闘を観察し、ライダーの絶技が持つ摂理を看破しているが故であるうと思われた。

「ほほう、——セイバーと見た。フフン。なるほどここで頂上対決も悪くないではないか」

ライダーは唸るような声で問うた。男は答えない。ただ、掲げられた美しい波紋のなびく剣がその問いを是として煌めいていた。

私の見立てもライダーと同様であった。あれはまさしく宝具に違いない。剣の宝具を持つサーヴァントそれ即ち剣の英霊『セイバー』でしかありえない。

ついで無言のまま、不意にセイバーが跳んだ。まるで飛燕の如く跳び退ると、そのまま周囲の霧に剣を振るい、虚空にルーンを刻んだ。

すばやく奔った切っ先を私は目で追った。それは原初の十八のルーンではなく、より洗練され波及していったという後世のルーン文字のようであった。

この男も魔術を使うのか？——あらためて考えると不可解ではあった。たった今

セイバーだと看破した相手がこうもなれた手つきで魔術を使用するというのが何処かで引つ掛かった。

とはいえ魔法が生きた時代に生きた戦士なら多少なりとも魔術の心得があつてもおかしくない。それほど肝を抜かれる話でもないのだが、どこかで引つ掛かりを覚えるのだ。私は何かを見落としているのではないだろうか――？

描かれたのは私の記憶が確かなら、まず勝利(テュール)とイチイ(ユル)。それに氷(イス)豊穰(イング)収穫(ヤラ)のルーン。それらが溶け混じるように周囲の霧を巻き込んで足元の地表の落ち、氷雪の塊のようになった。

そこから見る間に一本の氷の枝が芽吹き、伸長し始めた。それらは次第に確固とした形状を獲得していくようであった。

セイバーが跳び退つてから、ここまでに必要な時間はコンマ数秒というところであった。

一時の停滞を挟んで、ライダーは突貫した。後手に回ることのリスクを懸念しての英断——というよりは、やはり他にやり方を知らないだけなのではないかという感も否めないではない。

前進と共にライダーは戟を回転させ、覇刃を波状にばら撒いた。周囲の霧が切り裂かれ、攪拌されてその刃の存在を私の視覚に教える。

乱れ飛ぶ刃の軌道は、さすがに一本の剣で受けきることは容易でない。波状の刃群だといえる。しかし今度のセイバーは下がらなかつた。凝縮し、伸長と成形をなしていた氷枝を空いていたセイバーの野太い左手が掴み取り、執り成したのだ。

すると、それはいつの間にか一振りの重厚な戦斧となつていた。

なんと、セイバーは右手に剛剣、左手には氷斧を執り、双方を交錯、回転、斬舞させ、無数に跳んでくる覇刃をガードしながら前進を始めたのだ。

自在に扱うのにはそれなりの膂力と手首（リスト）の強さが必要になる反面、片手剣の利点は、もう一方の手に、盾なり斧なり短剣なりを持つことで戦術に幅をつけやすいという点にある。

乱れ飛ぶ覇刃と戟を再び鮮やかな手練によつてかいくぐつたセイバーが剣の間合いにまで踏み込むと、ライダーは咄嗟に獲物を前にした虎の如く身を伏せ、そして挟み込むように見舞われたセイバーの剣と斧を躡わし、一刹那の後にまるで羽のように虚空へ跳びたつた。

間髪入れず、セイバーは抜け目無く左手の斧を宙空のライダーめがけて投擲していった。

回転する大斧は放たれるやいなや氷の粒へと自ら粉碎、分解して再度凝結し、今度は複数の手斧（ハチエツト）となつて空中で回避のかなわぬライダーに迫る。

傍から見ていた私にしても、今のライダーにはそれらを覇刃でことごとく打ち落とす以外の防衛手段はないように思われた。

迫り来るのが一振りの大斧だけならいざ知らず、散弾のごとき無数の刃とあつては戟の一振りで防げる道理もない。

しかし次の瞬間、何時の間にか、地表から姿を消していたセイバーが宙空にいるはずのライダーの頭上を取っていたのだ。

セイバーは氷斧の投擲と同時に跳躍していたのだ。

ハチエツトの群を迎撃した刹那の間隙を突いて、大上段からライダーに剣を見舞おうと言う意図あつてのことだろう。

同じ空中にいるなら、上を取ったほうが絶対的に優位に立つことはいうまでもないことだ。

ライダーの覇刃といえどもその射出は眼制限ではなく、全くの断間なく放つこともできない。

それまでの攻防でセイバーもそれを見ぬいていたのだろう。相手は最良のサーヴァントと呼ばれる剣士のクラス、セイバー。以前に一度技を見られていることを踏まえれば、むしろ当然のことだといわざるを得ない。

しかし、その最良のサーヴァントは宙空で泡を食うこととなつた。なぜなら、今まさ



に頭上を取った筈の敵が、なぜか次の瞬間には己の頭上にいたからである。

「フンッ。——その手は食わん！」

呵々と笑いを含んだような、威勢のいい声が弾けた。ほぼ同時に硬い金属音が響いて、僅かな血煙が濃い霧に入り混じった。

当事者のセイバーが今の攻防の意味を理解しているかは定かではないが、第三者である私にはよくわかった。

以前にも述べたが、サーヴァントといえども空を飛ぶ能力は常備されていない。故にセイバーの攻撃を避けて後方に跳び上がったライダーは通常ならそれ以上身動きできず、自由落下に任せて地に着地するしかないはずだった。

故にその時点で拡散して到来するハチエットの群から身を護るには、物理的干渉力を備えた殺気である「覇刃」によってそれらを迎撃するしかないと思われた。

セイバーの狙いもそれだったと思われる。虚空でハチエットを迎撃したライダーの隙を突き、頭上の有利を得て一太刀で勝負を決しようとしたのだ。

しかしそれは失敗に終わった。ライダーはセイバーの攻撃を読んでおり、己が放った覇刃を足がかりとして宙空から更に上方へと移動してそれを回避したのだ。

しかし私がやったように自分の足でやったのではさしものライダーも、無傷ではいられまい。故にライダーはある方法によってこの絶技を成し遂げたのだ。

その方法とは、まず横一文字の覇刃を自らの眼前に放ち、左脇に抱えた戟の枝、直刃の脇に添えられた月牙をその覇刃に引つ掛けたのだ。

そうすると物理的干渉力を持つ覇刃は無論戟を引つ掛けたまま前進することになる。ライダーはその推力を支柱のように利用して己を振り子のように斜め上方へと運んだのだ。

つまりライダーは覇刃で何も無い空間に支点を作り、それを利用して逆上がりの要領で己をセイバーの頭上へと運んだということになる。

この場合、月牙が鉄棒を握る胴体、ライダー自身が情報へ駆け上がる足先に相当する。無論、その状態では戟は攻撃に使えない。よって、ライダーは空いた方の右手で腰の剣を抜き、逆にセイバーの脳天へ打ち下ろした、というわけである。

「フーン。賢しいな、この髭達磨め！」

間合いを保って着地したライダーは口角を捻じ曲げて呟いた。実に邪悪で、実に良い笑顔を満面に浮かべている。

言うなれば——メチャクチャに楽しそうだ。こんな展開を心底待ち侘びていたのだと、言下に語らずともそう顔に書いてある。そんな感じだ。

まったく困った奴である。が、しかし——今だけは、それがひどく頼もしくもあるのも事実だ。

同時に危うげなく着地していたセイバーのカブトの縁には、僅かな亀裂が入り、長い髭の先からは僅かながら紅い鮮血が滴っていた。

「……」

私には深い髭に埋もれたセイバーの表情は読み取れなかった。

ただその冷やかな眼光から、決して激昂してはいないことが見て取れた。敵は徹底して冷静（クール）な男だ。

その姿が、なぜかますます私の意識外で警鐘を鳴らす、動悸が早鐘をうち、冷たい汗が滲んでくる。

何故？ そんなものを感じる必要があるものか！ 私はそれを意図的にその危惧打ち払った、事実として、ライダーはその冷厳たる威容を誇るあの最良のサーヴァントに、決して負けていけないではないか！

私が己を無理にでも鼓舞しようとした、そのときであった。

——セイバー、どうやら今度の敵は手強そうだな——

まるで私の不安を具現化したかのような声が、地の底から低く轟くようにして私の耳と心胆とに届いた。

まるで背骨を直に鷲づかみにされたかのような感覚に、私の総身は囚われてしまった。

視線さえ動かすことの出来ない私の眼前、そのはるか先で、奈落のような深い闇の間を掻き分け遊泳するようにして、赤い外套が——一瞬だけ閃いた。

息を呑む間に、周囲の電灯が一斉に弾けた。同時に信号機や道端の自動販売機までもが爆ぜ、灯火としての役を失って沈黙した。

ただでさえ暗かった周囲は、途端に本当の闇そのものに吞まれることになった。私は指先を震わせながら目蓋に軟膏を塗りつけ、暗くなつた視界を補填するよう努めた。

そしてそこに、——間違いなく一人の洒脱な紳士の姿を見つけた。

黒のシルクハットを被り、黒檀のような燕尾服に身を包んだ長身。手には漆黒のステッキを持ち、薄墨のようなシルエツトを、むしろ白々しく闇間にのぞかせるその威容。

そしてその五体を包むのは、まるで血に染めたかのような、むしろ露骨に過ぎる真赤な外套。

その鮮烈なる赤は、たとえば魔術を使わずとも闇の中に浮かびあがるように見えたかもしれない。

やはりお前だったか！ 私は内心で叫んでいた。

予感があつたのだ。今こそ追い求め続けた音的との邂逅の時であつた。そう、ヤツこそが赤い外套の悪魔紳士。またの名を、魔術師——夜鳴手錐人。

傍らのセイバーとは違い、控えめに整えられた口ひげの向こうで紳士は優雅な笑いを

たたえていた。

私はその威容を見つめながら、それだけで気圧されそうになっていた。さすがは御三家の一角、私などとは魔の密度も年季も桁が違いすぎる。

その瞳が不意に私の視線を吸着した。

抵抗する間もなく、私はその瞳の奥にあるものを見せ付けられた。

憎悪であろうか、情欲であろうか、兎角、何か原始的な、凶悪な衝動のようなものがぎらぎらと光を放っているようだった。

視線は何の魔も孕んではいなかった。持っていないかったか、使う気が無かったのかは知らないが、もしも彼が高位の魔眼の持ち主であったなら、勝負はここで決まっていただろう。

私は必死に視線を外してライダーを呼んだ。

「……ライダー、私を下ろして」

ライダーは何も言おうとせず、ただ戟をふるって英馬を月牙の輝きで包み込んだ。

ライダーとて解っているのだろう。ここからは極力魔力を温存しなければならない。この敵はライダーをもつてしても、全力でぶつからねば到底勝ち目の無い敵なのだ。

ライダーとセイバーとは距離を開けて対峙したままだった。英馬の守りを失った私は五体を獣化の魔術で変容させ、ライダーの側に移動した。

隙無く斜に構えたままのライダーは、私を横目で舐めてチツと舌打ちを漏らした。足手まといだとしても言いたげだった。

「何をしとる。いいからオレ様の背に……お、おい！」

ライダーもまたあの赤い外套の男の脅威を看破していたのだろう。私ではあの男の相手にはならないと目星をつけたのかもしれない。

しかし、私はあえてライダーの前に出た。ここで引き下がっても意味はないのだ。探し待ち望んでいた相手が目の前に現れてくれたのだから。

「……どうして私達を？」

かすれたような声で問うた私に紳士も流麗な魔声で応えた。

「おかしなことを訊くのだね。可愛らしいお嬢さん。君はそのサーヴァントのマスターであり、私はこのセイバーのマスターだ。

マスターがマスターを狙い、そして互いに殺しあうのがこの儀式のはずだ。……そしてバーサーカーとキャスターは消滅し、アサシンは私が返り討ちにした。静観を護る島原とシユタウフエンを覗けば残っているのは私と君だけだ。

とりあえず、まずは野にいる君で試運転（・・・）をするのが良いと思っただけのことだよ。アサシンは、あまりにあっけなかつたのでね」

聞こえてくる声はよく通って明瞭な響きを含み、さして乱れてもいない己が襟元をも

几帳面に正す仕草は一見、この男が、本当に事の貴賤を勝手知る紳士のそれと見えた。

「……そのキャスターとバーサーカーをやったのは、私達」

「それは驚いた。今代の島原とシユタウフエンは随分と怠慢なようだ。……あるいは、君達が優秀だということかな？」

当然知られているという前提で吐いた虚勢だったのだが、言葉には率直な響きしかない。妙な話だと思えた。コイツはこれまでの儀式の情報を何も持っていないようだった。

「どうということなのだろうか？　まるで数日前まで寝ていたかのようなことを言い出すものだ。」

「……ライダー、距離を詰めて戦って、それから……」

兎角、これ以上の問答は無用と判断した。

向こうは最初からヤル気なのだ。私は小声で指示を出す。できればこのまま一気に決めたい。長引けば、不利なのはこちらなのだ。

魔術全般にいえることではあるが、魔術を使うというのは得てして間接的な行為である。とりわけ、ルーン魔術はその性質上何らかの物体にルーン文字を刻印することで効果を発揮する。

それ故に、これを戦闘に用いようとするなら、事前に己の魔力を刻印した物品を用意

するか、近場にあるものに刻印してそのための媒介に仕立てる必要がある。つまり詠唱を必要とする自然干渉の魔術以上にタイムラグを必要とするのだ。

つまり刹那を争う戦闘の場においては使用しにくい種類の魔術だということになる。付け入る隙があるとすれば、そこだ。

とにかく、近接戦に持ち込んで、敵が新たにルーン魔術を使用する前にセイバーを制する。そして一気に——そのマスターまで。

「……それから、宝具で一気にカタをつけて」

「フン。さて——そう、うまくいくかな」

ライダーもまた、このまま上手く行かないことは察しているようだった。しかし言葉とは裏腹に、その横顔には喜々とした獰猛な愉悅の表情が張り付いていた。

「ふむ、これは手段を選んでいない場合ではないようだな、セイバー」

背後からの紳士の声に、ずんぐりとしたセイバーの巨体が応えるように縮んだ。

そこから発せられる圧力、そしてそこから喚起されるイメージはまるで巨大で強靱なバネの塊がこれから反動をつけて弾けようとするかのようにであった。

そして突撃しようとするライダーを前に、しかしそこでセイバーは奇妙な動作をした。

手にした剣を、まるで突きでもしようとするかのように抱え込んだのだ。そしてあい



た左手をその刀身に伸ばし、指をその剣の腹に走らせ始めた。

その奇妙な動作に私はどうしようもない悪寒を感じた。

セイバーの野太い指は、その力強い駆動からは想像もできないほどの繊細さ白刃の上を舞い、——描きいれられた文字は、またもや「ルーン」だ。そう、これが本来のルーン魔術の使い方なのだ。それは、いい。

だが問題はそこではない。最大の問題は——、

「……駄目、ライダー、引いて！」

私はここでようやく己の、あまりにも致命的な考え違い（……）を自覚した。

先ほどの一連の怪異、アレを引き起こしていたのは魔術師であるキリヒトではなく、すべてセイバー単独で行われたことだったのだ。

あれほどの魔術を、剣の英霊であるはずのセイバーが、しかも連続で使用したという事実。

そうだ。これはあまりにも想定外の事態ではないか。

私はライダーの直接的な戦闘力を加味して、たとえセイバーのサーヴァントといえども真正面からなら恐れるに足りずと見ていたのだ。

しかし、それは真正面からの戦闘を前提としての話だ。即ち——私の計算では敵が、それもセイバーのサーヴァントが同時に高位の魔術使い（……）であった場合

の想定をしていないということだ。

確かにライダーは通常戦闘においては強い、最強の存在だ。しかしその反面、魔術に対する護りは薄い。

つまりキャスターをはじめとする魔術の使い手こそがライダーにとつての鬼門なのだ——ッ！

剣の腹に完成されたルーン文字に爆発的な魔力が循環して満ちていく。

魔術を使う気なのだ。そして、おそらくあれがあのセイバーの宝具なのだろうと察せられた、その効果は——あの刀身にルーン魔術の効果が付属することだろうか？

それなら、それだけなら、まだ勝機はあるはず。——

しかし突っ込んできたセイバーの剣と刃を合わせた瞬間、ライダーの巨体は、私の希望的観測と共に木っ端の如く吹き飛ばされた。

ライダーの対魔力は最低限のEランク相当だが、それでも多少は魔術の威力を緩和できる筈だ。そして身体の頑強さも類を見ないであろう。

それがこうもあつけなく、レジストすらままならず打倒されるとは。考えたくはないが、そうとしか結論づけられない。

セイバーのふるう魔術は、明らかにAランクを超えていた。

状況は最悪に近い。あの剣の持つ魔術的哲理・能力は明らかだった。すぐに分かつて

しまった。

簡潔で、それ故に手に負えないほどの汎用性をもつ利器としての宝具。あの宝具は刀身に書き込まれたルーン魔術を最大レベルまで増幅して打ち出しているのだ。魔力、そして魔術の増幅機としての効果があるに違いない。

もつと早く気が付くべきだった。セイバーのクラスが魔術を使えるのはともかく、それがなべてAランク以上、しかもこれほど連発できるとは、たとえキャスターのサーヴァントでも限られた英霊だけだろう。

それを、サーヴァント中最優と言われるセイバーが行っているのだ。道理にかなわないわけだ。ライダーとあのセイバーとは、キャスターを相手取る以上に相性が悪いのだ。

「フーン！ まだまだあッ！」

先ほど吹き飛ばされていたライダーは、今のでさらに頭に血が上ったと見えて、私が止める間もなく形振りかなわずにセイバーに向けて奔った。

……これしか、手はないのかもしれない。セイバーの宝具が剣にルーン魔術を書き込むという動作を必要とするのは通常のルーン魔術と同様だ。

ならば、その動作を起こさせなければ、あの致命的な宝具を封じることができはす。ならば段間すら置かない接近戦にこそ勝機が——ッ。

しかし、その時突貫するライダーの目の前に割って入ったのは、セイバーのマスターである夜鳴手錐人本人であった。

私はさすがに己が目を疑った。これは向こうにとって自殺行為のはず。

しかしキリヒトは手にしたステッキでライダーの戟を受け止めると、逆にライダーを殴り返したのだ。

「——んがッ!？」

モロに入った。

ライダーの前進は止められ、頓狂な声が上がった。ライダーとしても慮外のことだったのだろう。

声にはダメメージよりもむしろ驚きの色が強い。当然だ。サーヴァントが魔術師に殴り飛ばされるなど、これを怪異といわずしてなんと言おう？

それでも魔術師の拳打など物の数ではないのか、ライダーは額に青筋を浮かべて反撃しようとする。

しかし、そこで「充填」を完了した剣を携えたセイバーがするりとキリヒトと位置を入れ替えライダーの眼前に躍り出た。

今度は下段から跳ね上がった剣が、爆ぜたかのように湧き起こり、隆起した大量の土砂を伴ってライダーを襲った。

劍を危うげなく受け止めたライダーだが、その身体が見る見るうちに何十tあるのかも定かでない土砂の壁に埋め込まれてしまった。

だがそこはライダーも唯の馬鹿ではない。今や隆起を止めた土塁は永久凍土の如く強靱に凝結し中のライダーを捕縛していたが、ライダーは覇刃によって事前に切れ目を入れていたらしい。

ライダーは拘束を力任せに粉碎し、巨岩の封印から晴れて自由になった岩猿よろしく土塁からの脱出を果たした。

それを見たセイバーが迫る。此度は常なる斬撃。ライダーはそれを受ける。しかし今度はセイバーの影から姿を現した魔術師、キリヒトが奇妙な色の光に濡れ光るステッキを振るう。

ライダーは更に念意の刃によってそれを迎撃するが、連続する二者の猛攻に曝される。

再び刀身に刻印を刻もうとしたセイバーに、ライダーは反応せざるを得ない。

セイバーの劍を弾き、致死の劍戟を防いだはいいが、しかし露になったのはこれ以上ない、隙。

死に体となったライダーの脇腹に向けて、赤い外套から覗いたイブニングコートの羅紗地が、夜に更なる漆黒のラインを引いた。

前言撤回だ。キリヒトは、あの魔術師は、打突によってライダーの巨体を、今度こそその背後にあった巨大な土塁ごと吹き飛ばし、道の反対側にあったビルに叩き込んだのだ。

サーヴァントにも勝るとも劣らない、規格外の膂力だ。いくらライダーでもアレで無傷と嘯くことは出来まい。

それから苛烈にライダーを攻め立てるセイバーとそのマスターは前衛と後衛、動かぬ筈の位置関係を常に入れ替えながら、通常ならばありえない変則攻撃を仕掛けてくる。

確かにその魔術師としても異常な戦闘力は不可解だ。確かに異常だ。しかし、ひとりこうして戦線を蚊帳の外から検分するに至って、真に訝るべき事柄は別に無くてはならない。

激しさを増す剣閃のさなか、ライダーの発する威があらうことか後退を始めた。それは膂力や威力によってのものではない。

その身体の、現行の世界への干渉力の低下によるものなのだ。

いくらサーヴァントといえども、全力で戦闘を続ければ否応なく消耗は避けられない。何より、果敢に戟を振るうライダーが切らす息よりも、私が行う吸気の精度こそが、危うい。

考えてもみれば、あのランサーとの戦闘も、バーサーカーとの闘いも、ライダーは全力ではなかった。

キヤスターが相手のときは、そもそも正面から戦えなかった。私がライダーの「本気」の魔力消費にさらされるのはこれが初めての経験なのだ。

どんどん魔力がライダーに吸い上げられていくせいで、私の魔力は枯渇しかかっていたのだ。ライダーが真に全力で戦うには、私が供給する魔力ではまるで足りていないのだ。

立っているだけの私が、一番消耗している。

しかしそれはもとより承知のことだ。ライダーがいくら強力でもそれは十分な魔力が供給されているという前提があつてのこと。

その起点が私である以上、このような事態は予想して然るべきものである。にもかかわらず、私がこうまで動揺せねばならないのは――、

この戦場において消耗しているのが、私たちだけだという事実故にである。

あのセイバーも、そして魔術師であるキリヒトすらも、あのライダーとこうまで打ち合っていないながら、まるで消耗していないのだ。

魔術師であるキリヒトがサーヴァントであるライダーと打ち合えるのかは、ある程度察しがついている。これはカラクリと言うほどのことでもない。

あの悪魔紳士の五体が、まるで人体の稼動現界を嘲笑うかのように駆動するたびに、その悪夢のような体躯の端々からは、なにか得体の知れぬ、液体とも気体とも、霊体とも物体とも付かない青、黄色、緑の混じったような、ようとして詳細の知れぬ靄のような光が濡れそぼりながら滲み出してくるのだ。

その性質までは計り知れないが、あれは間違いなく高密度の魔力で編まれたものに違いない。

それが常に視覚に訴えるほどに放出されているということは、つまりあの紅い外套の魔術師は総身から常に凄まじい魔力を放出しつづけているということだ。

それでもしなければ、何者であろうとも生身のままサーヴァントと肉弾戦を行うことなど出来はしない。

不可解なのは、にもかかわらず現時点でのキリヒトにまるで消耗がみられないということだ。魔力の貯蔵にそれほど自身があるということなのか。それともこの怪異には何らかの理由があるということなのだろうか。

この不条理を押し通してしまうような、何らかの要因が。

だが、現状でそれを看破している暇はない。このままではジリ貧だ。どうあつてもこちらのスタミナ切れで勝負がついてしまう。

兎角、このまま二体一ではライダーに勝ち目はない。敵のコンビネーションだけでも



崩せれば――。

すでに消耗の激しい私には直接の戦闘は荷が勝ちすぎるだろうが、この身を囿にすれば多少の陽動くらいにはなるはずだ。

そう思い、一定の距離を持つていた場所から戦闘の渦中に近づこうと四足にて前に踏み出した――刹那。

そのときキリヒトの持つているステッキから、なにか、発光性の流体のようなものが溢れだし、それが振るわれると光が波状になって十メートル以上距離を取っていた私を吹き飛ばした。

辛うじて重篤な負傷こそ免れたが、直撃していたなら終わっていたことだろう。私の代わりにその光の鞭の標的となった軽自動車が真つ二つに切り裂かれていたのだから。近づくことすらままならないのか――

私は臍を噛んで更に後退した。確かにサーヴァントと肉弾戦を行うような輩に対して些か思慮が無さ過ぎた。

だが、それでも一瞬とはいえキリヒトの注意がこちらに向くことには違いが無い。そうすればライダーが突破口を開く糸口にはなるかも知れない。

私が再三近づこうとすると、すると、キリヒトは一時セイバーにライダーの相手を任せ、こちらに向き直り、左手を掲げ上げた。

すると、近くの駐車場に止められていた大量の車に向かってその五体から滲み出す光る流体の筋が延びた。

まるで光る巨大な蜘蛛の巣を見ているようであった。すると途端にそれらの車が息を吹き返したかのように走り始めたではないか。

それらは縦横無尽に走り回り、私を追い回し始めたのだ。これでは牽制も囿もままならない。わが身を護るだけで精一杯だった。

それを見たライダーが吼える。

「余計な事はするな！ ええい、こうなればすぐにも——終わらせてくれるわッ！」  
ライダーは今度こそ進退窮まったのか戟を振り乱し、再度時空の彼方から真紅の愛馬を呼びだす。

見覚えのある紅い光が昏い虚空に湧き起こり、私を追いまわしていた車両群を軒並み粉碎してその威容を現した。

烈火の香気に濡れ光る双眸を滾らせ、英馬は近場にいたセイバーに向けて、「あな怨敵や、いざ轢殺せん」とばかりに嘶き、加速する。

伝説の英馬の出現に際してキリヒトは赤い外套を翻して姿を消し、セイバーもライダーと距離を取って英馬に向き直る。——が、さしもの最良のサーヴァントも、伝説の巨馬相手の肉弾戦は分が悪い。

咄嗟に巨大な氷壁を作り出すと、身を翻していつの間にか闇の中に逃げ込んでいたマスタアの元まで後退した。

「どうしたア？ フフン。敵の頭数が揃ったら随分と意気地がなくなったな」

いかなる火気をもつてしても融解までに半日は掛かりそうと思える巨大な氷塊を、しかしまるで有つて無きが如く踏み碎き、果ては一瞬で気化させて悠然と歩み出る巨馬は、傍らで嘯くライダーと共に不敵な嘶きを漏らす。

その凄まじい威容に例えようも無い誇らしきさえ感じて、私にも暗雲を切り裂くような光明が見えた。

ようやく冷えて凝り固まった胸の奥に安堵のようなものが沸きあがってきた。もはや人馬揃った状態のライダーに勝てる英霊など居ようとは思われなかった。

そうだ、何も最初から悩む事など無かつたのではないか。最初からこうしていれば——しかしそのとき、意図せぬ呻きのようなものが私の口から漏れた。

「……………ツ！」

そこで、唐突に、私の時間は終わってしまった。

私の体は強制的に外装を解かれ、冷たい路上に跪いてしまった。

ライダーがここに来て全力の、更に全力での戦闘にうって出たために私のほうがまとも動くことも出来ないほどに消耗してしまったのだ。

迂闊だった。自分の状態さえ把握できていなかっただなんて……………

「どうしたあ?!

ライダーが私を見て吼えた。——バカ! 黙っていれば奴らにはまだ気付かれなかったものを……………!

私は地面に向けて荒い息を吐きながらそんなことを考えていた。意識はしつかりしていた。ただ、身体にはまったく余力が残っておらず、身震いすることしかできなかった。

敵が、キリヒトとセイバーがどう動くのかを確認することさえ今の私は出来ない。しかし——例え相手が誰であれ、この好機を逃すものなどあろうはずもない。

私の手の甲からは二画目の令呪が失われた。私にできることはもう、これしか残っていないかった。

「——ぬう?!」

ライダーとその騎馬たる巨馬の五体には強制力が働いたはずだ。

もはや指示をすることさえおぼつかない私は、令呪の強制力によつて己の意思を示すしかない。私を連れて全速力で逃げろ、と聞くまでも無くライダーがわかってくれればいいのだが。——

しかし、懸念は杞憂に終わり、次の瞬間には私の体は真紅の馬上にいた。

「おのれ、余計な真似を！」

案の定そんな事をいいながらも、ライダーの行動は迅速で正確だった。

さしものライダーも令呪の強制力はそれに抗うことを許されなかった。——というよりは、尋常でない状態の私を見て、これではもはやこれ以上の戦闘が無理だと判断せざるを得なかったのかもしれない。

たとえ令呪によってであろうと、己が意に違う命令には抗うのがコイツの流儀だろうから。

兎角、その疾走力は凄まじいものだった。私達はあつという間にセイバーとキリヒトを置き去りにした。

もう目が上手く機能しないが私も体感でスピードを感じていた。良かった、これなら何とか逃げさせる——

「な、なんだあツ!？」

——はず、だった。ライダーが似合わぬような頓狂な声を上げたのが耳にだけ届いた。

それで、蹲ることしか出来ない私にも状況を察することが出来た。霧の結界から抜け出したのにもかかわらず、キリヒトが前に居るのだ。

無論、傍らにはセイバーもいるはずだ。いかな英霊であれ、魔術師であれ、この伝説

の英馬を追い越せるものが居ようとは思えない。

セイバーだけなら霊体化するという手もあるはずだが、それならライダーが驚愕する筈は無い。しかしマスターである錐人までもが前に居るということにはまったくもって理解できない展開だ。

ライダーはさらに方向転換をしてさらに疾走させるが、その度に、またもや同じ展開の繰り返しだった。

「——ちいさいッ、どういうことだ！」

私には解かった。ライダーは進退窮まっつて令呪すら無視して突貫を想っている。——駄目だ！ それだけは。

「…………ア、め……………ラ、…………イ、……………り、……………に……………」

薄れ行く意識の中で、私は確かかどうかでもない指示を出していた。

それが私に出来たすべてだった。それが聞こえているのかどうかも確認しようが無いが、それでも——それでも私はライダーのマスターだ。

出来る事をしなければならぬ。成さねばならぬことを、手放してならない。

考え続けていた、奴らの異常なスタミナへの疑問、対策、まだ結論さえ出ていない虚ろな思考を辿るようにして、蚊の泣くような、寝言のような呻きを吐き漏らし続けた。

それがライダーの耳に届いたのか、そしてそれを聞き留めてくれたのか、それすら知る術もなく、私の意識はそこで暗転し始める。

嗚呼、もしもこのまま目覚めることが無ければ、これで、終わりなのか。

これで、こんな終わり方で——それが、認識できた私の最後の思考だった。

## 五章一

(金曜日・夕方)

暗い夜の道を、私は一人で歩いている。

長い、長い道のりだった。どうしてそんな所にいたのか、今ではおぼろげにしか思い出せない。

誰かに手を引かれている。

大きな手だったのだけを覚えている。大人の、男の人の手だった。

それだけがなんだかひどく印象に残っていた。そのまま車に乗せられて知らない街に行った。

しかし、なぜか私はそこから家に帰ろうと思って、夜になってから一晩かけて歩いて家に帰ったのだ。

長い道のりだった。帰ってから足がピリピリと痛んだのをおぼえている。

何でそんなことをしたのか、実はよくわからない。

それについての確かな記憶があるわけではないのだが、推察するに、あれは私の父



だったのだろう。

おそらく、父は母から私を救い出そうとしたのだとおもわれる。

私の認識の上で、分かる限りではあるが、母のことを話そう。

社会的常識を踏まえて客観的に評するなら、母は落伍者であった。

生家はそれなりに資産を持っているところらしかったが、それゆえに母はそれまでの生涯において金銭以外の価値を自分の内に見つけることができなかつた。

美しさと富とを天と両親に与えられて育つた母は、ただおだてられて二十余年の月日を生き、そして自分の価値は総て外面的な部分に付属するものでしかないことに気付いたのだ。

それから母のとつた行動をどのように評するかは個人の判断に任せるしかないだろう。

少なくとも私はそれを批判できない。私はその母の行為を起点としてこの世に誕生することになったのだから。

母は黒魔術に耽溺するようになった。己の内面的な価値を渴望する母はそのうちに己のルーツに希望を託すようになったのだ。

当初は己の血筋の起源に、何か他者とは隔絶した価値がないものかと躍起になって調べ始めたのが最初らしい。

もともとが古い家系だったこともあり、散逸していた文献だけでもかなりの量があったらしいが、母はしばらくの間社会との関係を絶ってそれに没頭した。

そして数百年前に、祖先の血に混じったとされる異邦の兆しを発見したのである。

その詳細についてまでは知りようがなかったらしいが、曰く、私達の祖には十三世紀から十四世紀に掛けて欧州から逃れてきた本物の魔女と交わった者がいたらしいのである。

何から逃れてきたのかは、記すまでもないことだ。

あの時代、まるで雑草でも刈るように魔女と名の付くものを、真偽さえ問わず皆殺しにした狂気の殺戮集団がいたことは今更語るまでもないことである。

どう考えても、普通ならそこであまりに荒唐無稽だと断じて、或いは笑って己が徒勞に終止符を打つものだと思うのだが、母の場合は運が良いというのか悪いというのか、その同時期に見つけてしまっていたのだ。

本物の魔術師であるわが師、ルベル・フォン・シユタウフェンを。

母は狂喜したに違いない。そのままの勢いで母は魔道の探索へ乗り出すことになった。

ここからは師の証言に基づいてことである。母はその頃日本に來日して來たばかりだった師のことをどこからか嗅ぎつけ、単身魔術の指導を願ってきたのだという。

まるで何かに取り付かれたかのような眼をしていた、とは師の言であった。

本来ならそれは真つ当な魔術師が受けるはずの無い申し出だったが、師はこれを受け入れたという。

着の身着のまま来日したばかりだった師は弟子というよりもパトロンとして母を遇したのである。

それ以来、プライベートにおいてはどこかルーズなところのある師は自堕落な母とは悪友のような関係となり、母が死ぬまでその付き合いは続いた。

数年ほどそのような付き合いが続いていたその頃、師は本国にある家門の有力者たちからの薦めで次の代のシユタウフエンを生む義務を課されており、すでに処置が施されていた。

それを聞いた母もまた魔女としての血を繋いでくれる子供を欲しがった。

すでに予想はついているかとは思ふが、そうして生まれたのが、私というわけだ。

母はそのために父と婚約したのだという。父は魔術のことについては何も知らない一般人でしかなかったが、遠縁ではあるもののあの島原の分家筋らしく、何代かに一人という割合で常人とは少々異なる人間が生まれるという、曰く付きの家柄だったそう

だ。しかし、——これは推察でしかないが、——父自身はそんなことは関係なく母を愛し

ていたようだった。

父は母と旧知の仲で、平凡ではあるが誠実な人間だったという。しかし、というよりもそれ故に、というべきか。

破局はすぐに訪れた。

当然といえば当然だ。母の目的は後継者としての子供を手に入れることだけだったのだし、父は母が裏でやっていることを知りながら看過できるほど性根の太い人間ではなかった。

そしてあの日、寒い夜だった気がする。

あの日、決別した二人は私のことについて言い争っていた。そして声が聞こえなくなり、父が私の手を取って歩き出した。

おそらく父はそのころになって、ようやく母が幼い私に何をしていたのかを知ったのだろう。

加えて、率直に己の心を告白するならば、私はそれほど母が好きだったわけではないのだ。

いつもイライラして酒びたりで、私がいるのも構わずに平気で男を招きいれて昼間から淫猥な行為にふけるような人だった。

たまに優しいことがあっても、次の瞬間にはまるで嵐の夜のように様相を変えて怒鳴

り始めたりもする。自堕落で、破壊的で、情緒が安定しないところがあった。

きっと、自分が魔女に連なる血筋ではあっても、それで魔女になれるわけではない。結局、自分はただそういうルーツを持つていただけの凡俗な人間なのだと思い知つていたからなのかもしれない。

それゆえに母は私を魔女にしようと躍起になっていたのだ。父の目には……それが虐待と映つたのかもしれない。

ただ、事実として、私は父の家から一晩かけて母のもとへ帰つたのだ。

私は、きっと、父のことを嫌つていたのではないと思う。父も、私という存在に対して邪悪な念を抱いていたわけではないのだと思う。

私の手を引いた、あの大きな手は掌は、とても暖かくて、優しげだった。

もしかしたら、それは、血の繋がりによるただの責任感でしかなかったのかもしれないし、事実を知らぬが故の外的な憐れみでしかなかったのかもしれない。

それでもそれが父の愛情だったのだと、頭のどこかで、私は知つていたのだ。私は確かに愛されていたのだと、ちゃんと知つていた。

それでも私は帰つた。そういうものを、丸ごと、振り切つて。

朝方になつて家に帰つてきた私を見つけて、母は子供のよう泣きながら私を抱きしめた。私は泣かなかつた。ただひどく満たされた想いがして、そのまま眠つてしまつ

た。

……考えてもみれば、おかしな話だ。一晩かけて、何十キロも歩いて実の母のもとへ帰ってきた子供が泣きもせず、母を愛おしいとも思わず、ただ満たされた、とは。——その後、父と母の間には師が仲介に入り、私達は師の屋敷に住み込むようになった。晩年の行いのせいで私財を食い潰してしまった母には、もう何も残っていなかったのだ。

そしてそれから数年の後に、母は枯れるようにして逝ってしまった。そして時を同じくして、それを追う様に、父も事故にあつてあつけなく死んだのだと、人伝に聞いた。私はそのまま師の屋敷に留まることになり、正式に魔女の弟子となった。そして——今に至る。この、戦場に。

今も母を心から愛していたとは言えないと思う。ただ、あの時の充足感が在ったから、私はここまでやってこれたのだ。

母のために魔女になることで、またあの気持ちにめぐり合えるのではないかと思つていたのだろうか。

だとすれば、私も動機の不純な人間だ。結局は充足という名の快感を得たいがためにこんな外法の儀式に参加してしているのだから……。

私が求めていたのはなんだったのだろうか、充足感。あの気持ちはいったいなんなの

だろう。

父の庇護を蔑ろにしてまで、求めたものはなんだのだろうか？

まるで手探りでその答えをさがるかのように問いを繰り返す内に、不意に柔らかな温もりを感じて、私は眼を覚ました。

暗い空間に横たえられている。周りを何か、馴染みのある柔らかな感触のものが取り囲んでいる。そして、とても暖かい。

丸くなった私の周囲を取り囲むようにしていたのは使い魔の黒猫たちだった。

それだけではない。顔見知りの使い魔予備軍の猫たちも勢ぞろいしている。皆、私のために集まってくれたらしい。

……映画であつたな、こんなシーン……

ビルから突き落とされて致命傷を負った女が猫の集団に命を吹き込まれて復活し、猫女としてよみがえる――。

そんなことを曖昧に考えながら、猫たちに礼を言つて身体を起こした。

「……なんてね。……みんな、ありがとう」

しかし、そのせいで揺り起こされたり、私の上から転げ落ちたりした猫たちからは抗議の声が上がった。どうやら皆寝床が動くことがお気に召さないらしい。

「……おいおい」

ツツコミを入れてみる。まあ、仕方がない。猫とはそういうものだ。気をあらためて、礼代わりに猫たちを一通り撫でこすってまわる。

とにかく、おかげで私は凍えずにすんだのだから、いくら礼をしてもしたりないくらいだ。……まあ、寒空の下で湯たんぼ代わりにされていた感もないのではないのだが……。

身体を調べてみる。取り敢えずはちゃんと生きているようだ。どうやら猫に跨がれて死体となつた後に蘇つたというわけではないらしい。

映画の話だけではなく実際に九州や四国では猫にまたがれると死者が蘇るといふ話があるらしい。類似の寓話は中国にもあるそうなの。

つらつらと、リハビリ代わりにそんな知識を回想してみる。どうでもいいことばかりではなく自分のパーソナリティや現在の状況等は滞りなく思い出すことができた。幸いにも頭の方は無事だったらしい。

使い魔達がそれぞれにストックしていた魔力を供給してくれたおかげで、枯渴しかかっていた魔力は補填されている。深かった傷のほうも取り敢えずは塞がっているようだ。

どうやら生き延びたらしい。ぼやけたままの頭を振ってようやくそれを確信できた。

私の使い魔たちは戦闘こそ行わないが、戦闘を行う場合は私の補給、補佐、後方支援



等に徹するように想定してある。

時には私の眼となり耳となり、あるときは器物や衣服に変容して私の身を護り、そして私の魔力が枯渇したなら魔力の補給も行うことができるのである。

よって、私が使い魔を前衛に使わないのにはそういう理由もあるのだ。

ストックしている魔力の量は使い魔によつてそれぞれ違う。

一軍（飼猫・幹部）の黒猫たちはほぼ私を満タンにできるだけの魔力をそれぞれにストックしており、二軍（半野良・正社員）三軍（顔見知り・パートタイム）以下はそれに順ずる形になる。

私自身の魔力の総量は微々たるものなので、本気で魔術戦をやるうと思うならこうした工夫が必要になってくるのだ。しかし魔力の総量が少ないということは逆に言えば完全回復にかかる魔力が少なくてすむということでもある。

物事には利点と難点とが背中合わせになっているものなのだ。

「……ありがと、グランパ。マーベルも来てくれたの？ ……レオ、耀子先生は大丈夫だった？」

顔に近い位置に陣取っていた一軍の使い魔たちはそれぞれにニャーニャーと鳴いて私の労をねぎらってくれる。

中には隠れ家に置いて来たはずのお腹の大きな雌猫、マーベルの姿もあった。私の危

機と知って駆けつけてくれたのだ。

レオに任せておいた担任教師の島原耀子も滞りなく病院に収容されたらしい。私はようやく安堵の息をはいた。

後は協会から派遣された魔術師達が、不可解な事故への事後処理等については万全を期してくれることだろう。

薄っぺらな毛布を羽織って外に出てみると、すでに辺りは夕刻の色合いを強めていた。少なくとも丸一日は経過している計算だ。私はかなりの時間眠り続けていたらしい。

ふと気が付くとせせらぎの音が聞こえていた。ここは何処なのだろうか？ どうやら山間の木小屋のようだが、どうやってここまで来たのか記憶がはっきりしない。

そういえば、ライダーは何処へ行っているのだろうか？ まだパスはつながっているが、しかし気配の所在がいまいちはっきりとしない。

私が寝かされていたのは、木小屋というよりも物置のような掘っ立て小屋だった。おそらくはかなり昔に使用されていた山荘の名残（・・・）のようなものなのだろう。

小屋の近くには適度な広さの更地があり、諸所に使い古された感のある材木が横たわっていた。

どうやら、私達は必死で逃走を続ける内に笹ヶ谷市の東側を丸く取り囲んでいる連峰

の奥深くに迷い込んでしまったようだった。

一昔前まではこの辺りに別荘なんぞを持ちたがる杞憂な人種がいたらしいのだが、今となつてはこの辺りに入り込む人間もなく、山荘の辺りには人の踏み込んだ跡さえなかつた。

私が状況把握に努めていると、背後から薪の爆ぜる音が跳ねた。振り向くと、小屋の陰になっている更地の隅で材木に腰掛けたライダーが私の寢床からあぶれたらしい猫たちと焚き火を囲んでいた。

「……………焚き火なんてしたら、ここにいて教えるようなものだと思うけど」

私は朱色の火の中へ微動だにせず視線を注いでいる大きな背中に声を掛けた。

薄れかかった夕日と周囲を取り囲む木々の作り出す仄暗い薄闇のせいか、その炎はとろとろとありもしない風に煽られるかのように揺らめいていた。

まるでこの空間ではその朱色の鬚りこそが陰であり、逆説的に影の代役を演じているかのようにであった。

「フン。なんだ、ようやく眼が覚めたのか」

「……………なんとかね……………」

「火のことは気にするな。たいして煙も出てはおらんし、どうせこのまま隠れてやり過ぎせるとも思つてはおるまい？ ならば英気を養うほうが先決であろうさ」

ライダーが振り向くと、ぼんやりとした影法師のような光景は矢庭に現実味を帯びた。確かに——煌々と燃える炎からは殆ど煙も出ていない。

「それに、こうして丸一日火をたいても何事もないのだから、気に病むこともあるまい。今来ないなら夜までは何も来やせんぞ。……ほれ、たいして残つたらんが、どうだ？ 今の内に食つておいたほうがいいぞ」

そう言つてライダーが四角い顎先でしめしたのは火にかけてある大鍋であつた。私の目は芒とした炎の仄明るさにばかり眼がいつてそれを失念していたのだ。

さて？ 小屋にあつたものだろうか？ とにかく近くまで歩み寄つてみると、獣臭い油の臭いがしてきた。どうやら得体の知れない大量の獣肉を煮込んでいたらしい。

見れば、ライダーの足許に広げられた青いビニールシートの上には小山のように積み上げられた血まみれの残骸、魚で言うところのアラのようなものが大量に転がっていた。集まつた猫たちはどうやらこれが目当てであるらしい。

「……………」

私がそれを無言で見つめると、視線に気付いたライダーは呑気そうな声で笑つた。

「フン。心配そんな顔をするな。足下の大事な猫を食つていたわけではない。食つたのは、ほれ、こいつだ」

そう言つてライダーが掲げたのは馬鹿でかいイノシシの頭だった。

先ほどのライダーの言から、そも、なぜ丸一日火を焚き続けなければならなかったのかと訝ってはいたのだが、どうやらライダーは捕まえたイノシシを解体して延々と鍋で煮込んで食っていたらしい。

「……呆れた」

私が心底脱力してそういうとライダーはガハハと声を上げて笑った。

「今朝まで生きとった新鮮な肉だ。ほぼ丸ごと食ったわけだからな、まあ、多少は腹と魔力の足しになったわい」

にしたって肉だけでも数十キロはあるだろうに、それをペろりと平らげるとは、あらためてこの男の貪欲さには恐れ入る限りだ。

しかし私は何もいえなかった。この事態のそもその要因は、私がライダーに十分な魔力を供給できていない事なのは明らかなのだ。

「さあ、足下も食え、食え。腹が減つていては反撃も何もままならんわ！ フン。実の戦でも、兵糧攻めほど恐ろしいものはない故な」

「……反撃……」

眩きながらも、私はズイツと力強く差し出された容器を受け取り猪鍋……とも呼べない煮込みを胃に流し込んだ。味のことはさて置いて、自分でも気が付かなかった空腹のおかげか、痞（つか）えることもなく肉と煮汁は胃に納まった。

飢えが満たされたことで、それまで寒気と共に体の諸所を蝕んでいた焦燥感やまるで底が無いかのような冷たい不安は薄れていった。

私は深く息をついて、ようやく顔に照り返してくる火の温度を感じることができた。

「そうだ。よく食い、よく眠る。……勝つための基本だな」

鍋の底をさらいながらなぜかライダーは嬉しそうな声で言った。しかし俯いた私の目には火の翳になったライダーの表情はわからなかった。

笑っていたのか、もしかしたら獰猛な獣のように牙を向いていたのかもしれない。私はじつと炎を見ていた。

穏やかなようで、その内部は激しく躍動しているのが見えた。それは今日の前にいる男の押さえ込まれた内情を映していたのかもしれない。

「…………この鍋は何処から持ってきたの？」

私はふと思いついて訊いた。それにこの妙に重い食器もそうである。箸まで金属製だ。というより、これは唯の金属の棒だというほうが適切だった。

「それなら、そこらにあつたもので、適当に鍋を拵えたのだ。フン。やってみれば何とかなるものだな」

なるほど、つまりあの奇妙な形に引き延ばされている大鍋はもとは別の形をしていたらしいということか。おそらくはあの物置に放置されていた廃材か何かなのだろう。

バーベキューセットか何かだろうか？ ライダーはそれを恐ろしい力で叩いて伸ばし鍋にしてみましたのだ。一見なんとも力技に思えるが、基本的に鉄の特性とは剛性ではなくいかなる形にも加工しやすいという、軟性にあるのだと聞いたことがある。

とある孤島に漂着した人間が、船の残骸から引き抜いた釘を石などで刃物や釣り針に加工して何年間もサバイバルしたという話もあるほどだ。

さすがは古代世紀に生きた男。いざという時には文明人とは違った妙な頼もしさがある。

——と、一時はこの男にしては意外にも気転を利かせたものだと感じたのだが、よくよく推察してみれば、おそらくはとりあえず捕まえてみたイノシシをどうやって食べようかを考えて、このバイタリティーを發揮したのではないか、ということは想像に難くなく。

加えて考察するなら食い気やら色気やらが絡むと凄まじい行動力を發揮するのがこの男の特徴なのであり、そもそも、実体化している事での魔力のロスを考えれば、霊体化してくれただろうが良かったのではないかとも思うのだが……。

いや、どの道同じことだろう。たとえ完全に回復したのだとしても、あの敵に勝てる確率はほとんどない。

「……ライダー。今までの食事と休息でどのくらい魔力を回復できた？」

「まあ、五割というところだな」

小枝で作った爪楊枝を使いながらライダーは素つ気無く言った。私達は互いに火に視線を落としていた。

私は赤い炎の揺らぎの向こうに不可思議な錯覚を覚えていた。両者の間に火を挿むと、さほど離れてもいないはずの相手の顔が不意に芒とぼやけるような気がしてくる。炎の赤い照り返しと燻（くゆ）る陰翳が相對する人物をまるで別人のように彩つてしまふようだった。

今では對峙する巨漢の顔が、いつもの安つぽく雑然とした粗暴な姦雄のそれではなく、ひどく峻厳で頼もしい益荒男のようにも思えてくるのだ。そのせいなのだろうか、いつものように内心でライダーを馬鹿扱いすることが憚られた。

なぜこんな気持ちになるのかわからない。解る事と言えば、私とは違つてライダーの気力は微塵も衰えていないのだということ。その点については深い安堵の心があつたのは確かだ。これでライダーにまで敗走の動揺があつたのなら、正味な話、私には事態を收拾できた自信がない。

さすがは戦乱の世に名を残した凶（まがつ）の泰斗だ。きつとこの男は今すぐにでも戦えるのだろう。たとえ、どれほど傷を負い、消耗して追い詰められても、この男は安つぽく抵抗しながら最後まで足掻くのだろう。



——それが、私には無理なのかもしれない。あれほど圧倒的に打ちのめされて、また闘いに行くことが私にはできないかもしれない。

……なぜ、この男はそうまでして戦えるのだろうか？

「……ライダー、私は……」

私は不意に声を滑らせた。自分でも己が何を言おうとしていたのかわからなかった。しかし、

「戦略の方は任せるぞ」

私の台詞を押しつけるかのように、ライダーはそう言った。私は俯くのを止めてライダーを見た。

「フン。せいぜい、俺様をうまく使って見せろ。そういう盟約だったからな。まあ、あの髭達磨のことは任せておけ、次やれば負けはせぬ」

「……………うん」

「では少し寝ておけ、夜が更けるまでは暫し時間がある」

「……………ライダーも後は霊体化しておいて。見張りはこの子達がしてくれるから」

「おう」

そう言うと、ライダーは馬鹿でかい鉄鍋を杯のように軽々と掲げ上げ、中身を一気に飲み干して火を落としにかかった。

私は寢床に戻り猫を掻き分けて再び横になった。

弱音を吐かずにすんだのはありがたかった。あれがライダーなりの気の使い方なのだろう。本当に、馬鹿に気を使われてばかりのわたしが一番馬鹿のようだ。

本来なら、幾らでも死者に鞭打つような言葉を吐きそうなライダーが私にはそんなそぶりをついぞ見せなかった。

私の消耗振りはそれほど危機的だったということだろうか、なるほど、そんな小娘に再度闘いを促すにはできる限り穏やかにことを運ぶべきと、あの男をしてさえ思わせるほどに、私は怖気づいていると思われたのだろうか？

そう考えると悔しい。——が、事実としてそれは正しい。今も身体の芯から震えが来るのだ。

いくら身体を温めても、身を縮めても、体の奥から湧いてくるそのおぞましい物は消えなかった。

怯えるだけの自分が情けなかった。ライダーがまがりなりにも私を慮り、戦略の全権を託してくれているというのに、それに応えるだけの覇気が今の私にはないのだ。

勝てない。

あのバケモノには、夜鳴手雖人にはどうあつても——再戦するとは言つても、向こうはもうこちらの弱みも手に取るように把握していることであろう。

どうあつても、勝てない。せめて何らかの策がたてられればいいのだが、こちらには奴らの弱点らしい弱点の兆しすらつかめていないのだ。

ならばどうする？ —— 逃げようか？

ふと自暴自棄気味な感覚が湧き起こり、あつという間に私の内容を満たしてしまつた。身じろぎする暇すらなかつた。

今ならライダーの宝具を使つて師の屋敷まで移動することができる。そして、ライダーには自害させてしまえばいい。ライダーがいくら強力なサーヴァントでも令呪には抗えない。

そうすれば、もう戦うこともなく生き延びることができる。誰も責めはしないだろう。もとより荷の勝ちすぎる挑戦だったのだ。師もおそらくそう言つてくれるだろう。あれで温情に厚い人だ。しかし ——

しかし、それは、できない。

私は菌を食いしばつて、その怖気を嘔み殺そうと努めた。

ここで逃げれば、私は生涯それを悔いる。そうまでして生き延びて何になるというのだろうか。

その先に待っているのは暗黒の日々だ。母がそれに苛まれ続けたように、悔恨は死に勝る苦痛を生者に強いる。

そうは思っても、いくら己に言葉を掛けても、すでに私という器を隅々まで満たした諦めにも似た弛緩したような冷めた感覚は、消えようとはしなかった。

むしろ凍りつくように凄味を増して、私の五感と五体を腐らせ始めていた。

どうせ死ぬのだろうか？ おそらくだが、それは、もう確定だ。それが恐ろしかった。

とつくに観念していた筈なのに。あれは嘘だったのだろうか？ ならば私は自分に嘘ばかりついていたことになる。自分を偽って、己の心を欺いて——そうして生きてきた結果が、これが。

自嘲の笑みさえ、私の乾いた唇からは生まれなかった。

私はなぜこんなことをしている？ そうしなければならぬ必要もないのに。なぜ命まで掛けてこんなことをしているのだ？

なぜ？ どうして、どうして、どうして——。

自分の身体を抱きすくめ、涙まで流して私は自問した。

眼を閉じるとまたさつき頃の夢のことが浮かんできた。そうだ。なぜというならば、私はなぜあの時母の元に戻ったのだろうか？

あのまま父の所へ行けば少なくともこんな場所で眼前に迫る死の気配に怯えることなく安穩と生きていけたはずなのに……。どうして私はそうしなかったのだろうか？

どうして、今、私はここにいるのだろうか？

私はもう一度あの時のことを思い出してみようとした。もしかしたら己を包む絶望感から逃げたかっただけなのかもしれないが、とにかくあのときの気持ちを思い出してみようとした。

死ぬかもしれないのなら、せめて自分の心くらいは知っておきたかった。私はなんのためにそうしたのだろうか。何のためにそうしているのだろうか。

あの時——そうだ、あの時だ。寒く長い道を通って、足からは血まで流して、道もわからなかったのに、それでも教えてもらったとおりに星の位置から方角だけを割り出して、それを目指して家に辿り着いた。

母に抱きしめられて、とても嬉しかったのをおぼえている。

しかし、それは母に抱きしめられたからではなかった。その家路についたとき、私は何も怖くなかったのだ。どんなに辛く、寒く、暗く、痛みを伴い、心細かったとしても、私は迷わずそうしたのだ。

そうしている間、何も怖いとは思わなかった。どうしてなのだろう。今はこんなにも怯えているというのに、どうしてあの時はそれを恐れずにすんだのだろうか。

どうして？ どうして——

そこで、不意に浮き上がるように、答えは、私の中から示された。

それは、——それは、————そうするのが、正しかったからだ。

私はつぐんでいた眼を見開いた。

そうだ。私は正しいことをしたかったのだ。

あの時もそうだ。弱った母を、私に依存することでは自分を保てなかった母を、そうだと知つていながら見捨てるのは正しくないことだった。

だから帰つた。それが私にとつての正しいことだった。

正しいことを、したいのだ。

それが私の願いだった。正しさとは、他者から賛同を受けることではない。他者に何かを強制することもない。

まして、誰かの愛や庇護に甘んじることも、ない。己の行いに己が後悔しないということをいうのだ。

後悔は生を鈍らせる、それは正しさのために払われる労とは異質なものだ。耐えがたく、おぞましいまでの苦痛だ。人を生きたまま腐らせる毒だ。

どうしようもない母を置いていくことは正しくない。そして、友人を無残に殺した相手を知りながらそれを野放しにすることも、正しくない。

私は、そう思う。それを知りながら見過ごすのは正しくない。だから、私はそうしなかつたのだ。

正しいこととは、己にとつての正しさに沿つて生きていく事だ。それは幸福への道なのだ。

幸福とは、物質的に満たされて安楽に生きていくことではない。己の行動を後悔することなく、絶え間ない労を厭うことなく、自己の理想を少しずつ実現しながら切磋琢磨して生き、そして死ぬことなのだ。

それが、人が人として幸福であるということだ。

如何に財に溢れ、才に恵まれ、人から崇められようともし、その生が迷いと悔恨に満たされていたとしたら、それは死に勝る苦痛に苛まれ続ける人生でしかない。

幸福に背を向けて、怠惰で安楽な生を求める人間は一時の快樂でその苦痛を忘れようとする。だがそれは所詮一時のことではないのだ。快樂で己の悔恨という苦痛を覆い隠しても、それはなんの解決にもならない。

幸福を目指し、己を律して生きていくことでしか、人は己を幸福にすることは出来ないのだ。

母は生涯それにあえぎ続けたのだ。物質的に満たされ、快樂と怠惰で総てを塗りつぶそうとしても、結局残つたのは悔恨だけであり、すぐに生きたまま腐つていくような自分を直視しなくてはならなくなる。

そして結局は、苦痛から逃げるように全身を麻痺させることでしか生きていけなくな

るのだ。心まで弛緩させて、生きた屍となつて生きていく。

そんな様を見ていたからこそ、私は思ったのだ。不幸にはなりたくない。私は生きていることの総てに後悔したくないのだ、と。

だから正しいことをする。そして満たされて生きていきたい。

私は私の生きかたに妥協したくないのだ。せめて私の手の届く範囲、この五体そして私の心だけは、私の正しきで律したい。

それが、私が万能の願望器に望む、唯一の願いだ。

己の気持ちを明文化してみても、初めてわかった。私はずっと正しく生きたいと思つてきた。それは幸福になりたかつたからだ。あの時感じた充足感自分が正しいことを成し、幸福なのだということを幼かつた私なりに感じていたのだ。

そうだ。正しさを求める限り、私は逸れる事のない、真つ直ぐな道の中にいる。その道を歩む限り、どれほどの苦痛に見舞われようとも、きつと自分は幸福の中で死んでいく。

そう思える。なら、もう迷う必要は何処にも——ツ?!

私は猫達を跳ね飛ばしながら、弾かれるように身を起こした。

「——道? ……!?! そうだ、道だ!」

『どつした』



弾けたような私の声に、霊体化したままのライダーが問いかけてきた。

「……見つけた」

『ほう？ ——フフン。何をだ？』

「……あの怪物、夜鳴手錐人攻略の手掛かりを」

私は体の内から淡く、しかしその後の大火を予想させるような煌めきを秘めた種火が静かに灯るのを感じていた。

## 五章一 2

(金曜日・夜更け)

日が落ち、また闇が夜の町並みの悉くを黒く覆い始めようとしている。すでにその諸所には薄墨のような霧が重苦しく停滞し、陰翳の世界をぼやかせているようだった。

今宵の霧は禍々しく、どこか得体の知れないこの世の常ならざる場所から湧き起っているようでさえあった。

土・日を控えた週末の夜である。本当ならもつと活気があつてもいいはずだが、この地方都市で怪奇殺人の噂がまことしやかに流れていることもあつてか、夜の街を歩く人間の姿はほとんどなかった。

しかしたとえそうでなくとも、この重苦しい霧は、ただでさえ暗い夜の空間を殊更に平面的で無味乾燥なものへと変えていく。

その扁平な空白（ブランク）が、人の脳裏に禍々しく醜悪な像を映し出すスクリーンとして作用し、人々は知らずに己で描いた暴魔の幻燈に恐れをなして足早に家路を急いでいるようであった。

無辜の住人を自ずからそれぞれの寢屋に引き込ませるための措置か、それとも悪戯に人々の恐怖を煽り、怯えさせて楽しんでいるのか、その両方であったのかはさだかでない。

しかし、兎角これを行っているのがあの男なのだということを、私はすでに確信していた。

私は単身で無人の暗夜を疾走していく。無論二本ではなく自慢の四本足で、である。辺りは一面漆黒の闇と、所々にだまができていくようにも見えるほど濃い霧の中だ。たとえすぐそこに人がいたのだとしても脇をすり抜けた私を補足することはできなかっただろう。

馳せるのは何も車両や人の足で踏みしめられた路面だけではない。ビルや鉄塔の壁面、電柱同士を繋ぐ電線も、今の私にとってはなだらかな地平と大差ないのだ。

縦横無尽に夜を駆け回る私は一時として留まることはない。留まれば、それが致命的な隙になるからだ。

今回は使い魔達の目は借りず、己の視力・張力を最大拡張させ、広汎な闇をくまなく見通す。まずは敵の姿を補足しなくては始まらない。

あの後、寢床から跳ね起きた私は、すぐに戦略の構築にかかった。休息に時間をとられたのであまり猶予はなかったが、私は己の内面から沸き起こってくるような活力を確

信していた。

たとえ一点だけであっても、勝機が見えていたなら、戦える。

そして時刻は夜の深奥を廻り、私は森から出て街中を疾走し始めた。あえて網の目のように走って、地形を確認していく。

脳裏には先刻回想し、鮮明に焼き付けた古地図が浮かび上がっている。あやめの遺物だったものだ。それを現実の地形と照らし合わせて確認しながら奔る。

私には確信があつた。魔術師、夜鳴手錐人は絶対に自分からはあの森の中へは侵入してこない。

そもそも、最初に訝るべきだったのだ。なぜあれほどの優勢に立っていた筈のキリヒトが森へ逃げ込んだくらいで私達を見逃したのか。

それは、奴に森の中へ入りたくない理由があつたからなのだ。考察を反芻しながら疾走する私の前に、淡い緑の光が湧き起こつた。

そして次の瞬間には、その光の袂には一人の洒脱な外套を羽織つた紳士の姿があつた。あまりにも忽然とその威容を現した怨敵を前に、しかし私はひるむことなくその人ものとも思えぬ眼を見据えた。

今度こそ怖気づくことはない。今や、私がお前の領域の中にいるのではない。お前こそがすでに私の策略の中にあるのだ！

意を決し、私は背を向けて走り出した。

すると、また以前ののように、当たり前のように私の前に敵の姿があった。が、私の動きのほうがかつた。

私は先刻からそれを承知していたとしか思われたいタイミングで、瞬く間に移動して現れた紳士の脇をすり抜けた。

「——ッ」

紳士が僅かではあったがその鉄面皮を歪ませたのが垣間見えた。ヤツは「驚愕」している。どうして私が奴の出現場所を特定できたのかわからず驚いたのだ。

あとはその焼きまわしだ。赤い紳士は私の進行方向の先々に突如として姿をあらわすのだが、私にとってはそれも総て織り込み済みのことでしかない。近づきはすれど、決して奴の攻撃の届く範囲には入らない。

なぜなら、私には敵の出現する場所があらかじめわかっているからだ。

先日こそ絶望的なまでに神出鬼没とみえたヤツの「瞬間移動」も、ものの役には立たない。そしてそれは同時に私の推察が正しかったことを示している。

濃い霧の帳の向こうに森が見えてきた。

私はその奥まった闇の奥をめがけて全速力で滑走し、まるで飛び込み台からひどく疎遠に感じられる水面へ、今正に飛び込もうとするかのように、一気に跳躍した。

私は後ろを見向きもしなかった。この直進経路ならヤツが私のフロントを取ること  
はできない。確信があったからだ。

しかし、その瞬間、意に反して私の眼前には壁のような何かが忽然と立ち塞がって  
いた。

セイバーだった。主の不調を見かねて助太刀に来たのだろうか？

その巨大な樽のような体から野太い腕が伸びる。しかし、

それくらいのは、無論織り込み済みだ。

私は叫んだ。——否、叫ぼうとした。

「……ライ——」

「待ちくたびれたあー」

瞬間、怒号が響き渡り、それまで私の周囲にもいかなかったはずの灼熱の靄の如き気配  
が実体化を果たし、私の前にいたセイバーの巨体を横合いから蹴り飛ばした。

まるで大型車両同士が衝突したかのような衝撃は波状に刻まれ、周囲を覆っている濃  
い霧に円環の輪を波立たせた。

セイバーも虚を突かれたのだろう。霊体化していたとはいえ、ライダーが私に並走し  
ていたなら今のように明後日の方角から奇襲を受けるはずもない。

それもそのはず、ライダーは最初からこの森のとば口に潜んでいたのだ。こうなるこ

とを計算して、私は洩るライダーに待機を命じていたのだった。

「……ライダー」

「おう、なんだ？」

脇に降り立って声を掛けると、喜色満面といった具合でライダーが応える。戦況の不  
利如何に関わらず、どうやらもう「待て」をしなくていいということが心底嬉しくてた  
まらないらしい。

まったくこつちの気も知らないでいい気なものだ。

しかし兎にも角にも、ここまでは計算通りだった。そして、

「……負けても、引き分けでも、駄目。——勝って！」

私は意を決して言った。本当の勝負はここからなのだ。

作戦の詳細はすでに伝えてある。あとは互いに最善を尽くすのみだ。するとライ  
ダーは盛大に鼻を鳴らした。

「フフンッ。前提以前の話だな。——いわれんでもこの俺様はな、生まれてよりこれま  
で、一騎打ちで遅れを取ったことなど、たあだの一度も在りはせんのだあ！」

私はそれに頷き、疾く暗い森の奥を目指して駆け出した。

ここからの光景は森を馳せる私が、この場所を見張れるように配置しておいた使い魔  
たちの視界を中継して見ているものである。

私が森の中へ入った後、ライダーは今しがた自分で吹き飛ばしたセイバーと、私を追っているながら、案の定森の袂で足を止めた怪人紳士と対峙していた。

ヤツはこう考えているのであろう。きっと私が、ライダー単体でならたとえ二体一でも勝機があると踏んで、戦力にならない自分をおとりにしてこの状況を作り出したのだろうと。

そしてサーヴァント戦においては弱点にしかならない脆弱なマスターである私は、一路、キリヒトが追ってこれない（・・・）森の中へ逃げ込んだ。あとは総てを己のサーヴァントの戦線の総てを任せる——と。

客観的に考えるなら、私もその策に賛同するかもしれない。この中で私は戦力と数えるには確かに脆弱すぎる。

紳士はその考えを見透かすかのように、僅かに嘲笑の兆しを浮かべてセイバーに指示を出した。

「セイバー。あの娘を追え、ライダーの相手は私がやる」

私はそれを聞いて更に己の推察に確信を強めた。やはり、キリヒトは自分で森の中には入ろうとしない。

「……どうしたセイバー」

指示を受けたセイバーが動こうとしないためにキリヒトは再度声を掛けた。



しかし、セイバーは無言でライダーを見ている。否、その視線はライダーが手にする武器にこそ、注がれている。

「貴様、なんのつもりだ？」

声は今しがた己の問いを掛けたマスターではなく、睨み見据えるライダーへ向けてであった。

キリヒトは何も言わず、己がサーヴァントの真意を測ろうとしているようであった。

あれほどの怪物であっても、サーヴァントと結んでいるのはあくまで共闘関係であり、決して完全な主従関係ではないことが推察できた。実は、これもまた私の推察どおりだ。

ライダーはわざとらしく咳払いをしてから、嘲るような調子でセイバーの声に応えた。

「フン。なあに、簡単なことよ。ここは一つ、貴殿のような猛者と同じ条件で遣り合ってみたいと思つてなあ」

実はこれを指示したのは私——なのだが、もうちよつと自然にやれないものだろうか？

いや、もしくははこの男、演技で挑発しているのではなく、本気でセイバーを嘲弄しているのかもしれない。それが逆にこの人を食ったような感を与えているのだろうか？

「……同じ条件、だと？」

使い魔の目を通し、ひやひやものの内心でそれを見ている私の心配を余所に、セイバーは訝る様子もなく、ただ慥然とその言葉の真意を求めた。

「おう、そうだとも。フフン。互いに一振りの剣を手にして、小細工なしの一騎打ちをな！」

そう、セイバーが注目していたのは今己の前に現れたライダーが、以前のように己の代名詞たる戟を持たず、腰に帯びていた大剣だけを抜いてこの場に現れたことだったのだ。

そう、これはセイバーにしてみれば大問題（・・・）の筈だ。

「つまりわしは魔術も宝具を使わず、うぬは長柄も騎馬も持たず、あの念意の斬気も使わんといいのか？」

「なんだ？ 嫌か？ これは失礼した。こっちの買い被りであつたか。フフン。てつきり貴殿こそこの聖杯戦争なる凌ぎ合いにおいては初めて相まみえた誇り高き真の益荒男だと思つとつたのだが、いやはや、残念無念この上ない……」

その声を聞いたセイバーの大樽のような体が倍に膨れ上がったかのような錯覚が、使い魔たちの目を通してさえ感じられた。

「乗せられるな、セイバー。策意あつての虚言だ」

冷然とした紳士の言葉に、しかしセイバーはかぶりをふった。

「たとえそうであつても、ここで退くことはワシにはできぬ。戦士にとって、ここで勝負から逃げるは死にも勝る苦痛よ！ どうしてもというなら令呪を使つてもらおう。それに、——うぬこそなにを手負いの小娘一人に何を怖気づいておるのだ。我がマスターでありたいなら、それらしい行動で示してもらおうか！」

「——ならば、好きにしたまえ。そもそも言い争うようなことではないのだよ。これは他愛の無い些事なのだから」

少し考えたあと、紳士はそう言つて微笑し居住まいを正した。そして優雅な足取りで森の中へ踏み込む。

それらを総て使い魔の視界で確認しながら、私はその言葉にガツツポーズをとりたくなつた。ここまでは計算どおりだと、私は内心で呟いた。ここで令呪を使つてまで私を迫らせるのはいくらなんでも割に合わないと思うだろう。

当然だ。現在の聖杯戦争の趨勢は、未だ島原、シユタウフエンなどの大御所が静観を護つている状況なのだ。それを、こんなところで大事な令呪を消費はできない。

一方、マスターであるキリヒトの許しを得てセイバーはその後体を爆ぜさせるかのようにならう。

「恩に着るぞ！ マスターよ！ もとより、この痴れ者はぜひと我が劍の錆びにと思

うておったわ！」

「フフン。そうこなくてはない！ オレ様の方こそ、その髭面を血の泡に沈めたいと夢にまで見た次第でなあ！」

セイバーの発した覇気に呼応するかのように、ライダーは劣らぬ気を吐いて応えた。

互いに剣を取った二人のサーヴァントの間にはただ対峙しただけだというのにも関わらず、まるで大気が裂け、悲鳴を上げるかのような上昇気流が生まれ始めていた。

そして——私は奔り続けていた。

条件は整った。ここからが本番だ。追って来い。追って来い。……私は内心で繰り返しながら枝から枝へ猫というよりはムササビかマシラの如く跳躍を繰り返して森の中を進んでいく。足跡を残さないためだ。

そして改めて用意した策の手順を順序だてて反芻し、確認した。最初の関門は突破した。しかし真に重要なのはここからだ。一手でも間違えれば、そこで終わりだ。ここからが私の本当の戦いになる。

ライダーはうまくやってくれた。このとき、セイバーとキリヒトの立場が逆だと良くない。故に、私はライダーにセイバーを挑発するように指示したのだ。

相手の出方次第だったのだが、ここでも私の推察は当たった。そも、あのセイバーが戦士としての作法や対面を何よりも重要視するだろうということは推測するのに難く

なかった。

真名まではわからないが、その外見から察するにあの剣士が所謂ヴァイキングであることは間違いない。

ヴァイキング、ノルマンニ、或いはデー人とも呼ばれる、北欧の海で伝説となった古代の海賊にして戦士たちだ。この国でも魔女と同じくらいメジャーになった存在だが、その実態を正確に捉えている人間は多くはないのではないだろうか。その点についても魔女と同じだ。

とにかく、それが本当ならば、口汚く己を侮辱した手合いを安易に見過ごすことは絶対にならないだろう、という私の読みは的中した。古代の戦場で生きた英霊は多かれ少なかれこういう側面があるのだろうと、私は考えたのだ。

私のライダーを見ればその典型のような男だ。——いや、もしかしたら体面を考えて物事の理を投げ捨てるという未熟性を捨てられず、往々にして愚を犯すのは、そもそも男と言う生き物の持つ基本的な構造的欠陥なのかもしれない。

なんにしろ、おかげで作戦は立てやすかったのは確かだ。

私は考えながら山頂を目指してひた走る。体中の関節はそろそろ最初の悲鳴を上げ始めている。

全力で魔力を燃焼させ全身を賦活化し続ける負荷と、そして、全身に纏わり突く鉛の

ような汚泥の如き感覚が私の体力を凄まじい勢いで削つていく。

少しでも動きを止めたなら、一瞬で絡めとられる。あの、まるで城壁に追い立てられているかのような圧倒的な圧力（プレッシャー）に。

周囲を包み込む暗闇は私の味方だったが、肺と喉を切り裂くような湿った冷気は決してそうではなかった。

今は全身がエンジンのように活性化しているからいいが、そのうちにこの冷気は私の体力をごっそりと奪い始める。このまま走り続ければ、そのうちに私は動くことも出来なくなるだろう。

……弱気になるな。弱気になるな。息切れした肺を無理に押さえ込みながら、私は自分に言い聞かせる。そして己を鼓舞して走り続けながら、思考の内で確認していた。

あの時、あやめに見せてもらった古代道の地図では、あの道は森の中へ一直線に伸びているはずだった。

山中にある古代経路は、街の中心部から真東へ伸び、そこからさらに山の頂上にある島原神社まで一直線に続いている道だけだ。

その遺跡道の線上でなければ、あいつは「瞬間移動」できない。

そう、道だ。私はそれに気がついて、あの怪人があやめの見せてくれた古代遺跡道を利用しているのではないか言う推測を立てたのだった。

あのとき、私はあやめの調べていたという古代道の成り立ちに、レイ・ラインや風水地相学的な呪術的な要素があると聞かされ、その裏に古代の魔術師の影を見たのだ。

その時は思わず受け流してしまったが、もしも本当にこの街の経路が地脈を操作する目的で造られた魔術的な構築物だというなら、それを逆に流用することも出来るかもしれないということだ。

無論、そんなことを普通なら思いつかないし、実行するのはもつと無謀だ。誰が作ったのかもわからない魔術師の遺跡を自在にコントロールするなど簡単なことではない。少なくとも数年から十数年の期間が必要になる。

しかもこの地に根を張る魔術師でないなら、手間はさらに膨大になるだろう。その上島原やシユタウフェンに知られぬままそんな細工をすることなど不可能だ。

そう、あの男、夜鳴手錐人を覗いては。

奴は今までの百年にわたる聖杯戦争を戦いながら、この経路に気づき、それを流用する術を構築していたのだろう。

奴が「試運転」と言っていたのはこのことだったのだ。

そのとき、私のすぐ後ろに赤い影がよぎった。私は形振り構わずに跳んだ。

私のふくらはぎを僅かに裂き、あの濡れ光る波動が私がいいた場所の木々を薙ぎ倒した。

怪人は獣のように牙を向いて微笑を浮かべながら私のすぐ後ろにつけていたのだ。あと一手、それで私を捉えられる。

ヤツはそう考えていたのだろう。しかし次の瞬間に四方から矢が走り、そこにつながられていたテグスが怪人の動きを奪った。あの山小屋の中に残されていた廃材で仕掛けた即興の罠だった。

「——もう、終わりかな？　可憐なお嬢さん。狩猟は久しぶりで興が乗ってきたところなのだがね？」

蜘蛛の巣にからめとられたかのように動きを止めた紳士は、それが何の痛痒でもないかのように穏やかな声音を発した。まるでこれは自分が完全な王手の前で一休みをしているのだとも言いたげな声だった。

「……へえ？　もつと焦ってるのかと思った。もう先回りができないから必死なんだと見てただけぞ？」

あえて嘲るように応えると、紳士は、もはや人とは思えぬ形相で牙を剥き上げた。奇怪な笑みを浮かべた。それは獣というよりも昆虫か何かが得物を屈服させようと威嚇しているかのようにも思えた。

「やはり、私の魔術の摂理について感づいたようだな。しかし、それで互角に戦えるつもりなら——」



凄まじいプレッシャーが弾けた。奴の五体から凄まじい密度の魔力が溢れている。なるほど、補給が受けられなくとも、まだサーヴァントと打ち合える程度の余力はある。といたいたらしい。

「少々、私を過小評価しすぎだな」

キリヒトの身体を拘束していたテグスは一瞬にうちに燃やされ、断ち切られてしまった。

そして紳士の手にするステッキからはカマイタチの如き波動が、そして空いた左手からは青白い光に濡れ光る火花がムチのように延び、周囲を跳ね回った。

掘削された幹の香りと木々の表皮が焦げる臭いが立ちこめた。しかしそれらは私を害することはかなわなかった。

——これでいい。

私は再び敵に背を向けて走り出した。追いつがったカマイタチの斬波がうなじを掠めたが気にすることなく加速した。

そう、私はわざと追いつかせたのだ。瞬間移動のできなくなった状態なら、スピードだけならこちらに分がある。

あえて補足できる程度の速度で奴を引き連れてきたのは、畏にヤツを誘い込むためだったのだ。

そして最初から、あんな子供だましの罠でどうこうできる相手でないことはわかって  
いる。それでいいのだ。これは後の罠のための布石でしかないのだから。

作戦の方針が決まってから、私はこの山中にいくつかの罠を仕掛けた。

ヤツは私が痺れを切らして街中に出てくるのを待っている筈だったから、少なくとも  
数時間ほどは時間の猶予があった。奴が深夜にならなければ出歩かないのはわかって  
いたし、何よりヤツは自分から森に入り込んでくることはない。と重ねて確信してい  
たからだ。

プレッシャーはどんどん迫ってくるが、私は山頂を目指してジグザグに森の中を走り  
回った。

いける！ ヤツは私を補足しきれていない。ここでなら、この森の中でなら、私のほ  
うに分があるのだ。私はそう言って強く己を鼓舞した。

私はこの周囲の山々のことを良く知っている。師につれられて、よく森の中で魔術の  
修練に励んだものだ。私はそのときのことを思い出していた。

師の故国もまた日本と同じように森林の多いところであったそうだが、今あるような  
森はもはや魔女が住まうにはふさわしくないのだという。

そういう森は人が憩うのには都合がいいのかもしれないが、しかしそれでは魔女とし  
て生きるのに最も必要な自然物への畏敬を育むのには適さない。

それが自然物崇拜を忌むものにとつては都合が良かったのだろう。キリスト教の支配が進むとともに、師の故国でも森林の伐採が進み、森はひどく明るくなつてしまつたという。

明るくなつてしまつた故国の森は、まるで硝子や磁器のように光を弾き返してくるよ  
うで、中にいても人の域の中にいるようなものだそうだ。

『けれどこの森は違う、まるで光を吸い込むように、淡い陰翳をそこかしこに抱きながら、光が染み込んでいくように森をゆつくりと照らしていく。——昔、この地に着たばかりの頃、ろくでもない所に來たものだど嘆いたものだけれど、この森に出会えたことは幸運だつた……』

そう言つて木々の魔名(まな)を唱え、しじまに横たわる陰影に名前をつけながら、嬉し  
そうに私の手を引いていた師のことを覚えている。

普段あまり笑顔というものを人に見せない人だから、とても印象に残つてゐるのだ。

そうだ、そこで初めて、私は魔術とはただ恐ろしいだけではないのだと知つたの  
だ。

幼かつた私は、昼間でも仄暗い空間に染み渡るような、広大な大氣と大地の境界に陰  
と陽とを混ぜ返しながら、淡く存在する森の中で、まるで己とそれを取り巻く総てのも  
のが互いに交じり合い呼応するかのような、魔術の根幹を学んでいたのだ。

記憶に誘われるように、不意に認識できたのは闇に沈んだ不気味な森の姿でも、凍てつくような寒さでもない。それは森の芳香であった。

生命に満たされた森の空気であった。

それを体中に取り込み、馴染みのある感覚が私の体がいきわたっていくのがわかった。

そうだ、ここは私の場所だ。私の領域（テリトリー）なのだ。ここでなら、私は優位に立てる。

私の息はもう切れてはいなかった。慣れ親しんだ記憶が私の焦燥を掻き消していた。

息が整って幾許かの余裕を得た私は、走行を続けながらも色付きの軟膏を再び眼の周りに施し、視界域を切り替えた。

私の目は先域に広がる暗く、雑多で、そして何処までも深く広がる闇を見据えながらも、同時に山のふもとに残してきた使い魔たちの眼が捕らえる情報を統合して、あたかもそこで行われている埒外なる煌刃の暴風を、眼前で行われているもののように視認した。

使い魔たちは十分に距離を開けてそれを見ることに集中している。先にも言ったことだが、私は戦闘に使い魔を使わない。もとより横槍を入れられるような闘いではな

く、そしてライダーもまたそれを望まないことはわかっている。私にできることは——  
そして成さねばならないことは、この決闘の趨勢から決して眼を離さぬことである。

押されているのは、残念ながらライダーの方だった。方膝を突き、血を流して息を乱すその姿は、あまりにもこの巨漢に似合わず私はそれを予測していてさえ、それでも瞠目せざるを得なかった。

「……そろそろ白状したらどうだ？ 貴様、何をたくらんでおる」

膝を突いたライダーを見下ろすようにして、歩を進めてくるセイバーが訝るような声を上げた。ちなみに、猫にとつて、もつとも敏感で重要な感覚器官は耳だといわれている。故に聴覚の感度は良好だった。

使い魔たちは視界で捕らえたヴィジョンだけではなく、音声のほうもしつかりと拾ってかれているのだ。

「フン。何のことだ？」

まるでダメージがないとでも言わんばかりに、ライダーはその長身をすつくと立ち上げた。未だその口角に余裕の笑みを浮かべてはいるが、その疲弊具合は火を見るより明らかだ。

今のライダーは私からの魔力供給を最低限に抑え、戦闘に必要な殆どの魔力を己の貯蔵魔力だけで補っている状態だ。私がキリヒトに単身で向かうという戦略上、私がライ

ダーに廻せる魔力はほとんどない。今も森の中を疾走するだけで消耗してしまう体たらくなのだから。

「得意の柄物はどうした？　まさか言葉どおりにワシと同じように剣を取って条件を五分にしたいなどというのが本音ではあるまい。なにか策あつてのことであろう」

「フン。そう思うなら、なぜそれに付き合つておるのだ？　お得意の魔術なり宝具なり何なり使えばよからう」

今度はセイバーのほうが立派な髭に埋もれた貌を、牙を剥くように歪めた。どうやら笑っているらしい。

「まず、挑戦を受けた以上、敵が何をたくらもうと、正調なる勝負にてこれを撃破するのが戦士の流儀よ。——そしてなによりも、そうしたほうが面白かろうと思つてな、実を言えば、おぬしの策というやつに少々期待しておるのよ」

問答の途中ではあつたが、ライダーは隙あり、とばかりに斬りつけた。そのままトックぐらいは両断できそうな斬撃ではあつたが、やはりこの男の本調を知るだけにそれが精彩を欠いていると感じざるを得ない。

「——このままうぬ（・・・）を斬り捨てるといふのはどうにも面白みに欠けるのでな」

セイバーはそれを容易に受け流し、反して豪腕をふるつた。刀身が躍動するかのよう煌めき、その刀身に波打つ美しい波紋が夜気の中で蛇の如く生動した。

うねる斬撃の炸裂に、ライダーの巨体は吹き飛ばされた。宙空に浮かされていた足裏が幾度か空を搔いてやつと地表を捕まえた。衝撃こそ吸収し切れなかったようだが、斬撃軌道だけはしっかりと読んで受け太刀していたらしい。

打倒（ダウン）だけはかろうじて免れたライダーはここまで聞こえてきそうな齒軋りを掻き鳴らした。重ねられるダメージよりもセイバーの漏らした、己を格下と見なす言葉のほうがこの男にとっては耐え難いに違いない。

「フン。生憎と、俺様には策など有りはせぬのよ！ 策を弄するのは主の領分でな！」  
ライダーは吼え、次いで残像も残さぬような速度で巨体が掻き消えた。

「ならば、それはどちらも徒労に終わりそうだな。うぬは策なしではわしに勝てぬ。そして、うぬの主はどう策を弄しても、あの男には勝てぬぞ！」

すると、セイバーのほうもその中身の詰った樽のような重々しげな体軀を、まるで重さなどないかのように跳躍させ、瞬間に姿を消した。

ともに腕力にのみ頼って威力を振るうようなタイプの猛者と見えて、その武芸の練熟、戦士としての錬度も桁外れであった。

そして、まるで断間のない斬撃音が周囲の万物を掻き巻くかのごとく振るわせた。私には使い魔たちに後退を指示した。そこは両者の剣域の範囲内かもしれないのだ。それに両者を補足すらできないのでは意味がない。

そのとき、掠れて尾を引くかのようなライダーの怒声だけが、彼らの初動に遥かに遅れて聞こえてきた。

「フン。やってみなければ——わからんだろうがぁ!!」

——そうだつ、やってみなければわからない!

私はライダーと己への鼓舞をかねて内心で気を吐いた。ライダーは良くやつてくれている。たのむから、もう少しでいい、もう少しだけ耐えて欲しい。そうすれば——。

そのとき、全力疾走していたはずの私の背後で樹木が粉碎される音が響きわたった。どうやら、目下の怨敵もこの展開にじれてきているらしい。

木々を薙ぎ倒しながら追つて来るキリヒト。乱打されるカマイタチと青白い熱線の相互放射は硬い木の幹を簡単に砕き薙ぎ払ってくる。しかしその攻撃は闇雲だ。暗い闇の中を縦横無尽に疾走する私を追いきれていない。

即興の魔力感知で大方の場所は索敵できているのだろうが、しかし私は一時たりとも同じ場所に留まっていはいないのだ。森の中で一匹の猫を追いかけることがどういふことかわかつたであろう。

雑木林、灌木の繁み、岩陰、あるいは一本の立ち木、一本の枝にさえ、私は己の身を隠匿できるのだ。

事実。ヤツは私を見失っている。この森に誘い込んでからというものの、奴の弱体化は



著しい。

その変化比から推察するに、奴の魔術は笹ヶ谷市内にあるあの遺跡古代道を魔術的に使用することを基本として根本から改変されていたらしい。

あの経路を通じて地脈から魔力を取り込むことができ、またその経路を使用して遺跡から遺跡の要点へと瞬間移動できる。

更にあの遺跡内にある市街地で起きたことを遺跡の経路に流した己の魔力循環させることによつて知覚できるセンサーとしても使用している。

これらの機能から察するに、やはり奴の魔術はこの街の古代遺跡を利用することを前提として長い時間をかけて周到に用意されたものだと考えられる。

しかし、今やそれらの機能も使用不能だ。ヤツはその頼みの綱から完全に引き離された。あとは……。

しかしそこでキリヒトの声が聞こえてきた。声の調子は穏やかで、それゆえに底冷えするほどに空恐ろしい響きだった。

その声音は明らかに魔の言霊を孕んでいた。

「何処にいるのかな？ お嬢さん。近くにいますのらうね？」

私も動きを止めた。ヤツが完全に私を見失っていることは間違いない。でなければこんなことはしないはずだ。

やはり、あの街の遺跡道から切り離されたヤツはその機能の大半を喪失している。それでもまだ魔術師としても能力には雲泥の差があるわけだが、それでも今の条件ならばまだ勝負にはなる。

どれほど低い確率であっても勝機があるのだ。ならば後はその確率を少しずつ上げていけばいいだけだ。

私はじつと動きを止めて気配を消すことにつとめた。

長身が不意にはためき、闇の中でも血に濡れ光るようなてかり（・・・）を見せる外套が翻った。

その手にしていたステッキの先から揺らめく陽炎のような波動が奔り、地面と硬い木々の表面を砂糖菓子かなにかのように容易に削り取った。

今まで散々見せ付けられた「カマイタチ」だが、改めて見てみるとその威力は凄まじいものがある。

たとえ闇雲であつても一度でもあれに当たればそれで総てが終わってしまう……。私は動きを止めたまま自分の心拍音を抑えることに努めていた。

そこで再び、奴の声が聞こえてきた。

「昔はよくこうやって、狩りの真似ごとをしたものだよ。まだ幼かった頃の話だ。君にしてみれば、結構な大昔だろう」

夜の山中では狐や狸のような小獣の歩く音でも、肝を抜くほど大きな音に聞こえるという。山中に泊り込んで狩りをした経験のあるものは昼間の森とは一線を画す森の一面を知るのだと聞いたものだが、それが私にも実感できた。

夜の森は初めてではなかったが、その中で狩るか狩られるかの緊張感に身を任せるのは初めての経験だ。自分の心臓の音がこれほど大きく聞こえるものだとは思わなかった。

声は続く。

「私はまだ魔術師ではなかったのだがね。兎、狐、鹿や猪……そういうえば猫は初めてだったな。だが、狩りをする上で一番面白い獲物はなんだったかわかるかね？」

響いてくる言霊は魔そのものであったが、しかしそこには何ら魔術的な作為は感じられなかった。この呼び掛けにはどんなに意味があるのか、私は訝りながら、耳を澄ました。

「成人してからは、その獲物ばかり追っていたよ。他の動物に比べて、動きはひどく鈍重だが、追い込まれると思わぬ反撃や、行動を起こす。追う側からしてみても、これかなかなかスリリングだね」

何かの準備をしているわけでもない。……一体何を狙っているのだろうか？

「最初はパトロンとして一部の貴族にその遊びを紹介したり、プロモートしたりしてい

ただが、そのうちにもっと大手の以来が舞い込むようになったのだよ」

ただ声の話術で私を追い詰めるつもりなのだろうか？　だとしたら吉兆だ。最初から徹頭徹尾こちらの命を狙ってきたヤツがそんな手しか打てないのなら、今、奴はよほど手詰まりな証拠だ。あとは――

「あの時代、獲物はいくらでもいた。私は教会の走狗として人間狩りを楽しんだものだ。――そう君たち魔女を狩るための狩人としてね」

――息が、止まった。

「だから、私をここに誘い込んだことは、大きな間違いなのだよ。私は慣れてきているのだ。この暗い森の中で逃げ惑う獲物を狩ることにね。――ふむ、そこだな（・・・）」

穏やかであった口調が、一点その魔的な声にそぐうように、鋭利な響きを孕んだ。

「匂うぞ、恐怖のにおいだ」

私ははっとして己の失策を悟った。私の鼻はそこでようやく己の体臭の変化を嗅ぎ分けたのだ。

奴の感覚器官それ自体は常人のそれと変わらないはずだ。なぜならあの遺跡道をレーダー端末のように使う術をもっているからだ。

だからこそヤツは他の突出した魔的感知能力の類を持ってはいない。そう考えていたのだが、しかし、ヤツにはそれ以外にも別種の感覚器官が備わっていたようだった。

確かに、辺りには私の体から発せられる、ある種の感情によって湧き起こってくる忌避物質の匂いが漂っていた。

人間だけではなく、生き物ならばたいはいはこの物質を嗅ぎ分ける能力を持っている。互いに気の置けない人間同士が同じ空間に押し込められた場合などにおいて、意味も無く互いも拒絶しあうような匂い、もとい空気が停滞する感覚を感じることがあるだろう。

人間は特にこの忌避物質を発しあつて自分に近づくな、というようなメッセージを言外に発しているものなのだ。どんな生き物でもこれを知覚する能力を有る程度は備えているものだ。

なぜならそれは、周囲にいる生物の状態の変化を、機敏に感じ取るための自然界で生きるための重要な感覚だからだ。

そしてこの能力に非常に長け、獲物——特に人間の恐怖や恐れ、不安を嗅ぎ分けそれを無上の糧をとするのが魔獣やそれに類する魔物の習性なのだ。

もつとも奴らのそれは危険を察知するためのものではなく、今まさに己の牙や爪にかからんとする獲物の恐怖を味わう（・・・）ためのおぞましい器官なのだ。

ヤツは私が瞬間的に発した感情の臭いを嗅ぎつけたにちがいない。

まさか一応は人の身でありながらヤツがそれを有しているとは思わなかった。ヤツ

が間違いなくあらゆる道を踏み外した外道なのだと言うことがよく解った。

私を補足したキリヒトは、もはや逃がさぬとばかりに私めがけて一直線に突進してきた。

ただし——ヤツは一つ勘違いをしている。私はただの一度も恐怖など抱いていなかった。

手にしたステッキが振り上げられ——それが振り下ろされるより先に、その巨体の懷に飛び込んだ私の爪が奴の五体に連続で叩きつけられていた。

私が発していたのは恐怖の匂いではない。その起源となる感情は「怒り」であった。

ほんの一瞬ではあったが、突発的に湧き上がった活力に突き動かされた私の圧力はこの高位の魔術師を上回った。

もはや無尽蔵の再生能力を削がれた燕尾服から、鮮血が舞った。

しかし、それまでだ。私はすぐに体勢を反転させた。今のは怒りに任せたまぐれ当たりに過ぎない。逃げの一手に終始すると思つていただけの私に前に出てきたために、一時的にヤツが混乱しただけのことだ。

そして、わかつていたことではあったが、全力で叩きつけた筈の魔爪が殆ど利いていない。こいつは単純な頑丈さでも騎士クラスのサーヴァント並だともいうのだろうか？

兎角、ヤツを怯ませた私は一路背を向けて逃げ出した。このまま真正面から戦つて勝てる相手でないことは先刻承知している。

ヤツが追つて来る。どうやら、私が逃げ延びたことよりも、私が恐れを抱いていないことのほうが気に障つたらしい。背後から湧き起こってくる、まるで爆ぜるようなヒステリックな怒りの気配がありありと感ぜられる。

それでいい、好都合だ。私は二番目の罠に誘導するつもりでヤツにこちらの居場所を知らせたのだから！

まるで飛ぶようにして私を追ってきた怪人紳士はふと足を止めた。そこが行き止まりだったからだ。私はまたあえてヤツに追いつかせるように動き、ヤツをこの袋小路に誘い込んだのだ。

そこは左右を剥き出しになった巨木の根が遮っている斜面で、おそらく以前は小川のようなものが流れていたのだろう。その水の流れが、この巨木の足元の土を長い時間をかけて削つたのだ。

むろん、斜面を駆け上がるなり引き返すなりすればいい話だが、紳士はその場で足を止め、何かを探るようにじつと暗闇を見つめていた。

奴の視力では私を捉えきれまい。今しがた利用された嗅覚も無駄だ。辺りには私の調査した軟膏が塗りつけてある。この強い香りのせいで嗅覚は殺されるはずだし、また

魔力感知にしても軟膏がデコイの役割を果たして奴の感覚をことごとくを攪乱しているのだ。

本来の魔術師にとっての意味合いとは違うがこれも結界だ。獣が己の存在を周囲の環境にしめすようにして成された私の結界であった。だからこそヤツは動きを止める。私はそう思ったからこそここに結界を張っておいたのだ。

私は第二の罠の、その第一段階を発動させた。

遙かな樹上の木組みの上に乗せられていた。材木や岩石が一気に落下してくる。

並の人間や自家用車ぐらいなら圧死は免れぬほどの罠である筈だったが、それを察知した怪人紳士はあきれ返ったかのような遠慮がちな笑いをその口角に湛えた。

ヤツにとっては、これも第一の罠とさして変わらぬ程度の痛痒でしかないと認識されたことだろう。無論、私としてこのような落石如きでことが成るとは思っていない。

たとえ敵の瞬間移動が封じられていても、こんなものが当たらないのは承知の上だ。重要なのは上ではなく、——下なのだ。

キリヒトに回避された石木は当然の如く足の下にあるぬかるんだ地表をしたたかに打った。途端、その周囲五メートル四方がぶち抜かれ、その上にいた錐人諸共深さ五六メートルはありそうな大穴の中へ落下していった。

さらにその上に、山小屋に置き捨ててあったブルーシートが覆い被さるようその穴



を塞いだ。

「機窞」という言葉がある。

「罨」を総括する言葉として出てくるのだが、これは二つの構造の異なったものを含んで現した言葉であり、機とはばね仕掛けのはじき矢などのことで樹木や竹の弾力を利用する類の仕掛けをさし、これに対して窞とは字の如く孔を掘って動物を落とし入れる構造の仕掛けをさす。

最初に私が仕掛けた仕掛け矢や、今しがた頭上から落石を起こしたものが前者であり、それをフエイントとして下の大穴に落としたのが後者に分類される罨ということになる。私はその両者を駆使して徹底的に敵を絡めとったのだ。

この大穴についてだが、ここはもともと干上がりかけた小さな沼であった。ライダーの手があるとはいえ、斯様な大穴を穿っているような時間的猶予はなく、その上、以前に私が廃工場に偽装された境界に侵入した時のように魔術で空間を作っておくと言うのも、下策だ。

そんなことをすれば、その場所に魔術を使用したのだということも、そして何をしようとしたのかも安易に知られてしまう。よって、私はこの沼地を選んだのだ。

ここで少々話は逸れるが、私の大分属性は「土」と「水」の二重属性である。血が浅いわりには稀有な素質を持ったものだと言われたものだが、それはさて置き。

私の名前は「涅」と書いて「くろむ」と読むわけなのだが、実際に字としては「くろつち」と読み。これは水底にある黒土を表す。つまり土と水を混ぜ込んだ泥粘土の扱いが私には最も在っている魔術ということになるのである。

私が軟膏や魔術薬の調合を専門的に習得しているのは、ここに由来するところが大きい。

ちなみにその詳細属性は土塊の「偶像」即ち崇拜対象を指し、隠遁を旨とする魔術師にはあまり向かない属性だと言わざるを得ない。

以前、師には真顔で新興宗教の巫女か芸能人にでもなったほうがまだ適正があるかも、などと言われた次第だ。

——話が逸れたが、要するにこのような湿地帯には私の魔力が通りやすいのだ。多少力を使ったが、この湿地帯を丸ごと自分に有利な地形に細工しなおすという芸当もうまくいった。

不自然な魔力の流れもなく自然な形で地形を変えられた。それでも細工の跡は魔術の名残となって現れてしまうが、その点は問題なかった。

それとは別の場所にもっと大きな囀を作ってやればよいのである。そう、下にできた空洞に敵を落とすための、頭上に仕掛けられた落石である。

あとは空間の底に用意しておいた塵を設置した。これを舞い上がらせるのも落石の

衝撃の作用だ。同時にその穴を青いビニールシートで塞いだ。穴の中ではその底に仕込んでおいた微細な粉塵が舞い上がっているはずだ。それは即席で調合した着火剤と粉塵だった。

さて、ここで天井をふさがれ、飛沫となった粉塵で満たされた状態となった空洞内で火花を散らすと何が起るのだろうか？

瞬間、蒼いビニールシートで塞がれていた筈の穴が、真つ赤な火を吹き上げた。

……こちらから着火する用意もあつたのだが、ヤツは自ら火種を起こしたらしい。怒りが奴の目を曇らせたのだ。とはいえ、この闇の中で穴の中に充満していた粉塵に気付くというのは怒りに駆られていなかつたとしても難しいことだつただろう。

この現象は俗に粉塵爆発と呼ばれている。これは大気などの気体中にある一定濃度の粉塵が浮遊した状態で、火花などにより引火して爆発を起こす現象である。炭鉱などで石炭の微粉末によつて起こるケースがその代表例であり、他にも微細な金属粉や小麦粉や砂糖のような食品でも爆発が起こることがあるという。

あまり意味がないので科学的詳細は割愛するが、これを人為的に引き起こすにはいくつかの条件が必要になるため、私もかなり集中しての作業を要した。それでも上手く行くかは運任せだつたのだが、どうやら予想以上の成果がもたらされたようだ。

——やつたか？ そう思い、その火柱を見つめて私は息を呑んだが、しかし敵は甘く

なかったようだ。

穴の中から這い出てくるキリヒトの姿があった。多少のダメージは認められるが、とても致命傷とは思われない。

判ずると同時に私は再びキリヒトに背を向け駆け出した。

私の脳裏に、まるでプリズムのように閃く光が映し出されたのはそのときだった。ライダーたちの戦いに変化が起つたのだ。

一体どれほど打ち合ったというのだろうか？ ライダーの手にしていた大剣は、その中腹から砕け、その刃の破片が無明の闇の中にあつてなお僅かな光彩をひらめかせて散華していく。

素人目にも業物であることが察せられた剣ではあつたが、さすがに幾千万にも及ぶ宝具との剣戟の衝撃には耐え切れなかったものと見える。

「……………ここまでだな」

不意に、セイバーは溜息交じりの簡潔な「終わり」を示唆した。

「フン。なんだ、面白いことを言うではないか？ 俺としてはここからだと思うのだがな？」

セイバーは髭に覆われた顎先を掻きながら心底つまらなそうな視線を片膝をついた

ライダーに向けた。

「その粘りだけは感服しないこともなのだがな、これ以上長引かせても、つまらんだけだ。もはやうぬの底は見えたわ」

「なんだと!?!」

セイバーの言はまるで呟くような素振りであったが、その声はよく響いてもれなく私達の耳に届いた。ライダーの顔がまるで鬼の如く顰められ、まるで責め苦にさらされているかのような鬼面を思わせるほどであった。

「使え」

「なに!?!」

「それが嫌なら、うぬのお得意の殺気を飛ばしてみればいいといったのだ。無論ワシは魔術も宝具も使わん」

総身を瘡のように振るわせながら、ライダーはゆらりと立ち上がった。そして天を仰ぎ、呟くように何かを口走った。

「そうか……この俺様を相手に……よくも、そんな……戯言を……ふふ、……フハハハッ……ここまで舐められるというのは、生前においても記憶にないな……」

瞬間、不可視の念波がまるで巨人の分厚い戦斧か何かのような分不相応な存在感を持って虚空とアスファルトに幾重もの亀裂の筋を引いた。

「その殺気の刃、確かに厄介だ。さすがに初見なら面食らうと言うこともあろうが——」  
しかし、セイバーはいとも簡単にその間をすり抜けた。

「——慣れてしまえばどうということもない」

そして殆ど柄だけになった剣を握るライダーに分厚い剣先を叩き込んだ。

間一髪、巨体を朽木のように投げ出してそれを避けたライダーはまさしく虎のような身のこなしで体を反転させ、地を転がった。

それに付いて廻るように黒ずんだ血の飛沫が飛散した。

まさしく手負いの猛獣そのもの荒々しき体術であったが、さすがに精彩を欠いていることは否めない。致命傷こそないものの、ライダーの巨軀は徐々に淡い赤血の斑に滲み、満身創痍の状態であった。

「隠しようなない殺意の具現であるがゆえに、その刃の軌道は見切りやすい。効果としては単純に手数が増えるというだけのものではない。ならば話は簡単だ、その総ての刃を躲すつもりでいれば良いだけのことだからな」

苛烈なる突きを放ったままのその姿勢で、数メートルほどの距離を置いたライダーに向けて油断なく切つ先を突きつけたセイバーは言った。

「もしも——、もしもライダーが全開で何のハンデも負っていない状態だったなら、こんなことにはならなかっただろう。総ては私の力不足が招いたことだった。」

「所詮はこけおどしの目晦ましに過ぎん。これ以上の戦闘は無意味だ。深く首を差し出すがいい。戦士の潔さを示せ」

私は己の窮地も忘れてその言葉に対する怒りを持って余した。なぜであろうか。ライダーがこうして侮辱されるのがどうにも我慢できなかつた。もとより侮辱されて当然の男だと言うのに。

しかし、当のライダーは怒りに震えて暴走したりはしていなかつた。

「フン。言ってくれるな。だが！ 悪いが、この俺もその主も、諦めが悪いのが売りなものな。そう簡単に——往生するつもりなぞないわ!!」

四方に放たれた覇刃が濛々たる砂煙を巻き上げ、二人の猛者の姿を覆い隠した。

私の五体には血よりも濃く、紅い炎が渦巻いた。そう言ってくれるのか。まだ、私のことを「諦めが悪い」と、まだ諦めていないといってくれるのか。

その姿を捉えることが出来なくとも私には見えていた。ライダーの顔にはまだいつもの不敵な笑みが張り付いていたはずだ。この程度のこととは総て承知のうえだといわんばかりの顔で。それがありありと想像できた。

——事実、そのとおりなのだ。私達にはまだそれぞれに最後の策がある。どれほどか細くとも、それを抱いている限り、心取り乱し自暴自棄になる必要などは何処にもない。後はその策に総てを懸けるだけだ。

もしかしたら、そのときの私の顔にはライダーのような不敵な笑いが張り付いていたかもしれない。

「そんなに急いでどこへ行くというのかね？ お嬢さん」

「——ッ！」

しかし、その先の趨勢を見届ける間もなく、私は足を止めた。遥か後方に置き去りにした筈の悪魔紳士の紅い影が、私の眼前に現れたのだ。

「残念だったな。……君はミスを犯した。恐怖に駆られて山頂と街を繋ぐこの遺跡道に近づきすぎたのだよ。」

確かにこの先、この山の山頂には島原の聖域がある。派手な戦闘は避けるべきだ。聖杯の召喚に必要とされてる場所だし、不戦を約束された場所でもある。そこに逃げ込めば何とかなると思っていたのだろうね。しかし、私はごめんこうむるよ。今島原に目をつけられるのは得策ではない」

私は斜面を登るようにして飛び退き、距離を取って敷き詰められた石畳の上に悠然と立つヤツの姿をじっくりと見据えた。この怪物にも度重なる陥穽によってつけられたダメージが確かにあつたはずだ。

しかし今ではその肉体はおろか外装の僅かな破損ですら、完全に修復されてしまっている。



キリヒトは私を追いながらこの遺跡道の存在を察知したのだろう。そしてまんまと見つけた遺跡道から魔力を取り込み体力を回復。さらには瞬間移動して今、私の前に現れたのだ。

逆に私はすでに消耗の色合いが濃い。加えて、先ほどの罠はあの短時間で私に用意できた最上の罠だった。あれ以上大掛かりな罠を仕掛けるのは物理的に不可能だった。ヤツも当然それを察しているのだろう。

私にはもうなんの打つ手もないのだと。

事実として、その推察はほぼ正しい。できることなら先の粉塵爆発で決めておきたかった。確かに今の私にはほんの僅かの余力も残ってはいない。だが、私がこの場所へたどり着いたのは、決して恐怖に恐れおののき、我を忘れて己の行く先を見失ったからではない。

急な石段の傾斜の下から、勝ち誇るように私を見上げ、異形の悪魔紳士は言った。

「敬意を表そう。君を半人前とみたのは早計だったと認めるしかなさそうだ。ここまで手こずるとは思っていなかったよ。君は私の記憶の中にある中でも最もしぶとかった魔女だ」

「……それは、どうも」

言って、私はふらつきながら、観念したかのように、自らも暗い石段の上に歩み出た。

我ながら、今にも崩れ落ちそうな糸の切れた人形のようだった。

纏った外装は剥がれ落ち、蒼褪めた裸体はむき出しなっていた。もう余力がないことは傍から見ても一目瞭然であったことだろう。

一方でキリヒトは自動修繕された衣装を悠然と整え、真新しい黒のステツキとシルクハットを何処からか新調した。そこでようやく己の身なりに納得がいったのか、満足気な息をはいて石段の上方にいる私を見据える。そして優雅な足取りで一步を踏み出そうとした。

「……そこで、止まって」

震えるような私の声に、再び洒脱な燕尾服姿となった紳士は驚いたように眉を上げ、そのあとで人のものとは思われぬ邪悪な笑みをその貌に湛えた。

「そう、怯える必要はないよ。可憐なお嬢さん。私にも慈悲というものはあるのだからね」

舌なめずりをするように言つて更に一步足を踏み出した。

私は足を引きずりながら、動いた。近づいて来るキリヒトに対してそのまま退がるのではなく、円の淵をなぞるように動いたのだ。逃げるのではなく、あくまで間合いをはかるように。

「……来ないで……!」

そして舗装された階段の只中に立って、錐人を真っ直ぐに見下ろし、出来る限り感情を吐露しないように努めて叫んだ。

長大な、白い石の敷き詰められた階段の上で、私達はちようど階段の上と下でにらみ合うような形になった。

そして私は手袋を外し、左手にある最後の令呪を見えるように掲げた。

それを見上げた怪人は、その貌にまた喜色の色を重ねた。

「今更、空間転位でサーヴァントを呼ぶつもりなのかな？ かまわんが、そうするならもっと早くやるべきだった。確かに未だ存命しているようだが、セイバーと戦い続けたライダーはすでに瀕死の状態だろう。役には立つまい。」

その上、君と私の間合いが致命的だ。これでは転位させられたライダーが状況を把握する頃にはもう君は死んでいると思うがね？」

「……やってみなければ、わからない！」

私は、最後の令呪を使用した。手の甲で熱が弾け、強大な魔力が解かれていく。

「そうかね？ ——」

瞬間、奴の姿が消失し、——攻撃は背後から来た。

ヤツはこの遺跡道の、どの地点にでも瞬間移動できる。ヤツは私の上にいた。私は後ろを取られたのだ。

もしも棒立ちしていたなら背骨を砕かれて致命傷を受けていただろう。しかし、そうはならなかった。

私はその攻撃を予期していた。背後から来たそれをすっかりと受け止め、同時にその反動を利用して石段の外まで（・・・・・・）跳んでいたのだ。

腕の何処かなのか、それとも別の場所なのか判然としなかったが、身体のあちこちから骨の折れるような音が聞こえてきた。

凄まじい衝撃に見舞われてはいたが、——しかしそのときの私に恐怖は微塵も無かった。私は勝利を確信して、宙空で、聞こえるはずもない言葉を嘯いた。

「……その位置がいい。やつとその位置に来てくれた。この直線上にいて、そして下を向いていてくれれば、なお良い。……あとは隙を作るだけ。それなら、……絶対に当たるから」

私を殺しきれなかった錐人は、そこで不可解そうな貌をした。私の呟きは聞こえていなかっただろう。

それでも私の勝利を確信しきった目を見て、ヤツは咄嗟に己の致命的な失策に思い至ったのだろう。——そういう貌だった。

次の瞬間、山の頂からふもとまでを一直線に伸びる長い石段を凄まじい熱と質量を持った何かが、紅い閃光の筋を残して直進して行った。背後からのそれに巻き込まれた

キリヒトの身体は一瞬でバラバラに砕け散った。

これこそが真正正銘、私の用意した本命の策だった。

階段の上、山頂にある神社の鳥居の間には、一本の棒状のものがつきたててあった。その先端には艶やかな月の光を弾いて輝く鋼色の三日月が輝いている。

私を使用した最後の令呪はライダーを呼ぶためのものではない。この階段の頂点につきたててあったライダーの宝具である戦の機能を、一時的にマスターであるわたしが使用できるようにするためだったのだ。

そう、今ヤツを粉碎した紅き閃光は月牙の輝きによって召喚される英馬、赤兎馬による渾身の突進攻撃（チャージ・アタック）だったのだ。

その威力はAランク相当の対軍宝具に相当する。いくらキリヒトが尋常でない頑強さを誇るとはいえ、直撃を受けてはひとたまりもあるまい。

私は最初にヤツを遺跡道のもたらすアドバンテージから切り離れた。次いで山中に仕掛けた罠で徐々に消耗させていく。そしてこの山中にある遺跡道はこの直線の石段だけ。追い詰められた私がここへ近づけば、ヤツは喜々としてこの道に躍り出るだろう。

そして私にミスに付け込んだ気になって己の優位を確信する。私が狙ったのはその隙だ。

いくら赤兎の攻撃がすばやくとも、いきなり撃つて当たるものではない。気が付かれれば避けられてしまう。しかも私が英霊の宝具を使用するというのはそう何回もやれる芸当ではない。

だから、最深の注意と最大の労を払ってでも、この瞬間に万全を帰さなければならなかったのだ。

高い再生力をもつキリヒトを倒すには一撃で五体を吹き飛ばすしかない。それができるのはおそらくサーヴァントの宝具だけだ。

しかし今ライダー自身はセイバーとの戦闘に身を投じておりこちらに加勢することはできない。いくらライダーでも魔力供給が滞っている状態でセイバーを相手取りながらキリヒトを粉碎するのは難しいだろう。

故に、私は令呪を用いて自分自身が宝具を使用するという裏技を使ったのだ。それが私が用意した最大の策であった。

どれほど頑強な魔術師であれ、命はないであろう。キリヒトの体はまるで巨大な蒸気機関車に轢殺されたかのような惨憺たる有様を呈していた。

粉碎されたキリヒトの破片を見ながら、私は吹き飛ばされたその場でへたり込んだ。寸分の余裕も残ってはいなかった。息が吸えず、全身全霊で呼吸に精を出すというのは久しぶりの経験だ。

もう、体の何処が負傷しているのかも定かではなかった。疲労のせいで痛みを正確に把握できないのだ。精神的疲労も凄まじいものがあり、すぐにでも眼を閉じて眠り込んでしまいたかった。

しかし私は何とかして心身に鞭打ち、いまだ戦い続けているライダーの様子に視界を向けた。

山中を走った一筋の閃光を見たセイバーが、目を剥いてそれを見上げた。

「な、なんだッ」

声の調子は驚愕を通り越して狼狽に近かった。北海の豪勇らしくないことだが、それも仕方ないことかもしれない。当然、その瞬間にマスターの身に起った異常も感じ取っていたのであろう。

「ゴオオオオオオオオ、ペアッ!!」

それを機に、ライダーは裂帛(れっぱく)の氣勢と共に「激昂」のスキルを発動し、残った総ての魔力を総身にめぐらし始めた。

「フン。これで、ようやく我慢の必要がなくなったな」

「——ッ！ 貴様、何をした!?!」

「何もしてはおらんといいただろう？ フン。オレ様にはなんの策もないとな。強いと言うなら、——そうだ。ずっと我慢しておったのよ。俺が受けた命は唯一つ。オレ様

のマスターが貴様のマスターを倒すまでは大人しく貴様を引き止めておくようにというものだ。

いやあ、難儀したぞ。——それも、もう終わりというわけだ!!」

この上なく不敵に笑んだライダーを、セイバーは豊かな髭に囲まれた面貌を真紅に染めて凝視した。

「なるほど、……まったく思っても見なかったことだが、マスターを失った以上ワシの勝ちはなくなたようだな。……だが、それで勝ち誇るは早すぎるぞ、たわけめが! この上は、この身に残された猶予を持つてうぬを下し、あの小娘を討ち取ってくれるわ!」  
それを聞いたライダーは快哉を叫ぶように呵々大笑した。

「又ハハッ! 生き汚くて結構なことだ。誠に重畳! 此処にいたって意気消沈されてはこちらこそ不本意極まりないわ!」

ライダーは中腹から折れ砕けて用を成さなくなった剣をセイバーに突きつけて大喝する。

「さあ、最後の大勝負と行くか、もはや貴様も出し惜しみの必要はないぞ。全力で来い。俺様も今度こそ渾身の一撃を見舞ってくれるわあつ!!」

「——轟け、『舵竜輝咆剣(ドラグヴァンデル)』! あの下郎を粉碎せよ!」

ライダーの言が轟くが早い、セイバーはもはや問答は無用とばかりに己の宝具たる



劍を執り成し、そこに最大限の魔力を注ぎ込み始めた。そして立て続けにその刃の腹にルーン文字を書き込んで行く。野太い指先がそこからは想像もできぬほどに繊細な躍動を見せ、光陵の紋となつて平たい刀身の上で爆ぜ廻るように乱れ狂った。

「渴望せし、原初の炎（ニイド・ケン）——戦神の奔馬（テイル・エオー）——陽光の寄与（シゲル・ギューフ） 雷神の戦車（ソーン・ラド）——並べて群れとなし（エオロー）、災厄の豊穡を約束せん（イング・ハガル）」

——それらが劍の中の魔術機構によつて、あつという間に最大値まで増幅されていくのである。

今あのセイバーは、極限まで増幅された魔術を渾身の斬撃と共にライダーへと見舞うつもりなのだ。

セイバーの構える刀身からはすでに馬鹿げた量の魔力が放電現象となつて溢れだし、大気を引き裂き始めている。

なんとという劍であろうか。書き込まれたルーンの摂理と注ぎ込まれた魔力とを丸ごと倍々化してしまうかのような、出鱈目な機構はアレが魔術の条理から外れた「宝具」である事を如実に物語っている。

もしもアレを叩きつけられれば、自然界においてさえ有り得べからざる規模の放熱と雷撃が見舞われる事になるだろう。正面から対峙するには、あまりにも危険だった。

それでも——わかつてはいた。事此処に至つて、この男に一切怯むところなどはないのだと言ふことが。

それまで、この世の常ならざる豪勇たちの鬩ぎあい、過度の嗜虐を加えられていた空間そのものが、それまでとは桁の違う暴虐に晒され、悲鳴を上げていた。そして不意に訪れた一瞬の後、周囲はまるで凪いだ水面のように静まり、——刹那！

「去れ、ライダーッ！ 雷鳴と光陵の彼方へ!!」

振り上げられた刀身から溢れ出した雷電はまるで津波のように当たり一帯を紫電の檻で包み込み、全身全霊の斬撃と共にライダーへ向かつて集束した。

己が必殺の剣を振るうセイバーの姿は、伝説の雷槌ミヨルニールを振りかぶる北歐の戦神トールのそれに瓜二つであった。

しかし万象を焼き焦がすはずの致命の余波には眼もくれず、魔人のごとき凶笑をたたえたライダーはセイバーの本命の斬撃が振るわれようとした刹那、それを真正面から受けるように踏み込んだ。

その巨軀をあたかも塵芥の如く飲み込もうとした雷電から逃れえることはもはや何者にもなしえないことと思えた。にもかかわらず——

「フーン。馬鹿な髭ダルマめ！ この俺様に正面から向かつて勝てるわけがあるまい！」

出鱈目な確信を叫び、ライダーは雷撃の波濤となって押し寄せるセイバーを迎え撃つ。

「受けよ。我が宝具の真髄！ 『飛將軍越——我、人中に有りいはいっ！！』」

声と呼ぶにはあまりに規格外な爆音が巨漢の口腔から迸り、瞬間、余波とは比較にならない稲妻の群を解き放たんとしたセイバーを活目させた。

それは決死の交差の合間、最大の一撃を放つとともに、ライダーの放つであろう覇刃を回避するはずの心積もりを崩されたからに違いない。

セイバーの思考を考察するなら、ライダーの手は事ここに至ってあの覇刃以外には考えられない。いかに渾身の殺気が放たれようが、来るのがわかっていれば回避も可能であり、いざとなれば斬撃の合間に受け止めることも出来るはず。

セイバーは一刹那のうちにそう考えたに違いない。それが最大の間違いだったのだ。

真名の開放と共にライダーが放ったのはこの男の念意の刃、その本来（・・・）の形態であった。

殺意の念波を実の刃の如く操るといふ術理は、この男にとつては副次的な使い方ではなかったのだ。その宝具の真髄はかつて何万もの敵を単騎で怯ませ、後退させたこの豪勇の放つ比類なき存在とプレッシャーそのものなのだ。

それは己を中心として全方位、あらゆる角度、あらゆる方面へ向けて波状拡散した殺

気の乱舞。そこには一寸の隙間さえ存在しない。まさしく対軍宝具の位置にある規模の覇刃であった。

今、英霊として受肉したライダーの殺気の念意は、そのすべてが余すことなく物理的破壊力を持ち、必殺の一撃をまるで雨か、否、あたかも刃の暴風雨の如く降り注いだのだ。

無論、回避することも、受けることも不可能な真なる必殺の一撃である。

瞬間、稲妻の波濤と斬刃の暴風が交錯した。

炸裂した雷光が周囲を包み込んでいた闇を取り払い、使い魔たちの視界は一時的に断絶してしまった。

少しの間だが、使い魔たちとの視界の中継が叶わなくなる。

今の光景からは一刹那の内に行われた激突の結果はわからなかった。私は視界を途絶し、よろめきながら立ち上がった。

「……ライ……ダーッ」

ライダーが勝ったにしろ、負けたにしろ、何時までも私がここに在るわけにはいかない。私の成すべきことは己のサーヴァント、否己の戦いの結末をこの眼で確認することだった。

だが、そのとき私は背後で何かが蠢く物音に振り返った。

そこに——紅い案山子が、笑っていた。

## 五章一3

(土曜日・未明)

私は走っていた。

あれほど漆黒の色味を重ねていたはずの森の暗がりには、すでに薄ぼんやりとした明かりが差し込み始めていた。

夜はもう終わりを迎えようとしている。なのに、私は止まれなかった。

走って、走って、ただ、走り続けていた。何も考えられなかった。意識は硬直し、思考は停止して、どうして走っているのかさえ、何から逃げているのかさえ、見失って走り続けた。

ただ苦しくて、わけがわからなかった。もう走らなくていいはずなのに、どうして私はまだ走っているのだろう。

いつの間にか、暗い山の斜面に灯りが見えた。ああ、晦の里だ。あそこに逃げ込めば何とかなる。あそこには師の工房がある。——私は知らぬうちに山の反対側に出てしまっていたようで、月を指して昇っていた筈の斜面をいつの間にか下っている状況だった。

そんなことさえ失念してしまうほど、私は無我夢中で逃げ惑っていたのだ。

訳がわからなかった。どうして夜鳴手錐人は死んでいないのだろうか？ あそこまでバラバラになっておきながら、どうして生きているというのだ？ サーフアントの宝具をまともを受けて四散したというのなら、もはや再生など叶わぬはずだというのに……どうして、どうして、どうして………。

思考はもはや、疲労と混乱とで暗転と空回りとを繰り返すばかりだった。そのまま留まることなく走り続けて、私は知らぬうちに歩き慣れた山道を駆けていた。

淡い安堵が湧き起こった。すでに枯渴したかに思えた五体に僅かな篝火が灯った。

この先には師の屋敷がある。もう、眼と鼻の先だ。

この際、面子だの矜持だのというものはどうしようもなかった。もはや最後の令呪も無くし、サーヴァントであるライダーとのつながりも殆ど感じられない。これ以上は無理だった。

この上は、何の体裁を保てずとも師に助けを求めるしかなかった。

ただ、生き延びたい。死にたくないという、その一念で私は住みなれた師の屋敷の前にたどり着き、そこでしばし呆然と立ち竦んだ。

堅固な守りを持つ一流の魔術師の工房。それは一種の異界にも例えられる魔術的要害のはずだ。なのに、その堅牢な筈の結界は根こそぎ破られていた。トラックの侵入す

ら防ぎとめられそうな高い塀と城門がまるでおもちゃのように切断されていたのだ。

私はすんなりと敷地の中に入った。何の魔術的設備も働かなかつた。つまり誰も私に気付いてくれなかつた。そこには誰もいなかったのだ。

凄まじい戦いの痕跡だけが残されていた。なんということだ。最後に師と連絡を取つたのはつい先日のことだ。

その間に、こんなことが起つていたなんて、いや、そもそも私自身が昨夜から交戦状態に入つていたので、気付かないのも無理はないのだが。

それでも今日戦闘があつたのなら、それを察知することくらいはできたはずなのだ。訝る私は破壊された瓦礫の中に僅かに燻つて煙を上げている部分を見つけた。つまり、この惨状を作り出した戦闘、あるいは襲撃は、今しがたまで行われていた可能性が高いのだった。

私はタツチの差でそれに遭遇しないで済んだらしい。それがいいのか悪いのかは判断が難しかった。

一つわかることは、私が継るべき最後の光明が、全く消え失せたということだ。

『やられたよ』

人の声音ではない。音波ではなくノイズの混じつた言霊のようなものが背後から響いてきた。



あのまま古代道で回復に専念していればいいものを、あの怪人はわざわざ私を追ってきたのだ。

振り返り、奴の姿を見た。

その変わり果てた姿を率直に言い表すなら、それは真赤な案山子だった。それも何年も風雨にさらされきつたポロポロのヤツだ。

あの洒脱な光沢を持つていた外套は殆ど意味を無くし、その首の辺りに引つ掛かっているだけだった。

真つ赤に見えるのは、四散した五体を無理につなぎ合わせているからだ。まともにつなぎ合わせられるような部品はないと見えて、総身が流れ出した血液と飛び散った肉片にまみれているのだ。

あらためて、とても生物が生きていられる状態ではないと思われた。魔術師だろうが魔獣だろうがなんだろうが、どうしてこの状態で生きているのかまるで理解できなかつた。

それでもその五体には凄まじい魔力だけは歪に循環しており、あの古代道から充分な魔力だけは補充してきているというのが見て取れた。

状況は最悪だった。擬態魔術を持続することができず、私はよろめいて膝をついた。魔力を漲らせているヤツに対し、私の体にはもはやそこらの女学生以下の能力しか残さ

れていなかった。その上助けを呼ぶことさえ出来ないのだ。

不気味な言霊が続いて流れてきた。奇妙なイントネーションだった。まるで喜々として笑っているようだった。

『本当にやられたよ。こうまで破壊されてはいくら魔力があつても、もうこの身体（・・・）の再生は無理だ』

否、事実としてヤツはこの状況を楽しんでいるのだ。

『令呪も失つてセイバーとのパスが途切れてしまった。おそらく、君のライダーと相打ちになったのだろうな。あの状況から相打ちにまで持つていくとはさすがに計算外だった。セイバーがだらしないというよりは、やはりあのライダーが凄まじいポテンシャルを秘めていたがための結果だろうな。』

ク、ク、ク。セイバーも、おとなしく君を追つていればこんなことにはならなかっただろうにねえ。——いや、そうではないな。総てはあらかじめ予見されていたことと考えるべきか。

君はそれも総て見通していたのだろうか？ 読んでいたのだね。なるほど、ならば真に賞賛すべきは君の機智であるべきだ。——しかし、それでも君には残念な知らせがある。この体はまだ少し動くようなのだ。ここで君を殺しても意味のないことなのだが、ただじつと動かなくなるのを待つのも、無為なのでね。せめて君と決着をつけようと思

うのだよ』

「……………ッ」

勝手なことを言ってくれる！

私は敵に背を向けて屋敷の敷地内を目指して走った。もう足の感覚は無かったが、とにかく転げるようにして走った。

絶望している暇はない。まだやれる事はある。少なくとも、ここには私の本来の工房があるのだ。そこまで行ければ――。

『つれないな』

ダメージを重ねすぎた体は動こうとするたびに歪に引きつって、いくら早く走ろうとしても体は思うように動かない。もたついているうちに、檻樓切れの塊のような体は私に目の前にいた。

今にも分解しそうな腕が伸び、信じられないような腕力で私の首根っこを捕まえた。

向こうもかなりの重症――というか明らかにその五体はちぐはぐに繋ぎ合わされただけの継ぎ接ぎで、どうしてそれが動いているのかさえもが疑わしかった。

しかしそれ以上の思考は許されなかった。私の身体を捕まえた案山子はそのままだ形みたい私を振り回し、そこいらの瓦礫の上に叩きつけた。

抵抗どころではない。殺される。向こうも殆ど魔術は使えないようだったが、今の私

を殺すのに魔術は必要ない。きっと子供でも私を殺せるだろう。

必死になって瓦礫の中から這い出した。骨がまた幾らか折れたようで、腿には太い木片が突き刺さっていた。

芋虫のように這うことしかできず、私は本当にここまでか、という諦観の思いを持って余した。

しかし、それでもまだ手足が動くのなら、諦めることだけはしたくなかった。

私はまだ生きているのだ。人を最後に殺すのは諦めた。己の念なのだ。最後に自分を殺すのは何時だつて自分なのだ。だから、ここで生きる事を止めてしまうことだけはしたくなかった。

だいぶ、時間をかけて身体を起こした。

そんなに時間があるのになぜ追撃がこないのか不思議に思つて振り返ると、そこにはキリヒトを取り囲むように何十匹もの猫たちがいたのだつた。私の使い魔たちだつた。

凄まじい唸り声の合唱が聞こえているはずだというのに、それがまるで聞こえてこない。私はようやく自分の聴覚が麻痺していたのだということに気が付いた。

私は助かった、とは思わなかった。私の使い魔の使い方はつまるところ感覚の拡張端末としての意味合いが大きく、戦闘には向かないというのは前述のとおりだ。

もとより彼らに戦う力はない。その意味では彼らはただの猫なのだ。あんなバケモ

ノに抗える道理がない。というより、本来足止めなどかなうはずはないのだが……。

怪人は一本だけ残った右手で瓦礫の木柱を引き抜き、それをふるって足許に群を成す猫たちを蹴散らしていた。本来、猫の反射神経と移動速度は人間の及ぶところではなく、さらに今のキリヒトは継ぎ接ぎの身体を持って余しているようで、その動きには精彩がない。

ゼンマイ仕掛けの人形のようなぎこちない動作しか出来ていない。だからこそ使い魔たちは弾き飛ばされながらも何とか持ちこたえてはいたようだった。

が、無論、威嚇するのがせいぜいで、反撃などは出来る筈もなかった。

『何処だッ！ 何処にいる？』

そう叫ぶ怒号のような念波と同時に、ふいごのようなフューフューという間抜けな音が聞こえてきた。聴覚の異常は一時的なものだったようだ。

——そこで私は気が付いた。なぜあいつは私を見つけれられないのだろうか？ 猫の群に阻まれているとはいえ、暗がりの中、私の肢体の姿を覆い隠すものは、それこそ薄布の一枚すらないのだ。

炸裂音のような音が響き渡り、数匹の猫達が吹き飛ばされた。そのうちの一匹が血にまみれながら私のほうに飛んできた。

三郎、と私が呼んでいる野良猫だった。よく私の所に餌をもらいに来る常連だった。

「……もう、いい」

私は虫の息の三郎を抱き上げ、その血と自分の血を指で掬い取り、額にラインを描いた。魔術発動の触媒だ。軟膏の代わりだった。用意していた軟膏は総て使い果たしてしまっていたから。

そうして念意を使い魔たちに伝え、私は下がるように命じた。このままでは全滅は時間の問題だったからだ。

確かにこの猫たちは私の使い魔だ。それでも私のための盾になる必要などない。そんな契約はしていない。義務もない。義理だつてない。私はただ自分がそうしたいから彼らの面倒をみていただけなのだ。

この猫たちが、私なんかのために死ぬような理由は何処にもないのだ。

『ハハア、そこかー』

猫たちは一斉に道を明けた。そしてようやく、暴れたせいで接合面がずれ、より歪な形になったバケモノが私を見つけた。

私はそれに背を向け、最後の力を振り絞って駆け出した。抱きかかえた小さな鼓動が消え行くのが感じられた。私の鼓動はまだしっかりしている。まだ動ける、まだ生きている。

なら、やれるだけやってやる。もはや逃げても生き残ることはできない。

斃すしかないのだ。ヤツを。

私は必死で駆けた。継ぎ接ぎなバケモノはそれを追つて来る。なんともろまな徒競走だったことだろう。足を引きずる私と、ブリキのおもちやの様な怪人とで。

まだだ。まだ、やれることがある。敷地の奥、本館の裏手に、私の本来の工房がある。せめてそこまでいければまだやれることがある。だから、それをやるまで諦めるな。

己を叱咤しながら、私は倒れこむように敷地の外れにあつた古ぼけた建物の中へ転がり込んだ。

『ほう、ここは……君の工房だったのか』

すぐに閉鎖（ロック）された筈の工房ドアを、こともなげに腕力だけで粉碎した歪なバケモノはすぐに天井に向けて瓦礫をばら撒き、室内の照明を根こそぎにしてから再び薄暗い闇に沈んだ室内に入ってきた。もとより雑多な物置状態だった工房内は一瞬で廃墟のような有様になった。

『変わった趣向だな。魔女の館にカトリックの祭壇とは……いや、違うな、黒ミサや儀式をするのにも祭壇は必要なのだったな。神への冒瀆ためにはうってつけか……しかし、それでも魔術師の工房の中に在るのは解せん。ここは工房ではないのか？』

私の工房はその大部分が礼拝堂になっていた。とはいってもその殆どは実質的に物置になっている。

実際にはもともと物置だったのだ。この屋敷そのものが今では別の場所に移設したミッシヨン系スクールの跡地をシユタウフエンが買い取ったものなのだという。この礼拝堂はその名残だというわけだ。

物置として使われた場所を、わたしが自分の工房として借りていたという訳だ。無論、魔女の工房としてはまさしく珍妙と映ったことだろう。

私はその祭壇の前に、今にも事切れてしまいそうな猫を抱いて座り込んでいた。

『自分の工房の中なら何とかなると思ったのかね？　しかし私は捨て身なのだよ？　そんな敵を押し留める手段が今の君にあるのかね？』

ちぐはぐになった怪人紳士は血を流し、祭壇の前に座り込む私の姿に、揚々とした念波を送ってきた。それに私は肉声で鋭く応えた。

「……口だけだ。捨て身だなんて。それ（・・）は元から、貴方の体じゃない」

もはや口すら無い、継ぎ接ぎの五体にも関わらず、その朽ち果てた案山子のような顔が笑ったような気がした。

『もう、全部知られているということだよいのかな？』

「……さっきのようやく確信できた。あの時、あなたは私を見ていなかった。あなたが見ていたのは、私の中の消えかけの魔力だけ。だから周りの猫たちと私の見分けがついていなかった。」



……あなたの本体は霊体、というよりも生霊なんだ。エクトプラズム体だけが本体で、それが生きた触媒として、戦闘のための、より強靱でそしていくらでも代えのきく身体を使用できる。

それが、あなたが百年以上も自分でこの儀式に参加し続けていられる理由」

そうだ、今この薄暗い室内でその赤い襪襦雑巾の塊のような五体を注視してみれば、その所々から漏れ出しているのは、最初の夜から目にしていたあの奇妙な青や緑の光に濡れ光る流体物だった。

生身の肉体ではなく。あのエクトプラズムのほうがあの魔術師の本体だったのだ。

『やはり、君は……優秀な魔女らしいね。素養はともかく、その思考力、行動力、そして精神力……己の「血」だけに寄りかかった愚図どもとは雲泥の差だ。君を侮りすぎたことが私の敗因だろうな』

己の有様を嘆くような台詞を吐きながら、怪人は哀れみを含んだような感嘆の言霊を響かせた。

私にはそれがただひどく耳障りだ。とだけ感じられた。高名な魔術師に認められたという感慨は微塵も沸いてこなかった。

「……あなたこそ言うだけのことはある。……夜鳴手、錐人。御三家の一角にしてこの儀式の核であるサーヴァントシステムの提唱者。……その魔術理論の根本にあるのは、

あなた自身の魔術なんだ。……ようやく、解った」

『そのとおり、私の体はいわばサーヴァントのプロトタイプとでもいうようなものでね。依代となる人間を用意して、私という生霊が物質化するための触媒とする。最も主従関係は人間と霊体で逆になるがね。』

時空の彼方から英霊を呼ぶのは聖杯の役目だが、それをサーヴァントという形に固定できるのは私の技術あつてのことなのだよ。その上、この数十年の間に実際に稼動しているサーヴァントを観察し、幾度となく素体を作り直して最適な素体を作り上げてきたのだ。

私の本来の肉体は滅んでしまったのでね。私は仕込んだ素体が成熟するまでは眠っているのさ。そして聖杯戦争が始まるとともに、私は新しい身体を得て復活する』

「……それが……この街の都市伝説、「赤い外套の悪魔紳士」の噂が数十年ごとに出回ってくる理由ってわけ」

怪人は継ぎ接ぎの顔を歪めて今度こそ確かな微笑を浮かべた。きつと、本物の悪魔が牙を剥いたら、こうなるのだというお手本のような顔だった。

『この素体は傑作だったのだがね。その基礎能力は単体において騎士クラスのサーヴァントのそれに匹敵し、さらにこの笹ヶ谷に残されていた古代道遺跡の能力を転用できるようにチューンナップしたのだ。』

この笹ヶ谷という場所での戦闘においてはサーヴァントすら凌駕するといっても過言ではない。どうだったね?』

「……あの、遺跡道は、なんなの?」

『さてね。その由来衣冠についてはついぞ解らなかつた。どうやら有史以前からあつたようだということが以外はね。どうやら島原がこの儀式に協力するのはこの遺跡が関係しているらしい。』

——まあ、私には来歴などどうでも良かった。有るのなら利用するだけだ。未だ生き残っている魔力の循環機構を利用してそこから魔力を吸い上げ、レイ・ラインを幾重にも使用できる機能に特化させた。

最も、それも君に読まれてしまったわけだがね。君もよくあの古代道の事を知っていたものだ。シユタウフエンはこのことについてはまったく気にもとめていないと思っていたが、そうでもなかつたのかね?』

私は唇をかみしめた。

「……私がその事を知つたのは、シユタウフエンとは関係ない」

『ふむ、では独学だと?』

「……それは私の友達が残してくれたものから。貴方が殺した、何の罪も無い、一般人の、あの娘の、ファイルのおかげ……」

『……………何のことだ？ ……………悪いが、心当たりがないな。私とて魔術師、必要の無い殺人（……………）など犯しはしない。

——いや、面白いな。その話には少し興味が湧いたよ。私達の認識には齟齬があるよ。うだ。なるほどそういうことならば、おそらくは……………』

案山子はぶつぶつと念派を漏らしながら考え事を始めたようだった。

私のほうといえ、別にヤツがなんと答えようと構わなかった。今更あやめの事を言つても意味の無いことだとは解っていた。

そもそも魔術師には「唯の人間」の命など物の数に入っていない。きつとあやめの死も、憶え置く必要の無い事柄でしかないのだろう。それはいい。別にそれについて罰を与えたいなどとは微塵も思っていない。

ただ——。血に濡れた猫を抱いて、再び死んでしまった級友の事を想った。きつと、あやめ本人は仇討ちなど望むような人間ではないのだ。

今ヤツが彼女を殺した事を懺悔したとしても、何も変わりはないのだ。すでに死んでしまったあやめにはそれに応える事など出来ないし、私の溜飲も別に下がりはない。

罪をあがなうことなど、本当は誰にも出来ないのだ。起きてしまった過去が変えられないように、いくら罰を受けても、与えても、それは罪とは何の関係もないことなのだ。

だから、私のやっていることは彼女のためではない。ただ、自分の自己満足のために

——この魔術師を殺すのだと、私は改めて確認した。この行為を決して誰かのせいにしてないために。

『……まあいい。いくら思考ばかりしても意味が無い。この続きは君の記憶を覗きながら、ゆつくりと考えることとしよう。さて、そろそろ時間もなくなってきた。君との戦いは良い経験になったよ。次の素体はもう少し改良が必要だな』

「……次？」

『そうとも、今も私の頭の中は次の素体をどうするのかのアイデアでいっぱいなのさ。もうすぐだ。もうすぐ完全な素体が出来上がる。……悪いが、そのためにもわたしは生きなくてはならない。そこで、君の身体をもらいうけようと思うのだよ』

ボロの案山子からは、今や暗闇に滑り塗れ光る、蛸やクラゲの足のような触手が無数に伸ばされ、まるでそれ自体が蜘蛛の巣にでも掛かっているのではないかと思わせるような光景が広がっていた。

いよいよ、キリヒトは素体である身体を捨て、本体であるエクトプラズム体を駆使して動き始めていた。

「……エクトプラズムは強い光に弱い……だからアンタは日の落ちた時間にしか活動しなかった。……町の街灯、この部屋の照明まで丁寧破壊して……闇の中でなら、もしも素体を失っても自由に動けるから」

『そのとおりだよ。聡明なるお嬢さん。だから私には時間がない。朝が来ては私の負けだ。だから君の死体を貰い受けたいのだよ。君の中でなら、日光に照らされても問題はない。』

肉体のポテンシャルについてはともかく。君の脳髓の中には興味がある。私にとつて、潔白で聡明な人間の脳髓は、例えるなら、綺麗に整頓された神殿のようなものでね。君は、住み心地がよさそうだ』

「……今、この子が息を引き取ったの」

興奮を隠し切れないとでも言うかのように喋り続ける奴の言葉には応えず。私は静かに呟いた。

ヤツが何らかの目的があつてこそ、時間を駆けて喋っているのはわかつていた。私にそれに付き合っていたのは、これを待っていたからだ。

私の手でそれを早めることはしたくなかった。私がコイツとの問答に応じていたのはこの小さな鼓動が穏やかに事切れるまでそれを、静かに迎えさせてあげたかったからだ。

案山子が下卑た笑いの念派を張り上げた。

『——残念だが、その猫では私の隠れ蓑には小さすぎる。まあ、しばらくは一緒に連れて行つてあげるのもいいかもしれないね。それなら寂しくはないだろう。』

一緒に往ける連れ合いもできたことだ。さあ、観念し——」  
そのとき、奴のツギハギの身体は、床の下から迫り出してきた鋼鉄の金具に絡め取られた。

後は一瞬だった。それは実際に魔女の拷問に使われたという鉄塊の群れだった。それが幾重にも案山子のようだった奴の身体に群がり、拘束し、切り刻み、あつという間に挽き潰してしまったのだ。

しかし同時に私の体も拘束されていた。

ぬらぬらと濡れ光る半霊体とでも言うようなエクトプラズム体が、私の周囲を取り囲んでいたのだ。

そしてそれらは身体に備わる穴という穴から私の内部へ侵入を果たしていた。ヤツは会話をしながら、紐のようにしたエクトプラズムの触手を私の周囲に伸ばしていたのだ。

時間稼ぎをしていたのはこのためだったか。

『私としても残念なのだよ。セイバーは消滅した。ここから存命できても、サーヴァントと令呪を失った私にもはや聖杯戦争を続けることは出来ない。』

つまりは引き分けだな。お嬢さん。しかも、もしも君の師匠が此処にいたのなら私はまんまとやられてということになる。……やはりここは痛み分けということになるので

はないかな？

それではお嬢さん。名や血筋ばかりで中身の無い魔術師よりも、君と戦うのは面白かったよ」

まるで軟体生物のような奇怪な塊となった生霊から響いてくる『声』は、まるで王手をかけたかのように勝ち誇っていた。後は私の身体を出来るだけ傷つけずに殺せばいいだけなのだ。

「……は、……む。」

私は口腔内を塞がれたまま、言った。

『ぬ？』

口内から粘液の糸を引いた半霊体物質が引き抜かれた。

「……私の名は小高森、涅」

それ（・・・）は確かに嘲笑し（わらっ）た。

『なるほど。憶えておこう、クロム。わが好敵手として』

しかし、私は良く聞こえるように、言霊を震わせるようにして言った。それが奴にも良く聞こえるように。

「……そう、光栄だけど。……残念ながらあなたに次はないの。名乗ったのはあなたを殺す魔女の名を教えてあげるため」



そのとき穴の空いた床のもっとも深い場所——つまり工房の中枢に仕掛けられた美しい装飾の施された軟膏壺がせり上がって来た。そして矢庭に凄まじい吸引力でキリヒトのエクトプラズム体だけを吸引し始めたのだ。

『——な、バ、馬鹿な』

それに抗うように、私を拘束していた触手まで騒動紳して、その吸引に抗いながら流粘体のバケモノは悲鳴を上げた。

ヤツは今までの私の戦法から、私の技量で作れる程度の罠ならば、容易に突破できると考えていたのだろう。しかしその目論見は大いに外れたといえる。

「あなたが生き残れない理由は二つある」

私は立ち上がり、ゆっくりと宣言した。今錐人を拘束している吸引力は私には何の影響も与えてはいない。

この罠……というよりも「罰」は、私の技量とは預かり知らぬところから力を得ているのである。

「……ひとつ、これは私が仕掛けた罠じゃない。咎人を罰するための「神罰」。ここはなんだと思う？　ここは祭壇。……でも、魔女である私が神の子や聖霊を崇めると思う？」

何か、強大な重力にでも捕らわれるかのようなエクトプラズム体の視線が跳ね上がった

て祭壇の上にあったものを見たのがわかった。

霊体しか感知できなくとも、そこにあった呪物（オブジェクト）が十字架やマリア像とは異質なもののだということがわかったことだろう。

そこにあつたのは、獣頭の女神をかたどったシンボルだった。

『ハ、これは……』

そのうろたえた様な言霊の響きは、燃え尽きる陽炎のように揺らいでいた。

「……彼女はエジプトで神格化された猫の女神『バステト』。古都ブバステイスで信仰されし女主人にして軟膏壺の貴婦人。

……古来エジプトでは「猫」は神聖視されるものであり、このバステトの神殿には実際に多数の猫のミイラが発見されている。——そして、彼女の領域、神殿内で猫を殺した者には例外なく神罰が下される……」

濡れ光る生霊の視線が、私の腕の中で温度を失ってしまったそれに注がれた。

「……本当なら、使いたくなくてなかつたけど」

『バカな……たとえそうであっても、この仕掛けを作ったのはお前だ。なぜお前程度の魔術師の罠にこれほどの拘束力があるのだ』

「……それは教会の、そしてあなたたちのおかげ」

『!?!』

「……どうして私がこんなあからさま魔女の格好をしていると思う？ なぜわざわざ神の教えを愚弄するような礼装を着て、カトリックの祭壇に異教の神を奉じているのかわかる？」

……そうすることで、私は全世界に十億以上もいる「神」への信奉者達の「憎悪の対象」となれるからよ」

そう。教会と、その信仰を冒瀆するために、私はあえて（・・・）この祭壇に我が信仰対象である彼女を祀ったのだ。

ここは長らく教会の祭壇、つまり彼らの世界観に支配された空間だった。そこに異教の神であるバステトを祀ることで、彼女は善性の女神ではなく、悪魔としての属性を得ることになるのだ。

キリスト教をはじめとする一神教には根幹となる思想がある。それは the Creator つまり「創造主」が天地を含めた世界の全てを創造したとする思想である。故に、彼らにとつては彼らの崇める創造主意外に神は存在せず、それ以外の物は全て塵から造られた creature すなわち被造物となる。

ここで重要な事は、彼らはこの「絶対的な神」と「それ以外の総ての物」との関係を、彼ら以外の世界観にも強引に適用しようとする点である。

戦国時代に日本へやってきた教会の宣教師たちは、現地で祀られていた神仏の像に強

い嫌悪感を抱き、これを破壊するよう土地の領主たちをそのかし、キリスト教の植民地となった南アメリカでも土着の宗教は徹底的に破壊され、住民は改教させられてしまったという。

つまり、己が祭る以外の神は総てが塵なのだとする傲慢な教会の世界観の中では、神聖なるラーの娘バステトも神ならざるものであり、被造物。即ち神が創った塵でしかないということになる。

私はこの場所を工房として設置するにあたって、この傲慢にして蒙昧なる一神教のシステムを、逆に利用させてもらうこととした。

一神教の世界観において、神ならざる崇拜対象それすなわち「悪魔」となったバステト。それにむけられる逆説の信仰心、つまり強大な憎悪の念により、「悪魔バステト」はその従僕たる魔女としての私の存在をより強大にしているのだ。

「……教会の信者から異教の悪魔や魔女に向け続けられる憎悪の念が、逆に私達魔女の存在を浮き彫りにし、その純度を高めてくれる。……今あなたが受けているのは、数百年にわたって魔女に向けられ続けてきた憎悪の蓄積なの」

『か、神への冒瀆。この工房はその、そのための邪悪なる儀式を行うために……』

「……それは違う」

私は、即座にそれを断じた。

「……『神』への冒涇が、すなわち邪悪であるとは限らない。魔女は元来、邪悪な儀式など行いはしない。

……魔女が邪悪なものだと言うのは、新興してきたキリスト教徒たちが、もとより各地に根付いていたアニミズムに端を発する宗教の癒しや自然崇拜の観念を、勝手な解釈によつて貶め、体系化して神の敵役としてレッテルを貼り付けたに過ぎない。

……魔女とは本来、一神教が世に蔓延る以前より人と世界との繋がりを担うものとして役割を持った人々だった。

……だから、私が行っているのは人の善性に対する冒涇ではなく、より狭い範囲への冒涇。それは教会の信仰に代表される、私達を「邪悪なる魔女」として貶め、侮辱のレッテルを貼り付けたものたちへのアンチナーゼに過ぎない。

……つまり、私が冒涇するのは教会の連中がご大層に崇める『神』に過ぎないということ」

私はさらに続ける。

「……もつとも今の『彼女』は、「邪悪であれ」というカトリック信者達の法外な憎悪の念によつてその存在をより強固な属性を付与されている。こうなってしまった「邪神」はもはや歯止めが利かない。

……解る？ 今、あなたは間違いなく強大な「悪魔」と成り果てたバステトの禁忌を

犯したの」

吸引力が強まったようだった。エクトプラズム体の生霊は少しずつ奈落の底に引きずり込まれようとしている。

『ま、待ってくれ、私は教会の信徒ではない。魔女狩りは仕事で依頼されていただけなのだ。私の心は一度として神を崇めたことなどないのだよ。』

私達は同じ信念のもとに魔道を歩む同士なのだ。たのむ、たとえ死ぬとしても、こんな（・・・）死に方だけは納得できない。私は魔術師として誇りを持って死にたい……』  
それ（・・・）はもはやスライムのごとく溶け崩れながら、恐怖を露にして命乞いをした。その声には私は応えた。

「……そう。確かに、心残りを遺したまま死ぬのは辛いね」

『そ、そのとおりだ。もう私に余力はない。頼む、最後に……』

「……でも」

私は唇で言霊を揺らしながら、言った。

「……悪いけど、私には私のトモダチを殺したヤツを許す気なんて、最初からない。……  
魔女狩りだ、神だ、教会だ、なんて、……実はどうでもいいんだ」

『———— ツツツツ！』

「……ついでに、あなたが生き残れない二つ目の理由」

最後の捨て身とばかりに、キリヒトは総体の一部分だけを切り離して弾丸のように私へ向けて特攻を仕掛けてきた。

先の戯言とは違う本気の捨て身だった。しかし、それをすさまじい勢いで天井を粉砕して現れた巨体が踏み潰した。

断末魔を上げる間もなく、最後のエクトプラズム体は臨界を迎えたフウセンのように弾け、粉碎されて軟膏壺の中に吸い込まれた。

そのまま、奴の霊体は消滅も出来ずに未来永劫罰を与えられ続け、最後には純粹な魔力の固まりになることだろう。聞こえてはいなかったかもしれないが、私は言葉を続けた。

「……セイバーは消滅したかもしれないけど、私のライダーは消滅してなんかいない！」

風通しの良くなった天井からは、朝日の光が差し込んできていた。

いつの間にか、夜が明けていたのだ。

そのまま、朽木のごとくその場に倒れこもうとした私を、ライダーの厳つい大きな手が受け止めた。ライダーはそのまま私を壁際にもたれかからせ、その脇にどかりと胡坐をかいた。

「……セイバーには、勝てたんだ……」

私は何とか壁から上半身を引き剥がして、ライダーを見た。

「フン。当たり前のことをぬかすな。快勝であつたわ!」

それにしても本当によくあの不利な状態から……。しかし、そう思つてよく眼を凝らしてみれば、その巨体はすでに存在感を失いかけていた。

ライダーもまた致命傷を負つていたので。ライダー自身の言とは裏腹にセイバーとの一騎打ちは相打ちだったのだ。

「フフン。言つただろう、オレ様は今まで一騎打ちで負けたことなどないのだとな」

「……結局は引き分けじゃない。……それでも、すごいけど」

「フン。あの髭ダルマはちと嫌なヤロウに似ていたんでな、少しばかり力が入つただけのことよ」

「………負けたくない相手に似てたつたこと?」

「ハッ、負けるはずなどあるわけがないだろうが、ただ気に食わん奴だというだけだ」

私は少し想像してみた。あの樽のような巨体。髭面、このライダーに絶対負けられないと言わしめるほどの豪遊。そして身のこなしは飛燕そのものと来れば……。

「………なんとなく、わかるかも」

後世に流布するイメージがわかり易すぎる、この男とも刃を交えたという、ひとりの豪傑の名が浮かんできた。



「ええい、言うな！ 酒が不味くなるわ」

そう言つて。ライダーは酒蔵から持つてきたらしい酒ビンを懐から持ち出した。

私は溜息をついて言つた。

「……そんなもの探してる暇があつたら、もつと早く来れたんじや……」

「その辺りは大目に見ろ。どの道、もう時間もなさそうだったしな」

「……私がやられたらどうする気だったの？」

「勝つといつたではないか」

巨漢は自前の杯に自分で酒を注ぎ足しながら、あつけらかなと、そういつた。

「……いや、言つたけど」

「そして事実として勝つた。フフン。ならもしもの時このことなど考えるだけ損だ」

「……ライダー」

これもある意味信頼という言葉なのだろうか？ とてもじゃないがコイツには似つかわしくない言葉としか思えないが……。それでも結果としてこいつは私の言葉を最後まで疑わなかつたのだ。

そう言つて笑いつつ、いつものように豪快に杯を仰ぎながら、しかしライダーは情けなく眉根を上げた。

「それにしても、何とかならんのか？ ここで消えるというのはなんとも歯痒いぞ。も

う少しで聖杯とやらも手に入るのだろうし、まだやっておきたいことも、たんまりと有ったというのに……」

私は呆れて顔を顰めた。

「……最後くらい、黙ってたほうがかっこいいんじゃない？」

「フンッ！ 何を言うか、最後まで足掻けるだけ足掻いてなんぼだろうが！」

そういわれて私は呆気にとられた。それはさつきまで私がやっていたことだ。やり通したことだ。

「……そうだね。足掻いてみて、なんぼだ……」

観念して、潔くなんてのよりは、そっちのほうがずっといい。今なら私も心からそう思えるのだ。

「フン。まあ……仇は討てた。それで良しとしておくか」

「……………うん」

「で、この後、足下はどうするつもりだ？ オレ様なしでも続けるつもりか？」

「……………どうだろ。案外、もう決着は付いちちゃってるのかもしれないし、また一からサーヴァントを探するのは、面倒くさいかも」

「だろうな。フン、ましてやオレ様のように面倒身が良くて手間のかからないサーヴァントとなると、なおさらなあ」

まさか本気で言っているわけじゃないだろうな、こいつは。

「……ライダー、最後に何かして欲しいことはある？」

朝日が私達の身体を照らしていた。ライダーの体はもう光の透過を防ぐことすら出来ていなかった。だから問うた。きつと、これが本当の最後だから。

「うむ。数えればきりが無いが、ま、取り敢えずはこれだ」

そう言つて、酒瓶と一緒に持つてきた硝子杯を私に向けて突き出してきた。

「……………」

とりあえずそれを受け取つてライダーを見た。いつもの不敵で分厚い笑みが私を見下ろしていた。

「幾度か一緒に卓は囲んだが、杯を合わせたことはなかったからな。フフン。とりあえず、祝杯だ。それから上手い酒と飯の礼は言つておくぞ。マスター」

「……………うん。私のほうこそ、ありがと、ライダー」

そう言つて、一緒に杯を傾け、視線を戻すと、ライダーの巨体は陰も形もなかった。私はコップを空にして俯いた。

最後の最後で、なんか調子を狂わせられた気がする。あいつはそういうキャラじゃないだろうに……………。

「……………上手い酒、か」

その場に残された唯一の痕跡である酒瓶を手を取った。中身はしつかりと空だ。――しかして、その銘柄を見て、私は眼を剥いた。そして今度こそ仰向けに寝転んだ。まさしく仰天したのだ。

「……にしたって、……あのバカ何で一番高い口マネを……」

ゆうに高級外車一台分の価値がある一本であった。師の酒蔵に在るなかでも秘蔵の品だ。あの短時間でじつくりと酒瓶を選んでいたとは考えにくい。

おそらく一発でこれを引き当てて来たというのだろうか？ いや、もしかしたら私が死にそうなのを知りながらじつくりと酒蔵に寄り道していた可能性も否定できない。

兎角、これでは後で師に大目玉を食らうかもしれない。

「……あんの、馬鹿……!」

まったくなんてヤツだろうか。やっぱりあいつはあいつだったみたいだ。最後の最後まで、私を当惑させてくれる。常識外れのサーヴァントだった。

## エピソード

結局、聖杯は今回も現れることは無かったようだ。

最後にはシユタウフエンと島原のサーヴァントが相打ちになり、サーヴァントがいなくなつたために手打ちということになつたのだという。霊体である聖杯に触れられるのはサーヴァントだけでなので、サーヴァントが全滅した時点でそれ以上の勝負は意味を失うのだ。

今度は丸々三日ほど浴槽の中で養生したあと、師に事の顛末を聞いた。師はなぜか憑きものの落ちたような顔をした。曰く、思いの外清々した、とのことだ。師も個人としてはこの儀式に不満があつたらしい。

それはさて置き、私は師の屋敷に戻ることにした。一時は互いの命を狙いあう関係になつたわけだが、まあ直接的に殺し合いをしたわけでもないので師も快く聞き入れてくれた。

利害関係さえ一致すれば、一度は殺し合いを誓いあつた者達が再び師弟の関係に戻るということも日常的に起るのが魔術師の世界だ。

というか、外様のくせに、いざ終わってみれば過半数のサーヴァントを直々に下して

いた私に、師はむしろ呆れている風でさえあった。

それでよく生き残ったものだ、久しぶりに掛け値なしの賞賛を貰った。

今回の儀式で、私が得た、もっとお価値のあるものが、結局はそれだということになるのかもしれない。

——とはいえ、それが失ってしまったものに比肩しうるのかどうかは、考えるまでもないことだ。

「ニヤーツ」

——で、今はというと、私は壁に書かれた落書きを消す作業に従事していた。

聖杯戦争自体が終わったと聞いて、それで身体から力が抜けた。それから何をすればいいのかと考えてみて、とりあえずしなければならぬことを思い出したのだ。

おそらく教会の持ち物なのだろうが、まあ、きれいにする分には文句もあるまい。それでも見つからないのに越したことはない、注意は怠らなかつた。

まだ暗いうちから始めたので、日が昇りきるまでには大方の作業が終了していた。

「ニヤー」

「……ごめんね。もうちよつとで終わるから」

足元から声が聞こえる。そこには出産を終えたばかりの母猫マーベルがいた。近くの木陰には大きめのバスケットが置いて有り、その中には黒ばかりの子猫が四匹丸く

なっている。

聖杯戦争が終わって、すぐに生まれた子猫たちだった。まだ毛も生え揃わず目も開ききつていいないが、四匹ともなかなか個性的だと思う。

名前はレオ、ドナ、ミケ、ラフ。四匹なのでそう決めた。使い魔の候補として皆なかなか有望だと思う。ちよつと気が早いかもしれない。親バカだろうか？

本来はこんなところまで連れてくるべきではないのだが、まあ、今回は特例だ。夜のうちから素晴らしく空が晴れ渡っていたので、できれば外に出してあげたかったのだ。

使い魔である母猫マーベルが付いているのなら、危険らしい危険もないだろう。

もうちよつとだと告げながら撫でてやると、マーベルはやれやれとでも言うようにしてバスケットの中に戻った。

「あらあ、綺麗になったわねえ」

塗りなおした白壁にムラが出ていないかを確認していたところで、不意に声をかけられた。

そこに居たのはひとりの老婆だった。あの時、この壁の前で会った人だ。まさか、また鉢合わせるとは思っていなかった。私は驚きつつも頭を下げた。

そのおばあさんは白い服装をして日傘を刺し、手にはなぜかいくつかの花束を持っていた。とても身奇麗な感じだ。日差しの中に一枚の絵画のようにも見える。

「ああのとき一緒にいた大きな人はあ？」

「……もう、ここにはいないんです。元いたところに帰ってしまつて……」

「あらそう、残念ねえ。けどあなたはいい子ねえ。一人でもちゃんと約束守つて」

「……いえ、そんな」

おばあさんは朗らかに話す。しかしその装いはどうやらちよつと散歩に出るといふ風ではないように見える。

私の視線から言わんとしているところを察したのか、おばあさんはなんだか照れくさそうに笑つた。

「じつはねえ、私も故郷へ変えることになつたのよお。これから空港へ行くとところなのお」

「……そうでしたか。あの子はどうしました？ ピンキーちゃんでしたっけ？」

周囲を見回してみたが、あの小型犬の姿は無かつた。

「もちろん一緒よお。けど、あの子カゴに入れられるのが嫌いねえ、ぎりぎりまでお庭で遊ばせてあげてるのよお」

「……わかります。私も猫を飼ってますから」

私はうなづいて木陰のバスケットに視線を移した。

小首をかしげたおばあさんを促して、私は木陰に歩み寄る。まあまあ、とカゴの中を



覗き込んだおばあさんは感嘆の声を上げた。

「可愛いわねえ〜」

動物の飼い主と言うのは不思議なもので、自分が褒められるよりもペットが賞賛を受ける方が素直に嬉しいという輩が少なくない。私も存外その気があるようで、もしかしたらこの時はずいぶんと相好を崩していたかもしれない。

隣にライダーがいたら、何も言われるかわかったものではなかっただろう。などと考えているのに気づいて、自分がどんな顔をしているのかわからなくなってしまうた。

しばし猫たちの名前など紹介して積もる話などしていると、向こうの方で腕時計を見て残念そうな顔をした。

「あらあく、悪いんだけど、そろそろいかななくちやならないわねえ」

———そういえば、猫と戯れている間に日もずいぶん高くなってきた。私は目を細めた。見上げた空はひどく晴れ渡ってどこまでも蒼かった。

まだまだ猫話は尽きなかったのだが、引き止めるわけにもいかないので、残念です、と告げると、おばあさんは思いついたように持っていた花束を差し出した。

「そうだ、よければこれをもらってくれる？　今ご近所さん達に貰ったんだけど、みんなでくれるものだから持ちきれなくて……」

「……はあ、ありがとうございます」

と、受け取っては見たが、どうしたものだろうか。花束というのも案外に使い道がないものだ。屋敷に戻ったら飾ろうか？　しかし、あの屋敷は師の蛮行のせいでまだまだ片付けも掃除もろくに住んでいない状態なのだが……。

と、そこまで考えて、私は頭を振った。……いや、きつと、そうじゃないだろうか。

「あらあ、もしかしたら迷惑だったあ？」

「……いえ、嬉しいです。……友達に、贈る花が欲しかったところですから」

「あら、さつき言ってた大きな人？」

「……いえ、別の友達です。ありがとうございます」

無論、それ以上のことは言わなかったが、きつとあの巨漢には、手向けの花なんて必要ないだろう。花を送るべき人は、別にいるはずだ。

「そお、ならよかったわあ。あなたも元気でねえ」

「……ええ、あなたもお達者で……あ、そういえばお名前を」

私がおばあさんの背にそう言うと、日傘の影で振り返った別人のような双眸が私を見た。降り注ぐ日差しのせいだろうか？

「ユルグよ」

「……ええ？」

「ユルグ・ローハン。——それがあ、私の名前よお」

一瞬、聞こえた奇妙に若々しい語調に、少々戸惑ったが、老婆はまたすぐにそれまでと同じようにおっとりとした調子に戻った。私の錯覚か何かだろうか？

「……そうですか、私はくろむです。小高森、涅」

「そう、色々と（・・・）ありがとうねえ。くろむちゃん」

そう言つて老婆は私の前から去つていった。言うまでもないが、それ以来その老婆を見ることはなかった。

あのライダーと会うことも二度とない。あやめとも、二度と会えない。

それでも、それを悲しいとは思わない。あくまで私の感傷でしかないわけだが、あやめの死も、いつまでも悲しんで居るべきではないのだろう。

仇を討ったから、とは違うだろう。あやめはそんなことを望まなかっただろうし、きつと喜びもしない。どうしてそんな危ないことをしたのだと、怒るかもしれない。

でも、それでもいいと思えるのだ。きつと、私自身の中でケリがついたということなのだろう。

なら、それでいいのだ。私にできることなんて、結局はどうにかして私自身を納得させることぐらいなのだろうし、それ以上の事は、きつと私の手に余ることなのだろう。

先日までの薄ら暗い空気が嘘のように、この山合の街に流れる空気は清々しかった。

私は自家製の、二度と落書きの出来ない魔法の塗料の入った容器とコンプレッサーを

担ぎ、猫の入ったバスケットと花束を手にして、踵を返した。

今日は午後からみんなで一緒にお見舞いに行くことになっていたのだが、ちようどいいので、その前に教会に寄っていいこう。思えば、仇など討っておきながら、未だに彼女の墓に手向けの花すら供えていなかったのだ。

少し遅れるかもしれないが、どうせ貴族体質の師は仕度に手間取り、今さらになつて見舞い自体を渋つてアズルを困らせていることだろうから、どのみち遅れるのは同じことなのだ。

ならばゆつくり行こうと思ひ、不意に足を止める。

見上げる日差しは強いが、風が涼やかで、驚くほど、空が蒼く、高い。

その裾に広がる緑の景観に視線を巡らせる。山林、森と、山の斜面を彩る棚田。深い碧に苔むしたような山々、そしてその中心に埋もれるようにして営まれる、人々の生。

彼女が楽しそうに語ってくれた。——たしかに考えても見れば、驚くほど画一的に削り込まれた地形。

きつと古の魔術師達によって造られた、何らかの遺跡。——だが、それでも今は自然の彩りによって驚くほど美しく輝いている。

不意に視線を巡らせると、その景観の端に、長く黒いみつあみが揺れたような気がした。

きつと、気のせいだ。

私は再び歩き出そうとして、また足を止めた。再び見上げた緑の景観に一輪の花を掲げ、黙祷する。

——今は亡き友への、慰みと弔いに代えて。

了